

京都府遺跡調査報告書

第 7 冊

京滋バイパス関係遺跡

1987

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立され、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その保存・活用及び研究を行うようになってから、早くも6年が過ぎようとしています。私達は、常に先人の遺した文化財を大切に考える考え方の普及育成に努めるとともに、これらを後世に伝えるべく、日夜努力しているつもりであります。その手段の一つとして、本書のような報告書を刊行しており、この『京都府遺跡調査報告書』のほかに、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』もあわせて刊行しております。

本書に収めました「京滋バイパス関係遺跡」は、昭和58年度から60年度にかけて調査した遺跡群で、隼上り遺跡・隼上り古墳群・西隼上り遺跡の3か所からなります。本書が関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となるだけでなく、地域の文化の発展にいささかでも寄与すれば幸いです。

本書に掲載した各遺跡の調査を実施するにあたりましては、日本道路公団大阪建設局京滋バイパス工事事務所の方がたをはじめ、京都府教育委員会・宇治市教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・厳寒の中で多くの方がたが熱心に作業等に從事していただきましたことを明記して、これらの人びとに厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本報告書は、昭和58年10月から昭和60年11月まで実施した京都府宇治市菟道西俣上り・東俣上り・森本に所在する京滋バイパス関係遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団の依頼を受け、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり実施した。発掘調査に係る経費は日本道路公団が負担した。
3. 発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員松井忠春、同調査員荒川 史・小池 寛・竹原一彦が担当して行った。
4. 出土遺物の実測・トレースは、主に小池 寛・荒川 史・寺升初代・小山裕美・久世美智子・和田 満・梶本真由美・中村かおり・小泉裕司が行った。
5. 本書に掲載した写真は、遺構については主に小池・荒川が撮影し、遺物については元文部技官高橋猪之介氏に撮影を依頼し、一部当センター調査員田中 彰が撮影した。また遺構平面図の一部は空中写真をもとに、株式会社国際興業に委託した。
6. 本書の執筆は、はじめに・おわりにを松井が、第1章を小泉裕司・荒川が、第2章を荒川・小池が、第3章・第5章・第6章第1節を荒川が、第4章・第6章第2節を小池が、それぞれ担当した。
7. 現地調査から本書の刊行に至る全期間中、以下の方々から専門的な指導・助言ならびに援助を得た。記して謝意を表する。

杉本 宏(宇治市教育委員会)、西谷真治・金関 恕(天理大学)、杉山信三(京都市埋蔵文化財研究所)、山田良三(京都府立桃山高校)、片岡 肇・鈴木忠司・山下秀樹(平安博物館)、鈴木重治(同志社大学)、石野博信・斉藤清秀(橿原考古学研究所)、毛利光俊彦・上原真人(奈良国立文化財研究所)、吉田金彦(大阪外国語大学)、白石耕治(和泉市教育委員会)、置田雅昭・山内紀嗣・高野政昭・竹谷俊夫・日野 宏(埋蔵文化財天理教調査団)、和田晴吾(立命館大学)、小林政春・山下誠一(飯田市教育委員会)、久保田勝一(渥美町史編さん室)、費 元洋(豊橋市教育委員会)、中川 渉(兵庫県教育委員会)、秋田裕毅(近江風土記の丘資料館)、吉水真彦(大津市教育委員会)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)

(以上、敬称略)

目 次

はじめに	1
第1章 地理的・歴史的環境	3
第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の経過	6
第1節 地区設定について	6
第2節 調査経過	6
(1) 昭和58年度調査	6
(2) 昭和59年度調査	9
(3) 昭和60年度調査	11
第3章 隼上り古墳群	12
第1節 隼上り1号墳の調査	12
(1) 古墳の概要	12
(2) 出土遺物	17
(3) 土坑墓群	21
第2節 隼上り2号墳の調査	24
(1) 古墳の概要	24
(2) 遺物出土状況	28
(3) 出土遺物	29
(4) 奈良時代以降の遺物と前庭部の遺物	35
第3節 隼上り3号墳の調査	37
(1) 古墳の概要	37
(2) 出土遺物	41
第4節 小結	44
第4章 隼上り遺跡	51
第1節 調査の概要	51
第2節 飛鳥時代・奈良時代の遺構と遺物	52
第3節 中世の遺構と遺物	78
第4節 近世の遺構と遺物	80

第5章 西隼上り遺跡	91
第1節 調査の概要	91
(1) 基本層位	91
(2) 各調査区の概要	94
第2節 古代の遺構と遺物	96
(1) 検出遺構	96
(2) 出土遺物	97
第3節 中世の遺構と遺物	105
(1) 検出遺構	105
(2) 出土遺物	106
第4節 その他の時代の遺物	110
第5節 小結	110
第6章 総括	115
第1節 菟道地域における古墳時代から奈良時代の変遷	115
第2節 生産遺跡に伴う建物跡について	117
おわりに	121
付載 隼上り遺跡・隼上り瓦窯跡出土の胎土分析について	123

挿 図 目 次

地理的・歴史的環境

第 1 図	調査地周辺の遺跡分布図	4
-------	-------------	---

調査の経過

第 2 図	隼上り遺跡・西隼上り遺跡トレンチ配置図	7・8
第 3 図	隼上り遺跡地区割図	9
第 4 図	西隼上り遺跡地区割図	10

隼上り古墳群

第 5 図	1号墳平面図	13
第 6 図	1号墳墳丘断面図	15
第 7 図	1号墳石室実測図	16
第 8 図	1号墳石室内出土遺物実測図(1)	18
第 9 図	1号墳石室内出土遺物実測図(2)	19
第 10 図	出土遺物実測図	20
第 11 図	土坑17実測図	22
第 12 図	土坑18実測図	23
第 13 図	土坑19・20実測図	23
第 14 図	2号墳平面図	25
第 15 図	2号墳墳丘断面図	26
第 16 図	2号墳石室実測図	27
第 17 図	2号墳遺物出土状況図	28
第 18 図	2号墳石室内出土遺物実測図(1)	30
第 19 図	2号墳石室内出土遺物実測図(2)	31
第 20 図	2号墳石室内出土遺物実測図(3)	32
第 21 図	2号墳石室内出土遺物実測図(4)	33
第 22 図	2号墳石室内出土遺物実測図(5)	34
第 23 図	2号墳前庭部出土遺物実測図	36
第 24 図	3号墳墳丘平面図	37
第 25 図	3号墳墳丘断面図	38
第 26 図	3号墳石室実測図	39

第 27 図	3号墳石室内遺物出土状況図	40
第 28 図	3号墳石室内出土遺物実測図(1)	42
第 29 図	3号墳石室内出土遺物実測図(2)	43

隼上り遺跡

第 30 図	DⅦ区北壁断面図	51
第 31 図	調査地平面図(杭間は20m)	53・54
第 32 図	掘立柱建物跡位置図	55
第 33 図	BⅦ区遺構実測図	56
第 34 図	BⅤ・BⅥ区遺構実測図	57
第 35 図	CⅦ区遺構実測図	58
第 36 図	CⅥ区遺構実測図	59
第 37 図	CⅢ・CⅣ区遺構実測図	60
第 38 図	DⅢ区遺構実測図	61
第 39 図	BⅡ・CⅡ区遺構実測図	62
第 40 図	掘立柱建物跡変遷図	65
第 41 図	CⅦ区焼土塚実測図	66
第 42 図	BⅢ区溝実測図	66
第 43 図	DⅢ区道状遺構実測図	67
第 44 図	出土遺物実測図(1)	69
第 45 図	出土遺物実測図(2)	70
第 46 図	出土遺物実測図(3)	71
第 47 図	出土遺物拓影図(1～7：瓦類，8：須恵器)	72
第 48 図	土器型式変遷図と建物跡時期設定図	74
第 49 図	時期別建物跡規模比較表	75
第 50 図	中世土塚墓実測図	78
第 51 図	中世土塚墓玉・刀子検出状況図	78
第 52 図	中世土塚墓出土遺物実測図	79
第 53 図	近世遺構配置図	81
第 54 図	CⅥ区近世遺構実測図	82
第 55 図	暗渠・排水施設平面・断面図	83
第 56 図	近世墓実測図	84
第 57 図	近世溝出土遺物実測図	86

第 58 図	出土遺物実測図	87
第 59 図	近世墓 4 出土遺物実測図	88
西隼上り遺跡		
第 60 図	第 3 調査区東壁断面図	91
第 61 図	第 2・3 調査区平面図	92
第 62 図	第 5 調査区平面図	93
第 63 図	第 4 調査区平面図	94
第 64 図	土塚 1 実測図	97
第 65 図	溝 1 出土遺物実測図	98
第 66 図	土塚 1 出土遺物実測図(1)	99
第 67 図	土塚 1 出土遺物実測図(2)	100
第 68 図	土塚 2 出土遺物実測図(1)	101
第 69 図	土塚 2 出土遺物実測図(2)	102
第 70 図	包含層出土遺物実測図(1)	103
第 71 図	包含層出土遺物実測図(2)	104
第 72 図	土塚 4 実測図	106
第 73 図	土塚 4 出土遺物実測図	107
第 74 図	中世遺物実測図	108
第 75 図	包含層出土遺物実測図	109
第 76 図	含有成分の濃度とその平均値(○印)	126
第 77 図	RbとSh含有量の分布	126
第 78 図	SiO ₂ とK ₂ O含有量の分布	127

付 表 目 次

付 表 1	小玉計測表	33
付 表 2	遺物観察表	47
付 表 3	遺物観察表	76
付 表 4	遺物観察表	89
付 表 5	西隼上り遺跡検出遺構一覧表	95
付 表 6	遺物観察表	112

図 版 目 次

隼上り古墳群

- 図版第1 (1)1号墳調査前全景(南から) (2)1号墳石室検出状況(南から)
- 図版第2 (1)1号墳石室内遺物出土状況(北西から) (2)1号墳石室全景(南から)
- 図版第3 (1)古墓群全景(南から) (2)土塚17全景(南から)
(3)土塚18全景(南から) (4)土塚19・20全景(南から)
- 図版第4 (1)2号墳石室調査前全景(南から)
(2)2号墳石室内遺物出土状況(南から)
- 図版第5 (1)2号墳石室内遺物出土状況(西から) (2)2号墳銀環出土状況(西から)
- 図版第6 (1)2号墳羨道部須恵器出土状況(西から)
(2)2号墳羨道部鉄製品出土状況(南から)
- 図版第7 (1)2号墳石室全景(南から) (2)2号墳石室裏込め状況(東から)
- 図版第8 (1)第1調査区調査前全景(西から)
(2)3号墳石室内遺物出土状況(南から)
- 図版第9 (1)3号墳石室内遺物出土状況(西から) (2)3号墳全景(南から)
- 図版第10 (1)3号墳石材抜き取り後の石室全景(南から)
(2)3号墳周溝遺物出土状況(北から)
- 図版第11 1号墳出土遺物(1)
- 図版第12 1号墳出土遺物(2)
- 図版第13 2号墳出土遺物(1)
- 図版第14 2号墳出土遺物(2)
- 図版第15 (1)2号墳出土遺物(3) (2)同 上 (4)
- 図版第16 (1)2号墳出土遺物(5) (2)同 上 (6)
- 図版第17 3号墳出土遺物(1)
- 図版第18 3号墳出土遺物(2)

隼上り遺跡

- 図版第19 (1)調査前遠景(隼上り瓦窯跡から) (2)調査前全景(西から)
- 図版第20 (1)調査地全景(空中写真, 北西から)
(2)CⅥ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡10・15・16・17, 西から)
- 図版第21 (1)CⅥ・CⅦ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡12~19, 東から)

- (2)CⅥ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡15~17, 南から)
- 図版第22 (1)CⅥ区掘立柱建物跡検出状況(東から)
(2)CⅢ・CⅣ区掘立柱建物跡検出状況(南東から)
- 図版第23 (1)CⅥ区掘立柱建物跡検出状況(北西から)
(2)CⅢ・CⅣ区掘立柱建物跡検出状況(北から)
- 図版第24 (1)DⅢ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡26・27, 西から)
(2)CⅢ・CⅣ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡22~24, 南から)
- 図版第25 (1)BⅥ・BⅦ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡6~11, 東南から)
(2)DⅢ区道状遺構検出状況(北から)
- 図版第26 (1)中世土塚墓検出状況(土塚中央が瓦質土器・三足盤, 南から)
(2)中世土塚墓遺物検出状況(土師器・皿, 玉, 刀子, 西から)
- 図版第27 (1)中世土塚墓遺物検出状況(西から) (2)中世土塚墓完掘状況(北から)
- 図版第28 (1)近世遺構全景(北西から) (2)近世建物跡検出状況(西から)
- 図版第29 (1)近世墓2完掘状況(北から) (2)近世墓4土師器・皿検出状況(東から)
- 図版第30 (1)近世溝・柵列検出状況(北から) (2)暗渠検出状況(北から)
- 図版第31 (1)暗渠給水口(北から) (2)暗渠・水溜め施設完掘状況(東から)
- 図版第32 (1)近世溝遺物検出状況(東から) (2)近世溝検出状況(西から)
- 図版第33 (1)甕検出状況(北から) (2)甕検出状況(北から)
- 図版第34 出土遺物(1)
- 図版第35 出土遺物(2)
- 図版第36 出土遺物(3)
- 図版第37 出土遺物(4)

西隼上り遺跡

- 図版第38 (1)第2調査区調査前全景(北東から)
(2)第2調査区土塚群全景(南西から)
- 図版第39 (1)第3調査区土塚群全景(南から) (2)土塚4青磁椀出土状況(東から)
- 図版第40 (1)土塚4青磁椀出土状況(東から) (2)土塚4須恵器出土状況(北から)
- 図版第41 (1)土塚1遺物出土状況(北から) (2)土塚1全景(西から)
- 図版第42 (1)土塚9遺物出土状況(西から) (2)土塚2遺物出土状況(南から)
- 図版第43 (1)第5調査区全景(北から) (2)第5調査区北半部全景(南西から)
- 図版第44 出土遺物(1)

图版第45 出土遗物(2)

图版第46 出土遗物(3)

京滋バイパス関係遺跡発掘調査報告

はじめに

千年の都の面影を残す京都市は、近代化に伴う都市の膨張によって南方へ漸次発展している。都市の近代化は、都市の再開発のみならず、経済基盤を支える運輸手段にも変化をきたし、自動車中心社会を出現させた。それは自ずと道路の混雑の増大と相俟って都市機能をマヒさせることを意味する。京都市域にあっても例外ではない。大阪方面から北方向に走ってくる一般国道1号は京都市のほぼ中央部に当たる五条堀川交差点で、山陰方面の主要道である一般国道9号と合流し、右折して名古屋・東京方面へと伸びる。また京都市伏見区烏羽地域では山城盆地を横断する名神高速道路が京都南インターチェンジで同1号と結合し、さらに京都市の外側を半円形に取り囲む外環状線も国道十条で同1号と交差する。正に一般国道1号を中軸線とした半円形を描く道路網である。

こうした道路網でさえ現在の交通量を将来にわたって維持しつつ緩和策を講ずることは難問題と言わざるを得ない。ことその最大要因は一般国道1号の混雑にあることは他言を要しない。そこで京都府と日本道路公団は、同1号の迂回路として、京都府久世郡久御山町・宇治市を経て滋賀県大津市瀬田を結ぶ京滋バイパスの建設を計画し、答申をもって運輸大臣より承認許可され、昭和59年度からの工事着手となった。

この京滋バイパス建設予定路線内には、昭和60年度発行の『京都府遺跡地図』に登録されている横穴式石室を主体とした円墳の単上り1号墳・同2号墳、弥生式土器・石鏃・磨製石器片などが散布している西単上り遺跡、及びその後文化財に追加登録された単上り遺跡が所在するため、日本道路公団は京都府教育委員会と協議を重ねた結果、昭和58年度より発掘調査を実施して記録保存し、場合によっては現状・移築保存することになった。

発掘調査は、日本道路公団の依頼により財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが担当することになり、昭和58年度調査対象の単上り遺跡を皮切りに3か年間にわたって実施し、その後1か年を費やして整理報告を行うこととなった。

現地調査においては、周到な準備を行うとともに、調査に伴う組織を次のとおりとして、昭和58年10月20日から昭和59年3月31日までを第1次調査、昭和59年6月18日から昭和60年3月30日までを第2次調査、昭和60年5月2日から11月21日までを第3次調査として発掘調査を実施した。

発掘調査総括責任者	栗 栖 幸 雄	事務局長（昭和58年度）
発掘調査総括責任者	荒 木 昭太郎	事務局長（昭和59年・60年度）

発掘調査責任者	堤 圭 三 郎	調査課長
発掘調査担当者	松 井 忠 春	主任調査員
	竹 原 一 彦	調査員(昭和58年度)
	小 池 寛	〃 (昭和58年・59年度)
	荒 川 史	〃 (昭和59年・60年度)
発掘調査事務責任者	白 塚 弘	総務課長

なお、発掘調査期間中あるいは本書執筆にあたり、多くの学生・諸氏・諸機関から助言ならびに援助を賜わった。以下芳名を記し、感謝の意にかえたい。

昭和58年度調査参加者

井川朋之・石原徳幸・伊藤今日子・井上 誠・岩本裁也・植木富美夫・上田順久・大和田淳司・加藤由美・久世美智子・小寺 誠・鈴木加代子・鈴木静恵・高橋孝次郎・東松義郎・中井精一・中西繁則・埴岡美矢・藤本雅之・吉田茂典・吉田 徹・和田 満

昭和59年度調査参加者

井川朋之・石田真一・植木富美夫・植西洋嗣・梅本昌二・大西敏宏・金子慶太・荻田成生・北埜善史・清松和夫・久世美智子・小山裕美・猿向敏一・鈴木加代子・鈴木静恵・高橋孝次郎・田中祥介・寺升初代・中井精一・西岡龍也・埴岡美矢・福富 仁・藤本雅之・藤原ひとみ・村田嘉弘・森田浩史・吉田茂典

昭和60年度調査参加者

金丸浩樹・北村祥子・九嶋妙子・久世美智子・小泉裕司・小山裕美・坂根直之・田中美希・溜池博記・寺升初代・中井英策・中井精一・中村かおり・野村道江・八田達男・林恵子・松永好宏・柳沢洋子・米井武始

昭和61年度整理参加者

穎娃ちか子・小泉裕司・寺升初代・樋口絹子・柳本喜美恵・和田 満

(敬称略・五十音順)

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 位置と地理的環境

京都府宇治市は、京都府の南部に位置し、京都市などとともに広義の京都盆地を形成しており、琵琶湖に源を発する瀬田川が宇治川と名を変え、京都盆地に流れ出る谷口部にあたる。

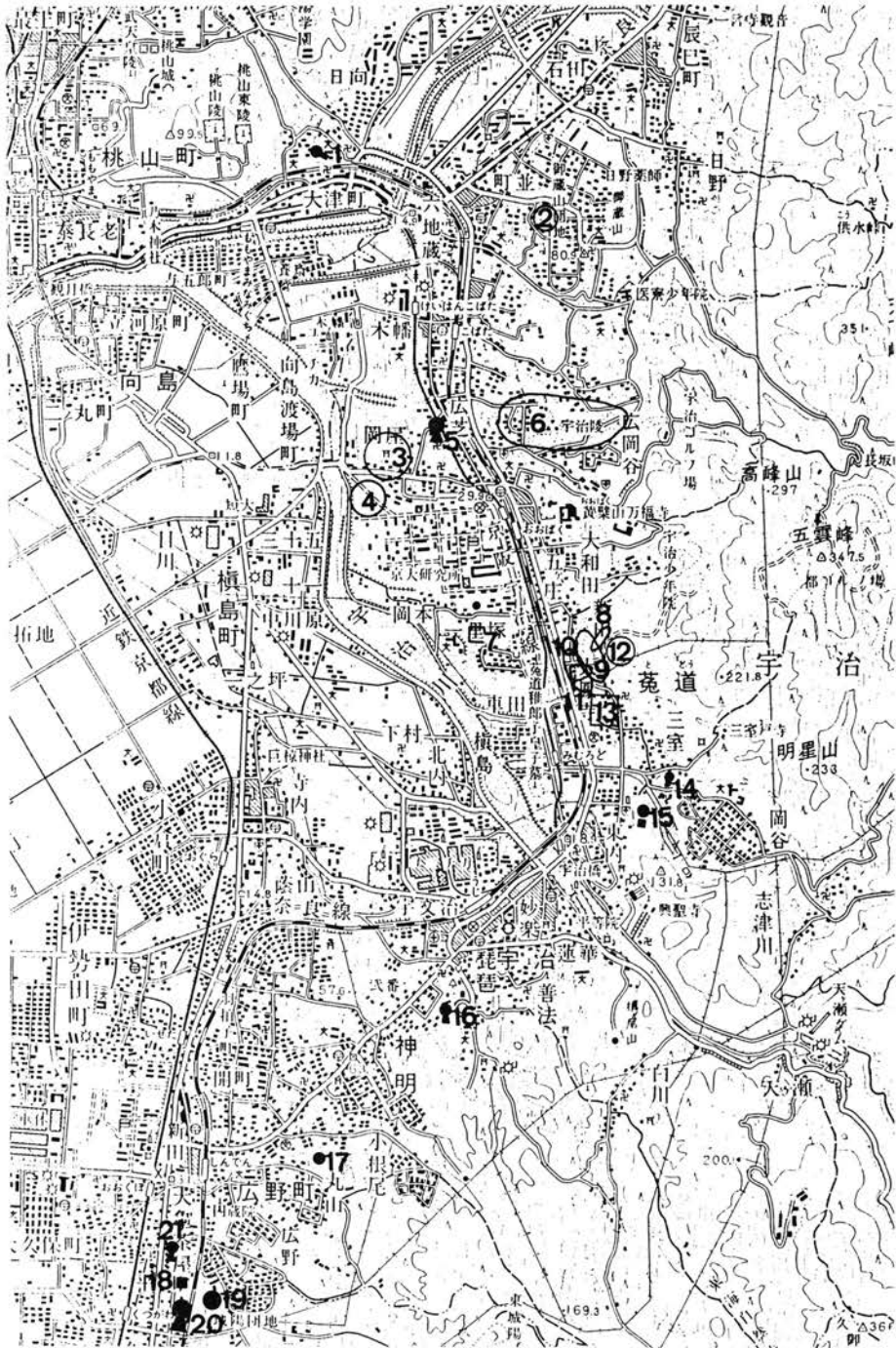
宇治地域は、地形・地質区分から大きく3区分できる。第1は、東部の古生層を基盤とする準平原化された標高200～400mの醍醐・笠取山地である。次に、この山地に続く標高20～200mの漸移地域がある。これは、笠取川・志津川によって形成された山間盆地の埋積谷や山陵・丘陵地帯である。地層は、大阪層群に属し、東部山間地の古生層上部にも広がっている。第3は、標高20mから巨椋池に至る西部低地である。この低地は、一部に低平な沖積段丘であるほかは、ほとんどが旧宇治川や旧木津川が形成した氾濫原低地である。西部低地は沖積層に覆われており、その厚さは5m程度で、礫・砂・粘土より構成されている。

この西部低地を形成した宇治川は、かつては槇島町・木幡・藪場付近を西に向かい、三軒屋で巨椋池に注いでいた。また槇島町付近から分かれた支流は、岡屋付近を流れ、木幡池付近で山科川と合流し、低湿地帯を形成していた。現在の流路は、豊臣秀吉の伏見城築城時に築かれた槇島堤によって変えられたものである。この宇治川により西部低地は東部地域と西部地域とに分けられており、宇治郡と久世郡の郡境にもなっている。

第2節 歴史的環境（第1図）

宇治地域の歴史を東部地域中心に概観すると、現在のところ旧石器時代の遺跡は知られていない。縄文時代についても、これまであまり知られていなかったが、草創期・早期・晩期の遺物が今回の隼上り遺跡の調査で出土している。また、昭和60年度の宇治市教育委員会が調査した寺界道遺跡で、縄文時代晩期(長原式)の貯蔵穴を検出しており、徐々にではあるが縄文時代の遺跡が明らかになりつつある。

弥生時代にはいと、洪積世以後に形成された丘陵上や扇状地上に人々が生活するようになる。宇治川東岸の羽戸山遺跡、西岸の巨椋神社東方遺跡・神楽田遺跡・神明石塚遺跡・野神遺跡・広野町一里山遺跡がそれである。このうち発掘調査が行われたのは、羽戸山遺跡・神楽田遺跡・巨椋神社東方遺跡にすぎない。羽戸山遺跡は、洪積世の高位段丘上に営まれた遺跡で、昭和56年に調査され、弥生時代後期前半の住居跡などを検出しており、



第1図 調査地周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|
| 1 黄金塚古墳群, | 2 御蔵山古墳群, | 3 宇治郡衙推定地, | 4 岡屋津推定地, |
| 5 二子塚古墳, | 6 木幡古墳群, | 7 岡本遺跡, | 8 集上り瓦窯, |
| 9 集上り東古墳, | 10 西集上り遺跡, | 11 集上り古墳群, | 12 羽戸山遺跡, |
| 13 大鳳寺跡, | 14 池山古墳, | 15 二子山古墳, | 16 丸山古墳, |
| 17 庵寺山古墳, | 18 鍛冶塚古墳, | 19 丸塚古墳, | 20 車塚古墳, |
| 21 芭蕉塚古墳 | | | |

その立地条件からいわゆる高地性集落としての性格が考えられている。神楽田遺跡・巨椋神社東方遺跡は、調査面積も小さくその性格も不明な部分が多いが、前者では弥生時代中期の土器が、後者では弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代に入ると、50～100mの間の丘陵端や段丘上・扇状地上のほかに、20～50mの旧宇治川の氾濫原低地や宇治丘陵先端部の広野や久津川の扇状地域の広域にわたり古墳が築造される。この地域における古墳の分布は、巨視的に見ると2地域に大別することができる。それは、宇治川西岸の宇治丘陵末端部に位置する久津川古墳群と、東岸の洪積世丘陵端や扇状地上、旧宇治川の氾濫原低地に点在する古墳群である。

久津川古墳群は、4世紀中葉から6世紀前葉に形成され、山城最大の前方後円墳である車塚古墳に代表される一大古墳群である。また、昭和61年に調査された芝ヶ原12号墳は、いわゆる庄内期の墳丘墓であることがわかり、さらにそれより古い時期から群形成が始まっていたことがわかった。

宇治川東岸地域は、西岸地域に比べるとその様相はあまり明らかではない。東岸地域では4世紀までさかのぼる古墳は知られておらず、現在のところ最古に位置づけられるのは宇治山本の二子山古墳である。二子山古墳は、直径40mの円墳である北墳と一辺30mの方墳である南墳からなり、北墳は5世紀前半、南墳は5世紀中葉に築造されたと考えられる。

この二子山古墳に続く古墳は明確ではないが、6世紀に入ると、木幡の地に山城最大の後期古墳である二子塚古墳が出現する。二子塚古墳は全長105mの前方後円墳で、外濠を含めた規模は、東西・南北とも210m前後にも及ぶ。

二子塚古墳のような大型首長墓が築造される一方、木幡地域では、木幡山古墳群が形成される。この古墳群は、平安時代の藤原氏の宇治陵墓として宮内庁の陵墓参考地に指定されているため、造営時期などその内容は明確ではないが、総数120基に及び、中には小型前方後円墳も含まれている。

7世紀に入ると、宇治川東岸地域では飛鳥の豊浦寺に瓦を供給していた隼上り瓦窯が営まれる。それにやや遅れて、白鳳時代には大鳳寺や岡本廃寺が造営される。また、これらの寺院に瓦を供給したと見られる宇治瓦窯・南山瓦窯・岡本瓦窯などが形成される。これに対して、宇治川西岸地域では広野廃寺・久世廃寺・平川廃寺・正道廃寺が営まれる。

7世紀代においても1つ注目されることは、宇治橋が架橋されたことである。現在、橋寺放生院境内にある「宇治橋断碑」によると、宇治橋は大化2(646)年に僧道登によって建造されたものであるという。建造者や建造年代については諸説があるが、『日本書紀』の天武元年五月の記事から、7世紀後半には橋が存在していたことは明らかであり、断碑のいう大化2年、或いはそれに近い年代に架橋されたことは間違いのないと思われる。

第2章 調査の経過

第1節 地区設定について（第3図・第4図）

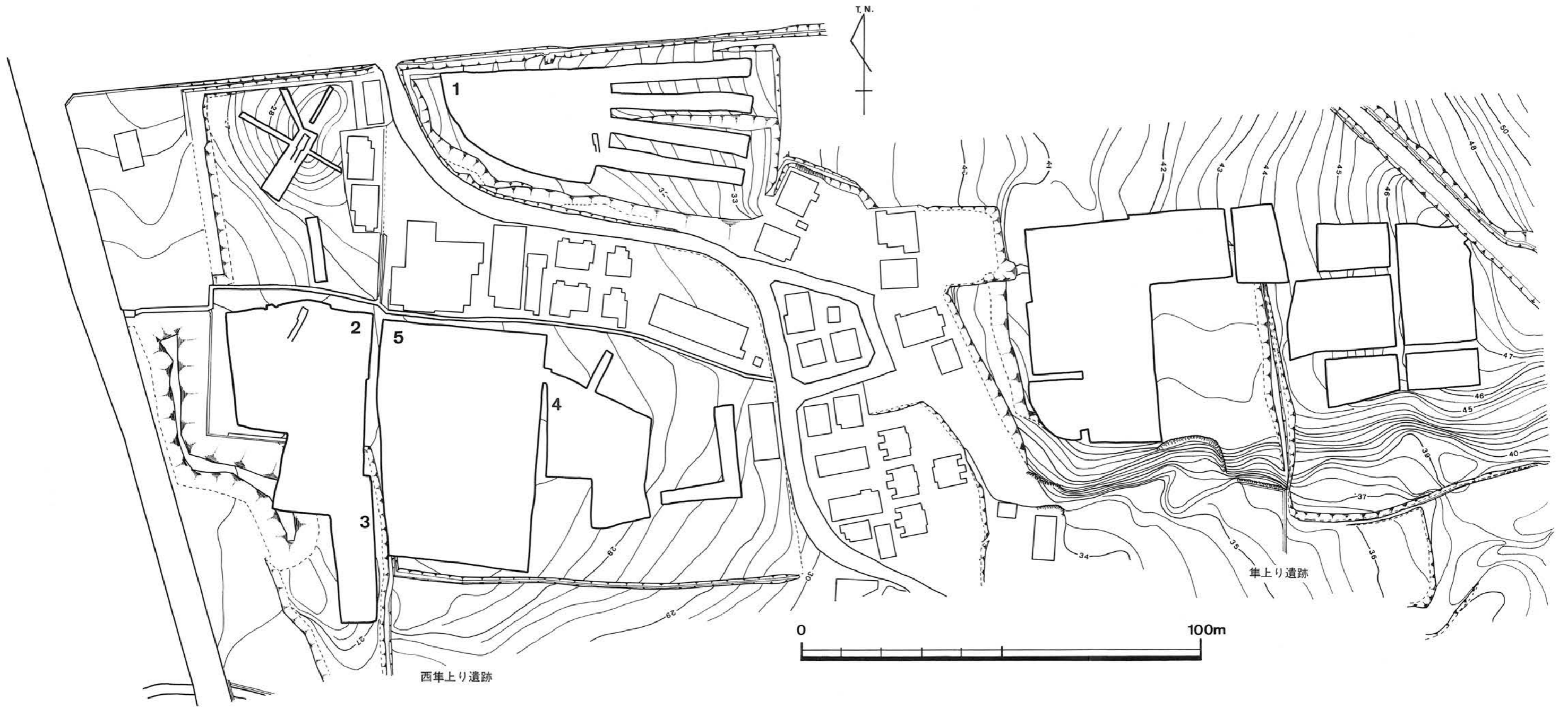
調査地が広範囲に及ぶため、道路公団が設定した道路センター杭146+40と146+80を直線で結び、東西を20m毎にⅠ区～Ⅶ区、南北をA区～E区に分け、その組み合わせによりトレンチ名を付した。また、遺構・遺物の広がり調査地全域に及ぶため、トレンチを更に10mに区画し、東西を1小区～14小区に、南北をa小区～h小区に地区設定し、遺構の位置関係の整理・包含層出土遺物の取り上げ等の際、対応できるようにした。これらの地区設定は、昭和59・60年度に行う京滋バイパス関係遺跡の発掘調査にも適用した。

遺構の呼称は、従来、その年代・性格・規模により検出した時点で命名する方法が取られてきたが、完掘した時点で遺構名称を変更する場合も多く、若干の問題点が指摘されている。そのため、本調査では検出した遺構すべてに Locus Number の略号 L. N. を冠し統一した。また、遺物包含層については調査地が丘陵上に位置することを考慮し、基本的堆積層を15層までとした。ここでは、L. N. 1～L. N. 15までを遺物包含層、L. N. 16以降を遺構番号とした。これらの遺構番号は現地説明会資料・概報等で便宜的に遺構毎に仮番号を付して発表した。本報告書において最終的な整理をし遺構番号を決定した。その対象は付表5の通りである。

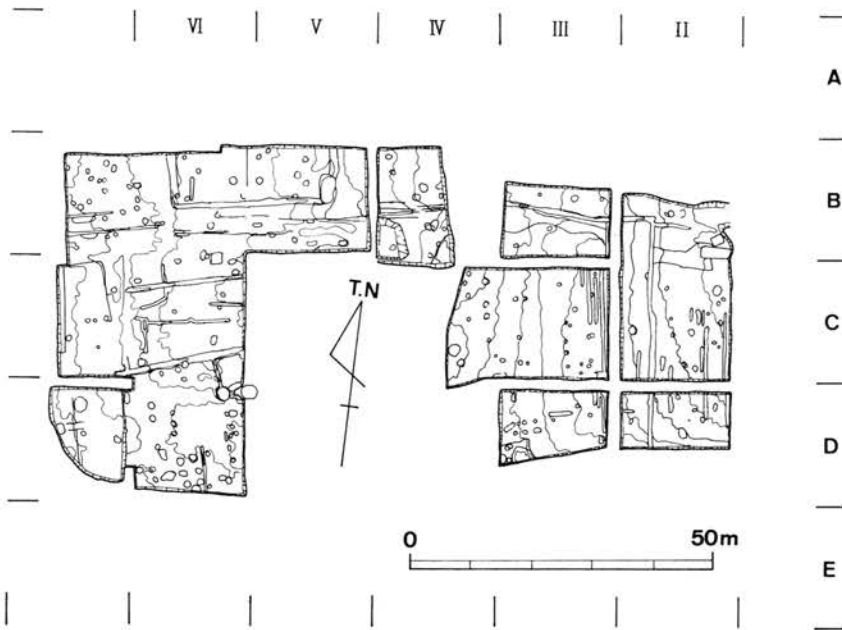
第2節 調査経過（第2図）

(1) 昭和58年度調査

昭和58年度の準上り遺跡の調査は現地調査開始に必要な協議を経て、昭和58年11月初旬に道路建設予定地内に仮設プレハブを建設した。調査体制が整った同年11月15日までに、試掘調査区の設定及び基準杭・絶対高の移動等の作業を完了した。同年11月17日から同19日まで重機掘削を行い試掘トレンチを設定した。試掘は、調査地が広範囲に及ぶため南北のⅣ区以西に「L」字形トレンチを設定した。検出した主な遺構は、DⅥ-g 12区において拳大の礫を6m×7mの範囲に敷いた集石遺構、DⅦ-h 13区では近世の柱穴、基準杭146+60に隣接した近世井戸、DⅤ-g 13区では南北にはしる溝等である。これらの遺構は試掘トレンチの全域に及んでいたため、同年12月5日から同年12月14日の間、重機により全面掘削を行った。本調査は、試掘調査の結果をもとに遺構の範囲を確認しながらすすめたが、近世・近代の遺構・遺物の残存状況が極めて良好であったため、下層の飛鳥・奈良



第2図 車上り遺跡・西車上り遺跡トレンチ配置図



第3図 単上り遺跡地区割図

時代の柱穴群の調査は、昭和59年1月11日以降集中的に行った。Ⅲ区以東の調査は、昭和59年1月10日から同年1月26日までの間、重機掘削により全面的に表土剥ぎを行った。Ⅲ区以東は、近世・近代の遺構は少なく、ほぼ全面で飛鳥・奈良時代の遺構・遺物を確認した。調査地内で検出した遺構は、飛鳥・奈良時代の柱穴が大半を占めるが、DⅢ-h56区のトレンチ端で礫を充填した道状遺構を検出した。ここから多量の遺物を検出したため拡張し、調査を行った。拡張部は、急な崖面になっていたため全容を明らかにできなかったが、断面図・平面図等からその範囲を復元するに至った。なお、調査地以南にも遺構がのびるため、工事掘削時に立ち会いを行った。

調査地の全容がほぼ明らかになった昭和59年3月23日、航空写真撮影を行った。また、調査成果の一応の総括ができた同年3月24日、雨天の中、現地説明会を行った。現地調査は天候の関係で同年3月13日にまで及び、全作業を完了した。

(2) 昭和59年度調査

昭和59年度は、昭和58年度の継続調査として、昭和59年5月下旬から現地調査事務所において整理作業を開始した。現地作業は、第1調査区の幅杭等の確認が遅れたため、同年6月18日から調査区内の草刈り作業を開始した。調査区が里道に隣接しており、危険防止のためネットフェンス設置の作業を行い、同年6月25日から重機により5か所に試掘坑を設定した。試掘の堆積状況から、トレンチ東半部では単純な土層で顕著な遺構もないこと



第4図 西集上り遺跡地区割図

が判明したが、西半部では複雑な堆積状況であり、遺物も出土することから人力で掘削した。トレンチ掘削中、古墳を検出した。新発見であるため、宇治市教育委員会と協議し、集上り3号墳と命名した。昭和59年9月22日に現地説明会を行い、同年10月18日に第1調査区の調査を終了した。第2・3調査区は同年10月15日に着手したが、第2調査区北部に集上り2号墳が存在するため、周辺は人力掘削を行った。古墳上に転落した石材があったため、図化した後、重機で排除し石室の掘り込みに入った。第3調査区では、地表下2mで近世の遺物包含層を検出し、更に1m下で中世土壇墓群を検出した。トレンチ南半部では、大鳳寺川の氾濫で遺構面が流失しており、一部地山面まで掘り下げ、堆積状況を確認するに留めた。第2・3調査区間に中世土壇・中世土壇墓が広がるため重機により拡張し、ここを拡張区と命名した。第4調査区は、南北方向に3本の試掘坑を設定し、遺構検出作業

をすすめた。全面に方形・円形の柱穴を確認したため、重機によりトレンチ間の拡張を行った。第4調査区東端のトレンチは、飛鳥・奈良時代の遺物包含層を確認したものの、明確な遺構がないため、一部に断ち割りを入れ、堆積状況を図化した後調査を終了した。これらの調査結果をもとに、昭和60年1月19日現地説明会を行った。調査は広範囲であったため、同年3月30日までに及び全作業を終了した。

隼上り3号墳は、宇治市内で初めて本格的に調査された横穴式石室であるため、宇治市教育委員会が中心になり、日本道路公団の援助を得て移築された。

(3) 昭和60年度調査

昭和60年度は、前年度着手できなかった西隼上り遺跡第5調査区と隼上り1号墳の調査を行った。西隼上り遺跡第5調査区は4月16日に作業準備を始め、5月2日から重機掘削を開始した。重機掘削は、中世の遺構面と考えられる茶褐色土層上面まで行った。調査区北部では削平を受けており、茶褐色土層はほとんどなく、重機掘削した段階で奈良時代の暗茶褐色土層を検出し、土坑・ピット群を検出した。南部では、第2・3調査区でも検出した黄褐色土を埋土とする溝を検出した。

溝等の調査終了後、1/50平面図の平板測量、及び写真撮影を行い、7月25日に再び重機を入れ、jライン以南を下層まで掘り下げた。しかし、顕著な遺構は検出せず、平板測量・写真撮影等を行い、8月28日全作業を終了した。

隼上り1号墳は、7月29日から平板測量を開始した。1号墳は、現状の観察から、表土直下に石材が存する可能性が考えられたため、8月12日から人力掘削によって表土剥ぎを行った。表土を除去した段階で、石室の奥壁と思われる石材と、古墓群を検出した。石材の方向から推測すると、石室部分に古墓群が営まれている状況であったため、古墓群の調査から行った。古墓群の調査終了後、古墓の底面のレベルまで掘り下げ、石室の石材を検出した。その結果、奥壁の石材は羨道側に倒れ込んでおり、石室の側壁はほとんど抜き取られていたことがわかった。石室内の調査は、石室主軸線とそれに直交する1m間隔の線を設定し、それによって地区設定を行った。

11月21日、すべての作業を終了した。

第3章 隼上り古墳群

第1節 隼上り1号墳の調査

(1) 古墳の概要

①墳丘(第5図・第6図, 図版第1)

隼上り1号墳は、五雲峰から東にのびる丘陵の南側緩斜面に位置する。地目は茶畑であり、この畑の中にわずかに盛り上がるマウンドが望見できた。この状況から、墳丘上部が削平され、耕作土直下に石材が遺存するものと判断された。このため人力によって表土の除去を行った。表土を除去した段階で、古墳の石材と石組を持つ古墓群を検出し、古墳が相当破壊されていることがわかった。

墳丘には4本のトレンチを入れ、その規模を調査した。以下、それぞれのトレンチの概要を述べる。

第1トレンチ 石室の主軸に直交し、石室の西方にのびるトレンチである。ここでは、明確な溝を検出することはできなかった。しかし、断面観察の結果、トレンチ東端から6.7mのところまで溝状の落ち込みが確認できた。

第2トレンチ 石室の主軸に対して、斜方向にのびるトレンチである。ここでは、トレンチ端から6.4~7.5mの部分で溝を検出した。

第3トレンチ 石室の主軸線上に、奥壁の後方へとびるトレンチである。トレンチ端から4.9~6.8mの部分で、砂礫を多く含む暗茶褐色土を埋土とする溝状の落ち込みを確認した。

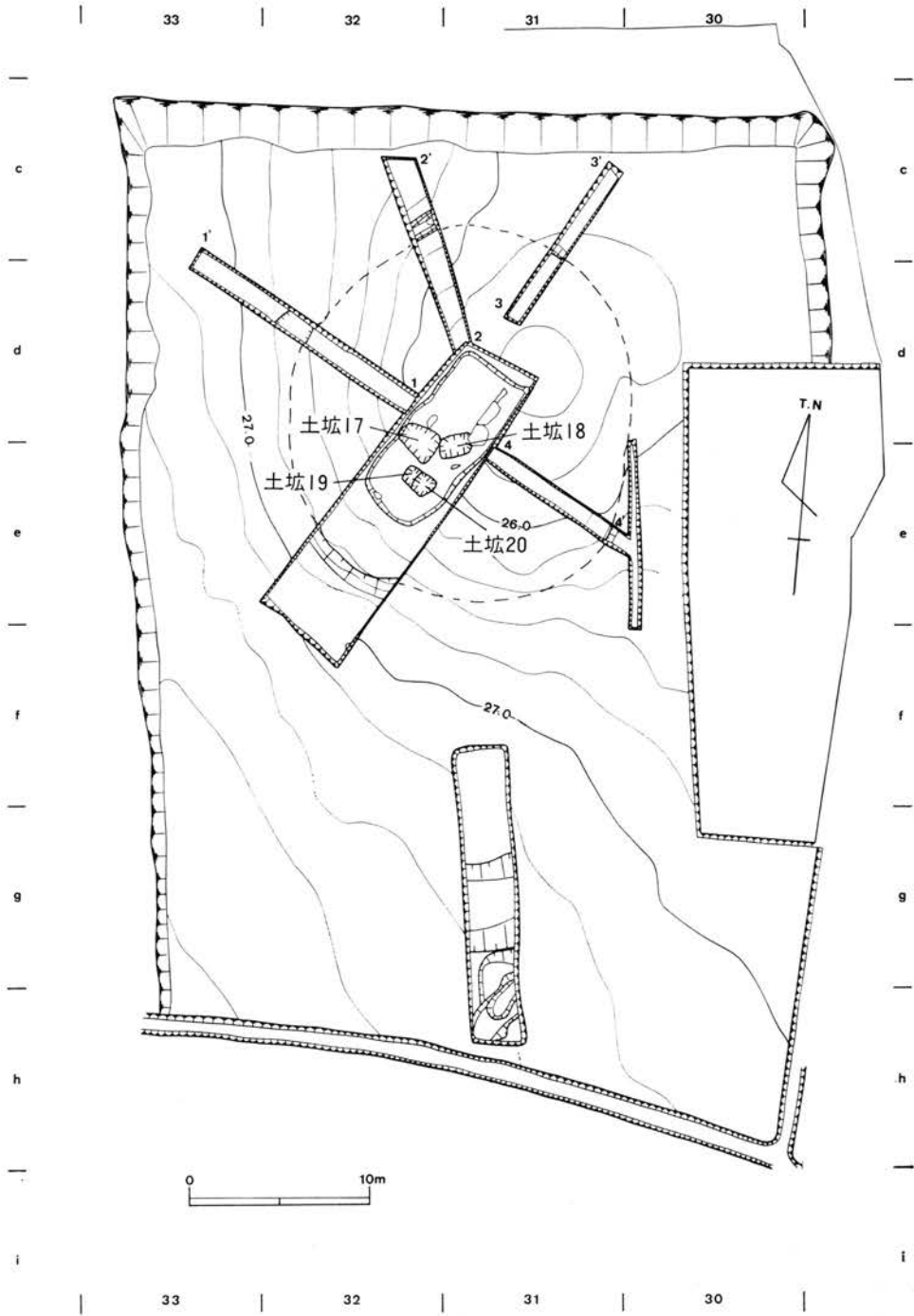
第4トレンチ 石室の主軸に直交し、石室の東方にのびるトレンチである。ここでは断面観察においても、周溝を確認できなかったが、主軸から10.7mの地点で砂礫を多く含む暗茶褐色土層が見られ、墳丘が立ち上がる状況が確認できた。

以上の各トレンチの調査結果から、1号墳は、東西23m・南北22mの円墳と考えられる。周溝以外の外部施設は、各トレンチにおいても検出しなかった。

②埋葬施設(第7図, 図版第1・2)

この古墳の埋葬施設は、後世の破壊によって多くの石材が抜き取られており、原位置を保っているものは、東側壁で4石、西側壁で1石のみであった。しかし、石材の抜き取り痕を検出したことから、1号墳の埋葬施設は両袖式の横穴式石室であることが判明した。

石室は西南西の方向に開口し、玄室の主軸はN-30°-Eをとる。石室の全長は8.4m・玄室長4.5m・玄室幅1.6~2.0m・羨道長3.9m・羨道幅1.3mを測る。



第5图 1号墳平面图

横穴式石室を構築する際、まず斜面に長方形の墓壇を掘り込んでいる。墓壇の幅は、奥壁付近で約2.6m、羨門付近で約2.5mを測る。深さは、奥壁付近で約0.6m、羨門付近で約0.1mである。

奥壁は、幅約2.65m・長さ約2mの石材を立てて使用したと思われるが、この石材は、石室内に倒れこんだ状態で検出しているため、構築状況等は不明である。

東側壁は、4個の石材を使って最下段を構築している。このうち奥壁よりの3石が残存している。残存している石材の中では、奥壁から2石目の石材が大きく、他の2石は同様の大きさである。2段目は、奥壁から3石目の部分にのみ残存している。石材の大きさは、下段の石と同様である。

西側壁は、東側壁同様4石で構築されていたものと思われるが、残存していた石材は、玄門よりの1石のみである。

玄室の平面形態は、奥壁部分が狭まり、玄門付近がやや広がる台形を呈する。玄室の床面には、礎床等の施設はなかった。また排水溝等の施設もなかった。

玄門部は、チャートの割石3石を並べて框石としている。

羨道は、玄門付近から徐々に西に曲がっている。羨道付近はすべての石材が抜き取られているが、石材の抜き取りの跡から判断すると、東側壁・西側壁ともに4石で構築されていたものと思われる。

③遺物出土状態

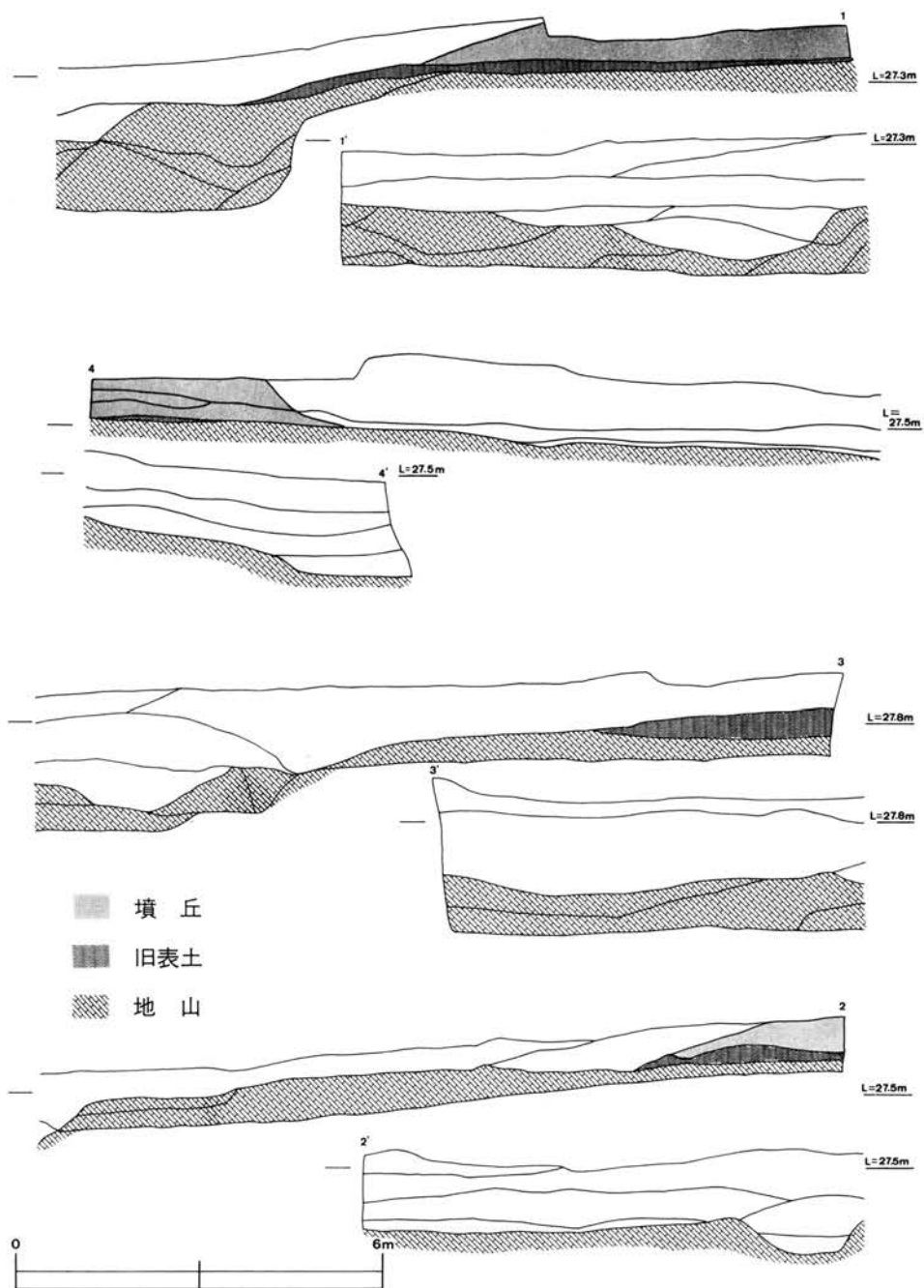
1号墳は、床面付近まで後世に破壊されたものと思われ、遺物も完形品が少なく、同一個体でも広範囲に散乱している状況が見られた。このような状況の中で、遺物が集中していた地点は、玄室の西側袖部付近と羨道部の玄門付近である。

西側袖部付近では、土師器の長胴甕・甕・甗が破片の状態で集中している。これらの土器は、復元した際不足部分が多く、また3個体の土器の破片がほぼ1か所にあったことから、追葬等の際に動かされたものだろう。

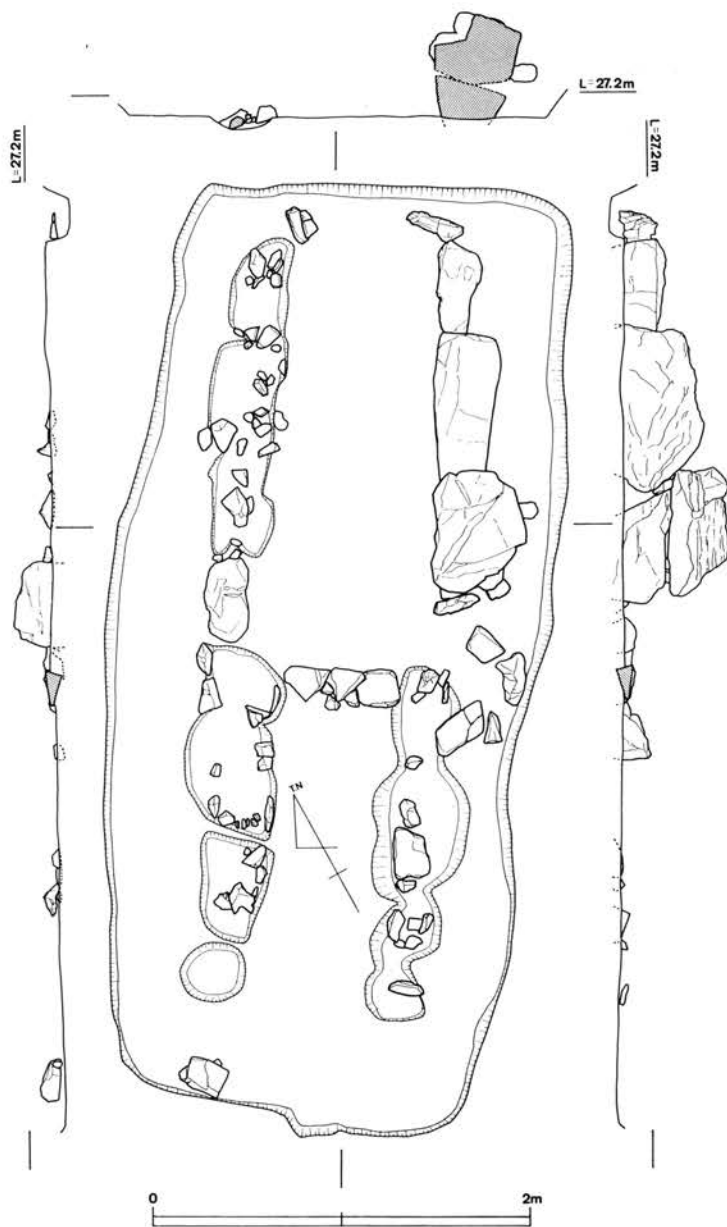
羨道部の玄門付近では、乳頭状のつまみを持ち、内面にかえりを持つ須恵器の杯蓋と、この蓋とセットになる杯身が集中している。これらの土器は、古墳に最後に追葬された土器であるが、やはり完形品は少なく、動かされている可能性がある。

特殊扁壺は、最も大きい破片が羨道部から出土しているが、玄室内からも数点の破片が出土しており、大きく動かされている状況を示している。そのため、どの遺物とともに埋葬されたかは不明である。

なお、西側袖部付近では、床面の土層において瓦器と火葬骨も出土していることから、中世の段階で古墳を再利用していることがわかる。



第6図 1号墳墳丘断面図



第7図 1号墳石室実測図

(2) 出土遺物(第8～10図, 図版第11・12)

遺物は、取り上げ番号で119に及んだが、その多くが破片であり、その後整理・復元を行い図示し得たのが45点である。遺物には須恵器(1～40)・土師器(41～43)・鉄製品(44・45)がある。以下それぞれの概略を述べる。

①須恵器(第8図・第9図)

須恵器には杯蓋(1～8)・杯身(9～23)・高杯(24～27)・甕(28)・壺蓋(30)・長頸壺(29)・台付長頸壺(31～33)・短頸壺(35～37)・特殊扁壺(34)・甕(38～40)がある。

杯蓋は、受部を持つ杯身とセットになるもの(1・2)と、乳頭状のつまみを持ち、内面にかえりをもつものの2つのタイプに分けられる。1と2は、口縁端部の形態等に若干の違いは見られるが、口径はほぼ同じで、同時期と考えていいだろう。3～8は、胎土・焼成・調整等もほぼ同一である。

杯身は、おおむね9のタイプ、10～17のタイプ、18・19のタイプ、20・21のタイプ、22・23のタイプの5つのタイプに分けられる。

9は口径が最も大きく、立ち上がりも直立に近く長くのびる。10～17では、個体差がある程度見られるものの、口径が9よりやや小さくなり、立ち上がりも短くなってきている。これらは1・2と対応するものと思われる。18・19では、口径はさらに縮小し、立ち上がりも短くなる。20・21はすでに蓋と身が逆転した段階のものである。これらは3～8の蓋と対応するものと思われる。22・23は、短頸壺の口縁部を外反させたような形態の土器である。この点からすると、杯の範疇に入れるのは不適當かもしれない。しかし、3～8の蓋や20・21の身とほぼ同じ位置から出土し、また、口径が20・21の身と同様の大きさであることから、3～8の蓋に対応する可能性が考えられ、杯の中に入れていた。

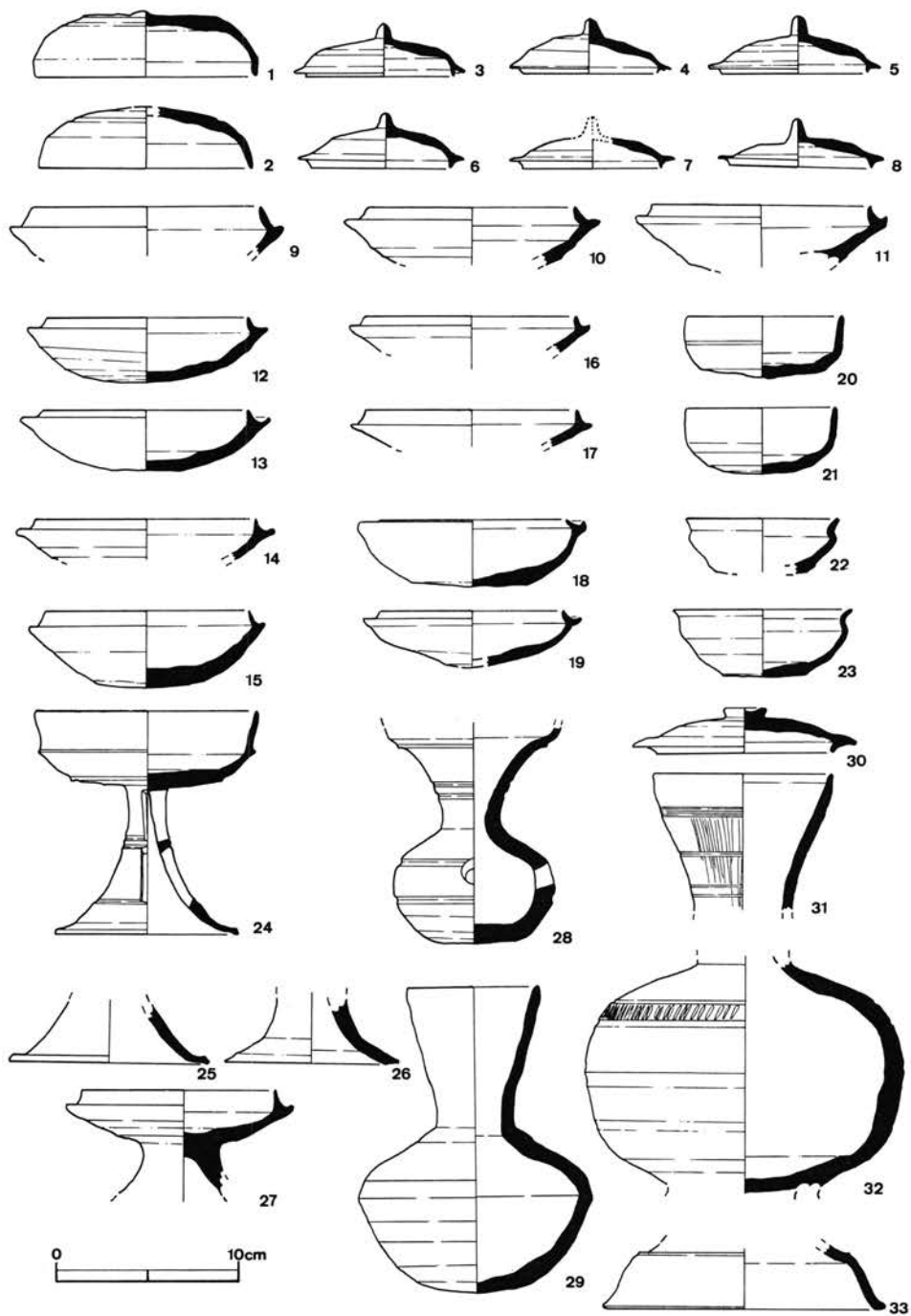
高杯は4点ある。24は無蓋高杯で、体部には突帯と段を持つ。脚部には2段の透しを持つ。27は有蓋高杯である。破片資料であるため、透しの状況は不明である。25・26は高杯の脚部である。体部の形状は不明である。

甕(28)は1点出土している。細くくびれた頸部と大きく開く口縁を持つ。文様は施されていない。

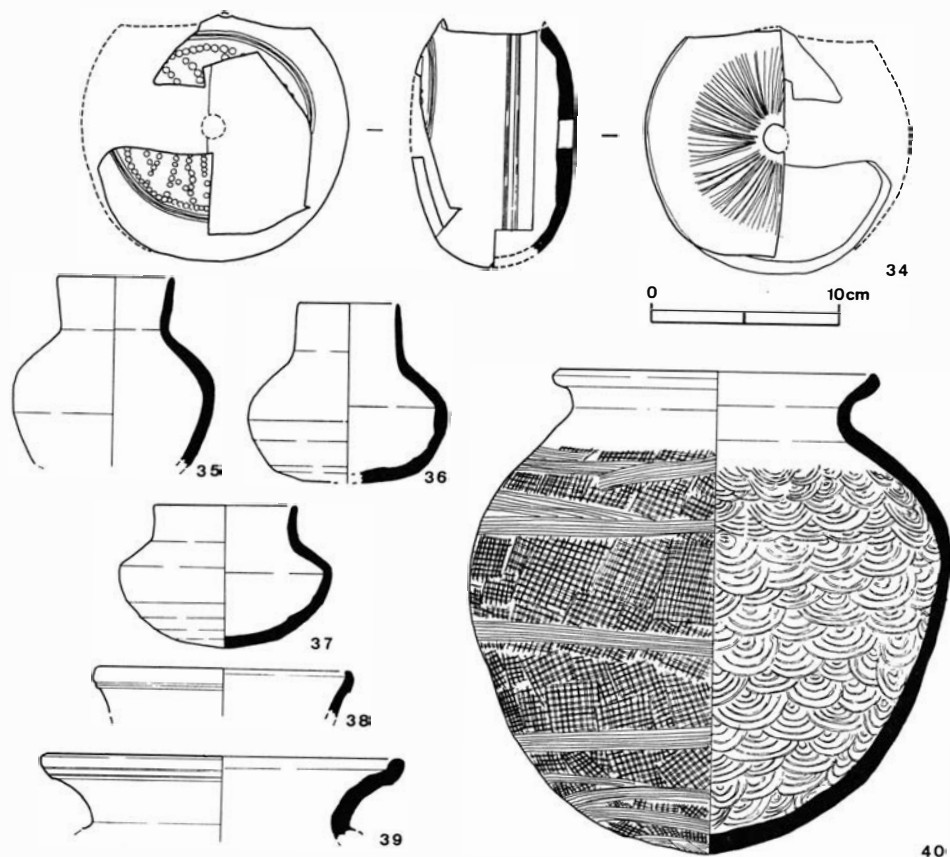
壺蓋(30)は1点出土している。台付長頸壺の蓋と思われる。

長頸壺(29)は1点出土している。やや外傾し、長くのびる口縁部を持つ。肩部はなだらかであるが、わずかに稜のような角度を有する。体部最大径は、1/2以上にある。

台付長頸壺はいずれも破片で、3点図示し得た。31は台付長頸壺の口縁部である。頸部からゆるやかに外傾し、口縁付近で直立する。文様は縦方向の沈線が施されており、部分的に文様を施さない空白部が見られる。32は体部である。肩部には2本の沈線に区画され



第8図 1号墳石室内出土遺物実測図(1)

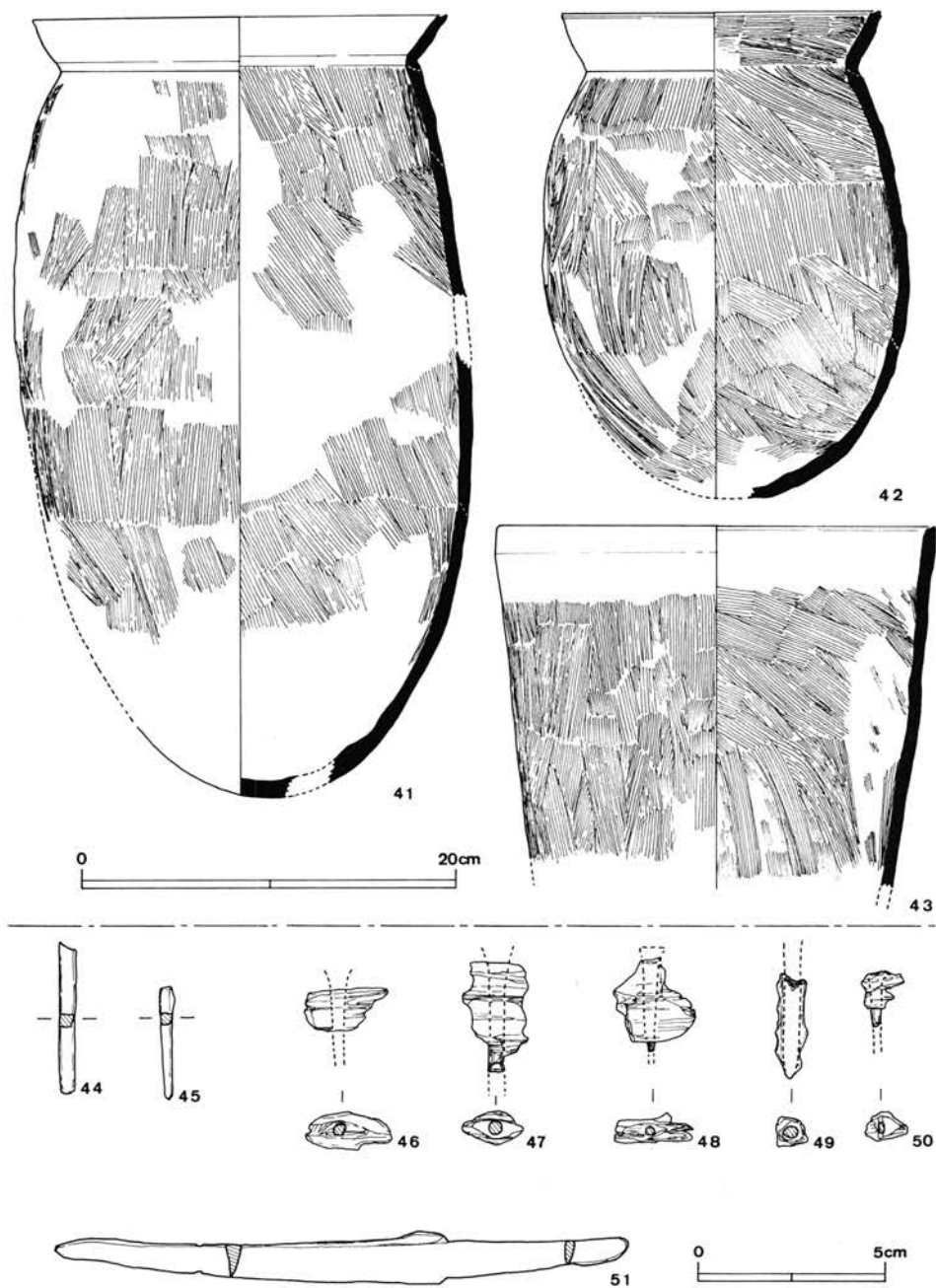


第9図 1号墳石室内出土遺物実測図(2)

た部分に刺突文を施している。最大径は、体部の中央にある。33は台付長頸壺の脚部である。屈曲部には段を有する。透しの有無は不明である。

短頸壺は3点出土している。35はやや外傾する口縁部を持ち、頸部は「く」の字状に屈曲する。最大径は、体部の1/2以上にあるが、明確な稜を持たない。36はやや内傾ぎみの口縁部を持ち、頸部はゆるやかに屈曲する。最大径は体部の1/2以上にあるが、肩部は明確な稜を持たない。底部は平底に近い形態を有する。37は直立する口縁を持ち、肩部は稜に近い角度を有する。底部は丸底である。

特殊扁壺(34)は1点のみの出土である。製作技法は提瓶に類似しており、扁円形の鉢状の土器を作り、円盤状の粘土で蓋をし、その後口縁を切って整形している。口縁の整形は施文の後に行われている。口縁部は山形に整形する。体部は両面に穿孔しているものと思われる。体部の片面は、孔を中心とした2本の沈線による円で区画し、その内部に竹管文を施している。竹管文は、まず円に沿って外周を施文し、数個おきに孔に向かって施文しているようだが、資料が一部のみが残存であるため、施文パターンを把握するには至らな



第10図 出土遺物実測図
 (41~45: 隼上り1号墳, 46~50: 土塚18, 51: 土塚17)

かった。別の面は、孔を中心として放射状に沈線を施す。この面には、直径約9.5cm程度、円形に色調の異なる部分があり、焼成の際、この面を下にして円形の台、もしくは土器の上に置かれたものと思われる。

甕は3点を図示し得た。38は外反する口縁を持ち、口縁端部を屈曲させ、わずかに肥厚する。肥厚した部分には、1条の沈線がめぐる。肥厚部分の断面は長方形である。39は外反する口縁を持ち、口縁端部をつまみ上げる。屈曲部には2条の沈線がめぐる。40はほぼ完形に復元しえたものである。口縁は外反し、屈曲部付近から肥厚させる。体部外面には粗くカキ目が施されている。

②土師器(第10図41~43)

土師器には長胴甕・甕・甗がある。

長胴甕は1点出土している。口縁部は短く外傾し、口縁端部には溝状の段を持つ。体部には、内外面ともハケ目を施す。最大径は1/2の位置にある。底部は丸底である。

甕(42)も1点の出土である。やや内湾ぎみの口縁部を持ち、口縁端部には段をもつ。口縁部は内面にのみハケ目を持つ。体部は、内外面ともハケ目がつく。最大径は1/2の位置にある。底部は丸底である。

甗(43)も1点のみの出土である。体部から口縁にかけて、やや外傾しながらまっすぐにのびる。口縁部付近を除いて、内外面ともハケ目をつける、破片資料であるため、把手の状況・底部の形態等は不明である。

③鉄製品(第10図44・45)

鉄製品は2点出土している。44は、長茎鎌の茎部、45は長茎鎌の茎の部分と思われる。

(3) 土塚墓群(第11~13図, 図版第3)

1号墳の表土を除去した段階で、4基の石組を持つ土塚墓群を検出した。この土塚墓群は石室の上層に掘削されており、石組を造る際には石室の石材も利用しているようである。

土塚17(第11図) 2.2m×1.8m・深さ0.4mの土塚である。人頭大の石材を主に使用している。断面の状況から判断すると、石材が土塚の中心に向かって転落している。これによって、この土塚には木棺が埋められ、その木棺が腐食した際に石材が転落したと考えられる。しかし、釘を検出しておらず、木棺である積極的な証左は得ることができなかった。

遺物は、刀子が1点のみ出土している。

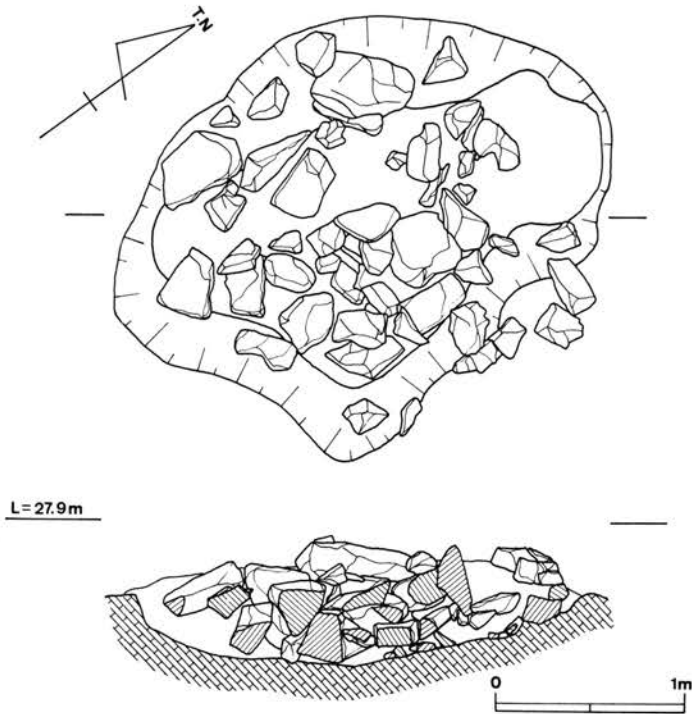
土塚18(第12図) 1.5m×0.8m・深さ0.5mの土塚である。この土塚では、拳大の石材が多く使用されている。この土塚の直下が石室の袖石の部分にあたり、袖石の破壊状況から、土塚掘削の際に、石室の袖石を破碎し、その破碎した石材を再利用しているものと思われる。土塚の南壁に沿って、鉄釘が5点出土しており、木棺が入れられていたことがわ

かる。

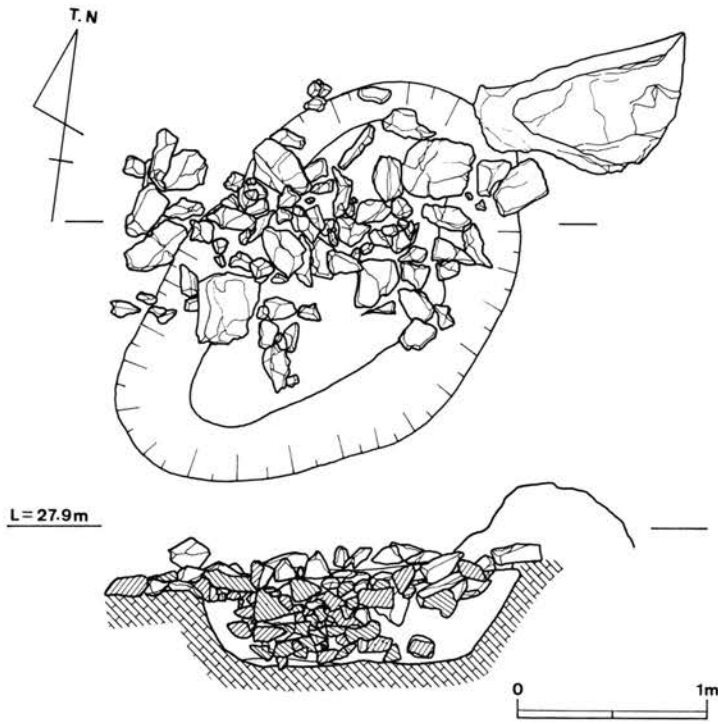
土塚19・土塚20(第13図) この2基は、土塚20が土塚19を切った状態で検出した。土塚20は1.3m×0.9m・深さ0.5mを測る。土塚19は、現存するところで、1m×1m・深さ0.5mを測る。石材はいずれも転落した状況を示しており、有機質のものが埋められていたと思われる。土塚20と土塚19の境には自然石を3石、土塚20の方に面を向けて並べられていた。遺物は出土していない。

以上の土塚群から出土した遺物は、土塚17から刀子が1点、土塚18から鉄釘が5点のみである(第10図46～51)。

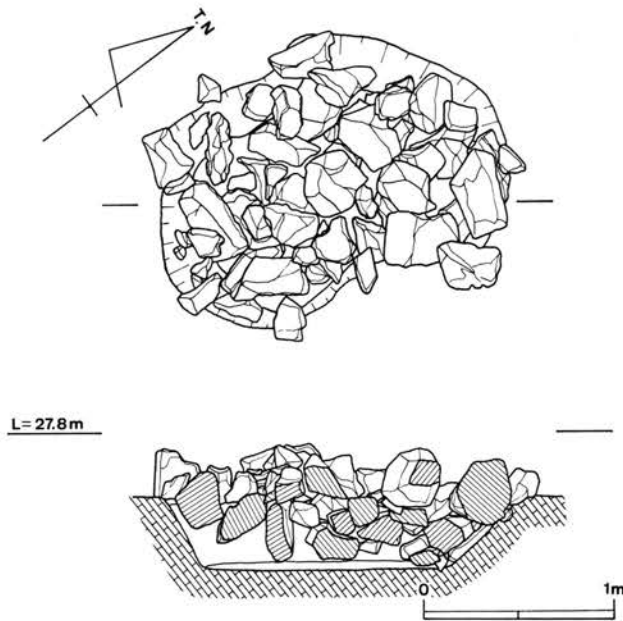
刀子(51)は刃部長10.4cm・茎長5cmである。刃部の断面形態は二等辺三角形を呈する。鉄釘(46～50)は完形品がないため長さは不明だが、太さは4mm程度である。5点とも木質がよく残る。



第11図 土塚17 実測図



第12図 土塚 18 実測図



第13図 土塚 19・20 実測図

第2節 隼上り2号墳の調査

(1) 古墳の概要

①墳丘(第14図・第15図, 図版第4)

1号墳の南方に隣接しており、調査前の標高は約26mである。墳丘は、茶畑の開墾等によって削平されており、石室の石材が露出している点以外は古墳と認めることすら難しい状況だった。調査はまず、露出している石材がその大きさなどから天井石と考えられ、石室が表土直下に遺存していることが予想されたため、人力掘削で表土を除去した。この段階で石室の石材の列を確認したため、石室の主軸線に従って、墳丘の調査を開始した。

墳丘の調査は、まず石室の主軸線に直交する方向に断ち割り、断面観察を行ったが、古墳築造時の旧地表と思われる黒色土層近くまで耕作による削平が及んでいるため、旧地表面まで全面を掘り下げ、墳丘規模を判断することにした。

墳丘西側では、墳丘の傾斜と考えられるラインを検出したが、その裾にあたる部分に奈良時代の溝が掘られており、古墳の周溝と考えられる遺構を検出できなかった。

墳丘東側は、徐々に地層が落ち込んでおり、溝状の遺構を検出したが、この溝は石室床面より低く、自然流路的な様相を呈する。

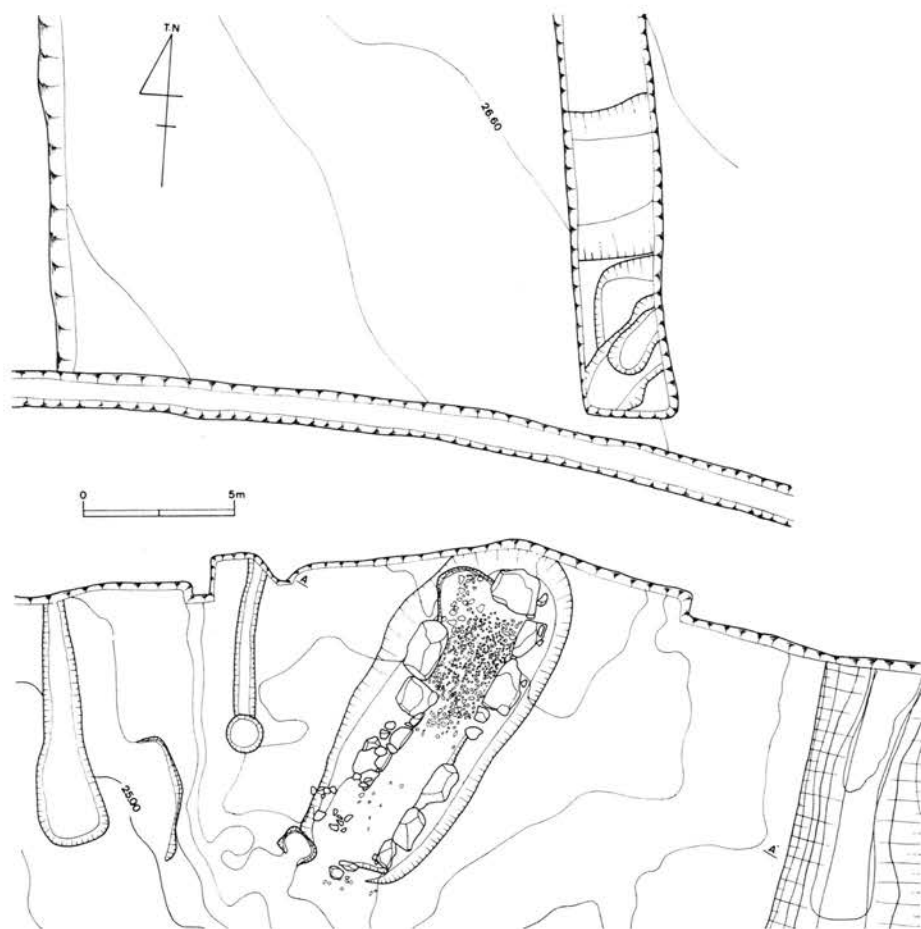
墳丘南側には、近世以降に堆積したと考えられる黄褐色土を埋土とする溝が東西に走っており、古墳の周溝と考えられる遺構は検出できなかった。

以上のような状況のため、古墳の周溝を検出できず、明確な墳形及び墳丘規模を確認することはできなかった。しかし、墳丘東側及び西側にある溝が、石室の主軸線からほぼ等間隔にあることから判断すると、これらの溝が、墳丘に規制されて掘削され、あるいは自然流路となった可能性も考えられる。このように仮定すると、2号墳の規模は東西約30mとすることができる。墳形に関しては不明であるが、1号墳や3号墳の墳形から判断すると、円墳と考えるのが妥当であろう。

②埋葬施設(第16図, 図版第4～7)

埋葬施設は、奥壁から羨道に向かって右側に袖を持つ片袖式の横穴式石室である。石室は大型のチャートを2段もしくは3段に積み、その上に天井石を架したものであるが、石材の抜き取りなどにあい、基底石のみが残存していた。

石室は南西方向に開口し、玄室の主軸はN-36°-Eをとる。石室の全長は9.15m、玄室長3.65m、玄室幅は奥壁部で1.64m・袖部で1.95m、羨道長5.50m、羨道幅は袖部で1.40m・羨門部で1.6mを測る。玄室の残存高は、奥壁部で1.10m・東壁で1.16m・西壁0.92m、羨道の残存高は、東壁で0.4m・西壁で1.04mを測る。



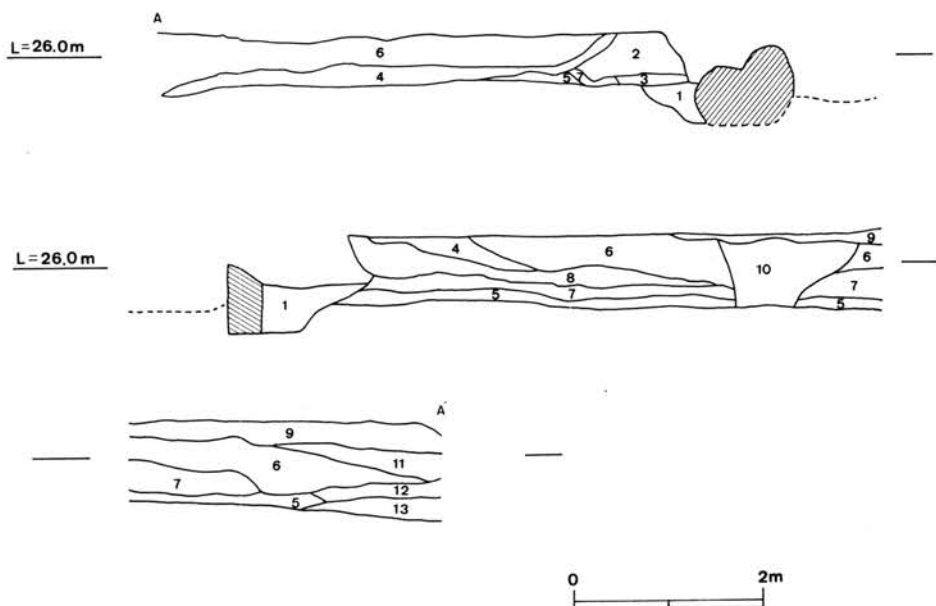
第14図 2号墳平面図

横穴式石室を構築するにあたっては、まず、旧地表面からコの字形の墓坑を掘っている。墓坑の深さは、奥壁部で0.5m・中央で0.4m・石室先端で0.2m、幅は奥壁部で4.6m・中央で5.5m・石室先端で3.5mである。墓坑を掘削した後、人頭大の石を裏込めにして、石材の最も広い面を内側に向けて側壁を据える。

奥壁は、幅1.68m・高さ1.26m・厚さ1.36mを測る大型の石材1石からなる。上段の石材は失われているが、下段の石材が、厚みのある上部の平坦面の広いものであることから、上段もかなり大型の石材を使用していた可能性が考えられる。

石室東側壁は、大型の石材2石とやや小型の石材1石で構成している。石材と石材の間には小型の石を詰めている。

石室西側壁は、奥壁よりの石材が抜き取られていたが、大型の石材2石をもって構成していたものと思われる。



第15図 2号墳墳丘断面図

- ① 暗黄褐色土 ② 暗黄褐色土(黒色土のブロックを含む) ③ 茶褐色土 ④ 淡黒褐色土
 ⑤ 黄褐色土 ⑥ 淡茶褐色土 ⑦ 黒褐色土 ⑧ 暗黄褐色土(礫を多く含む) ⑨ 淡黒褐色土
 ⑩ 黄褐色土 ⑪ 暗黄褐色土 ⑫ 茶褐色土 ⑬ 暗茶褐色土(礫を多く含む)

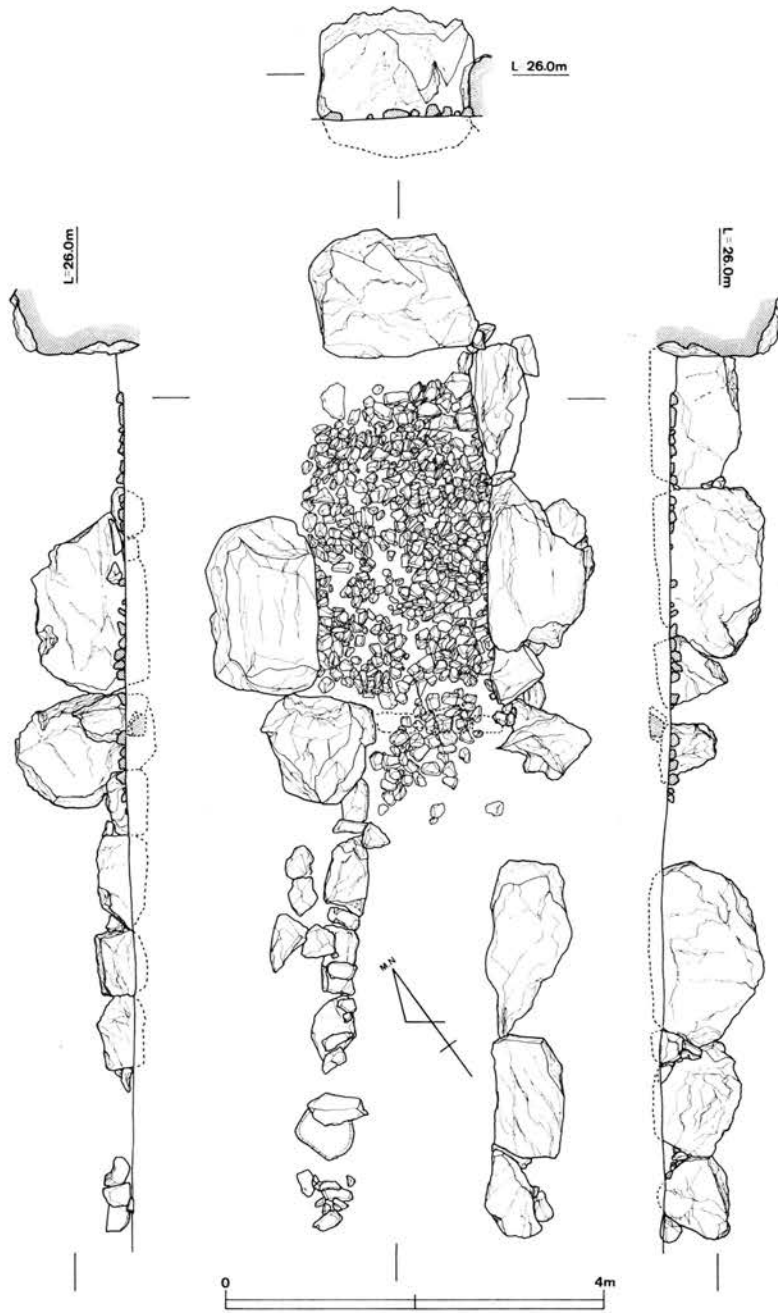
これらの3壁で形成された玄室の平面形態は、長方形を呈する。玄室の床面には、拳大の河原石を敷いている。このうち、奥壁から約50cmの幅だけ割石を敷いており、何らかの区画を意図していたものと思われる。この礫床下では排水溝を検出しなかったが、チャートの割石を多量に含む層が見られた。これは玄室内の排水を意図したものと思われる。

羨道東側壁は、玄門付近の石材が抜き取られているため、石材の大きさ等不明であるが、大型の石材5石で構成していたと考えられる。柱石は、石材上部が破壊されており、どのように据えられていたかは不明である。

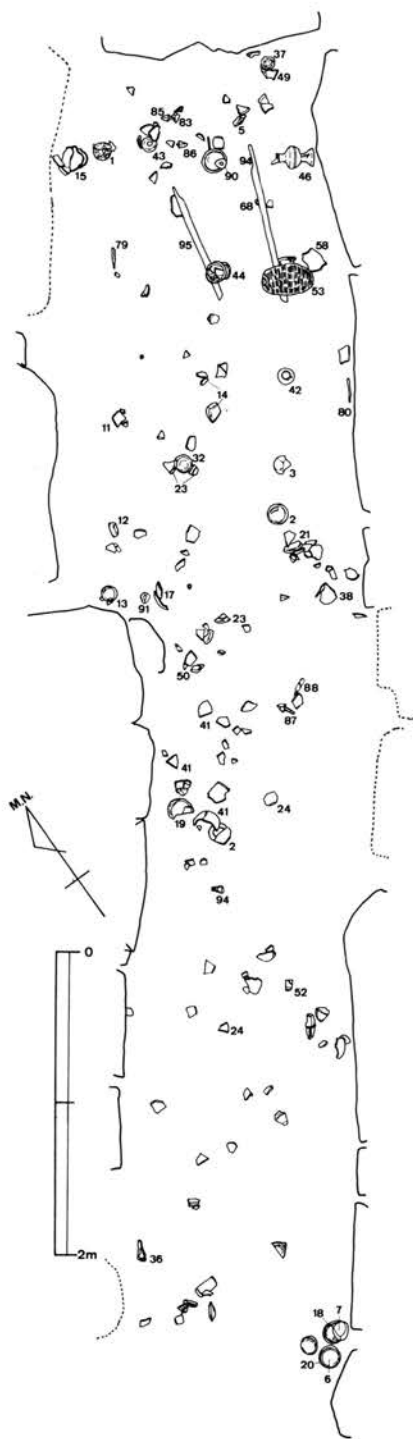
羨道西側壁は、羨門付近の石材が抜き取られているが、大型の石材1石と小型の石材6石で構築されていたと思われる。東側壁に比べ、西側壁の基底部の石材の高さは約1/2以下である。

羨道床面には袖石部分にかけては礫が敷かれていたが、ほとんどの部分で礫は見られなかった。玄門の礫床下には自然石3石が横に並べられており、框石としたものと思われる。この石から羨道側では、玄室礫床下で見られたチャートの層がなかった。

石室前庭部には、拳大の礫が堆積していた。ここからは、須恵器・土師器・瓦等が出土している。これらの遺物の中には、石室内の遺物と接合するもの、2号墳西側の土坑2出



第16図 2号墳石室実測図



第17図 2号墳遺物出土状況図

土の遺物と接合するものがある。このことから、玄室と同じく、羨道にも礫が敷かれており、この礫が追葬の段階、もしくは溝が掘削された段階にかきだされた可能性がある。

(2) 遺物出土状況(第17図)

石室内からはほぼ全面にわたって遺物が出土しているが、遺物の集中する部分も見られる。

玄室では、奥壁付近が最も遺物が多い。土器では、須恵器の蓋杯・台付長頸壺・横瓶・高杯等が出土している。鉄刀は2振りとも奥壁付近から出土しており、いずれも切先を羨道側に向け、刃が向かい合うような状態で置かれていた。鏝は1点が2振りの鉄刀のほぼ中間の位置にあり、須恵器の杯身の上に乗った状態で出土している。また、銀環もこの付近から出土している。鉄鏃は石室全体から散乱した状態で出土している。玄室の袖部付近では、遺物の集中はあまりみられないが、鏝・須恵器の蓋杯などが出土している。

羨道部では、袖石付近と羨門付近に遺物が集中する。袖石付近では、蓋杯や短頸壺が出土している。羨門付近では、蓋杯が4点重ねられた状態で出土している。また、鉸具・座金具などの馬具は羨道部から出土している。

この遺物の出土状態からは、遺物が原位置を保っているとは考えられない。石室内からは、8世紀以降の遺物も数点出土しており、古墳の再利用が数回にわたって行われたことがわかる。前項でも述べたように、再利用した際に大きな改変があったとするならば、遺物も大きく移動していることが考えられる。

(3) 出土遺物(第18～22図, 図版第13～16)

2号墳から出土した遺物には、須恵器・土師器・金環・銀環・小玉・鉄製品がある。以下、個々について説明する。

①須恵器(1～53)

須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・壺蓋・短頸壺・台付長頸壺・横瓶がある。

杯蓋は13点を図示し得た。杯蓋は、口径から、おおむね3つのタイプに分けられる。ひとつは、口径が14～15cm程度のもの、12～14cmまでのもの、10～12cmまでのものの3つである。このように口径によって3種に分けられるが、それぞれ同じグループ内でも、形態・胎土等において差異が認められる。

杯身は23点を図示し得た。これは、やはり口径から5つのタイプに分けられる。最古の形式と考えられるのは、蓋の1などとセットになるとと思われる口径13.5～14.5cmのものである。古墳に追葬された土器で、最も新しいと思われるものは33・34で、口径が9cm程度である。蓋と身が逆転する時期のものである。35は高台を持つもので、奈良時代のものであるが、これは古墳が攪乱された際に混入したものと思われる。

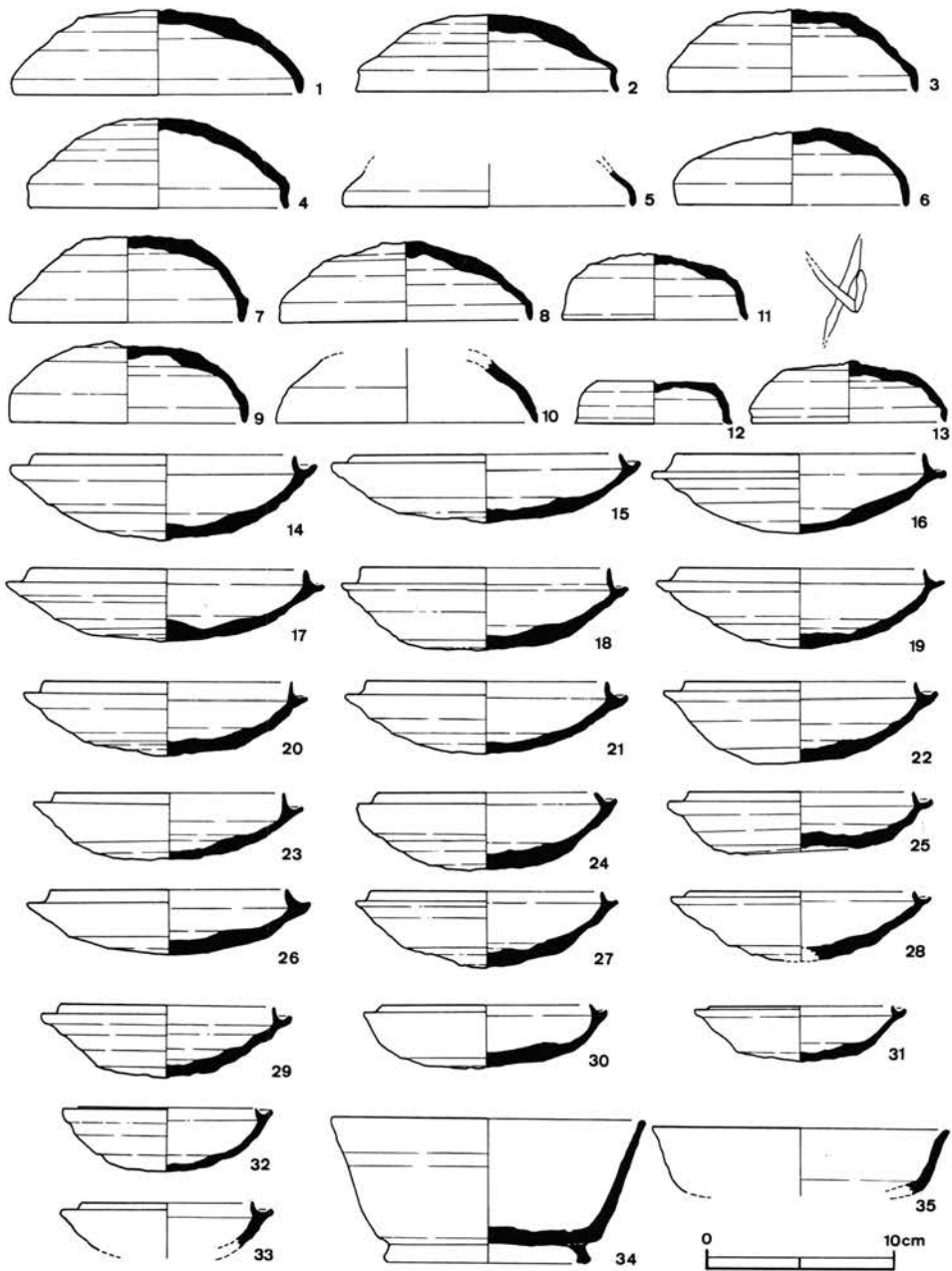
高杯は3点を図示し得た。36は有蓋高杯である。長脚で二段の透しを有する。透しは3方にある。37は有蓋高杯の杯部である。38は高杯の脚部で、3方に透しを持つ。

台付碗(39)は1点出土している。やや内湾する立ち上がりを持つ。体部には2本の沈線がめぐる。台部は外湾する。

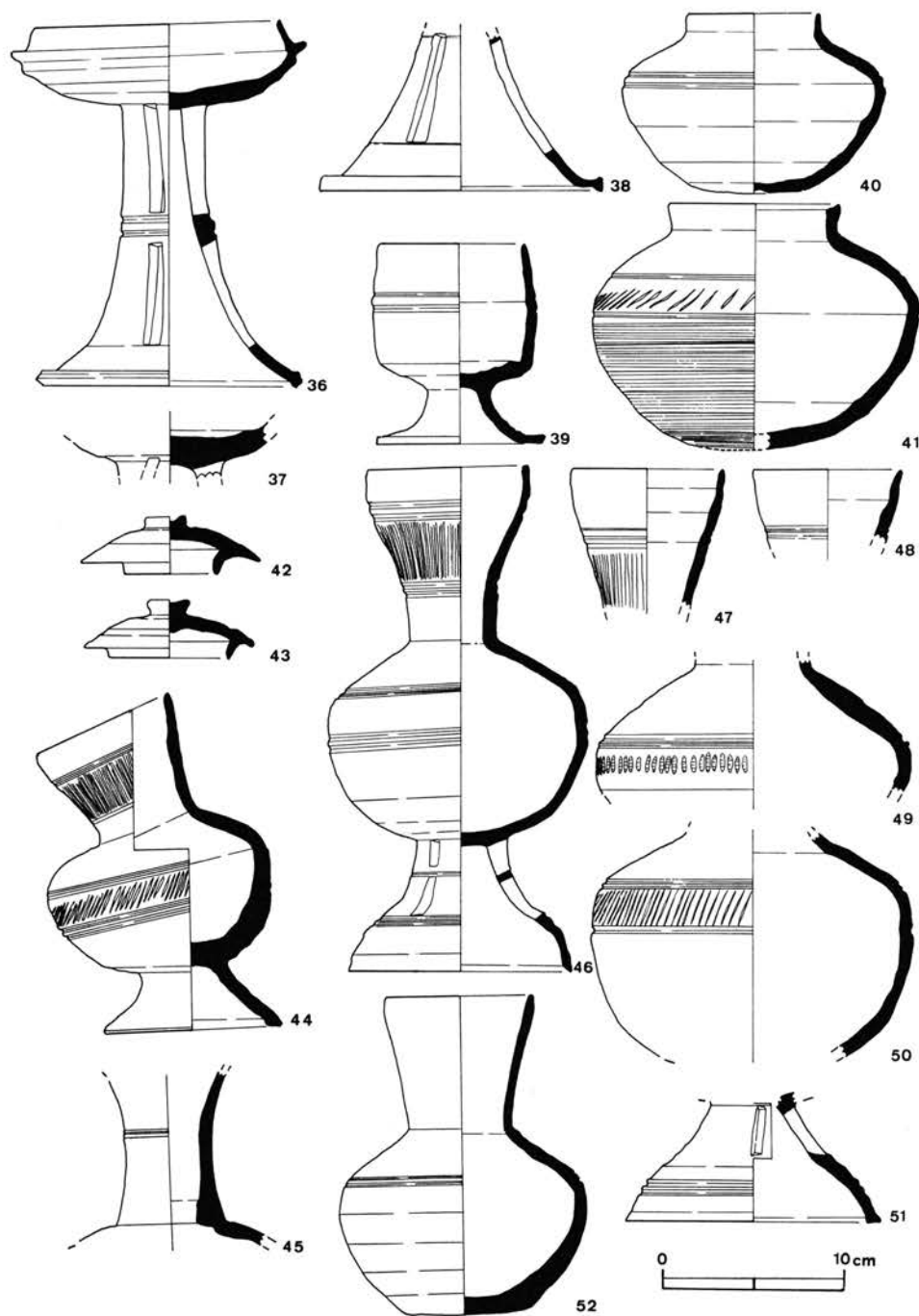
短頸壺は2点ある。40は短く垂直に立ち上がる口縁を持ち、肩部は明確な稜を持たない。肩部には2本の沈線がめぐる。41は短く垂直に立ち上がる口縁を持ち、口縁端部には面を持つ。肩部の形状はなだらかであり、2本の沈線によって区画された部分に刺突文を持つ。体部下半はカキ目を有する。

壺蓋(42・43)は2点ある。いずれも中央が窪むつまみを持つ。台付長頸壺の蓋と思われる。

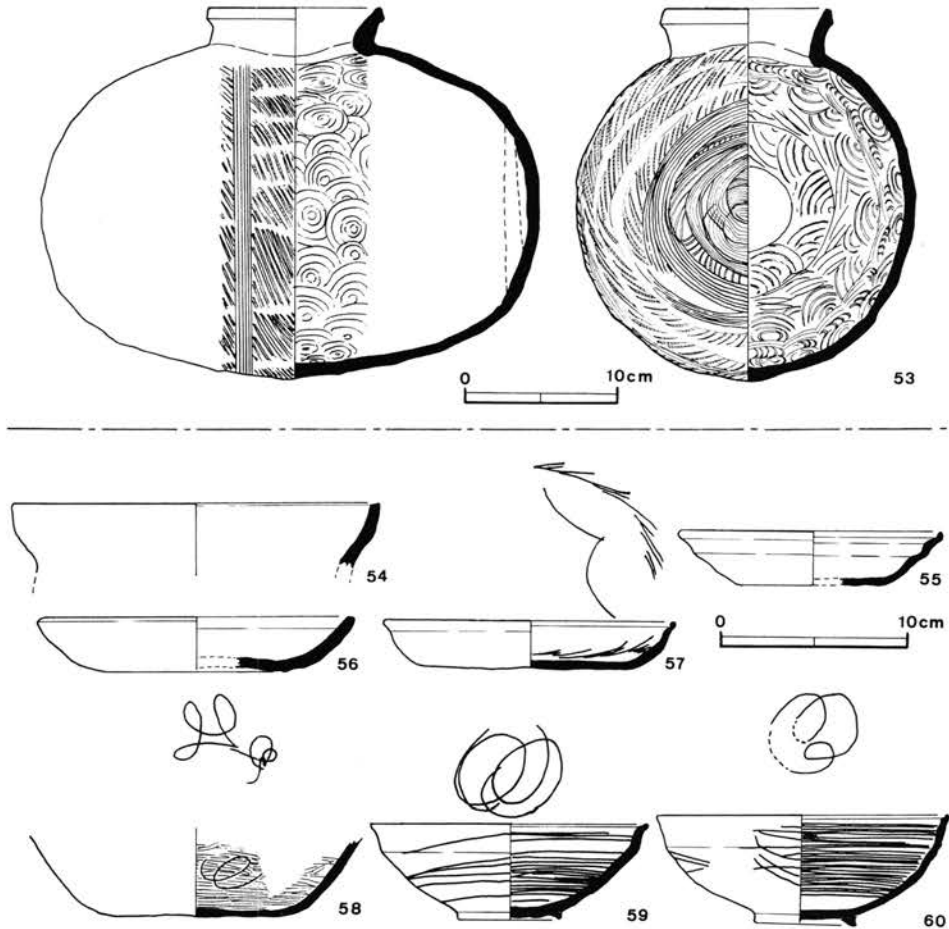
台付長頸壺は7点を図示し得た。44は頸部からゆるやかに外反し、端部近くで内方に屈曲する口縁を持つ。頸部と口縁の間には、上に2条、下に1条沈線で区画し、その間に縦方向の沈線を充填して文様帯としている。体部には、肩部の下に、上に2条、下に2条の沈線によって区画された文様帯があり、中には刺突文を充填する。脚部はハの字状に開く。焼成時のひずみが大きい。46は頸部からほぼ垂直に立ち上がり、文様帯からゆるやかに外反し、口縁付近で内方に屈曲する口縁部を持つ。口縁部の文様帯は、上に2条、下に2条の沈線で区画し、中は縦方向の沈線を充填する。肩部は稜のごとき角度を有し、体部最大径は1/2以上に求められる。文様は、肩部に2条、体部のほぼ1/2のところに2条の沈



第18図 2号墳石室内出土遺物実測図(1)



第19図 2号墳石室内出土遺物実測図(2)



第20図 2号墳石室内出土遺物実測図(3)

線をめぐらす。脚部には、3方に2段の透しを持つ。透しと透しの間に1条、下段透しの下に2条の沈線をめぐらす。47は台付長頸壺の口縁と思われる。3条の沈線をめぐらし、その下に縦方向の沈線を施す。48は台付長頸壺の口縁と思われる。2条の沈線をめぐらす。49は台付長頸壺の体部と思われる。肩部より下に文様帯を持ち、上に2条、下に1条以上の沈線で区画した部分に刺突文を充填する。50も台付長頸壺の体部と思われる。肩部より下に文様帯を持ち、上に2条、下に1条の沈線で区画した部分に刺突文を施す。51は台付長頸壺の脚部である。1段の透しを持つ。破片資料であるため透しの数は不明である。長頸壺は2点ある。45は長頸壺の頸部である。口縁部に2条の沈線を施す。52は外反する口縁を持つ。肩部はなだらかで、最大径は1/2以上にある。肩部に2条の沈線をめぐらし、沈線より下半はヘラケズリを行う。底部は平底である。

横瓶(53)は1点出土している。長い俵形の体部に短く外反する口縁がつく。カキ目は、

成形最後の段階に接合した部分に密に、他の部分は粗に施される。

②装身具(第21図)

装身具には金環・銀環・小玉がある。

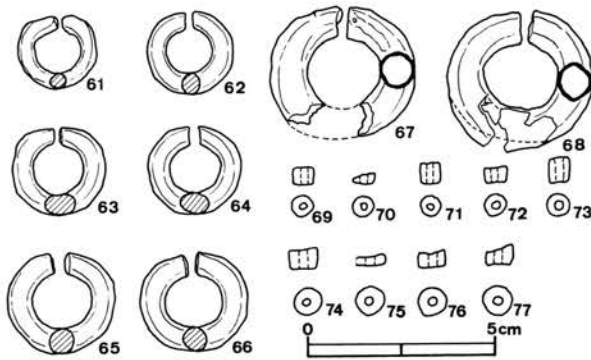
金環(61~64)は4点ある。61・62, 63・64が対になるものと思われる。いずれも銅芯に金箔を巻いたものである。61は最大径2.1cm, 断面形態は円形で、径0.4cmを測る。62は最大径2.2cm, 断面形態は円形で径0.5cmである。63は最大径2.5cm, 断面形態は楕円形で長軸0.8cm・短軸0.5cmである。64は最大径2.5cm, 断面形態は楕円形で長軸0.8cm・短軸0.5cmである。

銀環(65~68)は4点ある。65・66は銅芯に銀箔を巻いたものである。65は最大径2.8cm, 断面形態は円形で径0.7cmである。66は最大径2.8cm, 断面形態は円形で0.6cmである。67・68は中空のもので、厚さ約0.5mmの銀板を円筒状にし、その両端に蓋をして環状に曲げたものである。最大径3.9cm・断面径0.95cmである。

小玉(69~77)は9点ある。いずれも滑石製のものである。

③武器(第22図78~91・93~96)

武器には鉄鏃・鉄刀・鏑・馬具がある。



第21図 2号墳石室内出土遺物実測図(4)

鉄鏃(78~88)は10点ある。形態から4種類に分類できる。

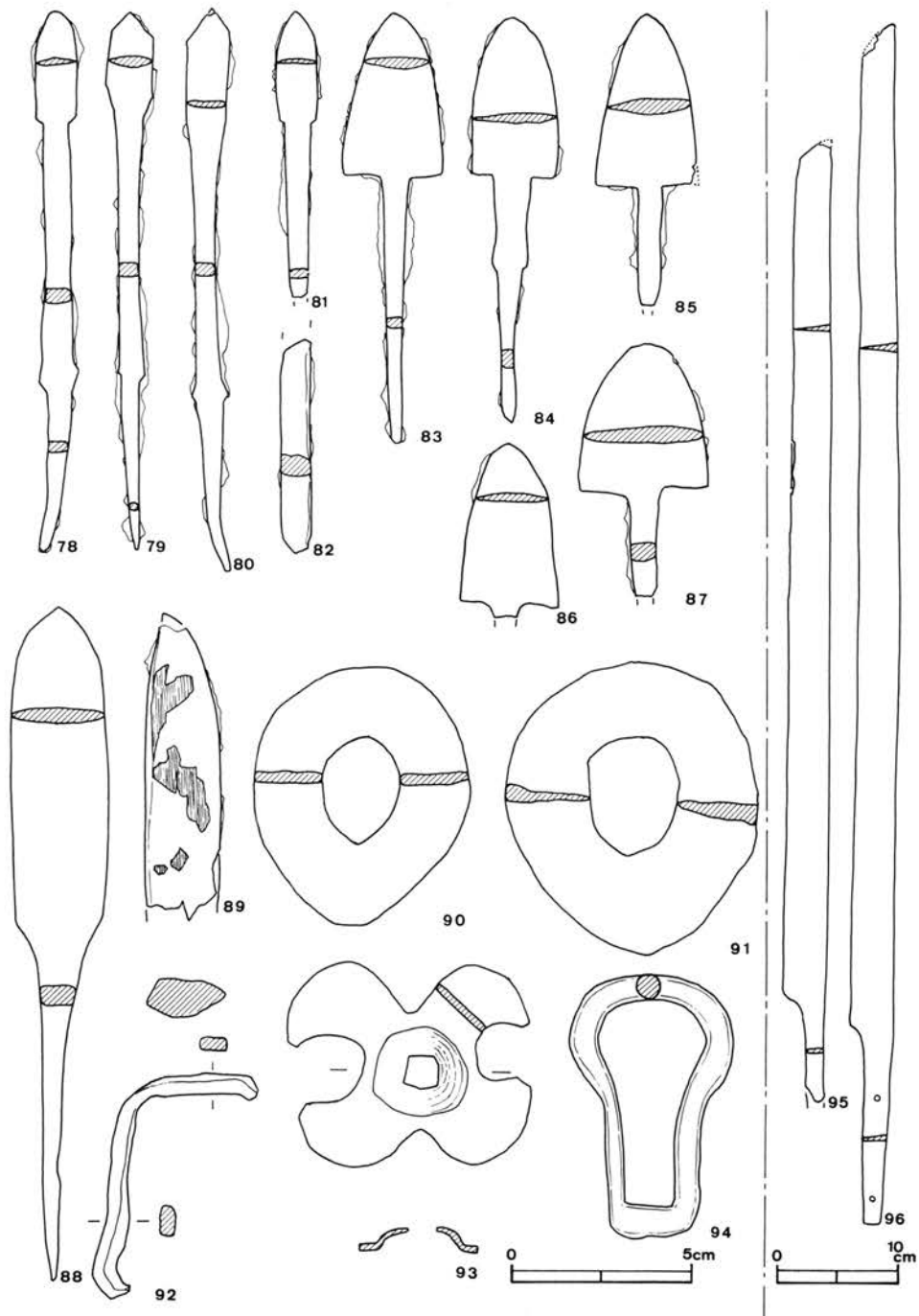
(a) 長頸鏃で、鏃身の両側に刃を持つ。頸部と茎の間には突起を持つ。長さは14.8~15.6cmである。

(b) 鏃身の形態が三角形を呈する。頸部と茎の間には

付表1 小玉計測表

(mm)

番号	長さ	径	孔径	番号	長さ	径	孔径
69	4.5	6.0	2.0	74	5.8	7.5	2.2
70	3.0	5.7	2.0	75	3.0	8.0	2.5
71	5.7	5.5	2.5	76	4.5	8.0	2.5
72	4.4	6.0	2.5	77	5.5	8.2	2.5
73	6.5	6.2	2.5				



第22図 2号墳石室内出土遺物実測図(5)

突起を持つものと持たないものがある。長さは12cm前後であろう。

(c) bに類似するが、bと比較して鎌身が広いものである。完形品でないため、長さは不明である。

(d) いわゆる柳葉式のものである。長さ18.7cm。

直刀(89・95・96)は3点ある。89は刀の切先部分である。断面は厚みを持ち、明確ではないが鑷のような角度を有す。刃と切先の境はほとんど角を持たず、切先はふくらみを持つ。鞘に入っていたものと思われ、一部に木質が付着する。95は切先と茎を一部欠損している。刃と切先の境は角を有し、切先はわずかにふくらみを持つ。断面は二等辺三角形を呈し、いわゆる平造りの大刀である。関は刃部側にのみある。刃部長70.5cm・現存長79cmを測る。96は切先の一部を欠損する以外は遺存状態の良好なものである。刃と切先の境はあまい角度を有し、切先はふくらみを持つ。断面は二等辺三角形を呈し、鑷はない。関は刃部側のみにある。茎には目釘穴が2か所あく。刃部長88cm・現存長99.3cmを測る。

鐔(90・91)は2点出土している。いずれも直刀とは別の地点から出土しているため、どの直刀とセットになるかは不明である。形態はいずれも倒卵形である。90は長径7.1cm・短径6cm、中央の孔は長径3cm・短径2.2cmを測る。91は長径8cm・短径7cm、中央の孔は長径3.2cm・短径2.5cmを測る。

④馬具(93・94)

馬具は2点出土している。

93は、C字形を背中合わせにしたような形態の鉄板の中心を円形に打ち出し、その頂部に方形の孔を穿ったものである。金銅等の装飾の痕跡は認められない。形態から、座金具として使用したものと考えられるが、何の座金具として使用したかは不明である。ここでは鞍^{しほで}金具の可能性を考え、馬具の項に入れた。

94は鉸具である。直径7mmの円形の鉄材を使用する。長さ7.2cm、幅は広い部分で4.8cm、基部で2.2cmを測る。

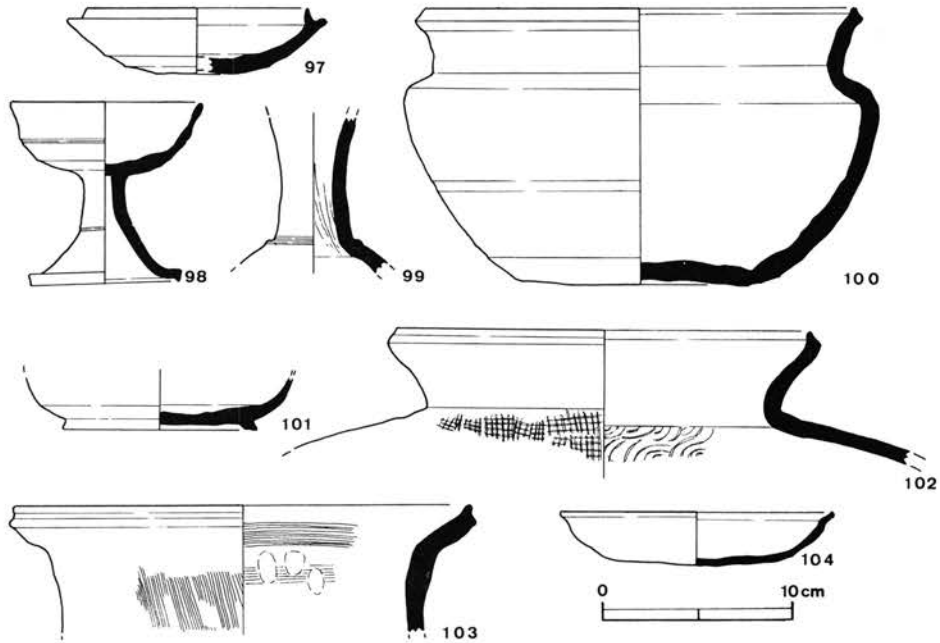
⑤鉄釘(92)

鉄釘は1点のみの出土である。長辺8mm・短辺4mmの断面長方形の鉄材を使用する。^{かすがい}錠のように両端を屈曲させている。1点しか出土しなかったため、棺に使用されたものかは不明である。

(4) 奈良時代以降の遺物と前庭部の遺物(第20図54～60・第23図)

2号墳の石室内から、古墳時代以外の遺物は、土師器・内面黒色土器・瓦器が出土している。

土師器は甕・皿がある。54は甕の口縁部である。頸部からゆるやかに外反し、その後上



第23図 2号墳前庭部出土遺物実測図

方に屈曲する。55～57は皿である。55はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁付近で外反する。口縁端部は上方につまみあげる。56は上げ底ぎみの底部を持ち、やや内湾ぎみに立ち上がる。57はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁は外方に屈曲する。内面に暗文を施す。

58は黒色土器である。内面には密に磨きを施す。59・60は瓦器椀である。口縁部には横ナデが施され、端部には比較的強い沈線が認められる。内面に比較的密に磨きが施される。

前庭部からは須恵器・土師器が出土している(97～104)。古墳時代から平安時代にわたる土器がある。97は短い受部をもつ杯身である。98は小型の高杯である。99は長頸壺の頸部と思われる。頸部に段を有する。100は奈良時代の鉢であるが、土塚2からもこの個体の破片が出土している。101は高台を持つ須恵器の杯身である。102は須恵器の甕である。口縁部は外反し、口縁端部にはつまみ上げの際の段を有する。103は土師器の甕である。やや内湾ぎみの口縁を持ち、口縁端部には沈線を持つ。104は土師器の皿である。やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外方に屈曲する。

第3節 隼上り3号墳の調査

(1) 古墳の概要

① 墳丘(第24図・第25図)

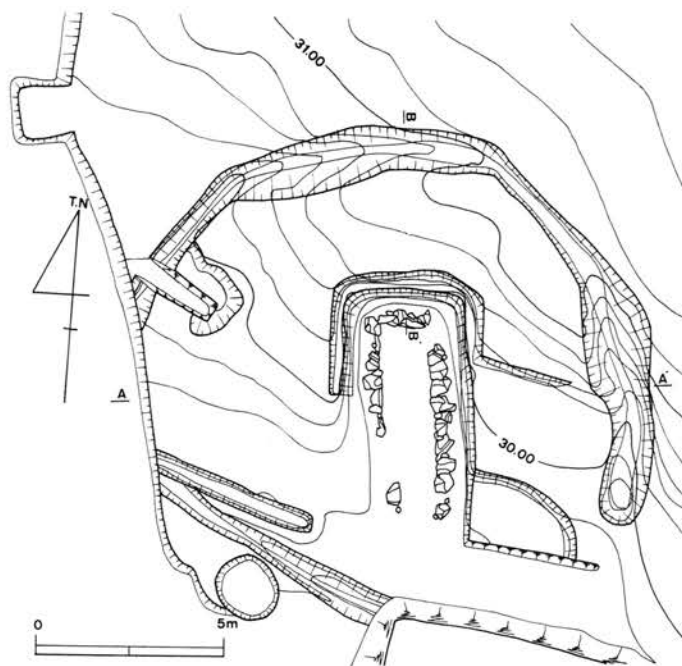
隼上り3号墳は、1号墳の東方約60mに位置する。

3号墳は、調査前には地上に全くその痕跡をとどめていなかった。当初第1調査区は、隼上り瓦窯と関連する隼上り遺跡と、石包丁の出土が伝えられる西隼上り遺跡のいずれにもかかっており、弥生時代から奈良時代にかけての遺構の存在が予想された。しかし、調査区東半部は近年の造成によって削平されており、地形が変わっていたため、地層の確認のため断ち割りを入れた。この際、土師器の長胴甕が出土し、遺構の存在が予想されたため、拡張して掘り下げたところ石室の石材の並びを検出した。

墳丘は削平を受けており、その高さ等は不明である。しかし、周溝の下部を検出した。周溝は、幅0.5~1.7m・深さ0.1~0.4mを測る。残存するのは斜面の高位部分、石室の北方から東方にかけてである。石室西方は後世の石垣によって削られている。この周溝によって規制される3号墳は、直径約12mの円墳である。

② 埋葬施設(第26図, 図版第8~10)

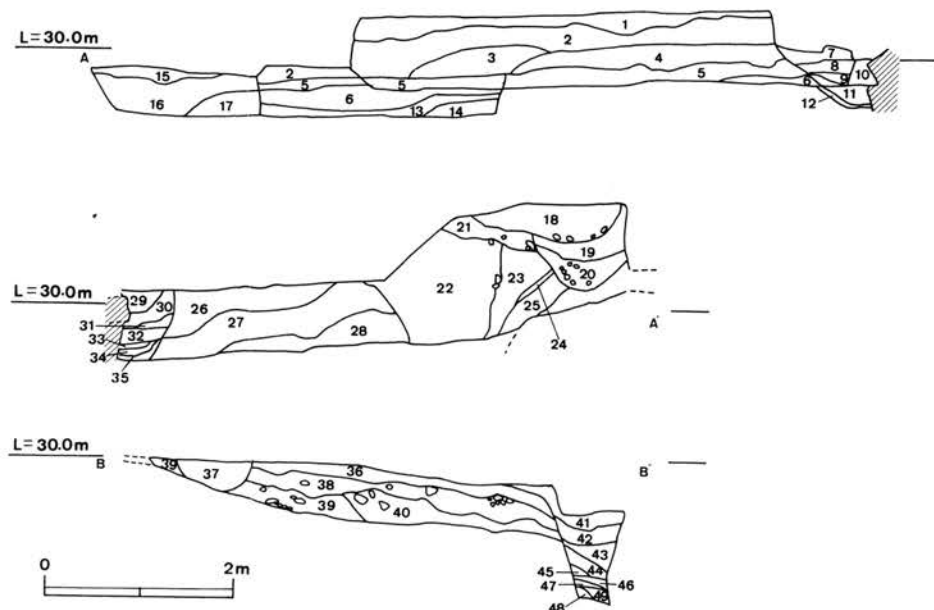
3号墳の埋葬施設は、チャートを用いた片袖式の横穴式石室である。



第24図 3号墳墳丘平面図

石室は、ほぼ南に開口し、玄室の主軸は磁北からN-2°-Eをとる。石室は全長4.65m・玄室長3.1m・玄室幅1.4m・羨道長1.55m・羨道幅は0.96mを測る。残存高は、奥壁で1.11m, 袖部で0.74m, 羨門で0.41mを測る。

横穴式石室を構築する際には、まず斜面にコの字形の墓壇



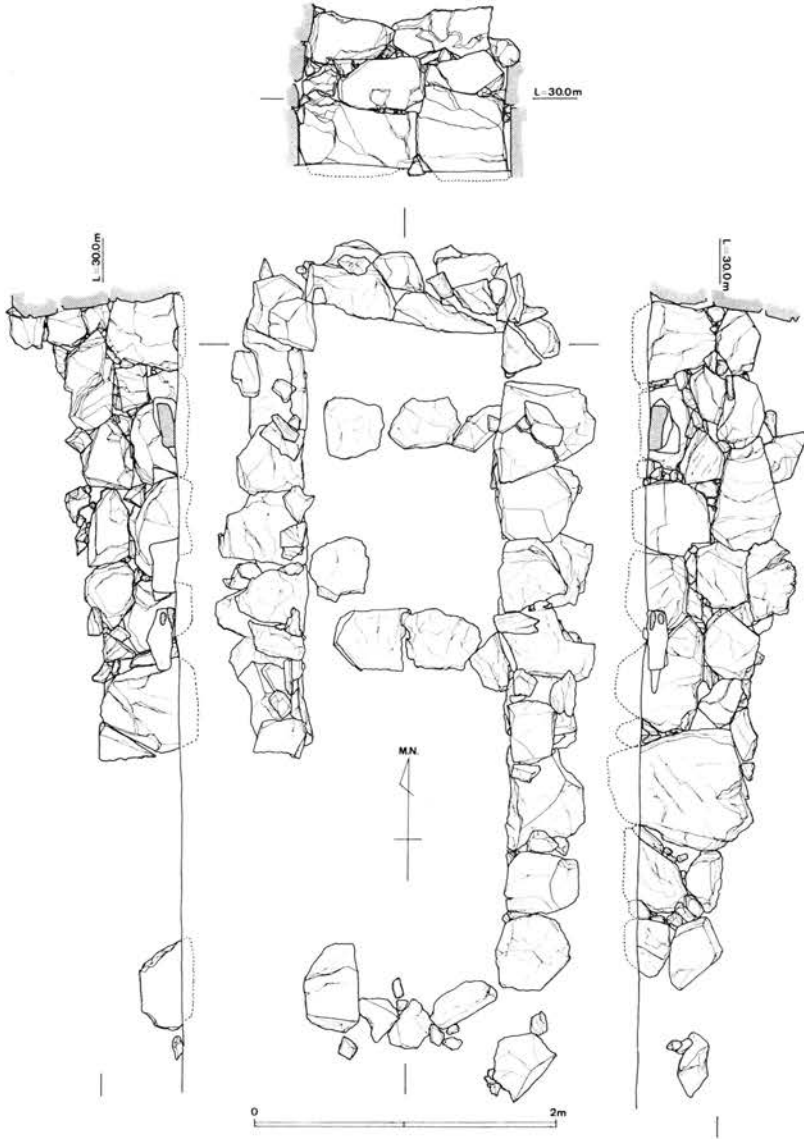
第25図 3号墳墳丘断面図

- ① 暗茶褐色土 ② 淡黄褐色土（軟質で細い土，少量の炭を含む） ③ 黄褐色土（軟質で細い土，少量の炭を含む） ④ 茶褐色土（軟質で細い土，少量の炭を含む） ⑤ 暗茶褐色砂利（約4×3cm～10×5cm程度の小礫を多数含みしまりが悪い） ⑥ 明黄褐色土（小礫を含む） ⑦ 黄褐色土 ⑧ 茶褐色土（黄褐色のブロックを含む） ⑨ 暗茶褐色土（黄褐色のブロックを含む） ⑩ 淡黄褐色土 ⑪ 暗黄褐色土（小礫を多く含む） ⑫ 黄褐色土 ⑬ 明黄褐色土（4～5cm大の礫が少量で小礫が少ない） ⑭ 黄褐色土（ほとんど礫を含まない） ⑮ 茶褐色土（小礫を含む） ⑯ 暗黄褐色土（小礫を含む） ⑰ 暗茶褐色土（5～6cm大の礫及び小礫を多数含む） ⑱ 淡黒褐色土 ⑲ 暗茶褐色土 ⑳ 黒褐色土 ㉑ 暗褐色土（若干砂利を含む） ㉒ 暗黄褐色土（黒褐色ブロックが入る） ㉓ 黄褐色礫層 ㉔ 淡黒褐色土 ㉕ 暗黄褐色土 ㉖ 暗黄褐色土 ㉗ 黒褐色土 ㉘ 茶褐色土 ㉙ 明黄褐色土 ㉚ 黄褐色土 ㉛ 淡茶褐色土 ㉜ 暗黄褐色土 ㉝ 淡黒褐色土 ㉞ 明黄褐色土（黒褐色ブロックが入る） ㉟ 黒褐色土 ㊱ 黄褐色土（軟質） ㊲ 暗灰褐色土（3×5cm～5×10cm程度の礫を含む） ㊳ 茶褐色土（軟質，2×3cm～5×10cm程度の礫を含む） ㊴ 淡黄褐色土（2×3cm～5×10cm程度の礫を比較的多く含む） ㊵ 暗茶褐色土（しまりが悪い，2×3cm～5×10cm程度の礫を含む） ㊶ 暗黄褐色土（5×6cm～3×5cm程度の礫を含む） ㊷ 茶褐色土（黄褐色のブロック炭が混入する） ㊸ 淡黄褐色土 ㊹ 淡黄褐色土 ㊺ 暗黄褐色土 ㊻ 明黄褐色土 ㊼ 明黄褐色土（㊺よりやや暗い） ㊽ 明黄褐色土（㊼よりやや暗い） ㊾ 暗黄褐色土

を掘る。墓壇は幅4m，深さは奥壁付近で1.15mである。その後石材を組むが，両側壁とも羨門から組んでいる。

奥壁は石材2石をもってその基底となす。2段目は3石をもって構築し，石材の大きさの違いによって上面のレベルを合わせている。3段目は2石の石材を使用し，2段目と3段目の隙間には小礫を充填している。壁面はやや内傾する。

玄室の東側壁の基底は5石で構成される。石材の大きさはまちまちで，それぞれのレベル差を解消するため，小礫や小型の石材を2段目との間に積む。2段目は6石で構成され



第26図 3号墳石室実測図

ている。基底石よりやや小ぶりの石材を使用する。壁面はやや内傾する。

西側壁の基底は6石で構成される。奥壁よりの石材と袖部よりの石材は他の石材と比較して大型である。2段目は前述の2つの石材の中間に、レベル差を解消するように積んでいる。壁面はやや内傾する。

この3壁によって規定される玄室の平面形態は、長方形を呈する。玄室床面には、平坦面を持つ石材が7石、2列に並べられている。奥壁から約0.9mのところ3石、約2.3mのところ3石あり、1石がこの列からややはずれ、奥壁よりのところに置かれる。平坦



第27図 3号墳石室内遺物出土状況図

面の高さがほぼ同一であることから、棺台として使用されたと考えられる。

羨道部東側壁では、3石が原位置を保っている。西側壁の状況から推測すると、築造当初は少なくとも5石程度の石材で基底を構成していたものと思われる。玄門部は、側壁の石材中最も大型の石材を使用し、立てる。他の2石は小型の石材を用いており、2段目もほぼ同様の大きさの石材を使用する。

羨道西側壁は、そのほとんどが抜き取られており、残存するのは羨門付近の1石のみであった。このため袖部の状況は明確でないが、抜き取り痕、遺物の出土状態および残存する石材の位置などから片袖式横穴式石室であることがわかった。基底の石材の数は確認できなかった。

羨道床面には排水溝などの施設はなかった。

羨門付近には、50cm程度の石が3石残存していた。石の周辺の床面には攪乱された形跡が認められないことから、閉塞石である可能性が高い。

③遺物出土状態(第27図)

石室内で完形の遺物が出土した地点は、奥壁部・袖部・羨門付近である。

奥壁部では、須恵器蓋杯が4点出土している。棺台付近では、奥壁よりの列の北辺部で銀環が2点、羨道よりの列の南辺で金環が2点出土している。袖部では台付長頸壺・高杯・蓋杯が出土している。羨門では礎が羨道中央から出土している。

石室内からはこれらの遺物のほかに、黒色土器や瓦器などが出土しており、石室が再利用されていることがわかる。しかし、金環は、着装して埋葬されたものが、棺や被葬者の腐朽とともに床面に落ちたようにも判断できる。また、他の土器に

においても、大きく移動した形跡は認められない。つまり、古墳再利用の際や石材抜き取りにおける若干の移動はあるが、多くの遺物がほぼ原位置を保っていると思われる。

(2) 出土遺物(第28・29図, 図版第17・18)

遺物には須恵器・土師器・金環・銀環・鉄釘がある。以下個々について説明する。

①須恵器(1～7・12～15)

須恵器には杯蓋・杯身・高杯・甕・台付長頸壺がある。

杯蓋は4点ある。器高では4cm前後のものと、3.5cm前後のもの2つのタイプに分類できるが、口径はほぼ同じである。

杯身は3点ある。杯身も蓋と同様の傾向が認められる。

高杯は2点ある。12は体部に2か所の段を持つ。脚部には2か所に2段の透しを持ち、透しと透しの間には2条の沈線を持つ。13は体部に1か所の段を持つ。脚部には2か所に2段の透しを持ち、透しと透しの間には2条の沈線を持つ。

甕(14)は1点ある。細い頸部と大きく開く口縁部を持つ。口縁屈曲部に段を持ち、頸部・肩部に各々1条の沈線をめぐらす。内底面には棒状工具の木口部で叩いた痕跡がある。

台付長頸壺(15)は1点ある。わずかに外傾する口縁部を持ち、2条の沈線をめぐらす体部の最大径は体部の1/2以上にある。肩部には、上1条、下1条の沈線によって区画された部分にヘラ状工具による刺突文を施す。体部内底面には、甕と同様に棒状工具の木口部で叩いた痕跡がある。脚部は一切出土せず、脚部を打ち欠いて副葬した可能性がある。

②土師器(16・17)

土師器には鉢と甕がある。

鉢(16)は外反する口縁部を持ち、口縁部に面を持つ。体部の最大径は体部の1/2以上にある。底部は丸底である。調整は内外面ともナデである。頸部には指頭圧痕が残る。

甕(17)はわずかに外傾する口縁を持ち、球形の胴部を持つ。口縁部はナデ調整、胴部外面はハケのあとヘラ削り、内面はハケ調整を施す。

③装身具(8～11)

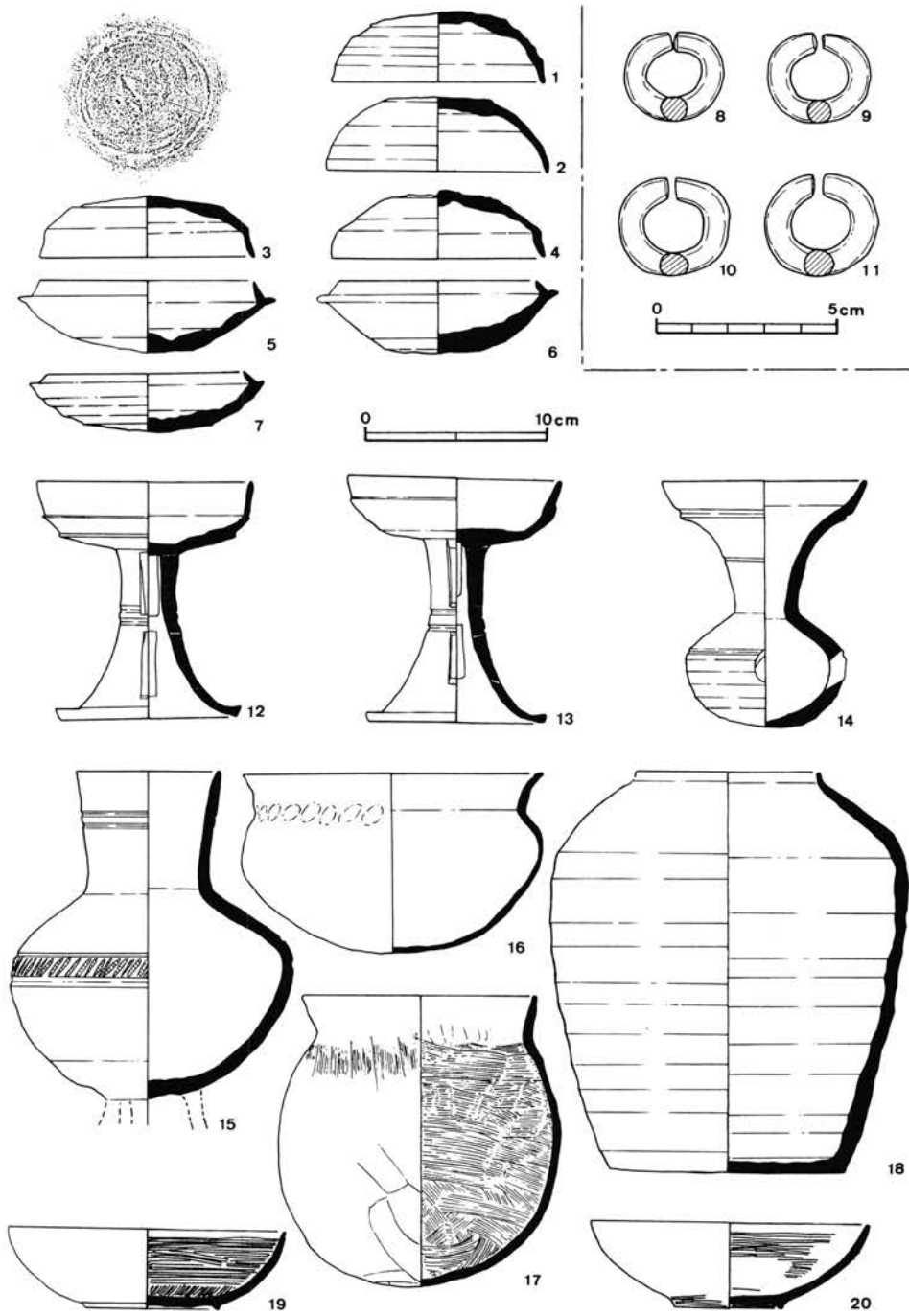
装身具には金環と銀環がある。

金環は2点ある。いずれも銅芯に金を巻いたものである。8・9ともに最大径2.8cmである。断面形態は円形で径7.5mmを測る。

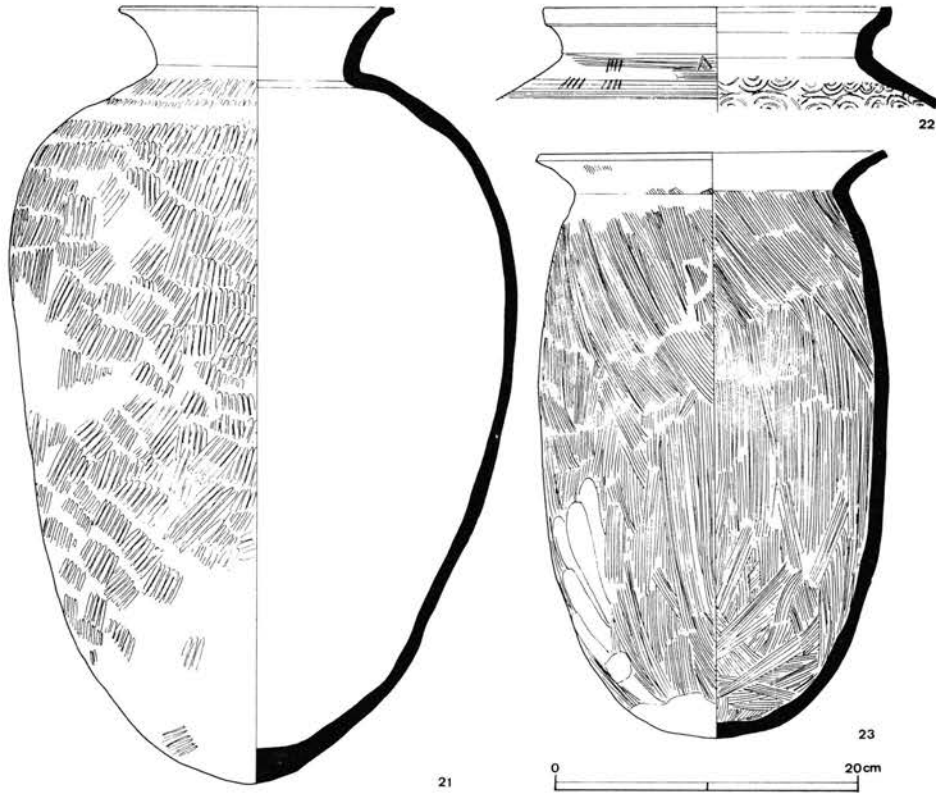
銀環は2点ある。銅芯に銀を巻いたものである。10・11ともに最大径3.1cm、断面の形態は円形で径8mmを測る。

④周溝の遺物(第29図)

周溝からは、須恵器の甕2点と土師器の甕1点が出土している。須恵器は、周溝内から



第28図 3号墳石室内出土遺物実測図(1)



第29図 3号墳石室内出土遺物実測図(2)

破砕された状態で出土している。

21は外反する口縁を有し、長い胴部を持つ。外面は平行叩き、内面は当て具痕を板状工具によってナデ消す。22は外反する口縁を持ち、口縁端部は垂直につまみ上げる。外面は叩きのあとカキ目を施す。内面は同心円状の当て具痕を残す。23は外反する口縁を持ち、長い胴部を持つ。内外面ともに縦方向のハケ調整を施す。底部にはススが付着する。

⑤古墳時代以外の遺物(第28図18~20)

石室内からは、古墳時代以外の遺物として、須恵器・黒色土器・瓦器が出土している。

18は須恵器の壺である。割れた破片を整理して重ねた状態で出土した。短く垂直に立ち上がる口縁を持ち、なだらかな肩を持つ。底部は平底である。内外面ともナデ調整を施す。20は黒色土器の椀である。いわゆる内面黒色土器で、内面には横方向の磨きが施され、見込みは一定方向の磨きが施される。底部には断面三角形の高台がつく。21は瓦器椀である。外面の風化が著しいため調整は不明である。内面は比較的密に磨きが施される。底部は断面三角形の高台が、幅の狭いヨコナデによって貼り付けられる。

第4節 小 結

(1) 古墳の年代

隼上り1号墳では須恵器の杯蓋を2タイプ、杯身を5タイプに分類した。これを田辺昭三氏の陶器の編年にあてはめると、蓋ではTK209型式とTK46型式にあたる。身ではTK43・TK209・TK46型式にあてることができる。第8図22・23はあまり類例をみない形態の土器であるが、出土位置などから考えると、TK46型式のものと考えてよいだろう。

2号墳では蓋を3タイプ、身を5タイプに分類した。蓋はTK43・TK209・TK217型式にあたる。身はTK43・TK209・TK217型式の範疇に4タイプがはいり、最も新しいものはTK48型式にあたる。土器以外では中空の銀環が、小池寛の分類によるとIb類にあたる。^(注2)この類例はいずれも京都府下にあり、園部町天神山3号墳例・福知山市城ノ尾古墳例の2例である。2例とも6世紀後半に位置づけられ、2号墳の土器の年代と矛盾しない。

3号墳では蓋・身とも2タイプに分類した。いずれもTK209型式の範疇にはいるものと思われる。

以上の結果から、各古墳の築造年代を判断すると、1号墳は6世紀第3四半世紀、3号墳は6世紀第4四半世紀後半から7世紀第1四半世紀前半の築造とみることができる。

隼上り古墳群の築造順序を示すと、まず隼上り1号墳と2号墳がほぼ同時期に築造され、やや遅れて3号墳が築造される。

(2) 埋葬回数について

土器の時期差が埋葬の回数を示すならば、1号墳では最低4回の埋葬が行われ、その最後は7世紀第3四半世紀である。

2号墳では、最低4回の埋葬が行われ、その最後は7世紀第2四半世紀であろう。7世紀末の土器は、追葬とみるより、攪乱の際の混入品とみるべきであろう。

3号墳は2回の追葬が行われるが、それらはほぼ同時期であったと思われる。耳環の数からも傍証できる。

(3) 被葬者の性格

隼上り古墳群は、細分すると隣接する1・2号墳と3号墳の2グループに分けることができる。築造時期もこれを反映して、1・2号墳が築造され、最初の追葬が行われた時期に3号墳が築造される。そして、1・2号墳がその後も追葬が行われるにもかかわらず、3号墳では築造当初に行った2体の埋葬以後、追葬されていない。このことから、隼上り古墳群の造営が2つの集団によって行われたと想定できる。

この2つのグループのうち1・2号墳のグループを中心に述べていく。まず石室では、

南山城地域で1・2号墳と同等の規模のものを持った古墳は、城陽市上大谷12号墳・17号墳^(注3)・田辺町下司1号墳^(注4)・加茂町前柵2号墳^(注5)などがある。

上大谷古墳群は、4世紀後半から6世紀後半まで造営が続いた古墳群であるが、このうち横穴式石室を持つのは12号墳と17号墳の2基のみで、6世紀後半に時期を限ってみると隼上り古墳群のあり方と類似している。

下司古墳群は8基の古墳からなり、この中で1号墳は最大の規模を持つ。前柵古墳群は5基からなり、この中で2号墳が最大の規模を持つ。

南山城地域では、100基単位の群集墳は宇治市木幡古墳群にしかみられず、その他は数基単位の小古墳群が主流をなす。このような状況の中で、9m前後の石室を持つ古墳は、小古墳群中の盟主墳的性格のものが多いようである。しかし、すべての古墳群にこのような規模の石室があるわけではないから、小地域に勢力を持つ集団の中でも、やや有力な集団の墓と考えてよいのではないだろうか。

このような視点から、隼上り古墳群の造営基盤を検討する。宇治川東岸地域の後期古墳は、前述した木幡古墳群・一里塚古墳・隼上り古墳群が知られている。地理的条件等から宇治川東岸地域を細分すると、木幡地域と菟道地域に分けることができる。そうすると前述の古墳群の中で、菟道地域に存在するのは隼上り古墳群のみとなる。現在までに破壊された古墳群や、まだ知られていない古墳群が存在する可能性は否定できないが、古墳時代と思われる遺物が出土したという伝承は隼上り周辺が最も多く、隼上り古墳群が菟道地域を代表する後期古墳群であることは、ほぼ間違いないと思われる。そうすると、この菟道地域が、隼上り古墳群を造営した基盤であったとみることができる。

菟道地域には、古墳時代後期段階では不明だが、奈良時代には宇治津・三室津があり、また北陸道もこの地を通ることになる。言わば水路・陸路の交通の要地となる。このような地域を基盤としていたため、1・2号墳を同時に造営できたものと思われる。

(4) 1号墳出土の特殊扁壺について

隼上り古墳群の中で、とりわけ注目される遺物として、1号墳出土の特殊扁壺があげられる。

特殊扁壺が出土しているのは以下の遺跡である。

- ①長野県飯田市恒川遺跡^(注6)
- ②愛知県渥美郡田原町向山6号墳^(注7)
- ③岐阜県揖斐郡池田町願成寺2号墳^(注8)
- ④三重県度会郡玉城町大仏山古墳群^(注9)
- ⑤滋賀県大津市穴太飼込13号墳^(注10)

①は唯一古墳以外から出土した例である。道路上遺構から出土しており、敷石と一緒に7世紀から11世紀までの土器が出土している。古墳出土の4例は、③・④が不明であるが、②・⑤は6世紀後半の土器とともに出土している。

まず時期については、6世紀後半から7世紀の中におさまり、隼上り1号墳の他の遺物の年代と矛盾しない。

次に分布であるが、各県1点しか出土していないため、分布の中心を把握することはできないが、すべての例が東海地方とその影響の強い地域にかたよっている。

隼上り古墳群の基盤は先に述べたが、菟道地域は逢坂山を越える北陸道が通る地域であり、また宇治津は瀬田川を利用する水運の基地である。つまり菟道地域は大和から近江方面へぬける陸路と水路の結節点である。そうした場合、菟道地域を基盤とする隼上り古墳群に、近江あるいはその近江に強い影響を与えた東海地方の遺物があることは首肯できる。

(5) 古墳の再利用について

各古墳からはいずれも奈良時代以後の土器が出土している。

1号墳では土師器と瓦器が出土している。細片であるため明確な時期は不明である。火葬骨がともに出土しており、埋葬に使われたものである。2号墳では8世紀・10世紀・12世紀の遺物が出土している。3号墳では10世紀・13世紀の遺物が出土している。

山田邦和・鋤柄俊夫は下司古墳群の報告書の中で、京都府下の古墳の再利用の状況を集成し、Ⅰ期からⅤ期に区分し、このうちⅠ期からⅢ期は墓室として使用していることを指摘している^(注11)。隼上り古墳群の例をこれにあてはめると、1号墳はⅢ期、2号墳はⅠ期からⅢ期、3号墳はⅡ期・Ⅲ期となる。1号墳では確実に埋葬が行われており、また3号墳の須恵器も蔵骨器の可能性が考えられることから、この指摘の妥当性を裏付けしたと言える。

注1 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

注2 小池 寛「中空耳環について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注3 『上大谷古墳群の調査一発掘調査概要一』元興寺文化財研究所考古学研究室 1979

注4 辰巳和弘他『下司古墳群』(同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.19 同志社大学校地学術調査委員会) 1985

注5 戸原和人他「前樽2号墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊—4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注6 山下誠一氏の教示による。

注7 久保田勝一氏の教示による。

注8 注1文献

注9 注1文献

注10 秋田裕毅氏の教示による。

注11 注4文献

付表2 遺物観察表

種類	器種	挿図 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須	杯蓋	8-1	口径：12.2 器高：3.6	平坦な天井部を有し 肩部に鈍い稜線をも つ。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	70%残 1号墳 上層
	杯蓋	8-2	口径：11.8	丸味を帯びた天井部 を有し口縁部外方に 開く。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)密 2)青灰色 3)良好	45%残 1号墳 上層
	杯蓋	8-3	口径：8.2 器高：2.9	天井部に乳頭状のつ まみを有し口縁部に かえりをもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)堅緻	45%残 1号墳 床面上
	杯身	8-9	口径：17.2	短い受部を有し内傾 する立ち上がりをも つ。	ロクロナデ	1)密 2)外淡黒色 内青灰色 3)良	5%残 1号墳 床面上
	杯身	8-12	口径：11.6 器高：3.7	短く内傾する立ち上 がりをもち受部は水 平にのびる。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)密 2)暗青灰色 3)良好	95%残 1号墳 上層
	杯身	8-19	口径：10.1	内傾する口縁部を有 し斜め上方にのびる 受部をもつ。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)淡灰色 3)不良	45%残 1号墳 上層
	杯身	8-20	口径：9.6 器高：3.3	比較的丸い底部から 屈曲し直立する口縁 部をもつ。	体部に凹線がめぐ る。ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	70%残 1号墳
	杯身	8-23	口径：10.0 器高：3.7	平らな底部から内湾 する体部をもち屈曲 し外傾する口縁部を もつ。	底部から体部中央 にかけてヘラケズ リ ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	80%残 1号墳
	高杯	8-24	口径：12.4 器高：12.3	長脚二段透かしで外 湾する脚部をもつ。 口縁部は外傾し稜を もつ。	杯部底面ヘラケズ リ ロクロナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)堅緻	70%残 1号墳
	高杯	8-27	口径：12.4	立ち上がりは短く尖 頭上ではほぼ直立する。	杯部底面ヘラケズ リ ロクロナデ	1)密 2)暗青灰色 3)良好	10%残 1号墳
器	甗	8-28	頸径：3.2 底径：4.4	平らな底部をもち屈 曲し外湾する口縁部 をもつ。体部・頸部 に沈線有。	体部中央から底部 にかけてヘラケズ リ ロクロナデ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	90%残 1号墳
	長頸 壺	8-29	口径：7.2 器高：16.9	丸底の底部を有し肩 部は張る。口縁部は 外傾する。	体部中央から底部 にかけてヘラケズ リ ロクロナデ	1)密 2)青灰色 3)良好	70%残 1号墳
	壺蓋	8-30	口径：12.4 器高：2.5	天井部には扁平なつ まみを有し鋭く内傾 するかえりをもつ。	天井部ヘラケズリ ロクロナデ	1)緻密 2)暗青灰色 3)堅緻	80%残 1号墳
	長頸 壺	8-31	口径：9.8	外傾する口縁部をも ち縦の細線を施し沈 線により2分割する。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡灰色 3)良好	5%残 1号墳
	特殊 扁壺	9-34	長径：10 短径：5.4 器高：13	扁平な体部を持ち両 面に穿孔する。口縁 は山形に切る。	ロクロナデ 側面ヘラケズリ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	50%残 1号墳
	短頸 壺	9-36	口径：6.0 器高：9.5	直立する口縁を持ち、 頸部の屈曲はなだら か。体部最大径は1/2 にある。	体部中央から底部 にかけてヘラケズ リ ロクロナデ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	50%残 1号墳 上層

種類	器種	挿図番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須恵器	短頸壺	9-37	口径：7.6 器高：7.3	口縁部はやや外反する。体部最大径は1/2以上にある。	体部中央から底部にかけてヘラケズリ ロクロナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	70%残 1号墳上層
	甕	9-40	口径：16.8 器高：25.3	口縁部は大きく外反し端部は肥厚する。	内面は青海波文、外面は格子文タタキ ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	80%残 1号墳上層
土師器	長胴甕	10-41	口径：22.5 器高：41.9	口縁部はわずかに内湾し口縁端部には面を持つ。	ハケ目 ロクロナデ	1)やや粗 2)淡赤褐色 3)やや軟	70%残 1号墳
	甕	10-42	口径：17.1 器高：25.8	わずかに内湾する口縁を持つ。一部にスス付着。	ハケ目 ロクロナデ	1)密 2)暗黄褐色 3)良好	70%残 1号墳
	甕	10-43	口径：19.3	体部はやや外傾し直線的にのびる。	ハケ目 ロクロナデ	1)密 2)明赤褐色 3)やや軟	40%残 1号墳
須恵器	杯蓋	18-1	口径：15.2 器高：4.4	やや丸味を帯びた天井部を有し口縁部は下方に屈曲する。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)密 2)淡黄褐色 3)不良	70%残 2号墳
	杯蓋	18-7	口径：12.4 器高：4.5	平坦な天井部を有す。焼けひずみがある。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)密 2)青灰色 3)良好	70%残 2号墳
	杯蓋	18-13	口径：10.4 器高：3.2	口縁部はやや内傾する。天井部にヘラ記号を持つ。	ロクロナデ 天井部ヘラ切り	1)緻密 2)青灰色 3)良好	100% 2号墳
	杯身	18-14	口径：13.9 器高：4.6	口縁はわずかに内傾する。受部は斜め上方にのびる。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)淡黄褐色 3)不良	80%残 2号墳
	杯身	18-20	口径：13.4 器高：3.9	垂直にのびる口縁を持ち受部は水平に短くのびる。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)密 2)暗青灰色 3)良好	100% 2号墳
	杯身	18-29	口径：11.5 器高：3.8	口縁はわずかに内傾し、受部は端部を上方に屈曲させる。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)暗茶灰色 3)良好	100% 2号墳
	杯身	18-32	口径：9.5 器高：3.4	短く内傾する口縁を持ち受部と口縁はほぼ同じ高さになる。	ロクロナデ 底部は未調整	1)緻密 2)淡青灰色 3)堅緻	100% 2号墳
	杯身	18-34	口径：16.4 器高：7.7	底部は平坦で張り付け高台をもち体部は斜め上方にのびる。	ロクロナデ 底部はヘラ切り	1)緻密 2)淡灰色 3)良好	50%残 2号墳
	高杯	19-36	口径：13.6 器高：19.9	長脚で2段に3方の透しを持つ。透しと透しの間に2条の沈線を持つ。	ロクロナデ 杯部底面ヘラケズリ 脚部はカキ目調整	1)緻密 2)杯部青灰色、脚外黒灰色、内淡灰色 3)堅緻	95%残 2号墳
	台付碗	19-39	口径：7.8 器高：11.0	体部は内湾気味に上方にのび、2条の沈線を持つ。台部は大きく外反する。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)密 2)暗青灰色 3)良好	90%残 2号墳
須恵器	短頸壺	19-40	口径：7.2 器高：9.75	口縁部は垂直に短くのび肩部に2条の沈線をめぐらす。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	80%残 2号墳
	壺蓋	19-42	口径：5.1 器高：3.2	つまみは中央に凹部を持つ。内面にかえりを有す。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)緻密 2)暗青灰色 3)堅緻	95%残 2号墳

種類	器種	挿図 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須	長頸壺	19-46	口径：8.8 器高：27.5	頸部にヘラ状工具による縦方向の文様を有し上部には2段透しをもつ。	ロクロナデ 底部ヘラケズリの後ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)堅緻	95%残 2号墳
	長頸壺	19-52	口径：8.0 器高：17.6	口縁部は外傾し、肩部に2条の沈線をめぐらす。底部は平肩。	ロクロナデ 体部下半分ヘラケズリ 底部ヘラ切り	1)緻密 2)淡黒灰色 3)良好	40%残 2号墳
器	横瓶	20-53	口径：10.8 器高：24.5	口縁部は短く外反する。体部は俵状を呈する。	外面は格子タタキ 後カキ目、内面は青海波文タタキ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	100% 2号墳
土師器	皿	20-57	口径：15.6 器高：2.5	口縁端部はやや外反し肥厚する。内面に暗文を持つ。	ヘラケズリ	1)密 2)明褐色 3)良好	70%残 2号墳
黒色土器	碗	20-58	底径：9.6	斜め上方にまっすぐにのびる口縁を持つ。内面に暗文を持つ。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)密 2)外赤褐色 内暗黒褐色 3)良好	70%残 2号墳
瓦器	碗	20-59	口径：14.8 器高：5.0	口縁端部に凹線を持つ。底部には貼り付け高台を持つ。	ロクロナデ 底部ハケ状工具で調整	1)緻密 2)暗黒灰色 3)良好	60%残 2号墳
須恵器	高杯	23-98	口径：10.1 器高：9.7	口縁部はやや外傾し脚部は大きく外反する。杯部と脚部に沈線をもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡灰色 3)良好	70%残 2号墳 前庭部
	鉢	23-100	口径：22.8 器高：14.5	口縁部は外反し体部は肩張りで平坦な底部をもつ。口縁端部は肥厚する。	ロクロナデ 肩部ヘラケズリ 底部不定方向ナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	80%残 2号墳 前庭部
土師器	甕	23-103	口径：24.2	口縁部は大きく外反する。	ロクロナデ ハケ目	1)密 2)淡褐色 3)不良	10%残 2号墳 前庭部
	皿	23-104	口径：14.4 器高：2.8	口縁部は大きく外反し底部はやや丸味を帯びる。	ロクロナデ 口縁部ハケ状工具によるナデ	1)緻密 2)淡赤褐色 3)良好	40%残 2号墳 前庭部
須恵器	杯蓋	28-1	口径：11.9 器高：3.9	口縁部は外反し体部にはわずかな稜がみられる。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	100% 3号墳
	杯蓋	28-3	口径：11.9 器高：3.4	口縁部はやや外湾し体部にわずかな稜がみられ天井部にはヘラ記号がある。	ロクロナデ 天井部ヘラ切りとヘラケズリ	1)密 2)暗青灰色 3)良好	100% 3号墳
	杯身	28-5	口径：11.8 器高：4.8	立ち上がりは内傾し受部は水平にのび底部は丸味を帯びる。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)密 2)灰色 3)良	97%残 3号墳
器	杯身	28-7	口径：11.1 器高：4.0	立ち上がりはかなり内傾し受部は水平方向に短くのび平坦な底部をもつ。	ロクロナデ 底部ヘラ切りとヘラケズリ	1)密 2)暗青灰色 3)良	100% 3号墳
	高杯	28-12	口径：11.8 器高：13.1	口縁部は垂直にのび杯部には段を持つ。脚部には2段2方に透しを持つ。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)外淡茶灰色 内灰色 3)良	90%残 3号墳
	甕	28-14	口径：11.4 器高：13.6	頸部から大きく外反する口縁を持つ。肩部に1条の沈線を持つ。	ロクロナデ 体部上面不定方向ナデ 体部下面ヘラ磨き	1)緻密 2)青灰色 3)良好	98%残 3号墳
	長頸壺	28-15	口径：8.0	やや外傾する口縁を持ち体部に刺突文を有する。	ロクロナデ 外面ハケによるカキ目	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	90%残 3号墳

種類	器種	挿図 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
土 師 器	丸底 壺	28-16	口径：16.7 器高：9.8	口縁部は大きく外反し 体部はやや肩張りで 底部は丸味を帯びる。	ロクロナデ 体部不定方向ナデ	1)密 2)暗茶褐色 3)良好	70%残 3号墳
	丸底 壺	28-17	口径：13.0 器高：16.2	口縁部はやや外反し 底部は丸味を帯びる。 口縁部から肩部に黒 斑を有す。	外面ハケ後ヘラケ ズリ、内面ハケ目 口縁部・底部指ナ デ	1)密 2)淡黄褐色 3)良好	90%残 3号墳
須 恵 器	壺	28-18	口径：10.2 器高：22.1	口縁部は短く上方に のびる。底部は平底。	ロクロナデ 底部ヘラ切り	1)緻密 2)青灰色 3)良好	98%残 3号墳
黒 色 土 器	椀	28-19	口径：15.4 器高：4.5	はりつけ高台を有し 口縁部内外面各々1 条の沈線をめぐらす。	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き	1)密 2)外淡赤褐色 内暗黒褐色 3)やや軟	95%残 3号墳
須 恵 器	甕	29-21	口径：18.2 器高：51.3	外反する口縁を持ち 胴部は大きく張らな い。	内面板状工具によ るナデ 外面叩き文様を施 す	1)密 2)青灰色 3)良好	80%残 3号墳 周濠
土 師 器	長胴 甕	29-23	口径：23.6 器高：38.8	口縁部は大きく外反 し底部は丸味を帯び ススが附着する。	ハケ目 口縁部ハケ目後ロ クロナデ	1)密 2)外淡赤褐色 内淡黄褐色 3)良好	60%残 3号墳

第4章 隼上り遺跡

第1節 調査の概要

隼上り遺跡は、標高41~45mの平坦な丘陵に位置する。当地から北方200mには隼上り^(注1)瓦窯があり、南方300mには大鳳寺跡^(注2)が所在する。両遺跡との関連が十分予想され、また、近世の五ヶ庄の一村落である畑寺村の有力な推定地として注目されたところでもある。

調査地は、南北60m・東西120m、掘削面積は5,000m²である。堆積状況を述べると、東方については置土(約30cm)直下で飛鳥時代・奈良時代の柱穴群を検出したが、丘陵先端部である西方(第30図)では、置土が約1m堆積し、その下に近世の遺物包含層(c層)が約20cm堆積している状況であった。近世の遺構は、基本的に置土直下のc層から掘り込まれており、そのため、飛鳥・奈良時代の遺構の30%前後が消失ないし、それに近い状態であった。近世の包含層中には飛鳥・奈良時代の遺物も比較的多く見られ、近世の段階で調査地が攪乱を受けたことを示している。

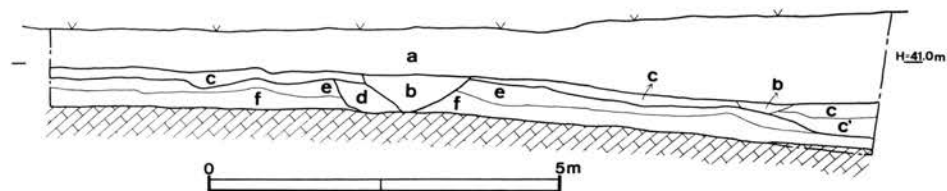
中世の遺構は地山で検出したが、遺構上面が削平された状況にある。検出した遺構は土坑墓のみで、周辺で同時期の遺構は検出していない。

飛鳥・奈良時代の遺構は、すべて地山に掘り込まれている。近世に削平を受けたため遺構自体も比較的浅く、一部で遺物が集中するのみである。

検出した遺構を時代別に記述する。

(1) 飛鳥・奈良時代の遺構

調査地全面に遺構の広がりを確認した。検出した遺構の大半は柱穴であり、特に、BⅥ区・BⅦ区に集中している。柱穴群から出土した遺物は極めて少なく、また、残存状態も悪いため、建物跡を復元する際、年代設定をするには至らず、群として時期設定をするのみに終わった。掘立柱建物跡を概観すると、主軸線方向から三時期に設定でき、飛鳥時



a:置土 b:暗茶褐色粘質土 c:黒灰褐色土 d:暗茶褐色砂質土 e:暗茶褐色土 f:茶褐色土

第30図 DⅦ区 北壁断面図

代から奈良時代の掘立柱建物跡の変遷を考える上で重要な根拠を得たと言える。その他の遺構としては、瓦、土器等を多量に含んだ道状遺構・溝・土坑・焼土ピット等がある。

(2) 中世の遺構

中世に属する遺構は、土坑墓のみであるが、一基で存在することも考えにくく、周辺に同様な墓があった可能性が極めて高い。

(3) 近世の遺構

主にV区からVII区において検出した。溝は建物を区画するために穿たれたと考えられ、堆積も浅い。溝内から瓦・陶磁器等が出土している。DVI区では、建物の基礎と考えられる集石を検出した。また、整地が進んだ段階で直径60cm前後の柱穴を30程度掘り込んでおり、一連の建物として認識できる。また、生活用水確保のための水溜め施設も検出することができた。その他、墓・柵列・土坑・石列等がある。

第2節 飛鳥時代・奈良時代の遺構と遺物

(1) 遺 構

①掘立柱建物跡について

検出した掘立柱建物跡は、総計30棟を数える。復元にあたり、各柱穴毎の出土遺物を観察し、また、柱穴の深さ等を正確に検証したが、切り合い関係の良好な資料等が極端に不足しており、建物跡の前後関係を明確にできなかった部分もある。以下、各掘立柱建物跡毎に規模・時期等について記述する。なお、各図面の掘立柱建物跡の番号は時期を考慮せず、便宜的に付したものであり、また、時期の記述についても第40図掘立柱建物跡変遷図に準拠している。

掘立柱建物跡1(第33図) B VII区最西端で検出した南北に棟をもつ建物跡であるが、トレンチ外に広がるため全容はわからない。3間分(7.6m)の柱列を検出した。柱間は等間隔で、柱穴は円形の掘形をもち、大きさは直径60cmから80cmとばらつきが認められる。出土遺物には土師器片等があるが、細片のため年代はわからない。建物跡の主軸線の方向からⅢ期に含められる。

掘立柱建物跡2(第33図) 掘立柱建物跡1と重なり合った状態で確認した建物跡である。3間(5.4m)×1間(2.2m)の北西から南東に棟をもつ。桁行の柱間は1.8mを測り、等間隔である。一方、梁間の柱間は2.2mで桁行の柱間に比べて若干広い。柱穴は円形の掘形をもち、大きさは直径50cm前後である。柱穴内からの出土遺物は皆無であるが、主軸線の方向からⅠ期に含めることができる。桁行に比べて梁間が極端に狭いことを考慮すれば、



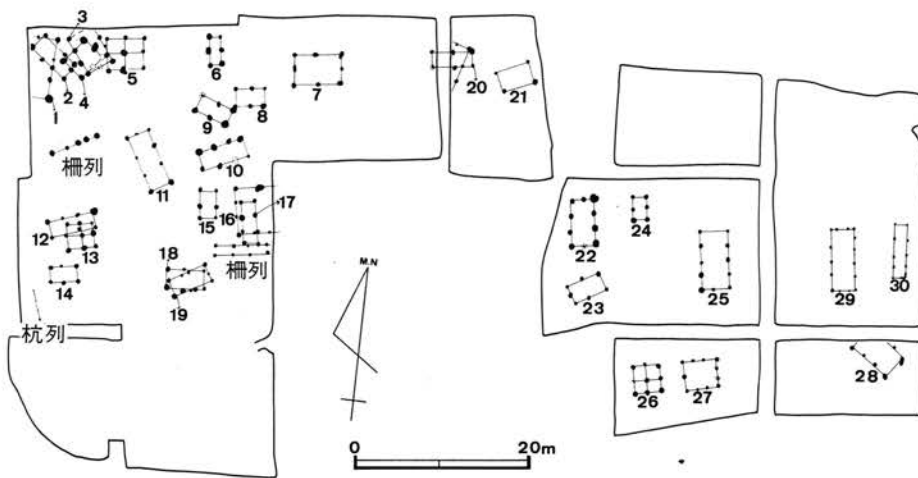
第31図 調査地平面図 (杭間は20m)

単純な構造をもった倉庫であった可能性が高い。

掘立柱建物跡3(第33図) 後述する掘立柱建物跡4・5と一部が重なった状態で検出した建物跡である。北端角の柱穴がトレンチ外に位置するため、計測値については推定値になるが、3間(4.8m)×2間(3.4m)の北西から南東に棟をもつ建物と考えられる。桁行の柱間は2間目が1.7mで、1・3間目は1.5mを測る。一方、梁間は両側の柱穴しか確認できていないが、中間部分が若干落ち込んでいることや、仮に2間と考えた場合1間あたりの柱間距離が桁行と同じく1.7mになることなどから2間とするのが妥当である。柱穴は円形の掘形をもち、大きさは直径50cmから60cmを測る。柱穴内からの出土遺物には土師器・須恵器・製塩土器があるが、いずれも断片資料であるため年代比定できないのが現状である。主軸線方向からⅡ期に含めることができる。

掘立柱建物跡4(第33図) 2間(3.1m)×2間(3.7m)の規模を有するもので、北東から南西に棟をもつと考えられる。桁行の柱間は1.8m・梁間の柱間は1.4mを測る。桁行の東方に位置する柱穴は後世の攪乱により確認できなかったが、2間×2間の建物跡は他の地区でも確認しており、その規模で復元した。なお、他の2間×2間の建物跡は総柱の建物として考えられるものが多いが、この建物跡の中央には柱穴を確認していない。柱穴は円形の掘形をもち直径60cmを測る。柱穴内からは数片の土師器・須恵器片を検出したのみである。主軸線方向からⅠ期の範疇に入れることができる。

掘立柱建物跡5(第33図) 掘立柱建物跡4と同じく2間(4.4m)×2間(4.1m)の規模を有し、東西方向に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は2.2m、梁間の柱間は2mを測る。柱穴の掘形は円形をなし、大きさは直径45cmから85cmとばらつきが見られる。特に、

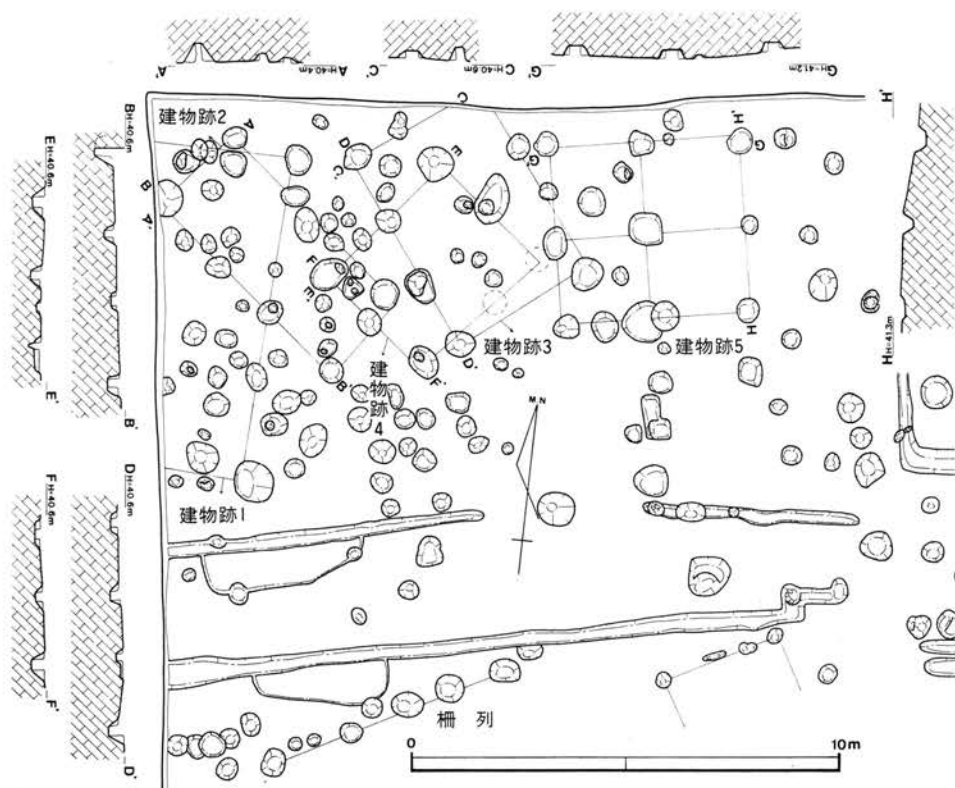


第32図 掘立柱建物跡位置図

桁行の北方面中央に位置する柱穴が直径51cmであるのに対し、南方面中央にある柱穴の大きさは91cmであり、上部構造との関連で考える必要がある。柱穴内から比較的残存状態のよい土師器・須恵器片が出土した。主軸線方向からⅢ期と考えてもよい資料である。

掘立柱建物跡6(第34図) 2間(3.6m)×1間(1.3m)の規模を有し、南北に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は北から1間目が1.5m、2間目が2.1mを測り、各々の柱間距離に差異がある。一方、梁間は1.4mを測り、桁行の1間目とはほぼ同じ数値になる。柱穴の大きさは40cmから60cmの円形の掘形を有し、柱穴内からは土師器・須恵器の細片が出土している。主軸線方向からⅢ期に属する。建物跡は2間×1間の簡単な構造をもつ倉庫である可能性が高い。

掘立柱建物跡7(第34図) 2間(5.7m)×2間(3.4m)ではあるが、柱間距離に違いがあり、東西に棟をもつ建物跡と考えられる。桁行の柱間は2.5mを測るが、1間分の柱間としてはかなり広く、柱間の中央に補助的な柱が存在した可能性がある。桁行の南東角柱は近世の溝で大半が攪乱されている。梁間は、柱間が1.6mを測るが、西側の中央部の柱穴は攪乱を受け確認できない。柱穴の大きさは個々によって若干の差異はあるが、60cm前



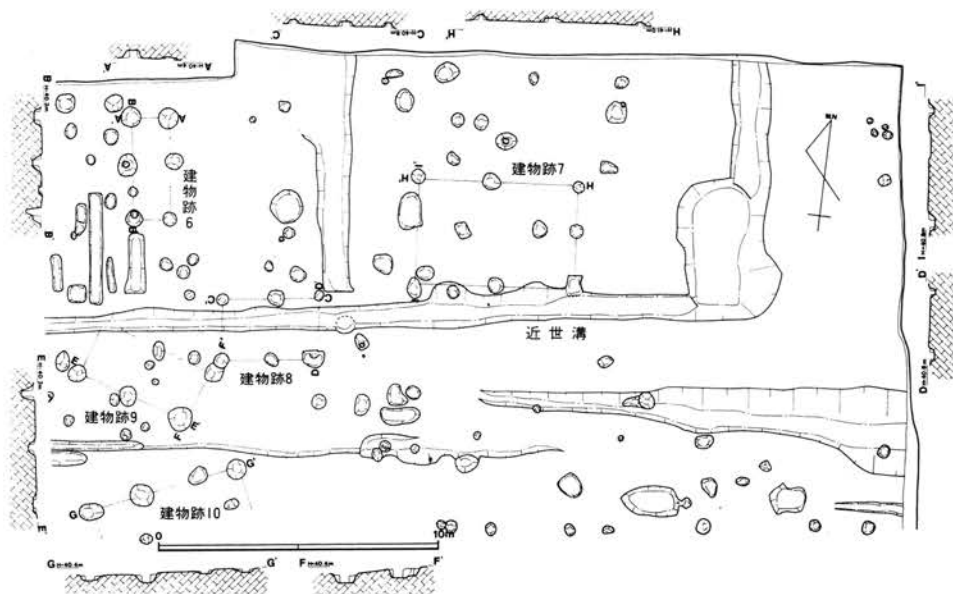
第33図 BⅦ区 遺構実測図

後の大きさである。柱穴からは土師器の細片を検出したが、器表面の調整等が摩滅しており、年代を決定するには至っていない。建物跡の主軸線からⅢ期の範疇に含めてよい資料である。

掘立柱建物跡8(第34図) 2間(3.3m)×1間(2.1m)の小規模な建物跡であり、東西方向に棟をもつ。桁行の柱間は西から1間目が1.8m、2間目が1.6mを測る。柱穴の大きさは60cmである。柱穴からは遺物が出土しておらず、年代設定ができないが、建物跡の主軸線からⅢ期に含められる。建物跡の性格は推測の域をでないが、規模が小さいことや柱穴があまり深く掘り込まれていないことから簡単な構造をもった倉庫であった可能性が考えられる。

掘立柱建物跡9(第34図) 掘立柱建物跡8と同じく2間(4.1m)×1間(1.9m)の小規模な建物跡で、東西方向に棟をもつものである。桁行の北西角柱は攪乱を受けたため、検出できなかったが、南面の柱列から柱間が2mであることがわかる。柱穴の大きさは基本的には60cmであるが、東南角柱のみ80cmを測る。柱穴は20cm程度の深さしかない。柱穴から土師器・須恵器片が出土しているが、年代設定するに至っていない。主軸線の方からⅢ期に比定できる。この建物跡は簡易な倉庫と考えられる。

掘立柱建物跡10(第34図) 3間(5.6m)×1間(2.1m)の西から東に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は1.8mでほぼ等間隔である。柱穴の大きさは50cm前後になるが、少しのばらつきが認められる。柱穴からの出土遺物には土師器片等がある。掘立柱建物跡として



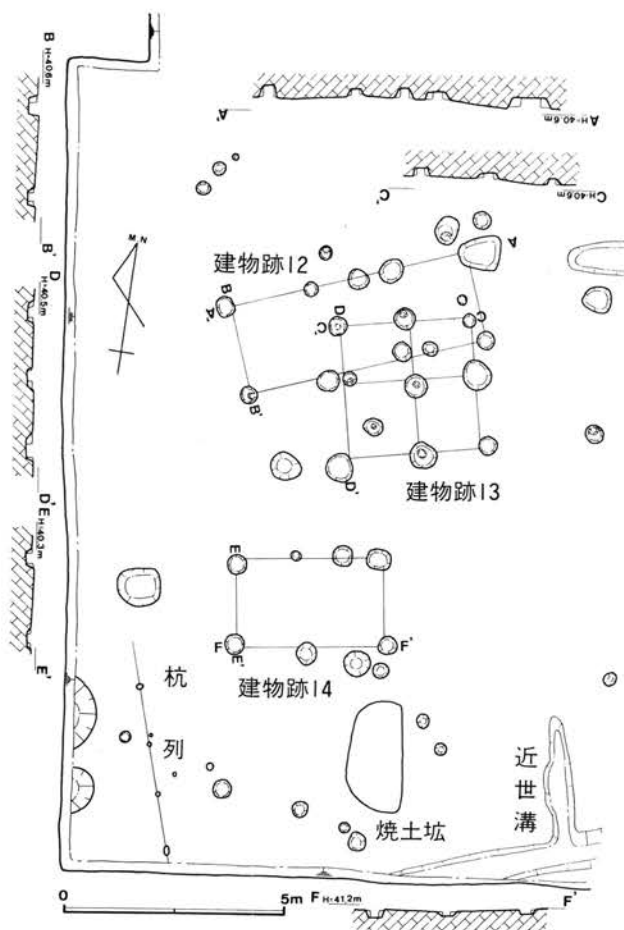
第34図 BV・BVI区遺構実測図

考える場合、柱間・柱穴の深さ・大きさ等がその根拠になるが、この掘立柱建物跡の場合は若干その根拠に乏しく、第34図及び第40図のみに入れ、個々については図化しなかった。主軸線からⅡ期に入れることができる。

掘立柱建物跡11(第32図・第40図) 3間(6.6m)×2間(2.4m)の規模を有し、北西から南東に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は2.1m・梁間の柱間は1.2mを測る。建物跡の規模自体は中規模であるが、掘立柱建物跡として認識する根拠が希薄であり、第32図・第40図のみに掲載した。主軸線の方からⅡ期に比定できる。

掘立柱建物跡12(第35図) 3間(5.4m)×1間(2.1m)の規模を有し、南西から北東に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は1.7mを測る。柱穴の大きさは50cm前後である。ただ、北東角柱は後世の攪乱を受けたため、正確な数値をあげることができない。柱穴からの出土遺物は土師器・須恵器片であるが、年代を決めるには至っていない。建物跡の主軸線からⅡ期に比定できる。建物跡は、簡単な倉庫であったと考えられる。

掘立柱建物跡13(第35図) 2間(3.0m)×2間(3.0m)の総柱の建物跡である。桁行の柱間は1間目が1.3m, 2間目は1.7mを測る。また、梁間の柱間は1.5mであり、ほぼ等間隔である。柱穴の大きさは基本的には60cmであるが、西南角柱は少し大きく穿たれている。柱穴からの出土遺物には、土師器・須恵器等があるが、いずれも年代を設定できないものである。検出した掘立柱建物跡のうち、総柱のものは3棟あり、3棟の中でも



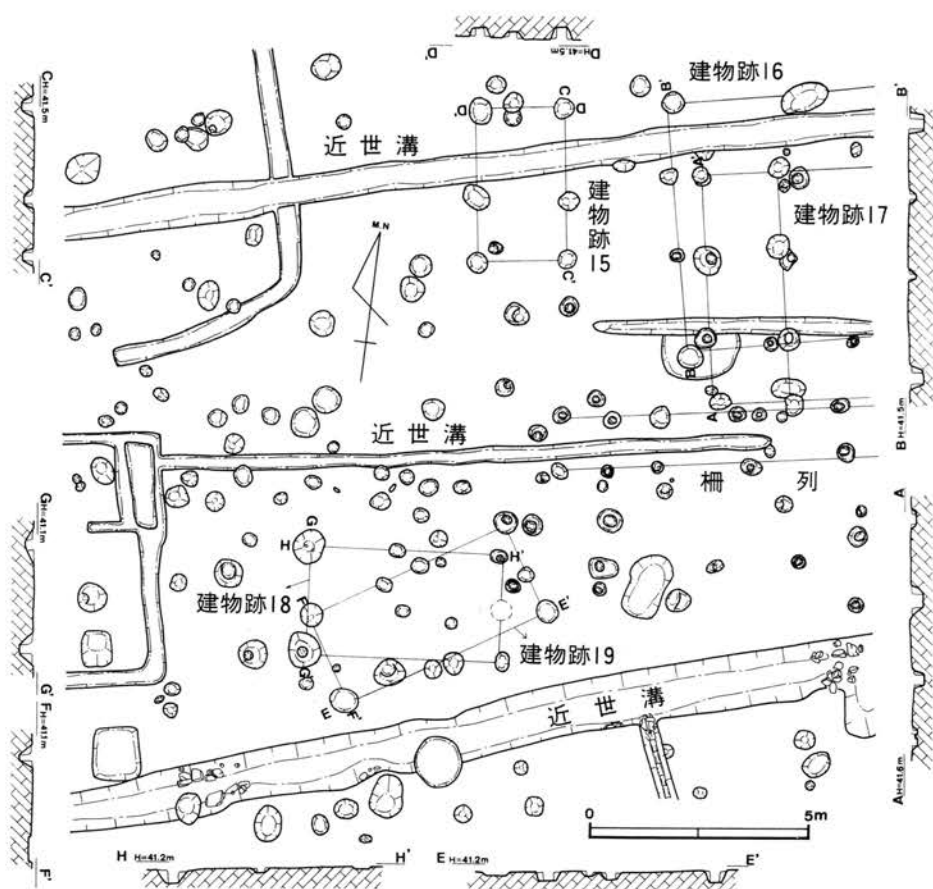
第35図 CMⅦ区遺構実測図

最も小規模な建物跡である。なお、総柱の建物跡はすべてⅢ期に属する。この建物跡は位置関係から考えると倉庫群の中でも中核的な役割をもっていたと考えられる。

掘立柱建物跡14(第35図) 2間(3.3m)×1間(2m)の東西方向に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は西から1間目は1.6m, 2間目が1.7mを各々測る。柱穴の大きさは60cm前後であるが、桁行の北面と南面の中央に位置する柱穴の大きさが異なっている。柱穴からの出土遺物は少なく、年代設定はできないが、主軸線の方向からⅢ期に比定できる。

掘立柱建物跡15(第36図) 2間(4m)×1間(2m)の規模を有し、南北方向に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は北から1間目が2.2m, 2間目が1.4mを各々測る。柱穴の大きさは50cm前後で、深さは20cmを測る。柱穴内からは土師器・須恵器片が出土しており、破片ながら年代設定ができる資料である。建物跡は簡単な倉庫であった可能性が高い。主軸線の方向からⅢ期に比定できる。

掘立柱建物跡16(第36図) 建物跡の東半が近世の溝により攪乱されており、全容はわか



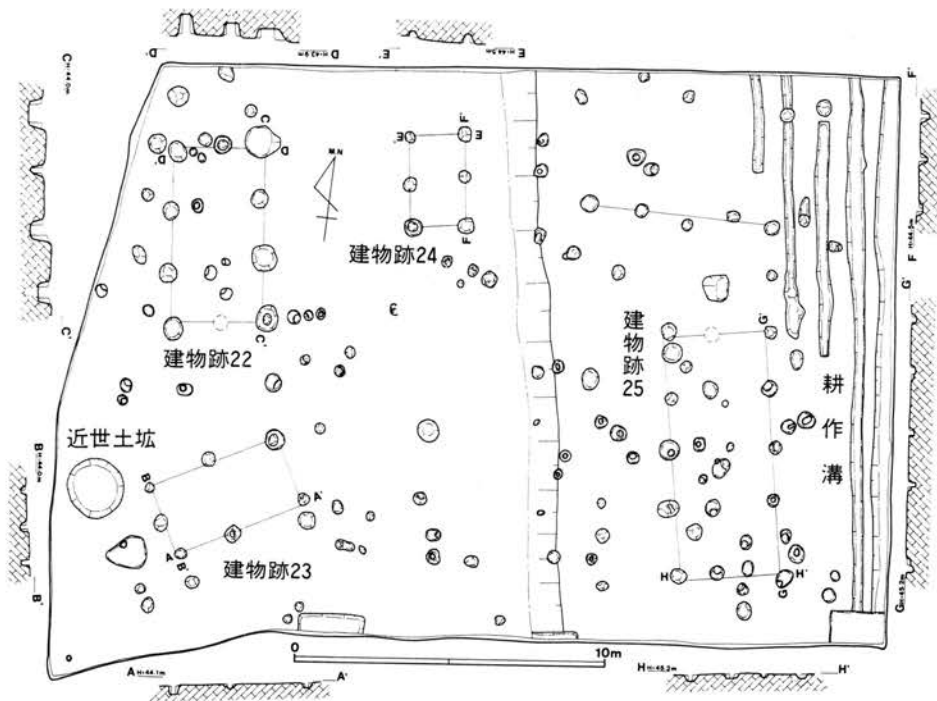
第36図 CⅥ区遺構実測図

らないが、南北面で3間(5.5m)・東西面で2間(4m)確認しており、東西方向に棟をもつ建物跡と考えられる。梁間の柱間は北から1間目が1.6m、2間目が2.2mを測る。柱穴の大きさは直径50cmを測る。柱穴内の出土遺物は土師器・須恵器・製塩土器片等がある。主軸線方向からⅢ期に含めてよい資料である。なお、掘立柱建物跡17と重複しており、Ⅲ期にあってもさらに2～3期に細分ができる。

掘立柱建物跡17(第36図) 建物跡の東半が近世の攪乱により確認できなかった。南北方向の柱列を検出し、3間(5.1m)であることが判明した。柱間は1.9mを測り、等間隔である。柱穴の大きさは70cmが平均であり、柱穴内から甕・壺・杯等の土師器や、甕・杯・鉢等の須恵器が出土している。主軸線方向からⅢ期に比定できる。

掘立柱建物跡18(第36図) 2間(4.4m)×1間(2.4m)の南北方向に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は西から1間目は1.9m、2間目は2.2mを測る。柱穴の大きさは概して西方が大きく穿たれており、70cmを測る。主軸線方向からⅢ期に含まれる。

掘立柱建物跡19(第36図) 3間(4.9m)×2間(2.1m)の南西から北東に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は、1間目が2.0m、2間目は0.9m、3間目は2.0mを測る。梁間の柱間は1.1mであるが、西面と東面では若干柱間が異なる。特に、桁行の柱間が西から1



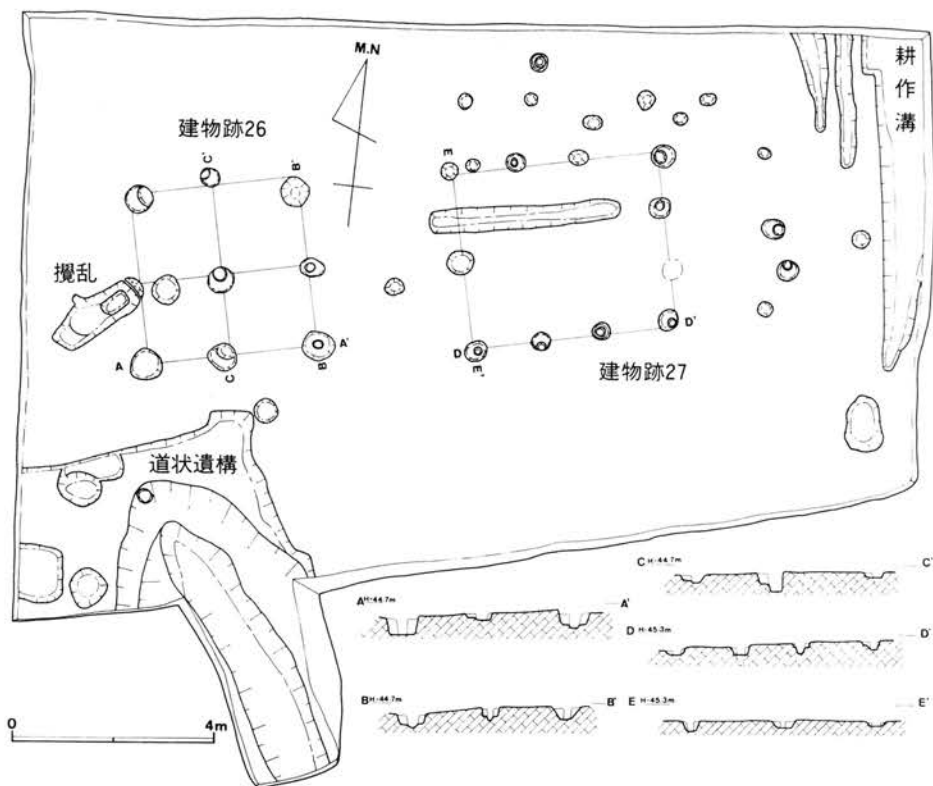
第37図 CⅢ・CⅣ区遺構実測図

間目と3間目が2.0mを測り、2間目がその約2分の1であることは上部構造を復元する際に良好な資料となるばかりでなく、建物群の中での性格を考える際にも有効な資料になる。柱穴は40cmを前後する大きさである。主軸線方向からⅡ期に含まれる。

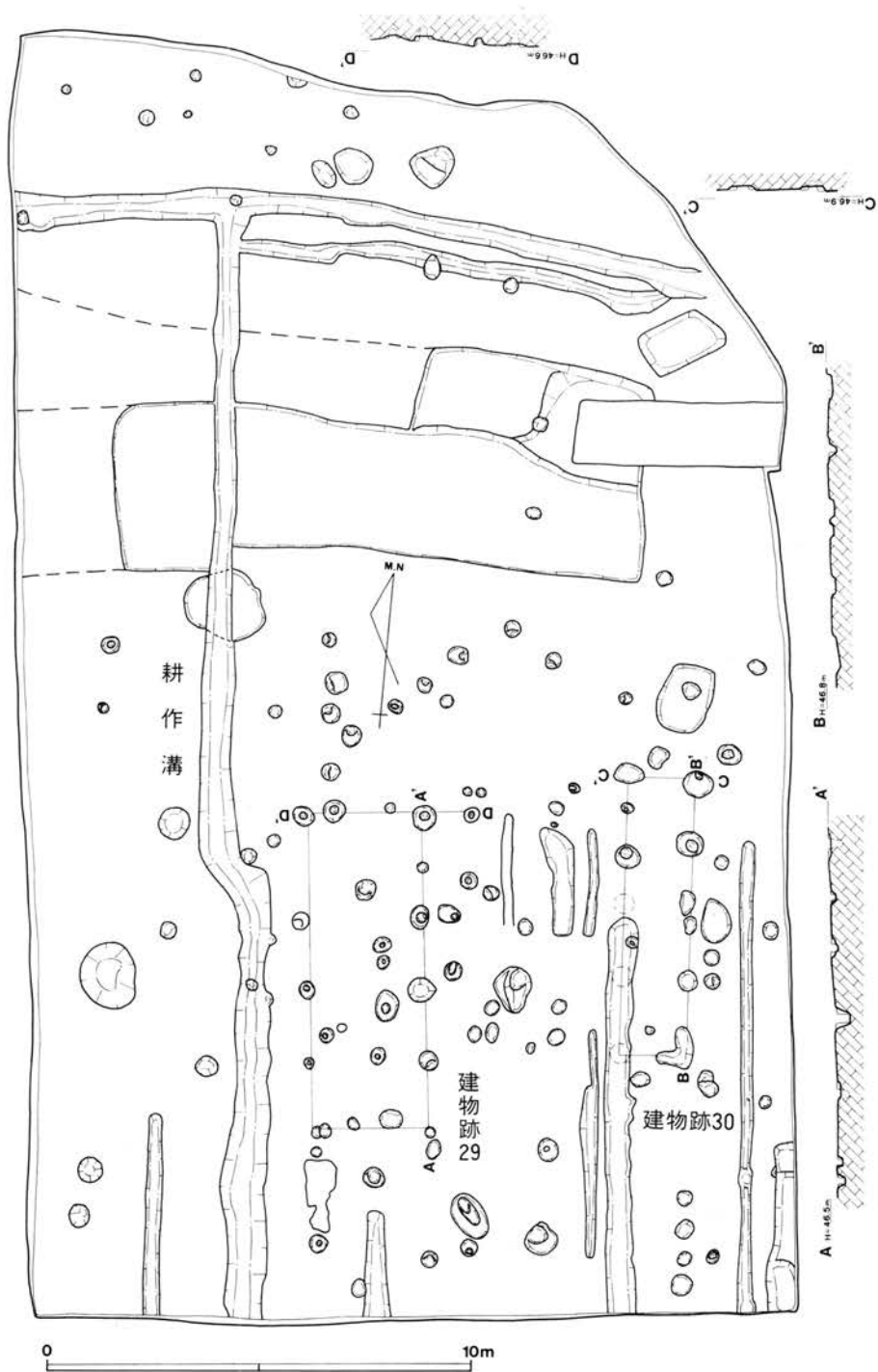
掘立柱建物跡20(第32図・第40図) 2間×1間の東西方向に棟をもつ建物跡で、簡単な構造の倉庫である。また、掘立柱建物跡21も同様である。

掘立柱建物跡22(第37図) 3間(5.4m)×2間(2.9m)の南北方向に棟をもつ建物跡である。桁行の柱間は2m間隔で、梁間の柱間は西側から1間目が1.5m、2間目が1.4mを測る。なお、梁間の南面の中央に位置する柱穴は、後世の攪乱によって確認することができなかった。柱穴は80cmから90cmにかけての大きさであり、土師器・須恵器等の遺物が出土している。主軸線方向からⅢ期に属する。

掘立柱建物跡23(第37図) 2間(4.2m)×2間(2.2m)の西南から北東に棟をもつ。桁行の柱間は2.1mを測り、ほぼ等間隔である。一方、梁間は東面中央の柱穴を欠くものの、1.1mを測り、桁行と梁間の柱間の比率は2:1となっている。柱穴は60cmの大きさを有し、土師器細片が出土している。主軸線方向からⅡ期に含まれる。



第38図 DⅢ区遺構実測図



第39図 B II · C II区遺構実測図

掘立柱建物跡24(第37図) 2間(3m)×1間(1.7m)の南北方向に棟をもつ建物跡で、桁行の柱間は1.6mを測る。柱穴からの出土遺物はない。簡単な構造をもった倉庫であった可能性が高い。主軸線の方向からⅢ期に比定できる。

掘立柱建物跡25(第37図) 4間(7.6m)×2間(3.2m)の南北方向に棟をもつ建物跡で、桁行の柱間は北から1間目は1.8m、2間目は1.9m、3間目は1.6m、4間目は2.3mを測る。また、梁間の柱間は1.5mになる。柱穴の大きさは60cmで、土師器片が出土している。規模等から考えて集落の中心的役割を果たしていた可能性が高い。Ⅲ期である。

掘立柱建物跡26(第38図) 2間(3.3m)×2間(3.3m)の総柱の建物跡である。各々の柱間は1.6mを測る。柱穴の大きさは60cmである。出土遺物には土師器・須恵器片等があり、主軸線の方向からⅢ期に比定できる。規模から集落の中心的な建物と考えられる。

掘立柱建物跡27(第38図) 桁行が3間(4m)で、梁間の東面は3間(3.4m)、西面は2間(3.4m)を有する建物跡である。桁行の柱間は1.3m間隔であり、梁間の東面は1m、西面は1.7mを各々測る。柱穴の大きさは建物跡の規模に比べて小さく、50cmである。柱穴からの出土遺物は土師器の細片のみである。この建物跡は主軸線の方向からⅢ期に比定でき、掘立柱建物跡26と何らかの関係があると考えられる。

掘立柱建物跡28(第32図・第40図) 3間(5m)×2間(2.9m)の建物跡であるが、一部は確認できていない。桁行の柱間は1.6m間隔で、梁間の柱間は1.4mを測る。なお、梁間の中央の柱は確認できていないが、1間が2.9mとは考えにくいので、2間で復元した。主軸線の方向からⅠ期に比定できる。

掘立柱建物跡29(第39図) 5間(7.3m)×3間(2.6m)の南北方向に棟をもつ建物跡で、後述する建物跡30と同様に南北に長い。梁行の柱間は1.4m間隔であり、梁間の柱間は北面東から1間目が0.5m、2間目は1.2m、3間目は0.8mを各々測る。柱穴の大きさは40cmと比較的小さい。柱穴からの出土遺物はないが、主軸線の方向からⅢ期に含めてもよい資料である。なお、桁行および梁間の柱間が極端に違っている点等を考えると、掘立柱建物跡として否定的な要素も含んでいる。

掘立柱建物跡30(第39図) 4間(6.4m)×1間(1.5m)の規模を有するものである。柱穴の大きさは50cmを測り、梁間の東南角の柱穴は「L」字状の形態を呈している。柱穴の形態として一般的とは考えられず、抜き取り跡の可能性が高い。桁行に対して梁間が極端に短い、建物としての機能も十分考えられ、ここでは倉庫群の範疇で考えておきたい。

以上のように、各掘立柱建物跡についての説明を踏まえた上で、建物跡の主軸線から建

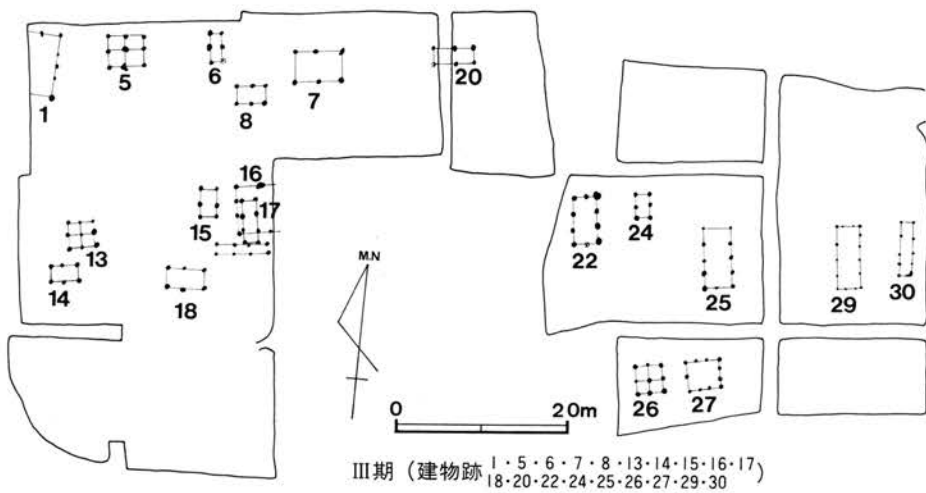
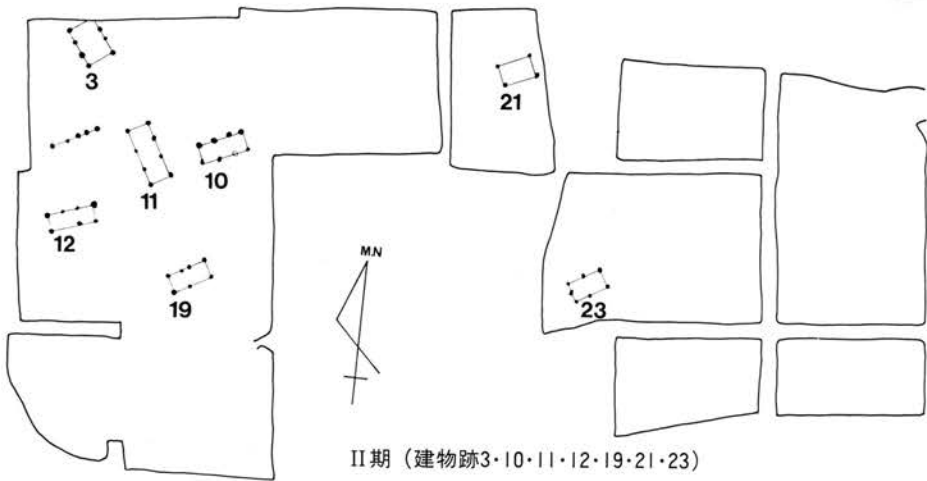
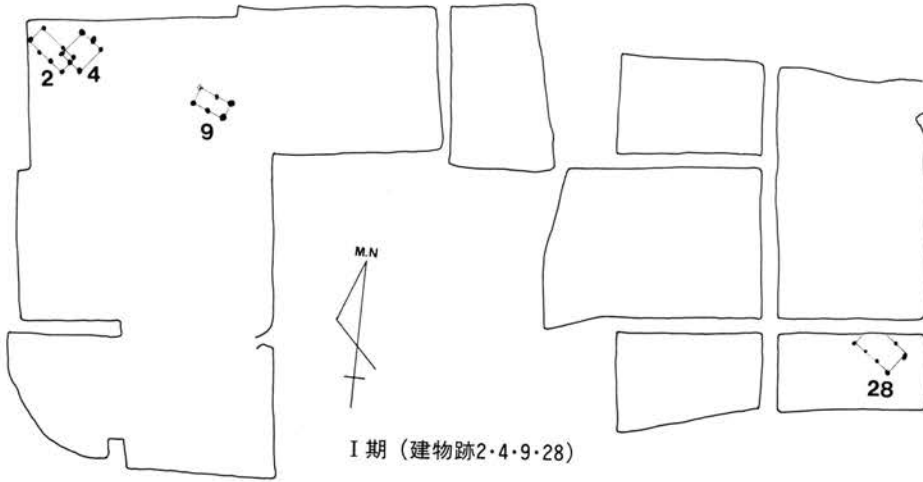
物跡群としての時期設定について記述したい。なお、前述したように、柱穴内の出土遺物は土師器・須恵器・製塩土器・瓦等があるが、いずれも細片であり時期設定した建物群に土器から年代を想定するには資料的な限界があり、ここでは単に時期設定をするに留め、詳細は小結に譲りたい(第40図)。

I期の掘立柱建物跡群 建物の主軸線が北から西へ54°振る一群である。この一群には建物跡2・4・9・28を含めることができる。概して小規模なものであり、後述するII期との関連を十分考慮しなければ集落あるいは倉庫群として認識できないのが現状である。また、厳密な時期設定をすればI期であっても2時期に分類する必要があるが、時期毎の年代を決められない状況では細分化しても重要な意義を見い出せないため、大きくI期と後述するII期に分類した。建物跡の性格としては、簡単な倉庫群であった可能性が高く、柱穴内および建物跡周辺から外面ヘラケズリの平瓦が出土することから、飛鳥時代の隼上り瓦窯との関連で解釈することができる。

II期の掘立柱建物跡群 建物の主軸線が北から西へ28°振る一群である。この一群には建物跡3・10・11・12・19・21・23を含めることができる。I期と比較すれば軒数がほぼ2倍になり、建物跡の規模も大きくなっている。建物跡の軒数から考えた場合、集落としての性格よりも、I期同様、倉庫群として解釈するほうが自然であり、一部で生活空間を認定しても、本格的な集落が成立するのは次のIII期からと考えられる。

III期の掘立柱建物跡群 建物の主軸線が北から西へ8°振る一群である。この一群には建物跡1・5・6・7・8・13・14・15・16・17・18・20・22・24・25・26・27・29・30を含めることができる。総計19軒の規模はI期・II期に比べると3倍から5倍に増加しており、また、建物跡の分布範囲も丘陵全面(調査地)に広がりを見せる。建物跡の規模についても、絶対数が増加してはいるが、桁行が3間以上のものが多くなる。特に、2間×2間の総柱をもったものが3棟出現することは、集落としての機能が完備されたことを示す根拠にもなる。また、小規模な建物跡も存在することから倉庫としての機能も有していることを示している。このIII期をもって倉庫と一体化した集落が前段階の建物群を発展させた形で成立したと考えることができる。また、数少ない柱穴内の遺物から判断して、後述する溝や道状遺構と同時期に建物群が併存したと考えられることから、III期に丘陵の土地利用が盛んになったことが理解できる。

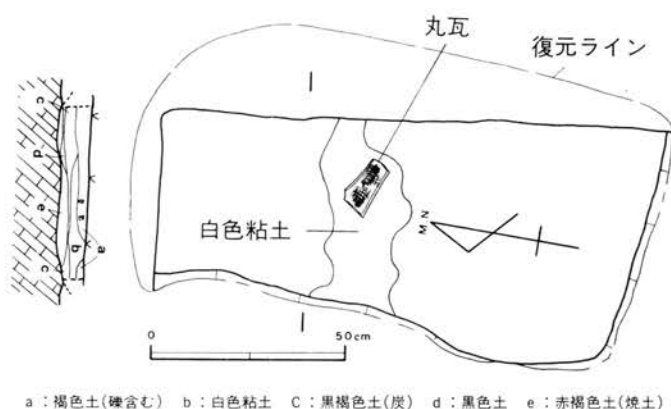
I・II・III期の時期設定が建物跡の主軸線によることは先述したが、掘立柱建物跡8・9の柱穴の切り合い関係からもある程度判断できる。また、掘立柱建物跡17の柱穴から出土した須恵器からも時期がわかり、概観すればI期→II期→III期と言う変遷がたどれると考えてよい。これは時期が新しくなるに従って建物跡の軒数が増えることから傍証できる。



第40図 掘立柱建物跡変遷図

②焼土坑(第41図)

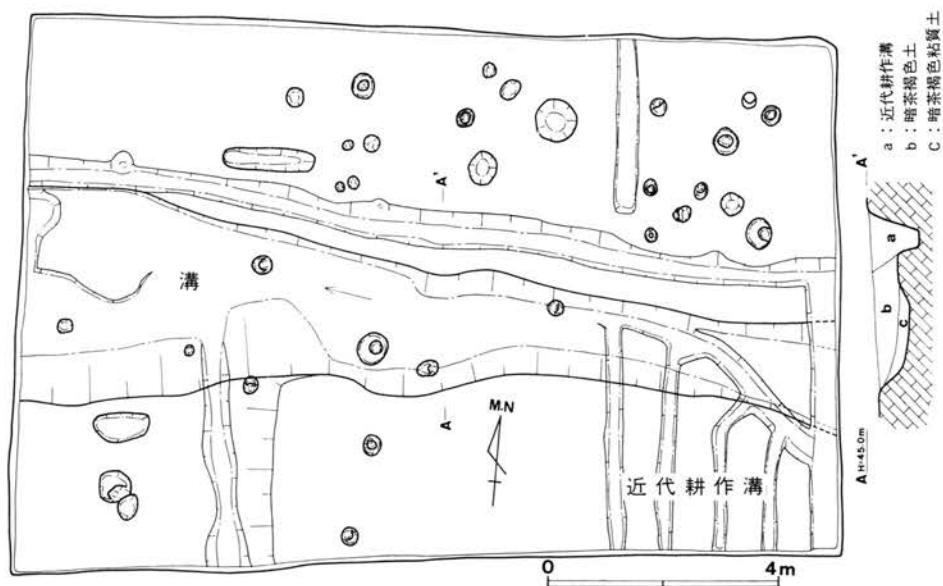
CⅦ区の掘立柱建物跡14の南方で検出したもので、長軸1.25m・短軸0.69mを測る。検出した段階では、単に焼土の広がりとして認識したが、柱穴検出のため掘り下げを行い、土坑の中間層に白色粘土を確認した時点で、10cmではあったが断面図を作成した。断面観察から焼土直上に白色粘土が堆積し、一部においては互層を呈する部分もある。外面ヘラケズリの丸瓦を最上層で検出した。これらの状況から同時に堆積したと考えられる。白色粘土は土坑周辺にも広がっている。この白色粘土を含め焼土坑については別に胎土分析の結果も併せて後述する。



第41図 CⅦ区焼土坑実測図

③溝(第42図)

BⅢ区に位置し、東から西に流れをもつ溝である。幅は西方で4m以上・東方で1.6m・深さは60cmである。下層は暗茶褐色粘質土で上層は暗茶褐色土が堆積している。溝の北肩は近代耕作溝で攪乱

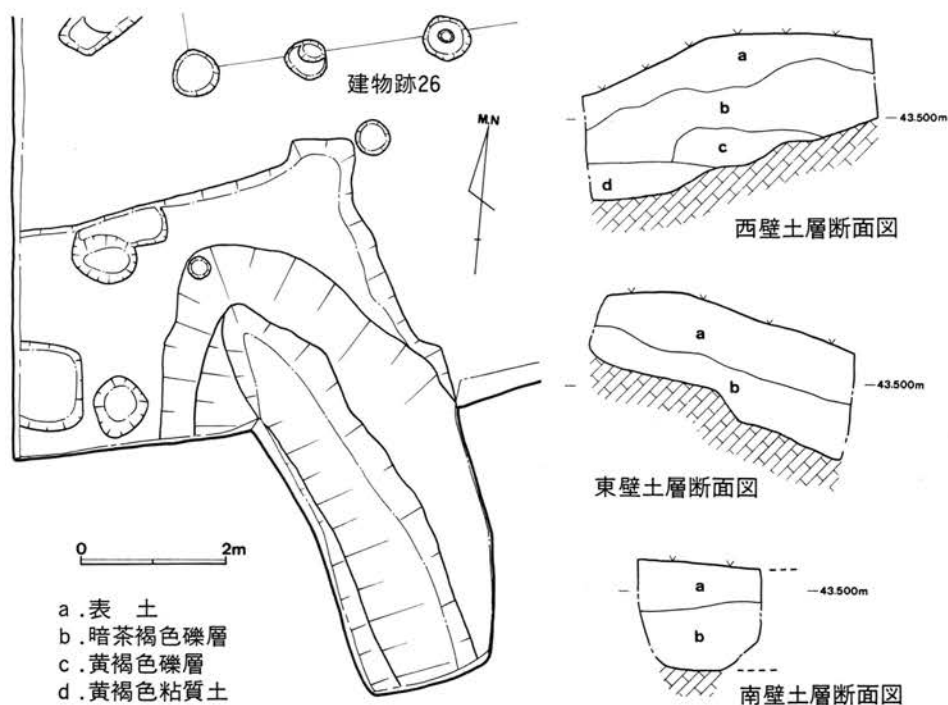


第42図 BⅢ区溝実測図

を受けている。溝内からの出土遺物は土師器・須恵器・瓦等がある。なお、CⅣ区においては確認しておらず北方の谷部へ流れるものと考えられる。

④道状遺構（第43図）

DⅢ区の掘立柱建物跡26の南方で検出した遺構である。トレンチにおける柱穴検出の際、土師器・須恵器・瓦等の遺物を多量に包含する落ち込みを確認し、その遺構の範囲を把握するために拡張して調査を行った。遺構は掘立柱建物跡26に隣接し、自然地形に沿い緩やかな斜面に、推定幅4m・深さ1.2mの規模で、底面が舟底状に掘り込まれている。平面で観察すると、遺構検出面から比較的平坦面を広くもつ1段目が削り込まれ、傾斜角を徐々に鋭角にしながら2段目が掘り込まれ、底面を深く掘り込んでいる。最下層には褐色の粘質土が堆積しており、その上に拳大の礫を含む黄褐色礫層が60cm程度充填されている。礫層中には多量の土師器・須恵器・瓦等が包含されており、特に、円面硯の出土は注目できる。この遺構は、排水溝とも考えられるが、掘立柱建物跡26周辺の地形は緩やかに谷部に傾斜しており、特別な溝を掘らなくとも十分排水することは可能であり、南方の谷部から台地上に位置する集落に至る施設と考えられる。また、充填されている礫は、斜面下半の下降が比較的急で、この部分に流れ込む水により大きく削り込まれないために充填



第43図 DⅢ区道状遺構実測図

したと考えられ、二次的な意味で排水の機能ももっていたと考えられる。包含層からの遺物には掘立柱建物跡というⅢ期のものが大半を占める。

(2) 遺物

飛鳥・奈良時代の遺物は大半が柱穴出土のもので、細片資料が多い。そのため、図化可能なものについては残存率が20%を前後するものについても掲載した。なお資料化についてはその残存率に十分留意し、観察表にも記述した。また、各遺物については基本的には遺物観察表に記述したが、同形式の土器についてはその特徴を最も表現しているものに代表させた。

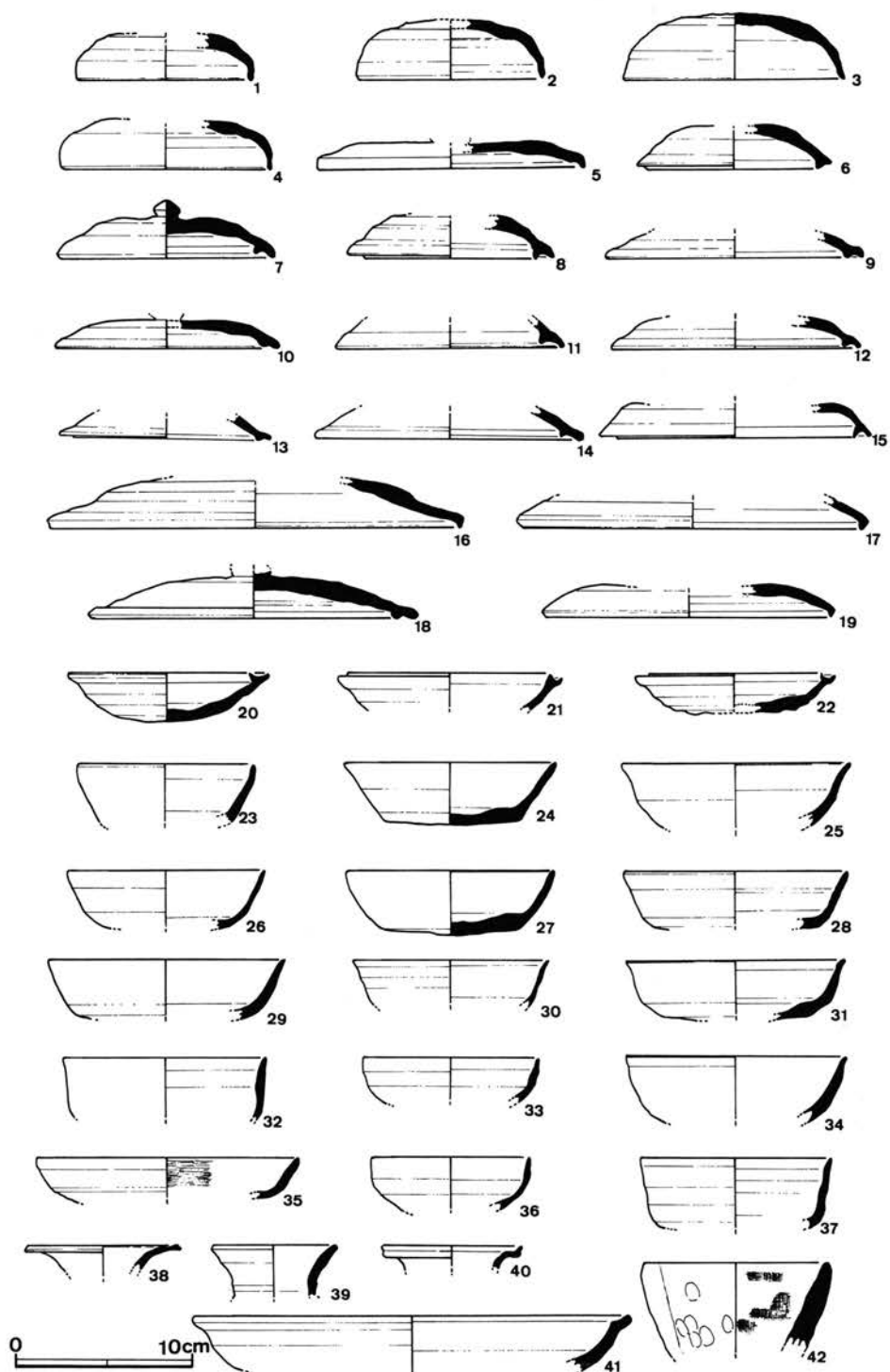
① 須恵器・土師器

須恵器・杯蓋 (a)杯蓋の天井部につまみをもたず、直立ないし緩く内傾する口縁部をもつもので、口径は10cmから12cmを測る。口縁部から天井部までの器高は3cm前後である。これらの杯蓋は出土遺物の中でも比較的少ない。第44図1・2・3・4がこれに該当する。(b)杯蓋の天井部に宝珠つまみをもつもので、口径が11cmから12cmを測る。口縁部内面にかえりを有し、比較的器壁が厚い。口縁部から内湾しながら天井部に至る。全体の中で比率は低い。第44図6・7・8・10・11がこれに該当する。(c)杯蓋の天井部に若干扁平なつまみをもち、口径は15cmから18cmを測る。内湾する口縁部と平らな天井部をもつ。口縁部内面に短いかえりをもつ。第44図5・9・12・14・15・18が含まれる。(d)杯蓋の天井部は平らで、口径が22cm前後になる。口縁部内面のかえりは消失する。残存状態が悪く、つまみの有無については不明な点が多い。第44図16・17・19がこれに該当する。

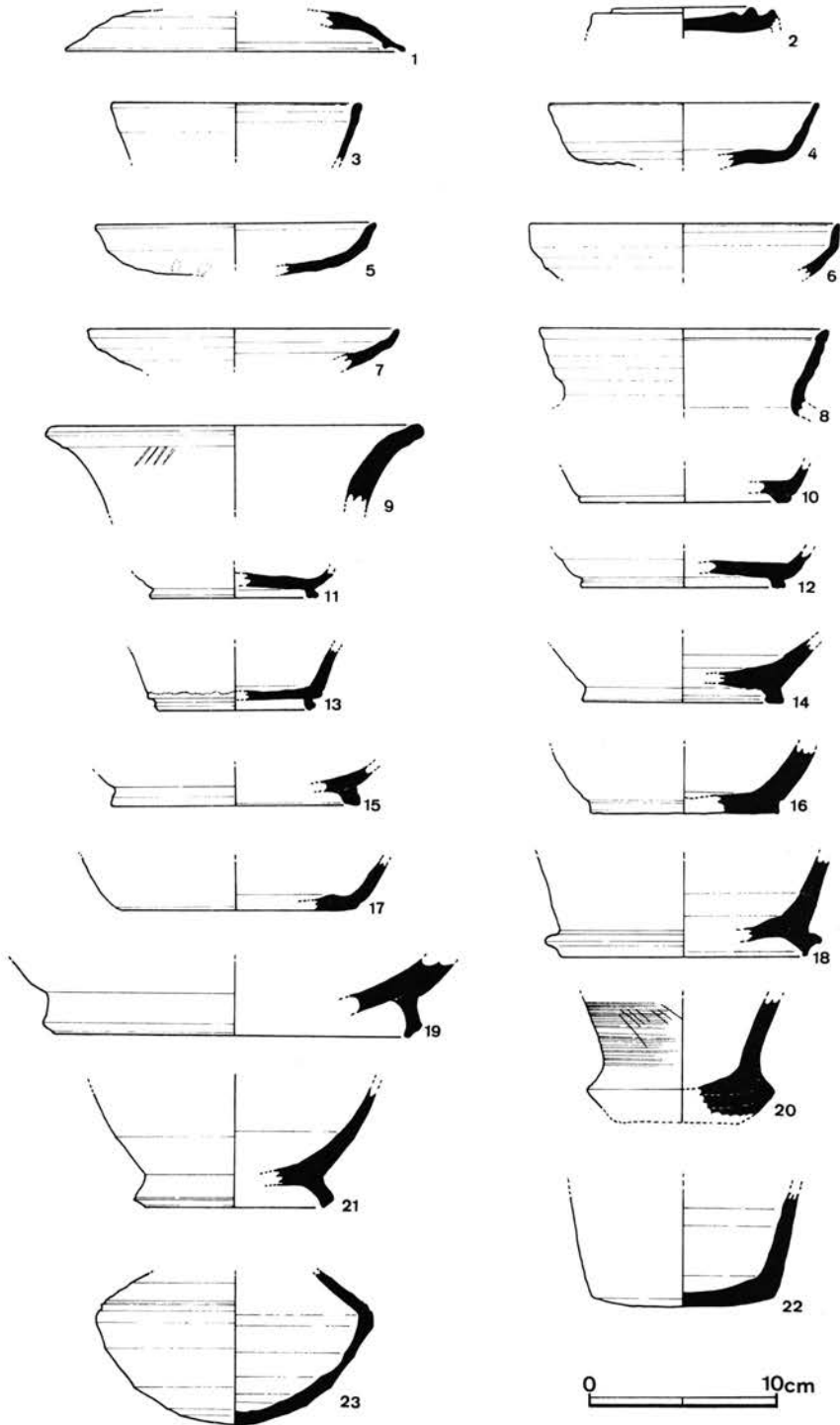
須恵器・杯身 (a)口縁部内面の立ち上がりが受部とほぼ同じ高さで、受部から緩く屈曲し底部に至る。比較的厚い器壁をもつ。口径は11cmから12cmである。第44図20・21・22がこれに該当する。(b)平らな底部から外傾する口縁部をもち、高台はもたない。口径は11cmから13cmを測る。第44図24・26・27・28等が含まれる。(c)基本的には(b)と同じ形態であるが、内湾あるいは外反する口唇部をもつ。高台の有無については良好な資料がないため不明である。第44図23・25・29等が含まれる。(d)杯身の中でも単に高台が残存するものを含めた。高台径が9cmから13cmを測る。第45図10・11・12・13・14等がこれらに該当する。

須恵器・壺 大半は高台ないし脚部のみで、胴部が残存するものは1点のみである。第45図23は短頸壺で胴部最大径が14.8cmを測る。肩が張り、丸い底部を有する。なお、他に壺の口縁部もある。第44図38・39・40がこれに該当する。

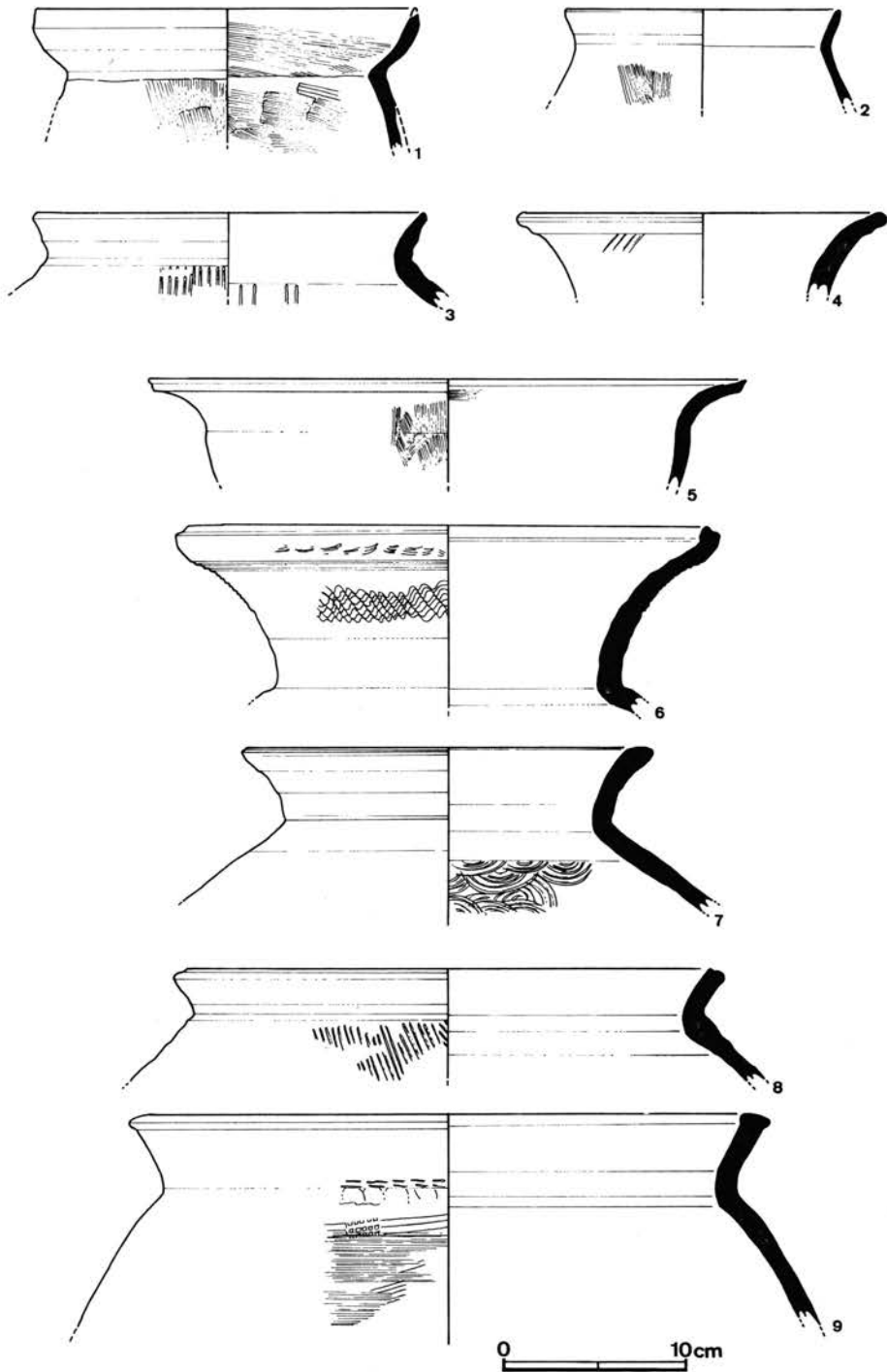
須恵器・甕 肩部から頸部で屈曲し外傾する口縁部をもつものと、肩部で屈曲し外反する口縁部をもつものに分類できる。前者は口唇部に面をもつものが多く、後者は尖頭状を



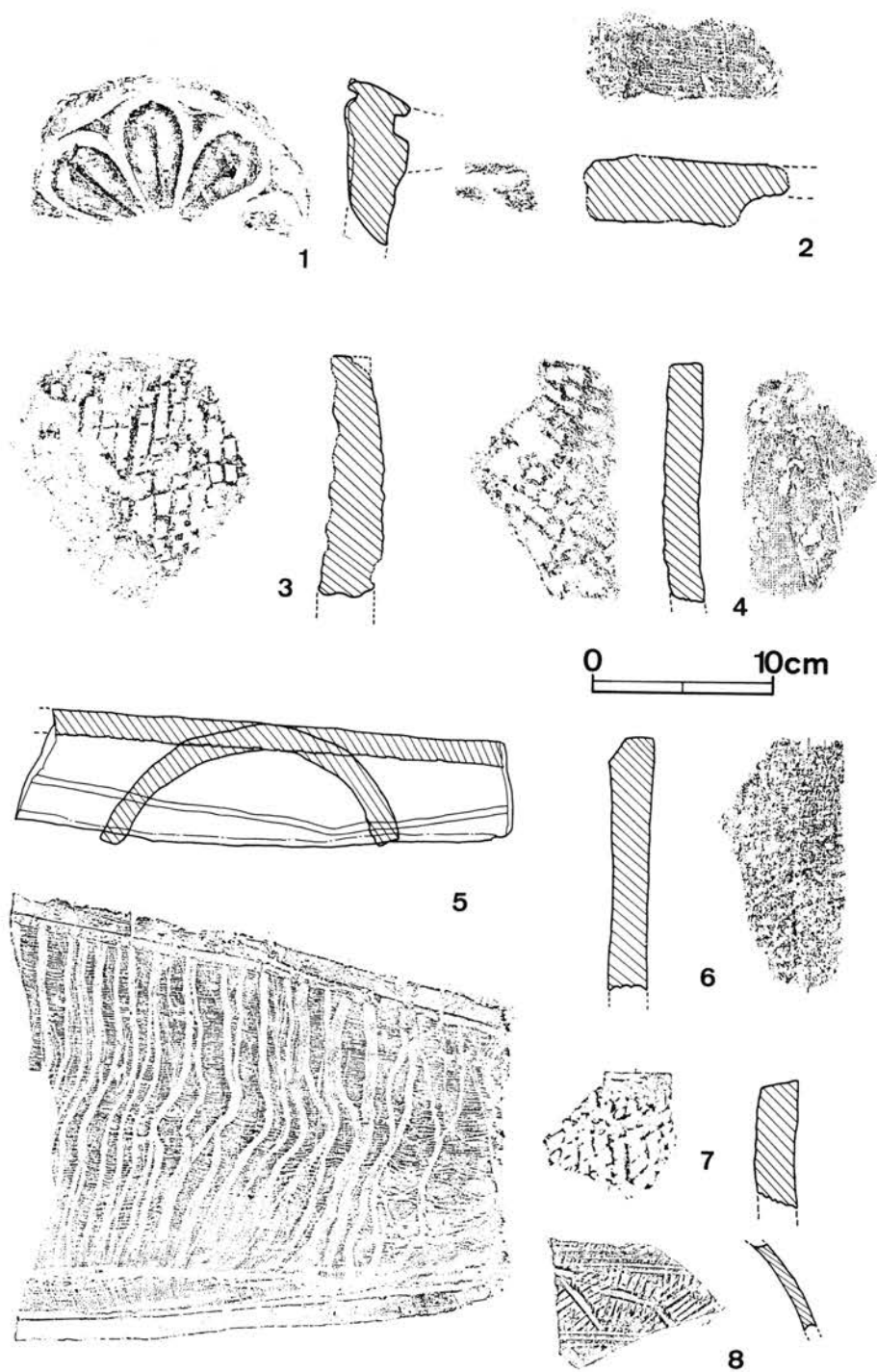
第44図 出土遺物実測図(1)



第45図 出土遺物実測図(2)



第46図 出土遺物実測図(3)



第47図 出土遺物拓影图(1~7:瓦類, 8:須恵器)

呈するものが多い。口径は21cmから35cmと幅がある。第46図6・7・8・9等である。なお、第47図8の叩き目は特徴的であり、その形状から生産地を同定できる資料である。

須恵器・ねり鉢 底部と体部の一部のみ残存する。体部はカキメで調整し、底部は少なくとも3回粘土を貼り合わせている(第45図20)。

須恵器・円面硯 墨堂と池と縁のみ残存し、台はない(第45図2)。

土師器・椀 内湾する胴部をもち口縁部は外反する。残存状態が悪く、調整等不明な点が多い。口径は12.2cmを測る(第44図34)。

土師器・甕 体部から頸部で屈曲する口縁部をもつ。口径が20.4cmを測る(第46図1)。

製塩土器 ほぼ外方に伸びる口縁部を有し、外面は指頭圧痕、内面は布目圧痕が観察できる。口径は10.3cmである(第44図42)。

②瓦

出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。遺跡の立地が丘陵であり、また、近世の段階で攪乱を受けていることもあり、残存状態は極めて悪く、内面の布目圧痕や外面の叩き目が観察できないものが多い。代表的なものを中心に記述する。

軒丸瓦(第47図1) 素弁八葉蓮華文を主文とするもので、今回の調査で1点出土した。残存率は、瓦当面に限って言えば40%である。周縁を有し、弁の中央の放射線上に緩やかではあるが稜線が走る。隼上り瓦窯跡の軒丸瓦型式で分類するとD型式となる。

軒平瓦(第47図2) 残存状態は極めて悪い。おそらく周辺の大鳳寺跡に類例が見られるため、四重弧文を主文とすると考えられる。段顎があり、顎は7cmを測る。大鳳寺跡出土の分類ではB型式にあてはめることができる。

丸瓦(第47図5) 残存状態が悪く、正確な観察ができないものが大半であるが、焼土ピットのものほぼ完形に近い状態で検出した。端面はヘラケズリによって調整しており、外面はナデ調整、内面はかなり引きのぼした布の圧痕が顕著に残る。胎土は緻密で焼成は堅緻である。色調は青灰色を呈する。

平瓦(第47図3・4・6・7) 隼上り瓦窯跡の平瓦の特徴は、外面をナデ・ヘラケズリで調整し、叩きを消すところにある。内面は布目圧痕が残り、一部ヘラケズリしたものもある。一方、大鳳寺跡の瓦は、外面が格子叩き目・斜格子叩き目・縄目叩き目があり、内面には布目圧痕が観察できる。これらの瓦は調査地で散見できるが、主にDⅢ区で検出した道状遺構から集中して出土している。

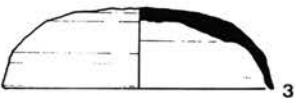


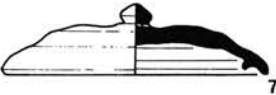

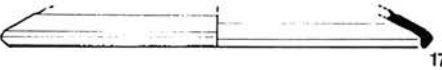
各々の瓦については、隼上り瓦窯跡と大鳳寺跡の出土瓦に類例が求められるため、詳細には記述しなかったが、整理箱に15箱程度出土している。そのうち、隼上り瓦窯産と考えてもよい資料が60%前後を占め、大鳳寺跡との関連で持ち込まれたものが30%、不明なも

のが10%を占める。隼上り瓦窯産の瓦が60%を占めることは、この地が集落・倉庫の性格を有していることを考えれば当然のことであるが、大鳳寺跡から持ち込まれたものが30%を占めることは、大鳳寺創建時に際し、政治的な背景をもって人の移動が余儀なくされたことを示唆するものと考えられる。

(3) 小 結

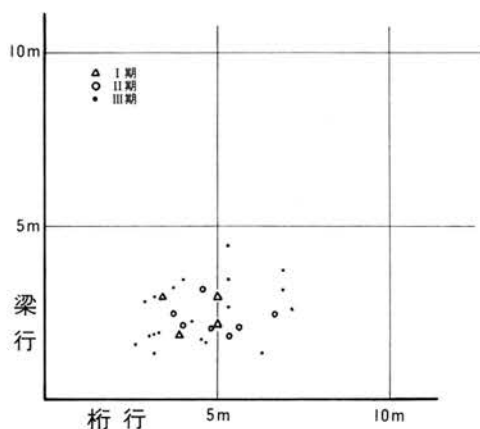
検出した遺構の大半が掘立柱建物跡であることは既に述べたが、ここでは、それらの建物跡の年代と性格について、遺物の年代と建物跡の主軸線から求めた時期設定を中心に考える。なお、遺物の出土量は僅少であり、残存状態も悪いことを念頭に置き、型式編年を行う。建物跡の時期設定はⅠ期からⅢ期に分類したが、各時期においても詳細な時期を考える必要がある。

掘立柱建物跡Ⅰ期は、他の時期に比べて建物跡が最も少ない時期であり、丘陵に集落が形成される時期でもある。この時期の柱穴からは、隼上り瓦窯跡の土器型式で最も古い段

土器の型式分類と変遷	隼上り瓦窯跡	隼上り遺跡	編年基準
 3	第Ⅰ段階 Ⅰ号窯灰原 3D区	○	飛鳥Ⅰ Ⅱ型式5段階
 2	第Ⅱ段階 2号窯 最終床面	Ⅰ	Ⅱ型式6段階
 1	第Ⅲ段階 3号窯 最終床面	Ⅱ	飛鳥Ⅱ
 7	第Ⅳ段階 Ⅰ号窯 最終床面	Ⅱ	飛鳥Ⅱ TK217
 14	不明	Ⅲ	Ⅲ型式3段階
 17 0 10cm	大鳳寺跡 3次調査 SD01	○	MT21
土器番号は図と一致する			

第48図 土器型式変遷図と建物跡時期設定図

階の第1段階のものが出土することを確認している。I期の建物跡の存続年数は、少なくとも隼上り瓦窯跡の第3段階にまで至ると考えられ、比較的長い期間を想定してもよい。この点については、土器型式が第1段階から第2段階、そして第3段階の一部にまで及ぶことや建物跡の主軸線が若干異なっていることから推定できる。II期の確実な遺物は、柱穴内からは出土していないが、II期に想定した建物跡の柱穴の埋土最上層から、隼上り瓦窯跡の第2段階の土器が出土していることから、少なくともI期より後出すると考えられる。I・II期の併行関係については出土する土器の型式から隼上り瓦窯跡の第3段階には確実にあったものと考えられる。また、各々の廃絶時期は、若干の時期差があったとしてもほぼ同時期の可能性がある。これは、隼上り瓦窯跡の廃絶時期とも一致している。III期は掘立柱建物跡の棟数が極端に増加し集落として整備される時期でもある。その初現が陶器II型式3段階に比定でき、I・II期と比較すれば隼上り瓦窯跡との関連もほとんどないことが土器型式からも判断できる。しかし、一部隼上り瓦窯跡の第4段階に含まれるものもあり、解釈を困難にしている。III期に伴う施設には溝・道状遺構等があり、I・II期には見られないものである。集落の存続期間は、建物跡の柱穴から出土した土器から、MT 21までは確実であるが、廃絶時期についてはそれ以降の土器も包含層から出土しており、時期を考える上で参考にはなるが、明確にはできない。廃絶時期については宇治川東岸に位置する丘陵部のようなすが解明されれば、より一層明確になるものと考えられる。



第49図 時期別建物跡規模比較表

付表3 遺物観察表

種類	器種	挿図 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考	
須	杯蓋	44-1	口径：9.8	直立する口縁部をもち平らな天井部を呈す。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ	1)密 2)青灰色 3)良好	40%残 柱穴	
	杯蓋	44-3	口径：12.6 器高：3.7	直立する口縁部をもち平らな天井部を呈す。	ロクロナデ 天井部ヘラケズリ 内外面に漆付着	1)緻密 2)暗灰色 3)良好	50%残 柱穴	
	杯蓋	44-7	口径：12.0 器高：3.2 つまみ径：1.5	内面にかえりをもち平らな天井部に宝珠つまみを有す。	ロクロナデ	1)密 2)青灰色 3)良好	30%残 柱穴	
	杯蓋	44-8	口径：11.6	内面にかえりをもち平らな天井部を呈す。	ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	30%残 柱穴	
	杯蓋	44-9	口径：12.6	内面にかえりをもつ。	ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)不良	10%残 包含層	
	杯蓋	44-14	口径：15.2	内面にかえりをもつ。	ロクロナデ	1)粗 2)外黄褐色 内青灰色 3)良好	10%残 柱穴	
	杯蓋	44-16	口径：23.2	直立する口唇部をもち傾斜する肩部から平らな天井部をもつ。	ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)不良	10%残 包含層	
	杯蓋	44-17	口径：19.1	直立する口唇部をもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	10%残 包含層	
	杯蓋	44-18	口径：18.5 器高：3.0	断面三角形のかえりをもち内湾し天井部に至る。	ロクロナデ 天井部はヘラケズリ のあとナデ	1)粗 2)淡青灰色 3)良好	30%残 柱穴	
	器	杯身	44-20	口径：9.2 器高：2.8	短い受部をもち丸い底部を有する。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡黄褐色 3)不良	100% 残 柱穴
		杯身	44-22	口径：11.4 器高：2.2	短い受部をもち平らな底部を有する。	ロクロナデ	1)粗 2)灰色 3)良好	30%残 柱穴
		杯身	44-24	口径：12.0 器高：3.5 底径：7.7	平らな底部から外傾する口縁部をもつ。	ロクロナデ 底部はヘラケズリ	1)粗 2)外暗青灰色 内淡青灰色 3)堅緻	60%残 包含層
		杯身	44-27	口径：11.8 器高：3.6 底径：7.7	平らな底部から外傾する口縁部をもつ。	ロクロナデ	1)密 2)青灰色 3)良好	30%残 柱穴
		杯身	44-31	口径：12.4	外反する口縁部をもつ。	ロクロナデ	1)密 2)青灰色 3)堅緻	10%残 柱穴
壺		44-38	口径：8.4	外反する口縁部をもち端部に面を有する。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良	10%残 柱穴	
土師器	製塩土器	44-42	口径：10.6	外傾した口縁部を有し口唇部は尖頭状におさめる。	内面に布目圧痕を有し外面に指頭圧痕が残る。	1)粗 2)赤褐色 3)良好	30%残 柱穴	

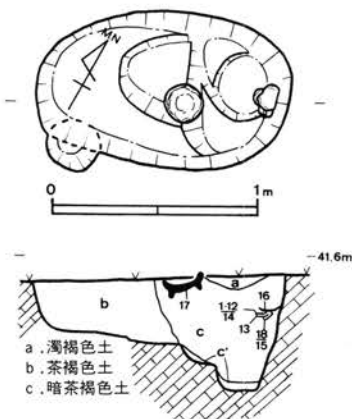
種類	器種	挿図 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須 惠 器	凹面 碗	45-2	口径：9.8	墨堂・池・縁のみ残 存し台は欠損してい る。	ロクロナデ ナデ	1)緻密 2)外青灰色 内暗灰色 3)堅緻	40%残 土垢
	杯身	45-4	口径：14.3 器高：3.5	平らな底部から外傾 する口縁部をもつ。	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	1)緻密 2)淡褐色 3)良好	30%残 柱穴
	甕	45-8	口径：15.4	外傾した口縁部を有 し口唇部内面が肥厚 する。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)堅緻	10%残 包含層
	杯身	45-11	高台径：8.8	断面台形の高台を有 する。	ロクロナデ 底部内面仕上げナ デ	1)緻密 2)淡青灰色 3)堅緻	10%残 包含層
	杯身	45-13	高台径：8.5	平らな底部から鋭く 屈曲する体部を有す。	ロクロナデ 底部内面仕上げナ デ	1)緻密 2)青灰色 3)堅緻	30%残 土垢
	壺	45-18	高台径： 13.2 高台高：1.2	外方へ突出する高台 をもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	20%残 土垢
	鉢	45-20	底径：10.1	肥厚した底部を有し 大きく外方へ突出す る。	外面カキメ 内面および底部は ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)不良	20%残 包含層
	短頸 壺	45-23	最大径： 14.8	底部から内湾し肩部 へ至り鋭く屈曲し頸 部へ至る。	底部外面ヘラケズ リ 肩部に鋭い稜をも つ。ロクロナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良	90%残 柱穴
土 師 器	甕	46-1	口径：21.0	頸部から内湾する口 縁部をもつ。	内外面とも粗いハ ケメ	1)密 2)暗茶褐色 3)良	20%残 柱穴
	甕	46-2	口径：15.0	頸部から外傾する口 縁部を有する。	外面はタテハケで 調整する。	1)粗 2)暗褐色 3)良	10%残 柱穴
須 惠 器	甕	46-6	口径：28.1	外反する口縁部をも ち口唇部が屈曲する。	頸部外面に波状文 を施し口唇部外面 にヘラをあて文様 を付す。	1)密 2)青灰色 3)良好	5%残 土垢
	甕	46-7	口径：22.4	稜をもちながら外反 する口縁部をもち口 唇部は肥厚する。	外面は平行タタキ の後カキメを施し 内面は青海波文を 有する。	1)粗 2)暗青灰色 3)堅緻	20%残 土垢
	甕	46-8	口径：28.8	外傾する口縁部をも つ。	外面は平行タタキ を有し内面はナデ 消し。	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	10%残 土垢
	甕	46-9	口径：32.0	外傾する口縁部をも ち口唇部は肥厚する。	外面は格子目タタ キの後カキ目内面 はナデ消し。	1)緻密 2)青灰色 3)堅緻	10%残 柱穴

第3節 中世の遺構と遺物

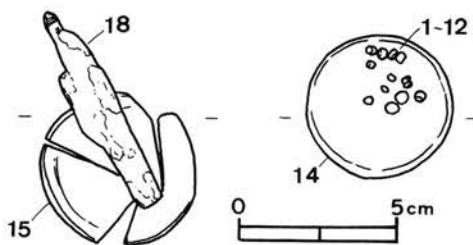
(1) 遺 構

中世土塚墓(第50・51図) CⅥ区において、飛鳥・奈良時代の遺構と同じく、地山で検出したものであり、同時期の遺構は他に存在しない。土塚の規模は、長軸1.22m・短軸0.76mを測り、平面プランは楕円形を呈する。墓塚は二段に掘り込まれており、西半部で深さ0.25~0.31m、東半部で深さ0.57mの地点で各々底面を検出した。埋土の堆積状況をみると、西半部の茶褐色土(b層)に東半部の暗茶褐色土(c層)が切り込んでいる。東半部では最下層に暗茶褐色粘質土(c'層)が約4cm堆積している。これは、上層の有機物が腐食したものと考えられる。また、東半部最上層では濁褐色土が観察できるが、土塚内部の有機物の腐食と同時に落ち込んで堆積したものと考えられる。

遺物は、遺構検出面直下で瓦質土器・三足盤、同面下16~21cmで土師器・皿(4個体)、ガラス小玉、鉄製品・刀子を検出した。瓦質土器・三足盤(第52図17)は、遺構検出面に口縁端部の一部が露出しており、ほぼ据えられた状態で出土している。土師器・皿(第52図13~16)は、最大径を有するもの(同16)が最も上部に位置し、以下3個体が重なりあった状態で出土した。ガラス小玉(第52図1~12)は土師器・皿上(第51図・第52図14)で検出した。小玉の埋葬時の状態は、玉の位置関係等から細糸で連結されていた可能性が高い。また、鉄製品・刀子も土師器・皿上(第51図・第52図15)で検出している。その他の土師器・皿には遺物はなく、有機物であったと推測できる。これらの遺物は、埋葬に係わる祭祀の後、副葬品として重ねて埋納したものと考えられる。なお、瓦質土器・三足盤は、出土位置・状態等から墓塚内の有機物が腐食し陥没した塚を整地する際に行った祭祀と深く関係する



第50図 中世土塚墓実測図
(図中の番号は遺物番号)



第51図 中世土塚墓玉・刀子検出状況図

遺物と考えられる。前述したように遺構検出面で出土した瓦質土器・三足盤と土坑内中位で確認した土師器・皿等は、若干の時期差を想定できるが、接近した時期であると考えられる。

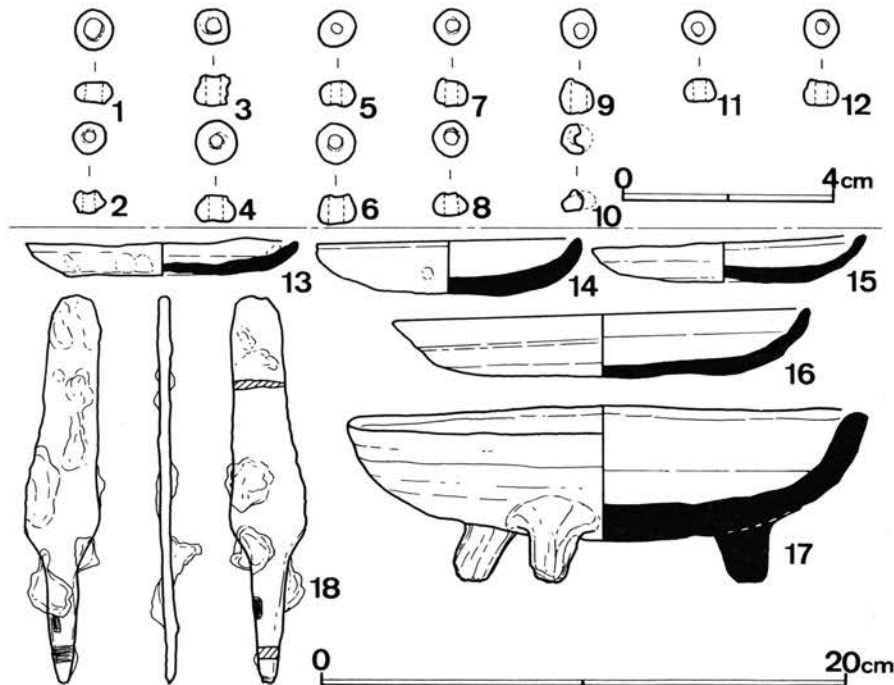
(2) 遺物(第52図)

中世土坑墓からの出土遺物は、ガラス小玉12点、土師器・皿4点、瓦質土器・三足盤1点、鉄製品・刀子1点である。

小玉 12点のうち4は緑色を呈し、遺存状態が良好である。その他は淡褐色を呈すが、風化が著しい。いずれも材質はガラスである。

土師器・皿 13は口径10.3cmを測る。平らな底部を有し、外傾する口縁部をもつ。胎土は粗く、焼成は不良である。色調は暗茶褐色を呈する。14は口径が9.9cmを測る。平らな底部を有し、内湾する口縁部をもつ。胎土は緻密であるが、焼成は不良である。色調は淡茶褐色である。15は口径が10.5cmで、平らな底部をもつ。内湾する口縁部を有し、口唇部は若干肥厚する。胎土は粗く焼成は比較的よい。色調は暗茶褐色を呈する。16は口径が16.5cmで、同種の中では最大径を有する。平らな底部から内湾する口縁部をもつ。口縁部外面に鈍い稜が走る。胎土は緻密で、焼成は不良である。色調は暗茶褐色を呈する。

瓦質土器・三足盤 口径は19.8cm・器高は6.8cm・脚高は2.05cmを測る。底部は丸底で、内湾する口縁部をもち、口唇部を丸く仕上げる。脚は3か所に付けており、脚の間隔



第52図 中世土坑墓出土遺物実測図

は必ずしも等間隔ではない。貼り付けの脚のため指頭圧痕が顕著に残る。胎土は緻密であるが、焼成は不良である。色調は淡黒灰色を呈する。

鉄製品・刀子 全長14.6cmを測り、刃部は8.6cmである。茎部には木質が残存する。刃部の厚みは0.2cm、茎部は0.4cmを測る。

(3) 中世土塚墓について

中世に属する遺構は土塚墓以外は確認できなかったが、遺物は近世の遺物包含層から土師器・瓦質土器・瓦器等を点数は少ないものの確認している。これらの遺物については残存率が悪く、資料化できない。ここでは土塚墓の年代等について簡単にまとめておく。

①土塚墓内から出土した遺物で、年代設定の根拠になり得るものは土師器・皿である。中世土器については土師器・瓦器の研究結果から編年試案が提示されており、特に、平安京を中心にした一括遺物は編年基準にもなっている。また、最近岩崎誠氏は長岡京跡から^(注3)出土した中世土器を詳細に検討し編年図を作成しておられる。それに準拠すると、土塚墓出土の土器は、平安時代Ⅲ期の範疇に含めることができる。年代については12世紀後半に比定できる。特に、いままで類例の知られていない瓦質土器・三足盤については一括遺物として年代設定ができたことは重要な成果であった。

②調査地周辺において、平安時代後期から鎌倉時代前期に比定できる遺構としては、後述する西準上り遺跡の土塚墓群があげられる。検出された土塚墓からは、中国の龍泉窯系青磁碗や東播系の中世須恵器等が出土している。当時の社会的背景を勘案すれば、青磁碗の出土は被葬者の社会的地位の高さを意味しているといえる。しかし、今回検出した土塚墓の出土遺物は、土師器・瓦質土器の日常雑器であり、青磁碗が出土した土塚墓の被葬者とは社会的地位に関しては明らかな違いがある。今後、周辺での中世土塚墓の増加に期待するところが大きいが、徐々にその要因が明らかになると考えられる。

第4節 近世の遺構と遺物

(1) 遺 構

近世の遺構としては建物跡・溝・暗渠・井戸・集石墓等がある。ここでは主に遺物の出土状態が良好なものについて記述する(第53図)。

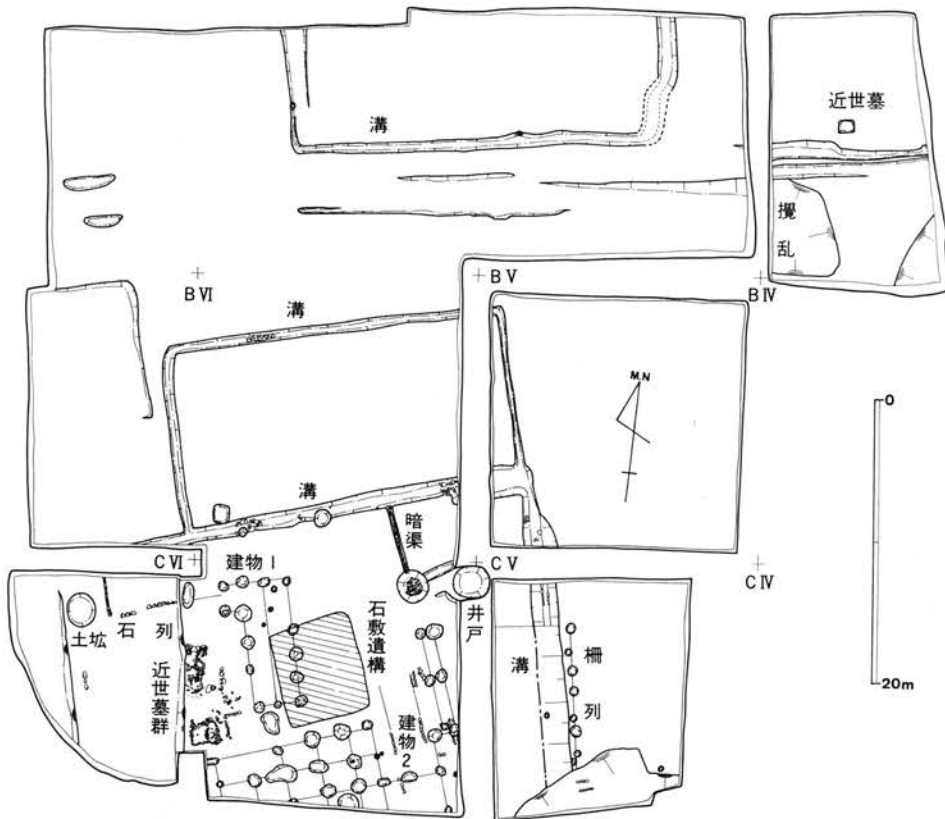
建物跡1(第54図) 南北に棟をもつもので、梁間が3.1m・桁行が8.4mを測る。建物跡の北面西側には1間×1間の張り出した部分があり、また、桁行の東面北側および西面南側の柱穴はない。柱穴の大きさは約80cmを測るが、概して建物跡の角柱が比較的大きい。柱穴内の出土遺物には陶磁器・土師質土器等がある。

建物跡2(第54図) 東西に棟をもつ建物跡で、少なくとも桁行が6間以上、梁間が3間

以上の規模を有する。建物跡の構造は、床面が一部張られていない部分があり複雑である。柱穴の大きさは90cmを測り、柱部は断面観察から40cmから50cmあったと考えられる。柱穴内からの出土遺物には陶磁器の細片があるが年代を決定するには至らない。

建物跡1・2は主軸線が同一であることから同時期に併存していたと考えられ、柵列を含め、建物跡2に付随するものとして建物跡1を解釈することができる。

暗渠(第55図) 建物跡の北方に位置し、底面に木板材を敷いた土坑と溝に流し込むための瓦質の土管からなる。水溜めの土坑は、検出面の直径が2.3m・底面で1.4mを測る。深さは0.8mである。土坑の断面は、底面に北方から流れ込んだ粘土が3層確認でき、その上に暗茶褐色粘質土が厚く堆積している。一方、土管を使用した暗渠は40cmの掘形をもち、溝の底面に直径15cmの瓦質の土管を16個体分埋設している。埋設された土管は、土坑の部分と溝部分の高底差が15cmを測る。レベルは、土坑部分の方が高くなっているが、土坑で泥水を沈殿させ上澄みを溝に流し込んだとは考えにくく、溝の上澄みを土坑に流し込んだと考えたほうがむしろ自然である。この高低差は後世の攪乱および土圧によってでき



第53図 近世遺構配置図

たものと解釈したい。出土遺物には土坑底面に陶磁器片が数点あるだけで、年代設定はできない状況にある。しかし、前述した建物跡と同時期と考えられる。

近世墓群(第56図) 近世初頭に属する墓は、DV区で4基検出した。以下、各々について記述するが、遺存状態が著しく不良な近世墓1・3については、復元規模についてのみ記述する。

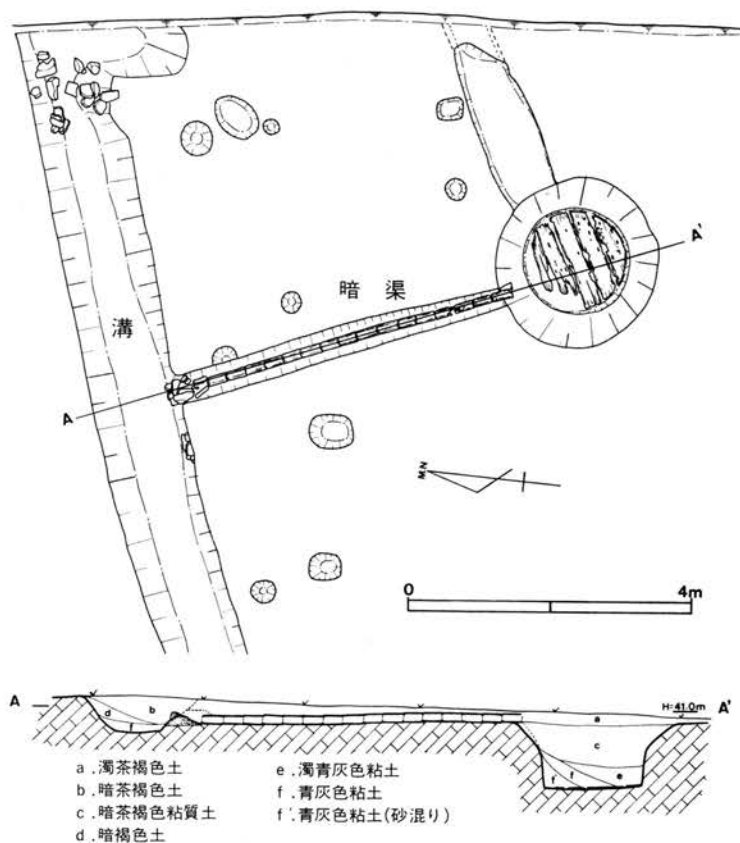


第54図 CM区近世遺構実測図

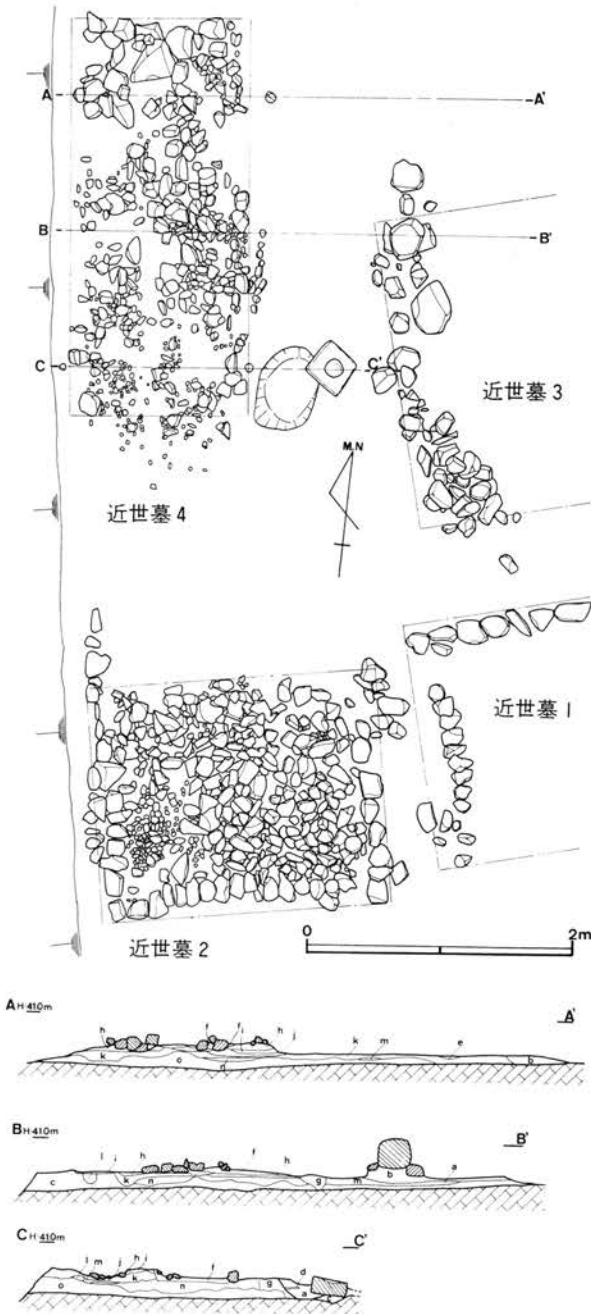
近世墓1 墓壇の外周に残存した北辺および西辺の列石を確認したにすぎず、全体の規模等についての詳細は不明である。北辺の列石は1.42mのみ残存している。基本的には20cm前後の円礫をほぼ直線に並べている。西辺は1.38mを測るが、北辺の西隅部まで礫が置かれていたと考えられ、1.84mの復元値が求められる。西辺の中央部は若干内側に入り込み、弧状を呈す。南辺および西辺の両端・墓壇内の礫群は後世の攪乱により残存していない。出土遺物はなく、年代等についても不明であるが、後述する近世墓2・4と立地条件や規模などが酷似しており同時期に比定できる。

近世墓2 近世墓1の西側に隣接しており、長辺2.18m・短辺1.77mの長方形の平面プランを呈する。北辺を除く三辺は20cm前後の円礫で区画しているが、北辺は墓壇内部に充填されている礫しか検出できなかった。墓壇内部は10~15cmの円礫を無秩序に充填し、西方のみ砂利を敷いている。墓壇の掘り込みは東半分が深さ25cm、西半分が深さ15cmで、東西のほぼ中央に段差がつけられている。埋葬位置は墓壇の掘り込みの状況から東半部に

遺骸を埋葬し、西半部に供献物を入れたと考えるのが妥当である。なお、西辺の北隅が墓壇の復元線よりも60cm北に突出している。これは、近世墓2と近世墓4との間に更に1基の近世墓が存在したためとも考えられるが、礫の散在もなく、また、近世墓2の北辺と近世墓4の南辺がほとんど攪乱を受けた形跡も



第55図 暗渠・排水施設平面・断面図



第56図 近世墓実測図

- a. 濁黄褐色砂質土 b. 濁黄褐色粘土 c. 濁黄褐色粘質土
 d. 暗茶褐色土 e. 暗茶褐色砂質土 f. 黒褐色土(炭混り)
 g. 茶褐色土 h. 黒色炭層(土師皿含) i. 黒色砂質土(炭混り)
 j. 暗茶褐色炭層 k. 暗茶褐色土 l. 茶褐色土(gより粗い)
 m. 暗黄褐色土 n. 濁暗茶褐色砂質土 o. 淡茶褐色砂利層

ないことから、近世墓2に付随する施設があったことによると考えられる。

近世墓3 前述した近世墓1の北方に位置し、西辺2.30mのみの列石が残存している。西辺北方は、30cm弱の角礫を据えている。西辺を除く三辺および墓坑内部の充填礫はすべて攪乱により残存していない。出土遺物は検出できなかった。

近世墓4 群中最も北方に位置する。主軸線はほぼ磁北と一致し、南北2.94m・東西1.42m以上を測り、平面プランが長方形を呈する。他の近世墓のように四辺を区画した列石はなく、北辺のみ30cmの角礫を区画している。西辺は近世末の削平により残存しておらず、東西の規模は不明な点が多いが、他の近世墓の規模等を参考にすると、現存する墓の範囲とは大きくは変わらないと考えられるため、1.42mの実寸を復元の目安にした。墓坑内には全体に5~10cmの礫を充填しているが、部分的にその礫が欠落している。礫群下の土層堆積状況は複雑な様相を呈するため別記する。

近世墓4の堆積状況について

東西に3本のセクションを設け断面観察を行った。北から順番にA・B・C(第56図)と呼称する。基本的には地山直上に茶褐色砂利層(o層)が全面に広がっており、墓壇床面の基層になっている。o層上には濁暗茶褐色砂質土層(n層)が堆積しており、o・n層が近世墓4の基本的堆積と考えられる。Cでは特に、黒褐色土層(f層)に多量の炭が含まれていることが確認できた。しかし、単に炭だけの堆積で、焼土を検出していないことから二次的な堆積と考えられる。一方、土師器・皿を多量に包含している黒色炭層(h層)は、検出した面で微量だが確認している。Bでは、先述したn層の堆積はごくわずかであり、h層の比較的厚い堆積が確認できた。なお、h層は上面の礫群下層に位置することから土師器・皿を用いた墓前祭祀の後、礫を充填したと考えられる。Aでは堆積自体が薄いこともあり、明確な堆積層と認識するに至らなかったが、f層とh層がほとんど同時に堆積していることが判明した。また、礫群はh層下層まで及び、礫が沈下した状態と解釈できる。

このような堆積状況から考えて、埋葬に係わる祭祀としてh層に包含されている土師器・皿が使用され、投棄されたと考えられる。また、土師器・皿は二次的な火を受けたために煤が付着しており、f層の炭層が土師器・皿を使用した祭祀により堆積したことが推測される。4基の近世墓を概観するといずれも方形プランを呈し、周囲には20cm前後の礫を並べて区画している。また、各々の墓には一定の空間があり、墓道である可能性を指摘できる。近世墓3・4間の五輪塔(火輪)は、出土状況から転落したと考えられ、いずれかの近世墓の墓標として解釈することができる。なお、各々の近世墓は深く掘り込まれた状況ではなく上部が削平された可能性があるが、墓の周囲および上部を礫で被覆した可能性も指摘できる。ただ、そのような構造をもった類例が少ないことから今後特に構造の面から考えていく必要がある。

(2) 遺物

近世・近代の遺構および遺物包含層から出土した遺物は整理箱20箱以上を数えるが、その多くは明確な遺構に伴わないものである。個々の遺物の記述は極力ひかえ、全体のアウトラインを中心に説明することにした。

近世の遺構の中で最も遺物が多く出土したものは地境の溝である。溝内からは伊万里・瀬戸・美濃・信楽・備前等の陶磁器類が比較的多く見られ、特に伊万里焼きの占める割合が高いと言える。これは、京都市内でも同じ傾向が指摘されている。年代は18世紀中葉から後半までに比定^(注4)できる。特異なものとしては瀬戸焼きの鉢(第58図5・6)があり、おそらく蔵骨器に転用されたと考えられる。器種別に見た場合は椀・皿・壺・甕・盤・ねり鉢など、生活に必要な日常雑器が大半を占める。その中でもねり鉢(第58図1～4)には信楽、

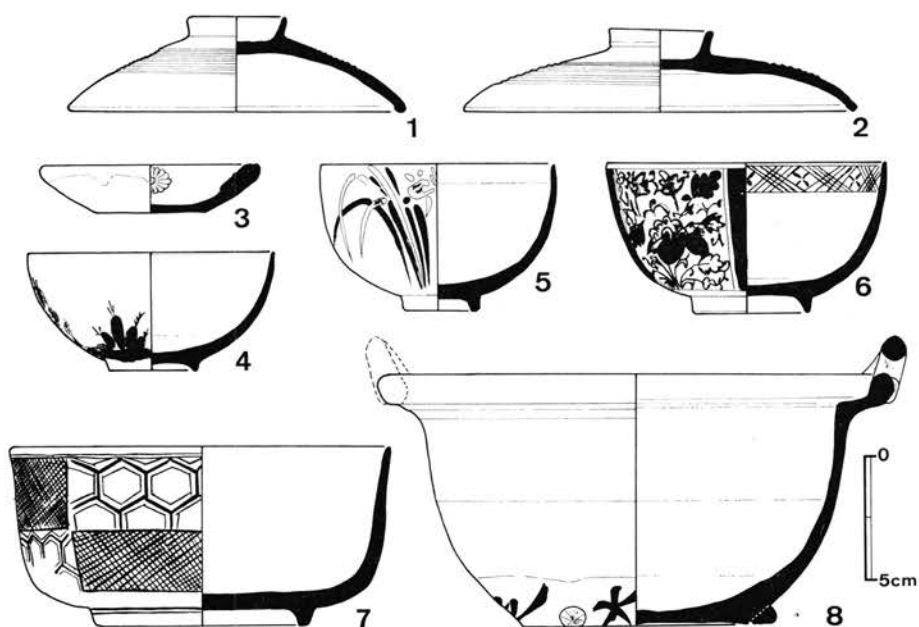
備前・丹波等のものがある。これらを総合的に見た場合、18世紀代のものが圧倒的で、建物跡の時期を比定する根拠になる。土師器・皿は後述する近世墓以外からも比較的多く出土し、特に、形態的に底部内面に沈線をもつ時期の皿は普遍的に見受けられる。

近世墓の遺物(第59図)

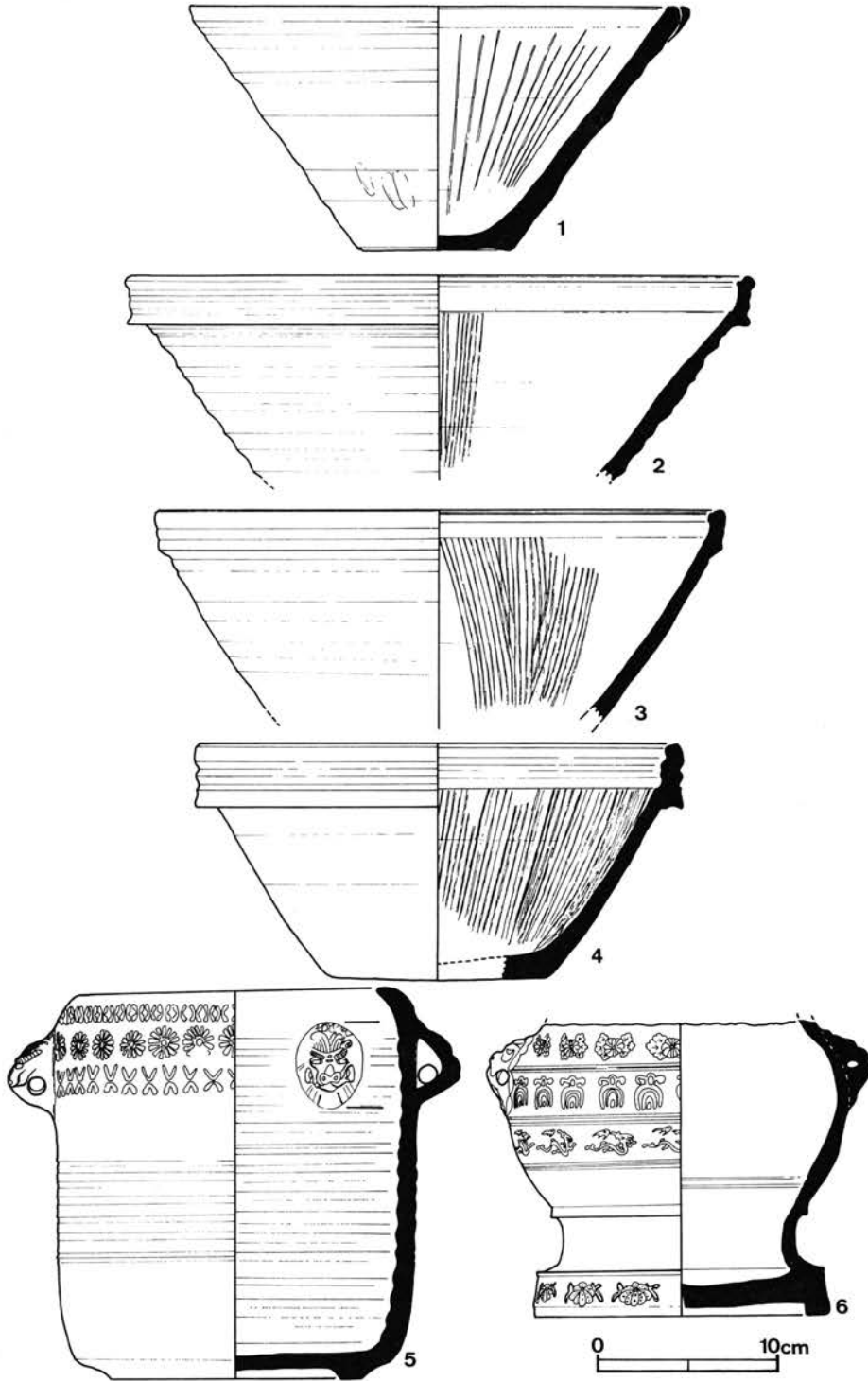
近世墓の焼土層から出土したものには、土師器・瓦質土器・天目茶碗・磁器・陶器・銭等がある。土師器・皿は口径が6cm前後・8.5cm前後・10cm前後・12cm前後の大きさに分類できる。底部の状態は、口径が6cmから8.5cmの大きさのものにあげ底が見られ、その他には見られない。また、底部内面に沈線が入るものは、4種類の中でも口径が12cmの皿にのみ観察できる。大・中・小の大きさの皿と他の土器の併行関係を明確にできたことは重要である。その他、瓦質土器や陶磁器類が見られる。17世紀後半から18世紀前半に比定できる。

(3) 小 結

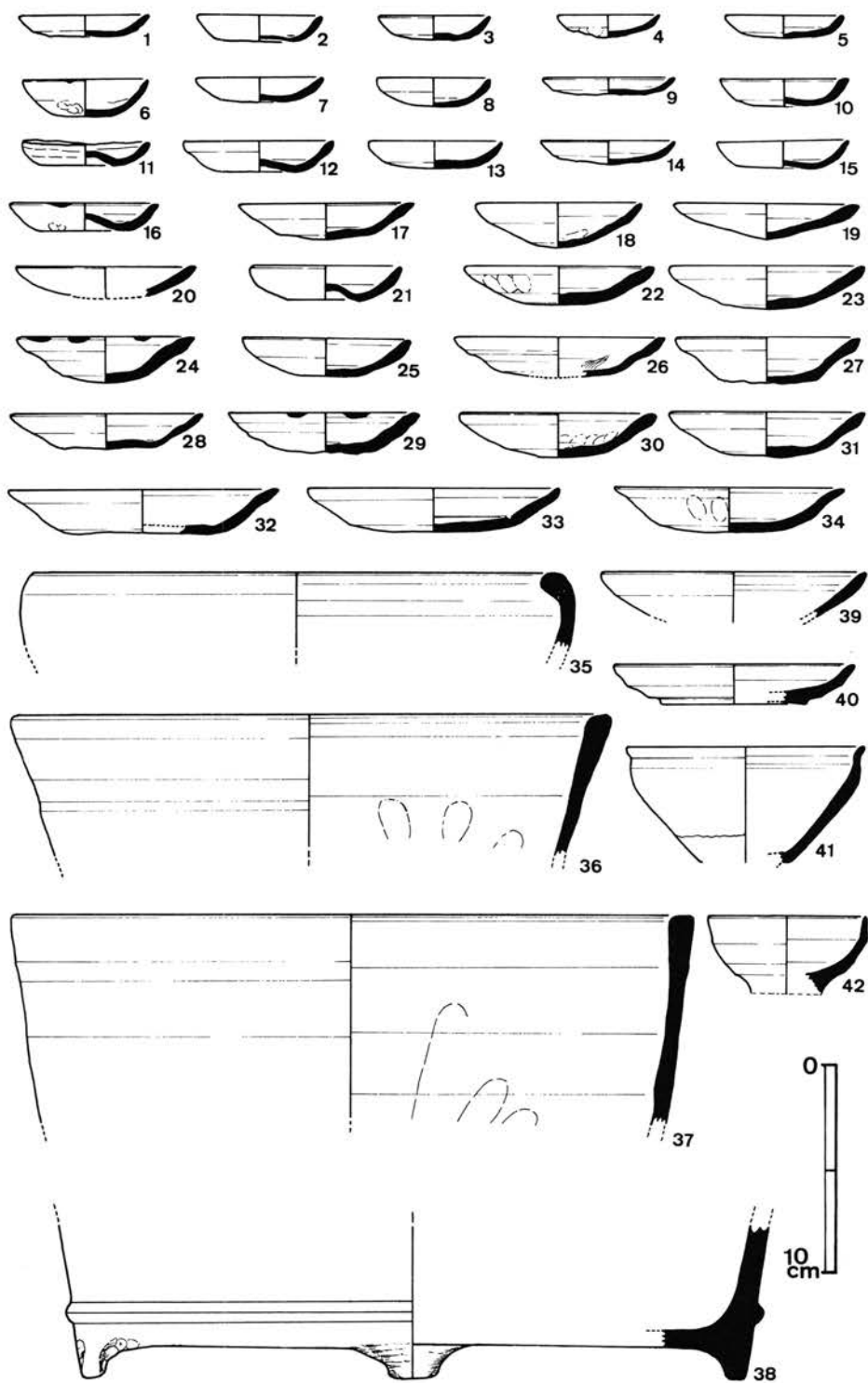
近世の建物跡には、生活用水を確保するための井戸や地境溝・建物を区画する柵列等の施設が付随している。これら施設の位置関係から、集落の形態をとるものではなく、一世帯の家屋と考えられる。宇治には近世文書が比較的よく残っており、五ヶ庄を中心に考えれば、建物跡の性格について明らかにできると考えられる。なお、この地は、五ヶ庄の一



第57図 近世溝出土遺物実測図



第58図 出土遺物実測図



第59図 近世墓4出土遺物実測図

村落である畑寺村の推定地であるが、関連の遺構は確認できなかった。可能性としては、当丘陵の南方の谷部かそれより東方の丘陵をあげることができる。

- 注1 杉本 宏「車上り瓦窯跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983
 注2 杉本 宏「大鳳寺跡第3次発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第2集 宇治市教育委員会) 1983
 注3 岩崎 誠「長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第17集 長岡京市教育委員会) 1986
 注4 鈴木重治他「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」(『同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編』II 同志社大学校地学術調査委員会) 1978

付表4 遺物観察表

種類	器種	挿図 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考	
土	皿	59-1	口径:6.2 器高:1.0 底径:3.4	平底の底部を有し外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良好	20%残 近世墓 4	
	皿	59-6	口径:6.0 器高:1.8 底径:2.2	平底の底部を有し内湾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ 指頭圧痕	1)密 2)暗褐色 3)良	50%残 近世墓 4	
	燈明 皿	59-9	口径:6.4 器高:0.8 底径:3.2	平底の底部を有し内湾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良	40%残 近世墓 4	
	皿	59-11	口径:6.1 器高:1.2 底径:3.7	あげ底の底部を有し内湾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)緻密 2)暗褐色 3)良	100% 残 近世墓 4	
	皿	59-17	口径:8.6 器高:1.7 底径:3.2	平底の底部を有し外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良	30%残 近世墓 4	
	師	皿	59-19	口径:8.9 器高:1.6 底径:—	尖底の底部を有し外傾し端部が肥厚する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)暗黒褐色 3)良	30%残 近世墓 4
		皿	59-21	口径:7.2 器高:1.6 底径:3.8	あげ底の底部を有し外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)緻密 2)淡赤褐色 3)良	50%残 近世墓 4
		皿	59-26	口径:10.0 器高:1.8 底径:—	平底の底部を有し内湾したのち外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良好	25%残 近世墓 4
		器	皿	59-27	口径:8.8 器高:2.2 底径:4.6	平底の底部を有し内湾したのち外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良
	皿		59-32	口径:12.8 器高:2.0 底径:7.0	平底の底部を有し外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡褐色 3)良好	30%残 近世墓 4
	皿		59-33	口径:12.0 器高:2.0 底径:6.0	平底の底部を有し外傾する口縁部をもつ。底部内面に沈線を施す。	ヨコナデ 仕上げナデ	1)密 2)淡赤褐色 3)良好	20%残 近世墓 4

種類	器種	挿図 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
陶器	鉢	59-35	口径：24.5	内湾し口唇部が玉縁状になる口縁部をもつ。	ヨコナデ	1)密 2)淡褐色 3)良好	10%残 近世墓 4
瓦質土器	鉢	59-36	口径：28.8	外傾し端部が肥厚する口縁部をもつ。	ヨコナデ 指頭圧痕	1)密 2)外黒灰色 内淡褐色 3)良好	10%残 近世墓 4
近世陶器	皿	59-40	口径：11.6	内湾する口縁部をもち外面に稜をもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)白灰色 3)堅緻	33%残 近世墓 4
	天目茶碗	59-41	口径：11.6 器高：5.4 底径：4.4	内湾したのち外傾する口縁部をもつ。	ロクロナデ 内外面施釉	1)緻密 2)暗茶褐色 3)堅緻	25%残 近世墓 4
陶器	ねり鉢	58-1	口径：27.0 器高：13.4 底径：8.6	平らな底部から外傾する体部を有し口唇部に面をもつ。	ロクロナデ 一本単位のすり目	1)緻密 2)赤褐色 3)不良	40%残 信楽 包含層
	ねり鉢	58-4	口径：26.8 器高：12.9 底径：12.4	平らな底部から若干内湾する体部をもち口唇部に面をもつ。	ロクロナデ 5本以上の単位のすり目	1)緻密 2)暗赤褐色 3)良好	20%残 包含層
	鉢	58-5	口径：15.8 器高：21.5 高台径：14.0	削り出しの高台をもち直立する体部に内湾する口縁部をもつ。	ロクロナデ「 \sim 」 形と花卉のスタン プをもつ獣顔の把手	1)緻密 2)外暗黒褐色 3)良好	70%残 土塚
磁器	蓋	57-1	口径：13.6 器高：3.8	口縁部内面にかえりを有し天井部に環状つまみと凹線をもつ。	淡緑色の釉を内外面にかける。	1)緻密 2)淡緑色 3)堅緻	80%残 近世墓
	皿	57-3	口径：8.8 器高：1.9 底径：4.5	底部から外傾する口縁部を有し内面に菊花浮文をつける。	淡褐色の釉を底部以外にかける。	1)緻密 2)淡褐色 3)堅緻	50%残 近世溝
	椀	57-6	口径：11.2 器高：6.0 高台径：4.7	断面三角形の高台を有し、丸味をもった体部をもつ。	外面に草花を描く。	1)緻密 2)白青色 3)堅緻	95%残 近世溝
陶器	鍋	57-8	口径：21.0 器高：10.0 底径：10.2	底部に豆状の粘土を付し口縁部両端に把手がつく。	茶褐色の釉が付き 底部に「大□□求 之」墨書あり	1)緻密 2)茶褐色 3)堅緻	70%残 近世溝

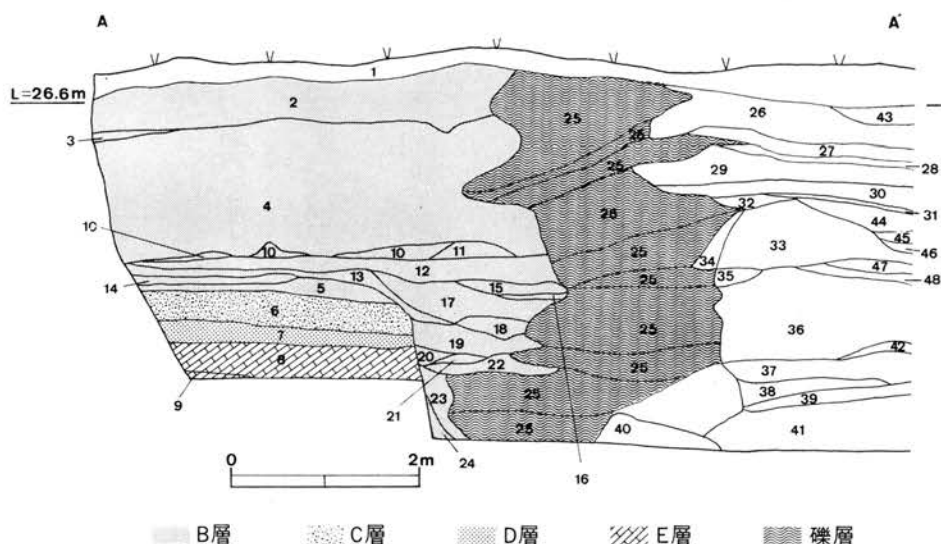
第5章 西隼上り遺跡

第1節 調査の概要

西隼上り遺跡は、五雲峰から西にのびる丘陵とその南側斜面に位置する。この遺跡は、かつて石廂丁が採取されたと伝えられており、弥生時代の遺跡として知られていた。宇治市教育委員会が昭和53年に今回調査地の北方を調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

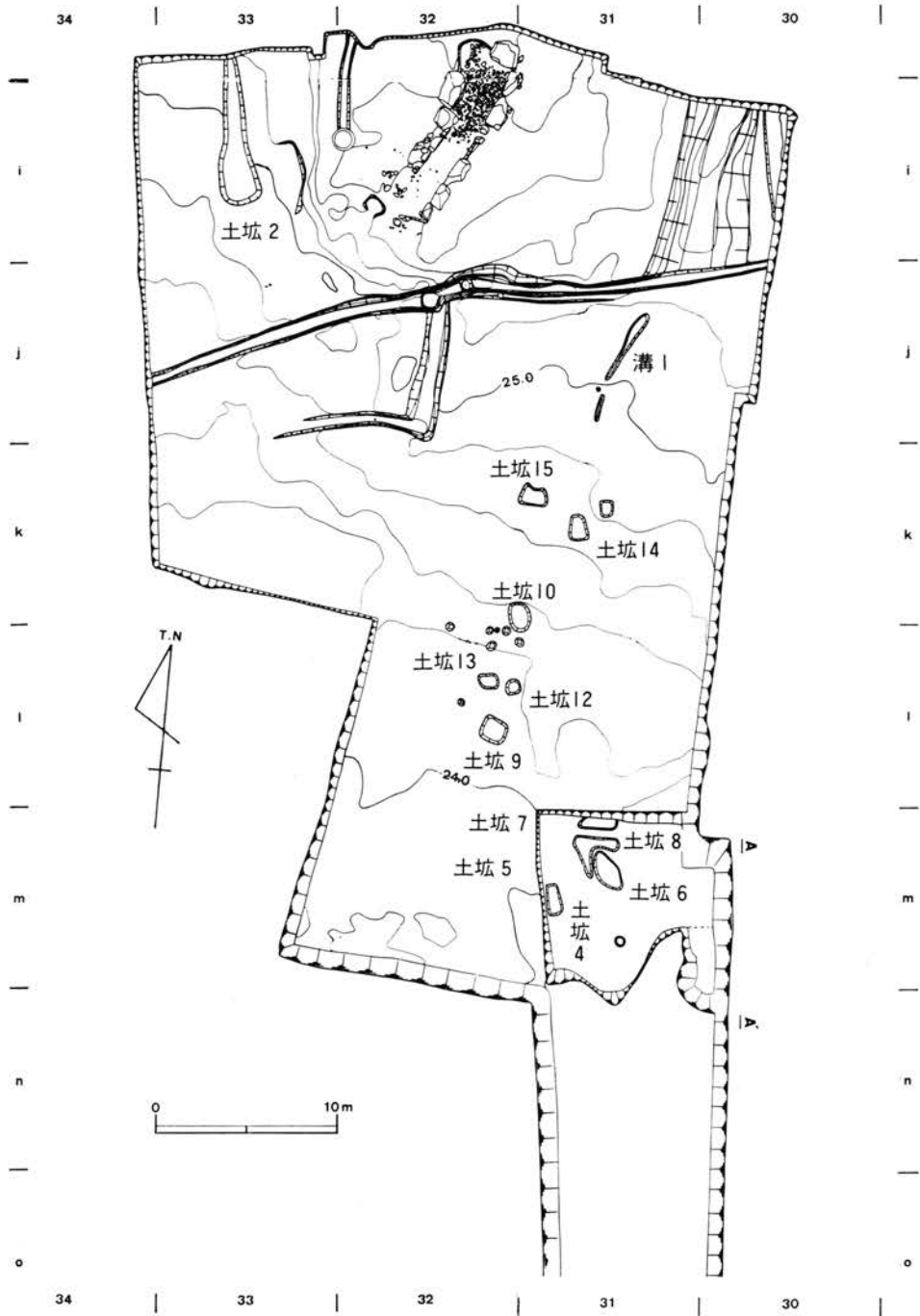
(1) 基本層位(第60図)

西隼上り遺跡の基本的な層位は、大きく5層に分けることができる。まずA層は表土である。B層は黄褐色砂質土層である。このB層は川の氾濫などによって堆積した層と思われる、細分が可能である。調査区北部ではほとんど見られず、南部では約3m堆積している。C層は暗茶褐色土層である。中世の遺構面である。D層は茶褐色土層である。古墳時代・



第60図 第3調査区東壁断面図

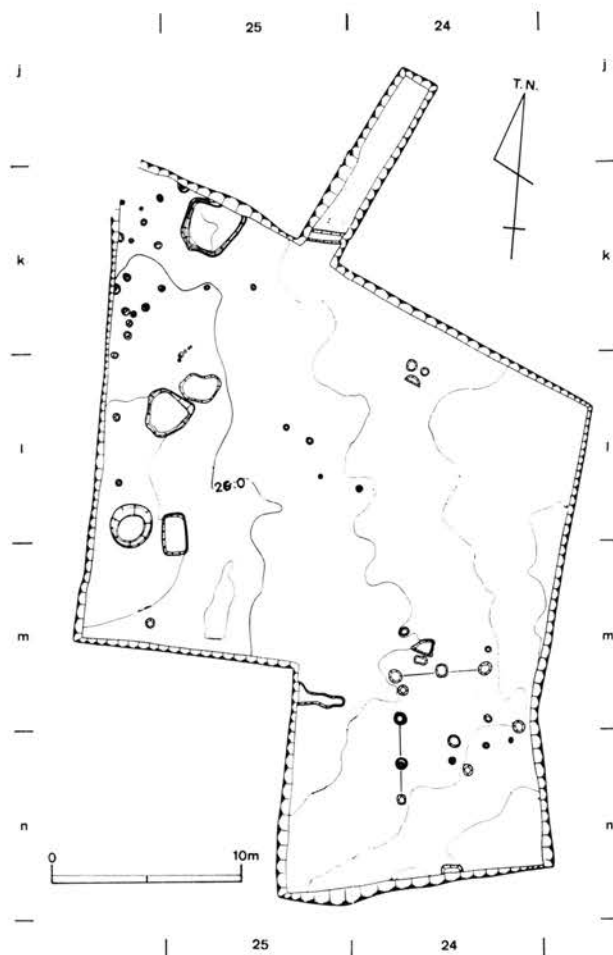
- ① 腐植土(表土) ② 暗黄褐色砂質土層 ③ 褐色礫層 ④ 黄褐色砂質土層 ⑤ 暗茶褐色土層
 ⑥ 暗茶褐色砂利層 ⑦ 茶褐色土層(10cmの円礫入る) ⑧ 暗茶褐色砂礫層 ⑨ 黒褐色土層
 ⑩ 黄褐色礫層 ⑪ 黄褐色砂質土層 ⑫ 黄褐色砂質土層 ⑬ 黄褐色砂質土層 ⑭ 黄褐色礫層
 ⑮ 黄褐色砂質土層 ⑯ 黄褐色砂質土層 ⑰ 黄褐色砂質土層 ⑱ 黄褐色礫層 ⑲ 黄褐色砂質土層
 ⑳ 黄褐色砂質土層 ㉑ 茶褐色砂利層 ㉒ 黄褐色砂質土層 ㉓ 黄褐色砂質土層 ㉔ 黄褐色砂質土層
 ㉕ 褐色礫層 ㉖ 暗黄褐色砂質土層 ㉗ 暗黄褐色砂利層 ㉘ 暗黄褐色砂礫層 ㉙ 暗黄褐色砂質土層
 (砂礫を含む) ㉚ 黄褐色砂利層 ㉛ 黄褐色砂質土層 ㉜ 黄褐色砂礫層(5~10cmの礫を含む)
 ㉝ 黄褐色礫層(15~20cm程度の礫) ㉞ 黄褐色土層 ㉟ 黄褐色砂利層 ㊱ 黄褐色土層
 ㊲ 黄褐色土層(砂っぽい) ㊳ 黄褐色土層(こぶし大の礫を含む) ㊴ 褐色礫層 ㊵ 暗褐色土層
 ㊶ 暗褐色砂利層 ㊷ 暗褐色砂利層 ㊸ 暗黄褐色砂利層 ㊹ 褐色砂礫層 ㊺ 褐色砂礫層
 ㊻ 暗褐色砂質土層 ㊼ 暗褐色砂質土層 ㊽ 褐色砂利層



第61図 第2・3調査区平面図



第62図 第5調査区平面図



第63図 第4調査区平面図

奈良時代の遺構面である。

E層は暗茶褐色砂礫層である。この層から下層では全く遺物が出土していない。

(2) 各調査区の概要

今回の調査では、1～5の調査区を設定した。掘削総面積は7,240m²である。以下各調査区の概要を述べる。

①第1調査区 調査地の南東から北西にはしる市道の北側丘陵部である。この調査区は、近年の造成工事によって東半部が削平されていたため、削平されていない西半部に重点を置いて調査を行った。この調査区では隼上り3号墳を新たに発見し、近世以後の石垣等を検出した。

②第2・3調査区 i～

P・30～34区の範囲で、府道京都・宇治線沿いの地点である。当初は調査区を分けて設定したが、調査の進行によって、第2調査区と第3調査区の間の中世土坑の存在が予想されたため、第2・3調査区間を拡張した。ここでは隼上り2号墳のほか、古墳時代の溝・奈良時代の土坑・中世の土坑等を検出している。また、第3調査区では礫層が縦にはいり、この礫層から南は前述した基本層位と異なる砂と礫の互層となっている。この礫の層は東西にのびる。大鳳寺川の旧流路と思われる。

③第4調査区 j～n・21～26区の地点である。当初は3本のトレンチを設定したが、奈良時代のピットを検出したためトレンチの拡張を行った。ここでは、奈良時代のピット群を検出している。

④第5調査区 この調査区のみ調査年度が異なる。i～o・26～30区の地点である。第

付表5 西牟上り遺跡検出遺構一覧表

遺構番号	旧番号	地 区	規 模	遺 物	時 期
溝1	溝80	i 31	長さ7.4m, 幅0.2~0.6m	須恵器	古墳時代
2		k 29	長さ2.4m, 幅0.35m		中 世
3		j 26~ j 27	長さ15m, 幅0.5m		近世以後
4		k 29~ j 29	長さ19.8m, 幅1.2~1.8m		〃
5		h 30~ i 30	長さ11.5m, 幅0.5~2.5m		〃
6		l 26~ l 29	長さ38m, 幅0.6~1.7m		〃
7		l 28~ l 29	長さ18.3m, 幅0.4~1.8m		〃
8		l 28~ n 29	長さ28.5m, 幅0.4~1.8m		
9		l 29~ m 29	長さ13.5m, 幅1.2m		
10		l 30~ m 30	長さ20m, 幅0.7~1.5m		
11		b 26~ c 26	長さ11.5m, 幅0.4~0.7m	瓦	不 明
12		d 24	長さ8.5m, 幅1m		〃
13		h 28~ j 28	長さ13.6m, 幅1~1.7m		〃
14		j 30~ h 30	長さ22.2m, 幅0.9~1.5m		〃
15		m 29	長さ7.5m, 幅0.7m		〃
16		n 28~ n 29	長さ9.8m, 幅0.5~0.7m		
土塚1	土塚1	i 26~ j 26	長さ4.2m×幅1~2.4m, 深さ0.4m	須恵器, 土師器・瓦	奈良時代
2	溝66	h 33	7.2m×2.45m	須恵器, 土師器	〃
3		c 24	3.5m×3.0m	炭混り	
4	土塚11	l 31	1.8m×0.65m	青磁椀, 漆器	
5	土塚12	〃	1.4m×0.9m		
6	土塚13	〃	2.6m×1.1m		
7	土塚14	〃	1.3m×2.4m		
8	土塚15	〃	2.2m×0.6m		
9	土塚63	h 32	1.3m×1.3m	羽釜, 土師器, 鉄製品	
10	土塚64	j 31	1.5m×1.3m	瓦器	
11		h 32	1.4m×0.8m		
12		〃	1.1m×1.1m		
13		〃	1.0m×0.92m		
14		j 31	1.4m×0.9m		

遺構番号	旧番号	地 区	規 模	遺 物	時 期
土塚15		j 31	1.5m×1.2m		
16		l 32	2.6m×1.6m		
17	土塚54	c 32	2.2m×1.8m	刀子	
18	土塚55	〃	1.5m×0.8m	鉄釘	
19	土塚57	〃	1 m×1 m		
20	土塚58	〃	1.3m×0.9m		
21		n 27	直径2.9m		
22		h 26	3 m×4 m		
23		i 28	2.8m×1.2m		
24		l 28	1.8m×0.6m		
25		l 30	2.2m×0.1~0.56m		
26		i 29	1.3m×0.6m		
27		i 29	1.5m×1 m		

3調査区で検出した大鳳寺川の旧流路は、この調査区にはいるとほぼ直角に曲がり、南に向きを変える。検出した遺構は、奈良時代の土塚等である。

第2節 古代の遺構と遺物

(1) 検出遺構

①古墳時代の遺構

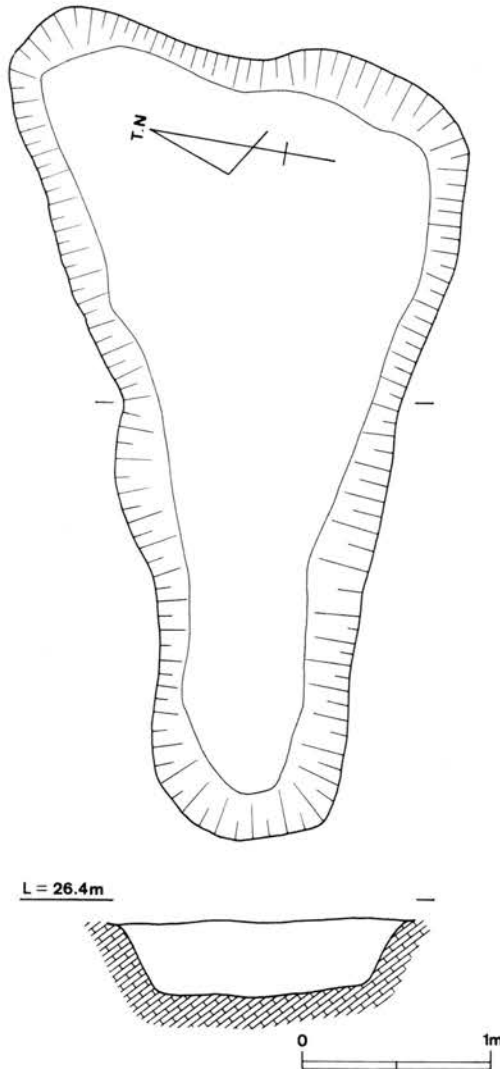
古墳時代の遺構としては、溝1がある。長さ7.4m・幅0.2~0.6m・深さ0.1mの細い溝である。溝内からは提瓶が1点出土している。準上り2号墳との関連が考えられるが、2号墳の遺物よりやや古式である。

②奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は土塚1・土塚2・ピット群がある。

土塚1(第64図) 第5調査区と第4調査区の中間に位置する。長さ3.1m・幅0.8~1.6m・深さ0.4mの溝状の土塚である。埋土には礫を多量に含む。須恵器・瓦・土師器が出土している。

土塚2 2号墳石室の西方、h33区に位置し、南北に長い溝状の土塚である。長さ7.5m・幅1.6~2.4m・深さ0.5mを測る。土塚1と同様に、埋土には礫を多量に含む。須恵器・土師器が出土している。



第64図 土坑 1 実測図

ピット群 124～m24区とj26区においてピット群を検出した。

124～m24区のピット群では、一辺約60cmの方形のピットを8基・円形のピットを7基検出した。ピット群の北部にある方形ピットでは、3基が東西に並ぶ。断面の観察からも、柱痕と思われる柱状の層を確認している。西端のピットからは南北方向に対応する並ぶピットを検出したが、他のピットでは南北方向に対応するピットがなく、建物として認定できない。あるいは柵列であったのかもしれない。

j26区では、直径40～50cmのピットを中心に、48基のピットを検出している。ここでも4基程度のピットの列をいくつか認定できるが、これに対応するピットの並びがなく、やはり建物として認定できない。これも柵列であったことが考えられる。

(2) 出土遺物

①古墳時代の遺物(第65図) 古墳時代の遺物としては、溝1から出土した提瓶がある。やや内湾ぎみの口縁を

持ち、2条の沈線をめぐらす。肩部には環状の吊り手を持っており、2号墳の遺物と比較してやや古式の様相を呈する。

②奈良時代の遺物

奈良時代の遺物としては、土坑1・土坑2出土の遺物がある。

土坑1出土の遺物(第66・67図)には須恵器・土師器・瓦がある。

須恵器には杯・壺・鉢・風字硯・平瓶・甕がある。

杯には高台を持たないものと、高台を持つものの2種がある。高台を持たないものは3点あるが、いずれも口径が異なる。高台を持つものは1点ある。高台は比較的高く、端部

は外方に屈曲する。

5は壺の底部である。ハの字形に開く高台を有する。

鉢は3点ある。小型のものと大型のもの2種に分けられる。小型のものは内湾する口縁をもち、径が最大となる部分に1条の沈線をめぐらす。底部は平底である。大型のものは直線的に外反する口縁を持つ。

9は風字硯である。硯面は使用による摩滅が著しい。いわゆる花頭風字硯(注1)に属する。

10は平瓶である。口縁の形態は不明であるが、肩部は大きく稜をなす。

11は甕である。口縁は緩やかに外反し、端部は外方に屈曲させる。

土師器(第66図12・13)には高杯と甕がある。

高杯は大きく開き下方に屈曲する口縁を持ち、口縁端部は上方に折り込む。内面には暗文を施す。脚はヘラケズリによって断面九角形に成形している。

甕はゆるやかに外反し、端部は内側に折り込む口縁を持つ。

瓦には、鬘斗瓦・平瓦・丸瓦がある。

鬘斗瓦は凸面に斜格子叩き、凹面に布目を残す。平瓦は凸面に縄目叩き、凹面には布目を残す。丸瓦は、凸面ではナデによって叩き痕を消している。凹面は布目を残す。

これらの遺物は平城宮Ⅱ～Ⅲ(注2)の土器群と類似しており、8世紀中頃の時期と考えてよいだろう。

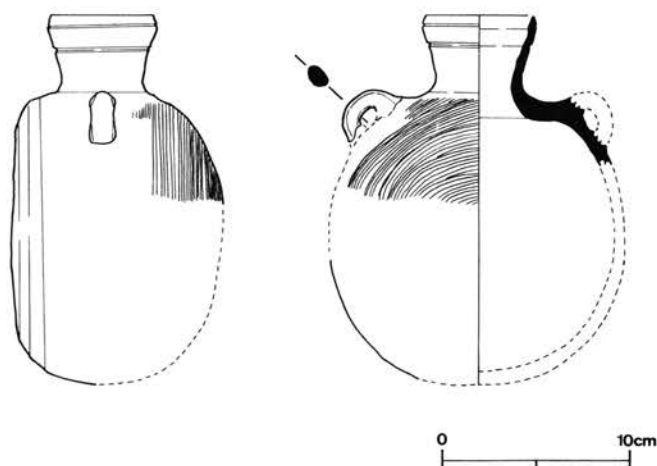
土塚2の遺物(第68図・第69図)には、須恵器・土師器がある。

須恵器(第68図・第69図1)には、蓋杯・壺・鉢・甕がある。

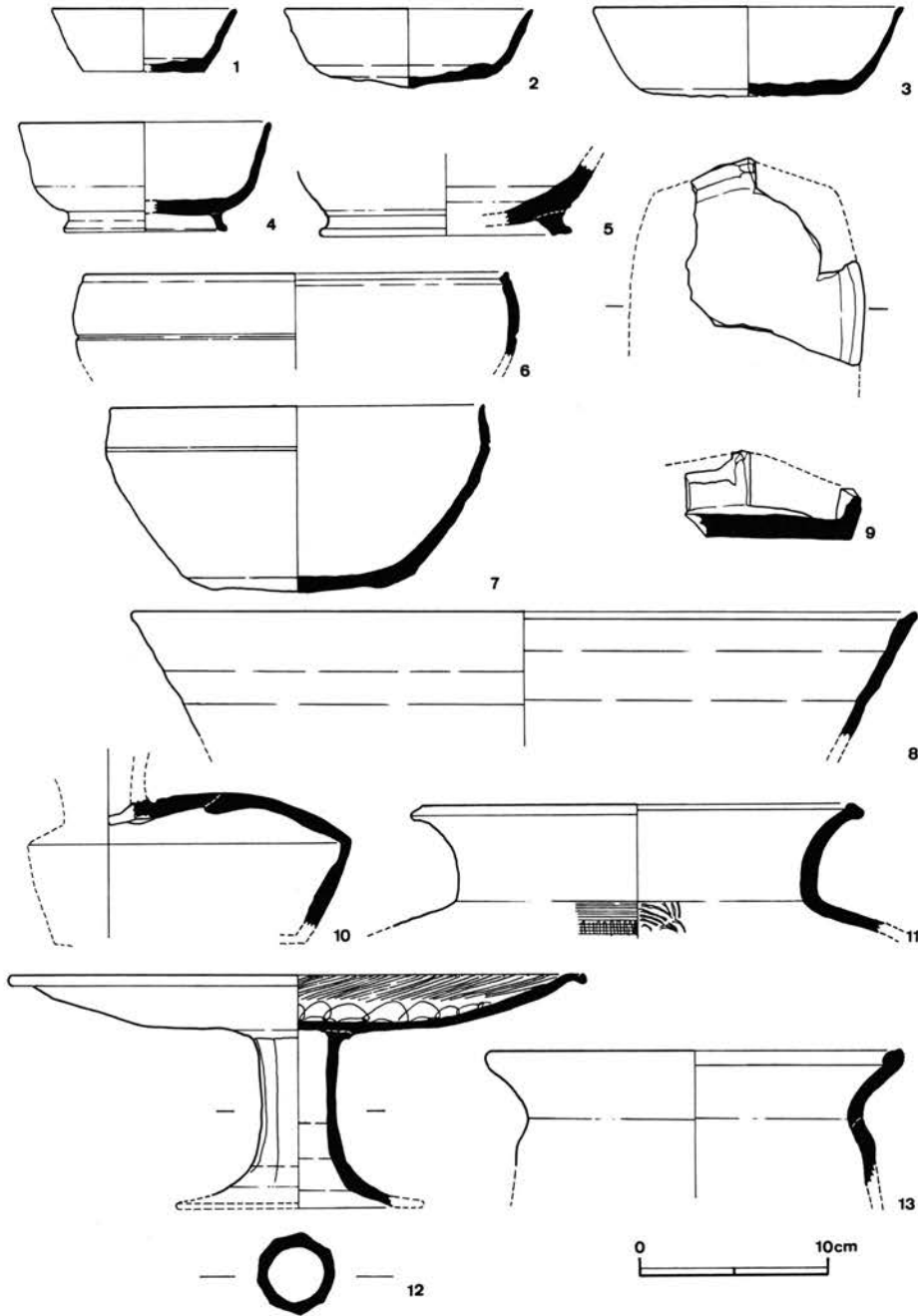
蓋杯は8点を図示し得た。蓋は平らな天井部を持ち、宝珠つまみを持つものと思われる。身には高台を持つものと持たないものがある。高台には低いものと比較的高いものの2種がある。

壺は6点を図示し得た。9は長頸壺の口縁である。大きく開く口縁を持ち、内面には絞った痕跡が見られる。

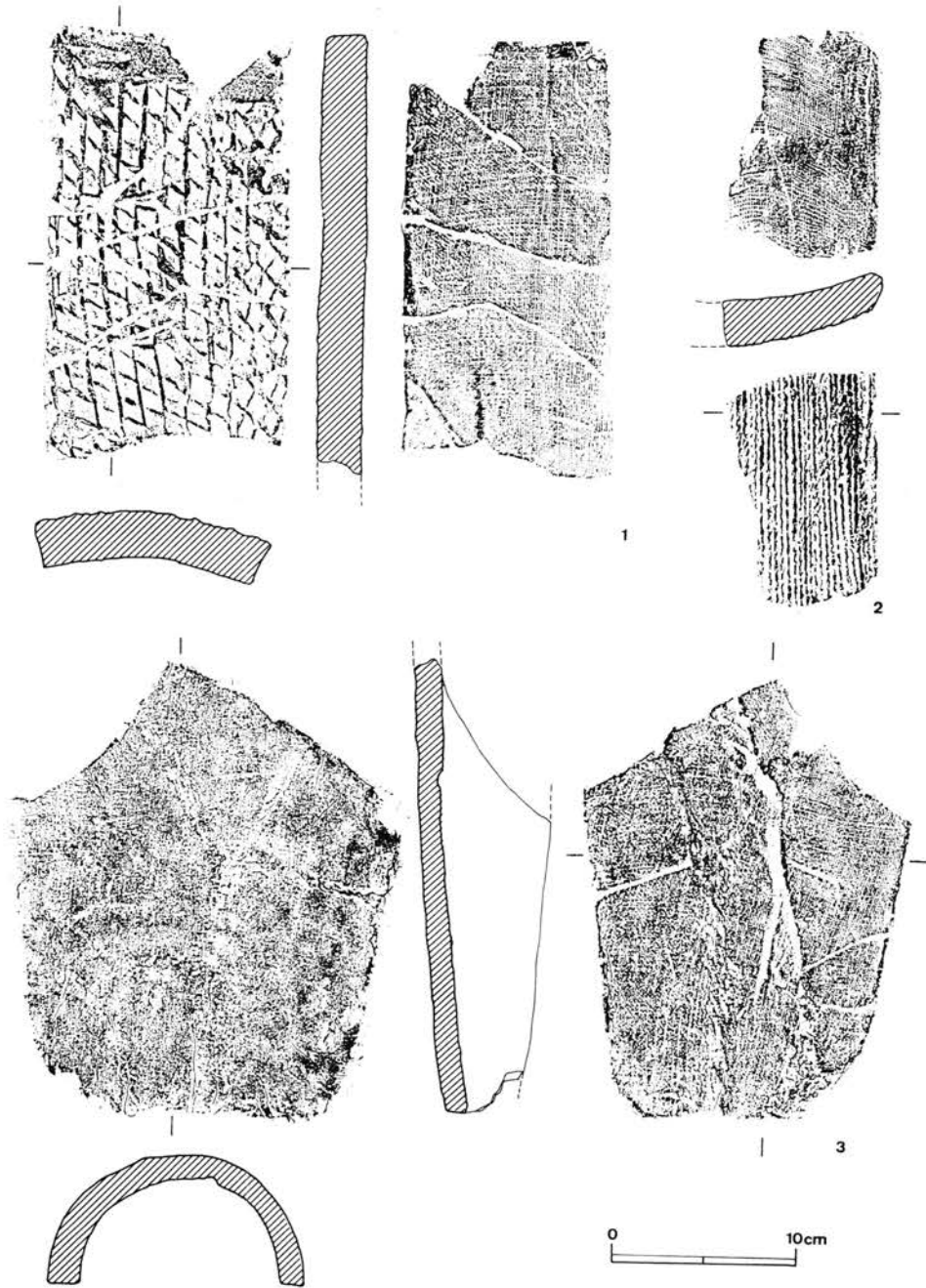
10・12は壺の体部及び底部である。ハの字に



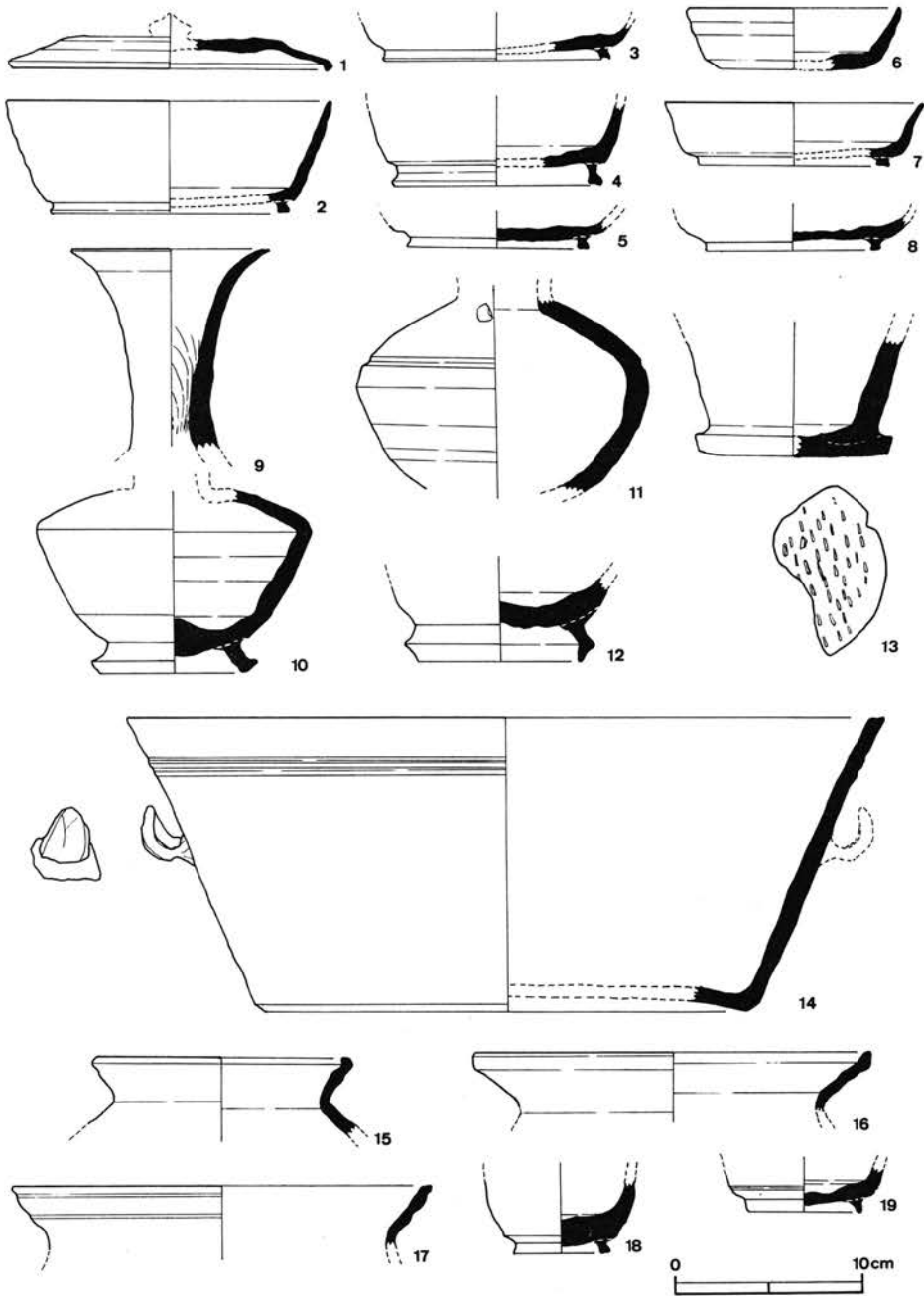
第65図 溝1出土遺物実測図



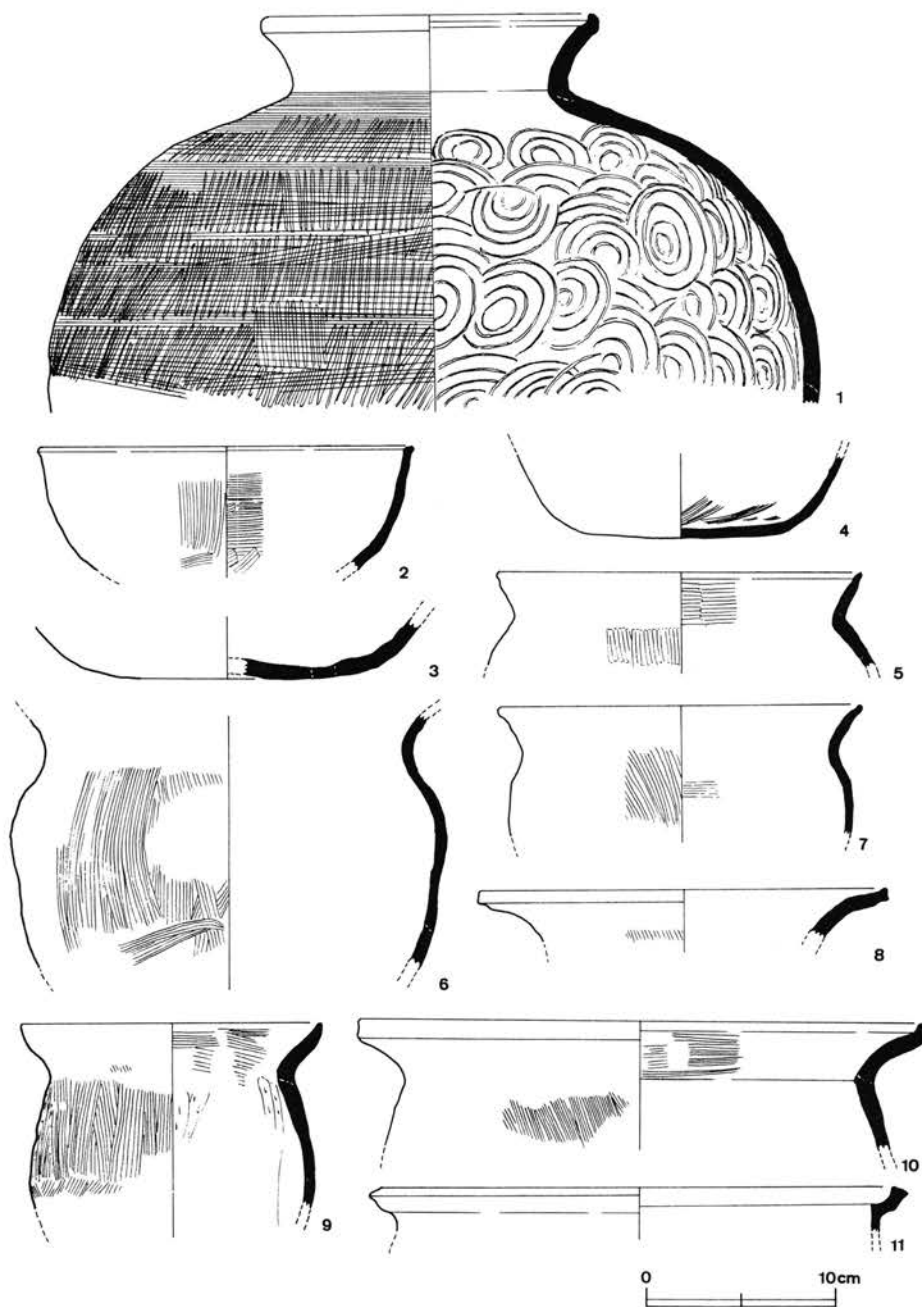
第66図 土塚 1 出土遺物実測図 (1)



第67図 土塚1出土遺物実測図(2)



第68図 土塚 2 出土遺物実測図 (1)



第69図 土塚 2 出土遺物実測図 (2)

開く高台を持つ。11は壺の体部である。肩部に1条の沈線をめぐらす。18・19はいわゆる瓶子である。

鉢は2点ある。13はいわゆる摺鉢で、底部にはヘラ状工具による刺突がみられる。14は底部から直線的に立ち上がり、口縁部には2条の沈線をめぐらす。舌状の把手が2か所につく。底部はやや上げ底ぎみである。

甕は4点ある。15はゆるやかに外反し、端部は内側に屈曲する口縁を持つ。16はゆるやかに外反する口縁を持ち、端部を上方につまみあげる。17はやや内湾ぎみの口縁を持つ。口縁部に2条の沈線を持つ。第69図1は外反する口縁を持ち、端部を上方につまみあげる。体部外面は平行叩きのあとカキ目、内面は同心円状の当て具痕を残す。

土師器には碗と甕がある。

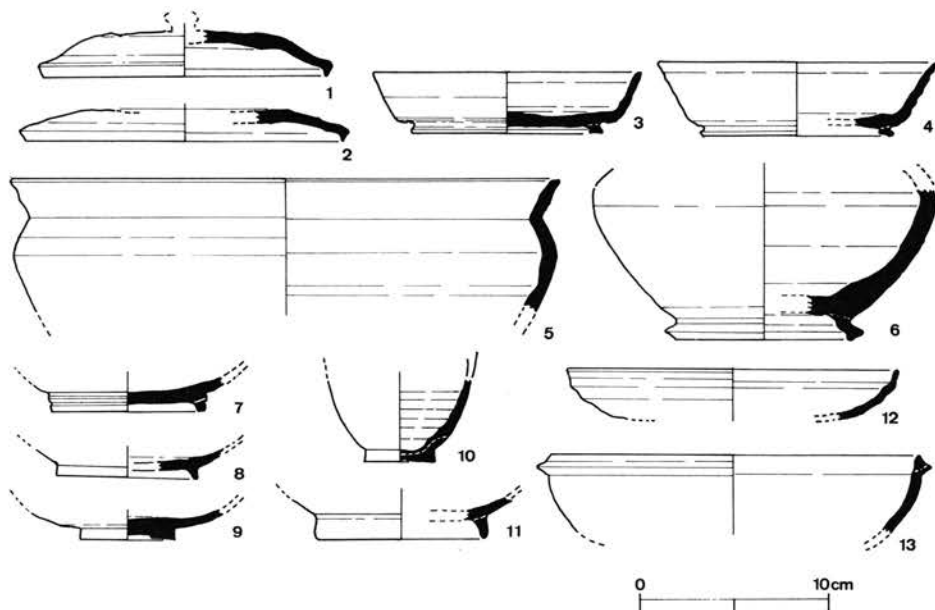
碗は3点ある。2は底部から内湾ぎみに立ち上がる。体部は内面をヨコハケ、外面にはタテハケを施す。4は内面に暗文を持つ。甕は7点ある。口縁の開きの小さいもの、大きいもの、受け口状を呈するものの3種に分けられる。

これらの遺物には若干の時期差が見られ、平城宮Ⅲから平城宮Ⅴの時期と思われる。

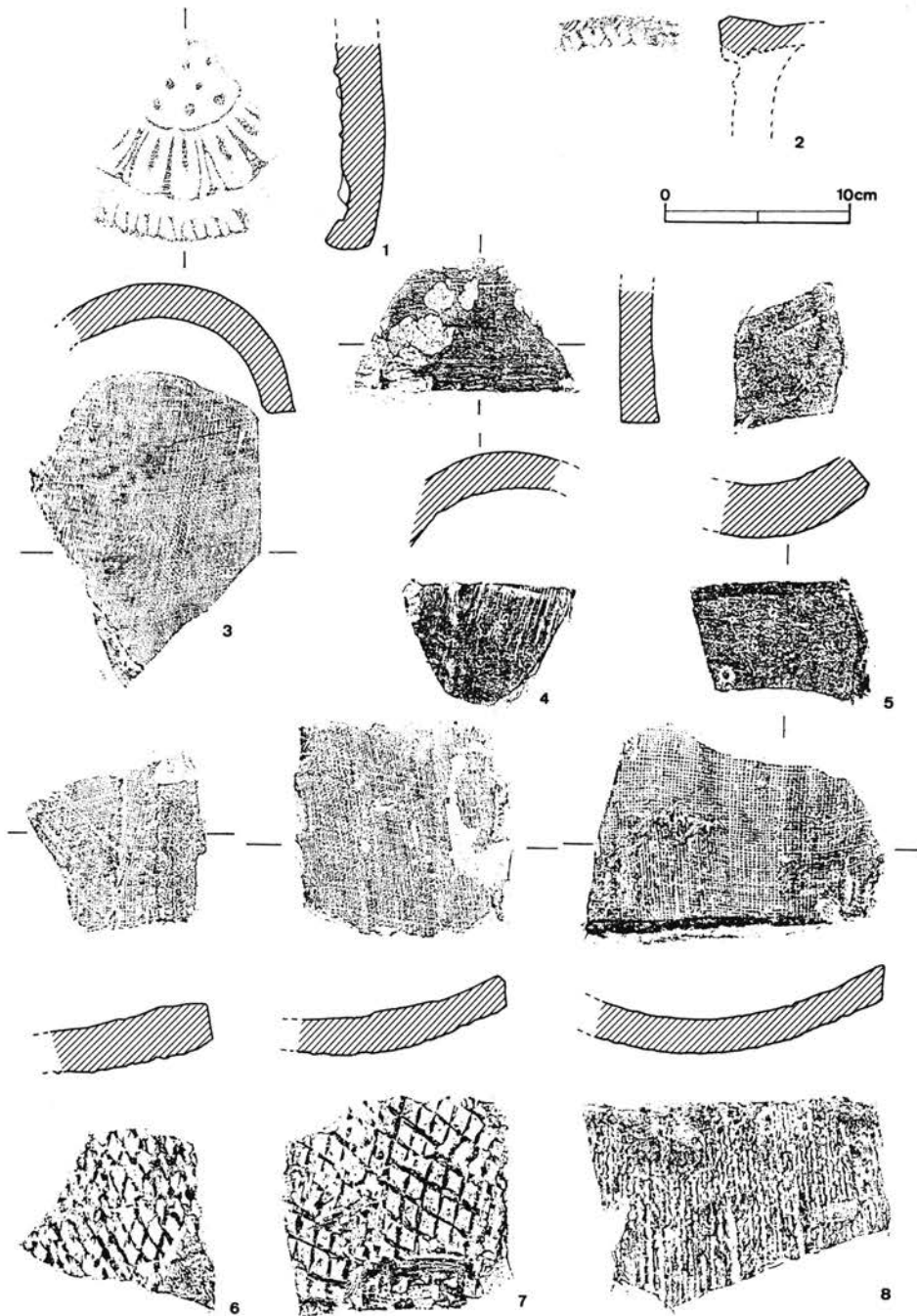
包含層からは、須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類が出土している。

須恵器(第70図1～6・10・13)には蓋杯・壺・鉢などがある。

蓋杯(1・2)は、蓋と身をそれぞれ2点ずつ図示し得た。蓋は平坦な天井部を持ち、口縁端部はあまり大きく屈曲させていない。身にはまっすぐに立ち上がる口縁を持つものと、



第70図 包含層出土遺物実測図(1)



第71図 包含層出土遺物実測図 (2)

やや外反する口縁を持つものがある。いずれも低い高台を持つ。

壺は2点図示し得た。6はなだらかな肩を持ち、ハの字状に開く高台を持つ。10は瓶子で、ミズビキ成形後、粘土で貼り付け底部の成形を行っている。

鉢(5)は1点を図示し得た。くの字状の口縁を持つものである。13は鉢と思われるが、類例がなく、器形・時期ともに不明である。

土師器には皿などがある。12は底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁を持つ。

緑釉陶器(7~9)には碗がある。釉調から京都系のもと思われる。貼り付け高台を持つものと削り出し高台を持つものがある。

灰釉陶器(11)には碗がある。形態から東濃系のもと思われる。

瓦類(第71図)では軒丸瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦は2点ある。1は複弁蓮華文を主文とする。外縁は面違鋸齒文をめぐらす。いわゆる川原寺式の軒丸瓦である。2は外縁のみであるが、鋸齒文が残っており、1と同様の形態の軒丸瓦と思われる。丸瓦(3~5)は凸面の叩きをナデ消すものが一般的である。凹面は布目を残すものと、ハケ状の工具で消すものがある。平瓦(6~8)には凸面に斜格子叩きを行うものと、縄目叩きを行うものがある。斜格子叩きには、格子の単位の大きいものと小さいものの2種に分けられる。

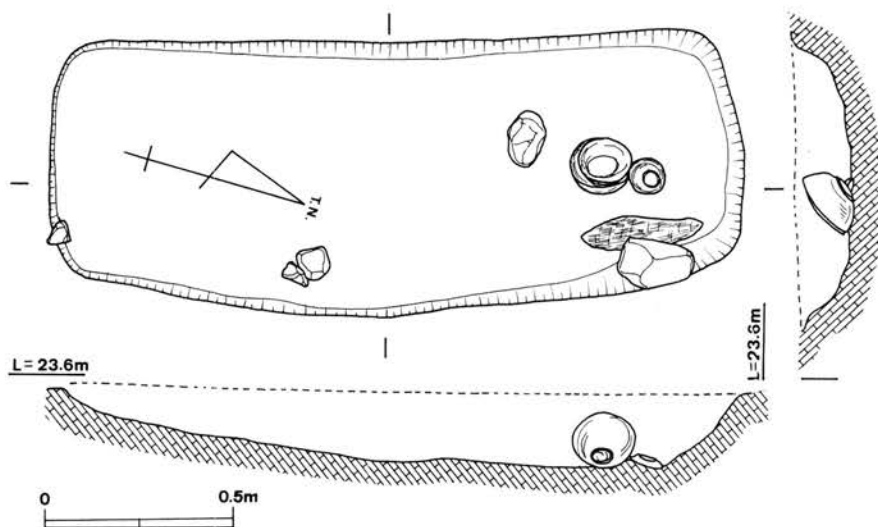
第3節 中世の遺構と遺物

(1) 検出遺構

中世の遺構には、溝・土壇がある。以下個々の概要を述べる。

溝2 第5調査区北部、h29区に位置する。長さ約2.4m・幅約0.4m・深さ約0.2mの細長い溝である。溝内からは土師器片が出土している。性格は不明。

土壇4(第72図) 第3調査区、131区に位置する。南北方向に長軸を持ち、長軸1.8m・短軸0.65m・深さ15cmの隅丸長方形の土壇である。土壇の北寄りから青磁碗2点・漆器の皿と須恵器の皿が出土している。遺物や土壇の形状から墓と思われる。墓とするならば、何らかの地上標識の存在が考えられるが、土壇検出段階では標識になるものは検出していない。しかし、土壇の北東部から20cm×30cmの石が1石と炭化した木材が出土しており、これらが地上標識の役割を果たしていたのかもしれない。遺物は、2点の青磁碗を重ねた状態で出土した。劃花文を持つ青磁碗を下に置き、碗と碗の間に漆器を入れていた。須恵器の皿は、この青磁碗の下から伏せた状態で出土した。また、土壇の北半部からは、鉄釘が29点出土している。概報では、青磁碗を入れた木製容器と木棺の両方の可能性を考えたが、鉄釘の出土位置に規則性が見られないことから、どちらとも確定し難い。



第72図 土 塚 4 実 測 図

土塚5 131区, 土塚4に近接している。長軸2.6m・短軸1.1m・深さ25cmの隅丸長方形の土塚である。中世の土塚の中では最大の規模を持つ。この土塚も墓の可能性が考えられる。出土遺物は、鉄釘が1点である。

土塚9 第2調査区, k32区に位置する。一辺1.4m・深さ9cmの隅丸方形の土塚である。土師器・瓦質土器・瓦器・鉄釘が出土している。

土塚10 第2調査区, j31区に位置する。長軸1.5m・短軸1.3m・深さ8cmの隅丸長方形に近い楕円形を呈する土塚である。上層から土師器・瓦質土器の細片が多量に出土している。

遺物が出土しているのはこれらの遺構であるが、その他の遺構で中世の時期に考えられるのは、土塚6～8と土塚11～15である。

土塚6～8は、土塚4・5と近接した位置にあり、これらの5基の土塚が関連性を持っていたことが考えられる。土塚11～15は、形態的に土塚9・10に類似しており、また検出位置も近いことから、土塚9・10とほぼ同時期と考えられる。

(2) 出土遺物

遺構から出土した遺物のうち、図示したものは土塚4と土塚9の遺物である。

土塚4から出土した遺物(第73図)には、青磁碗・須恵器・漆器・鉄釘がある。

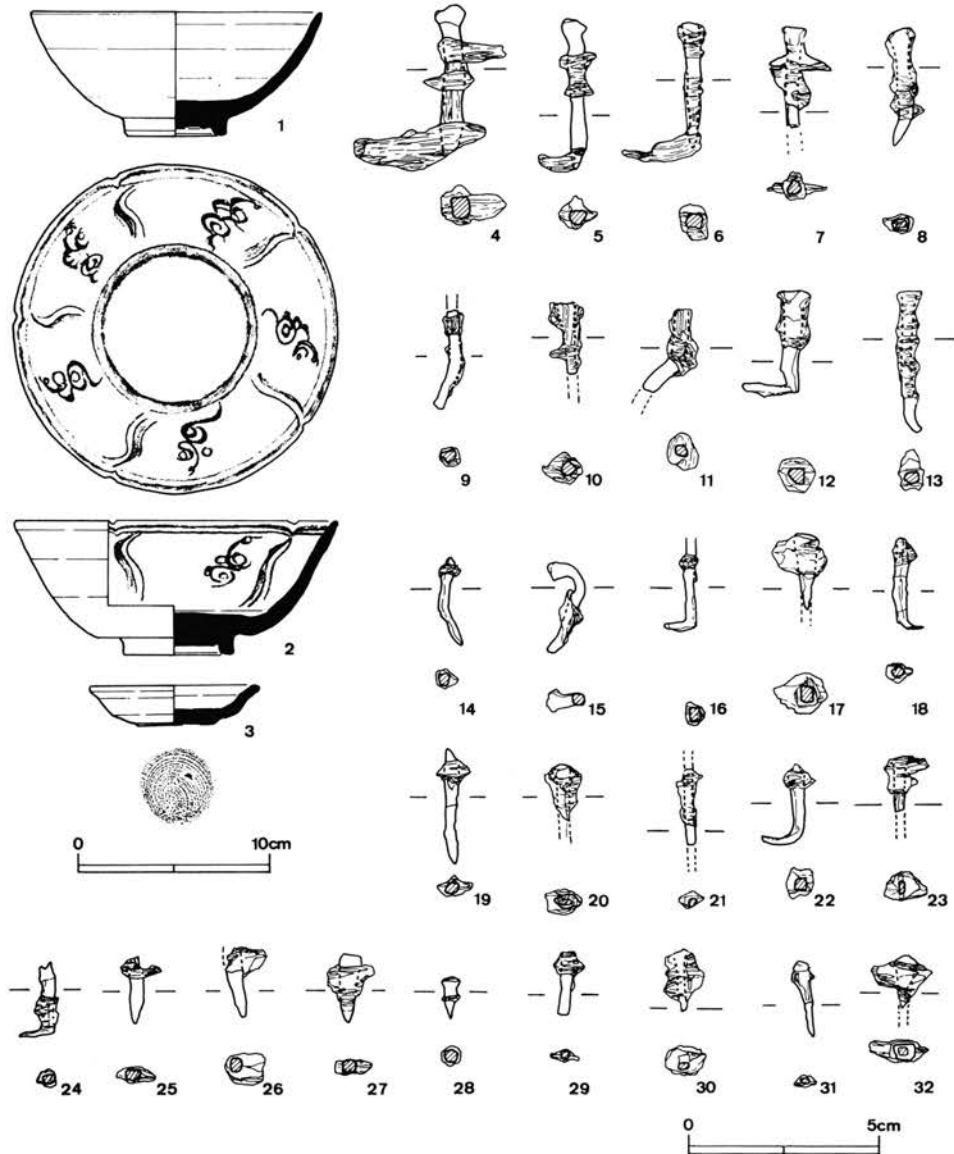
青磁碗は2点ある。1は内外面とも無文である。高台畳付と高台見込み部分は露胎となっている。横田・森田分類のI-1類(注4)に属する。2は内面を5分割し、劃花文を描いている。口縁端部にはこの文様に従い刻みを入れる。高台畳付と高台見込み部分は露胎となっ

ている。I-4b類に属する。龍泉窯系と思われる。

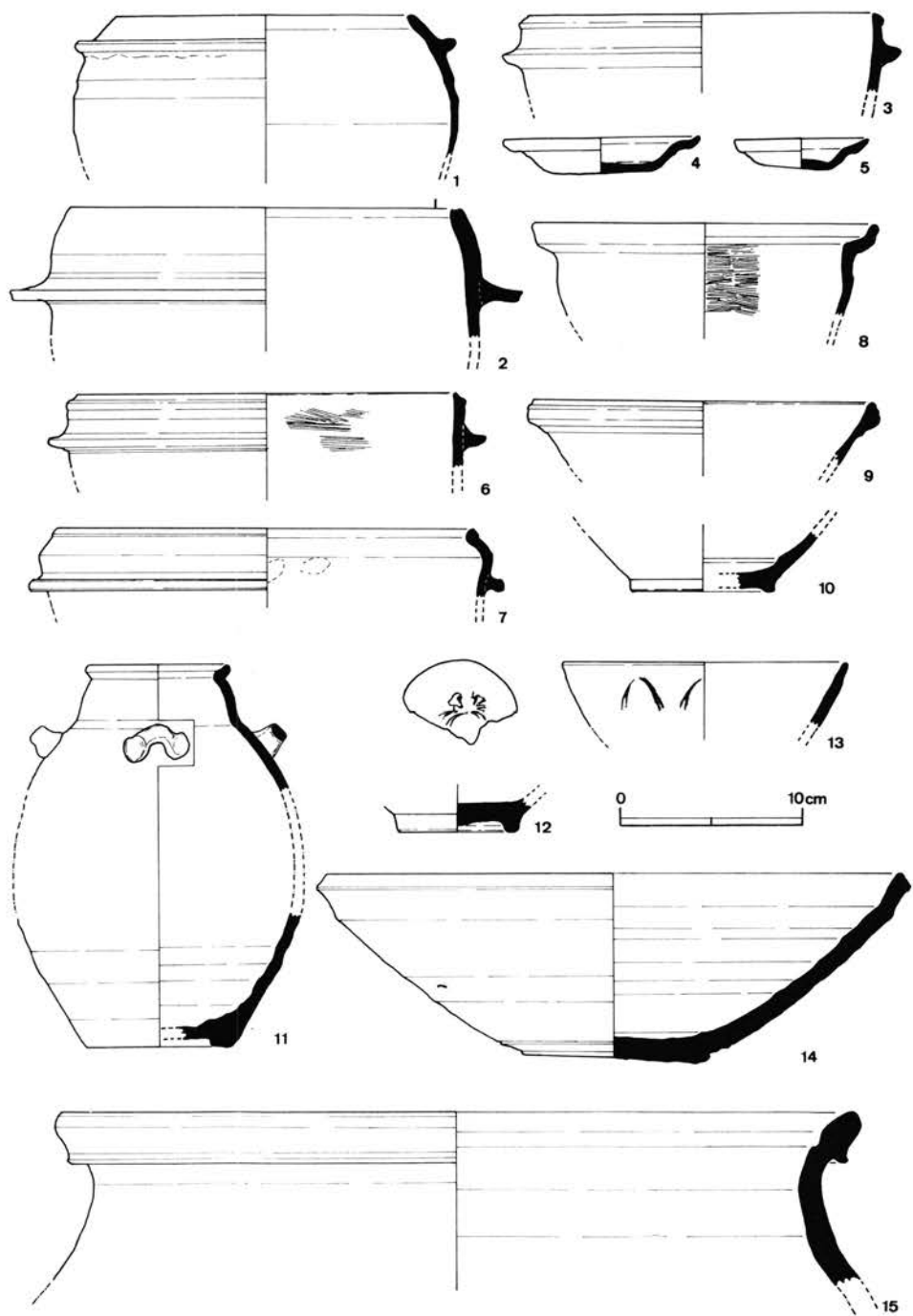
須恵器の皿は外反する口縁を持ち、口唇部は丸く収める。底部外面には糸切り痕が残る。

漆器の皿は、すでに木質部分は消失し、漆の膜のみが残る。内外面とも黒漆を塗り、その後内面にのみ赤漆を塗っている。

鉄釘は全部で29点ある。3~4cmの大型のものと、3cm以下の小型のもの2種類がある。全体的に木質をよく残すものが多い。



第73図 土塚4出土遺物実測図



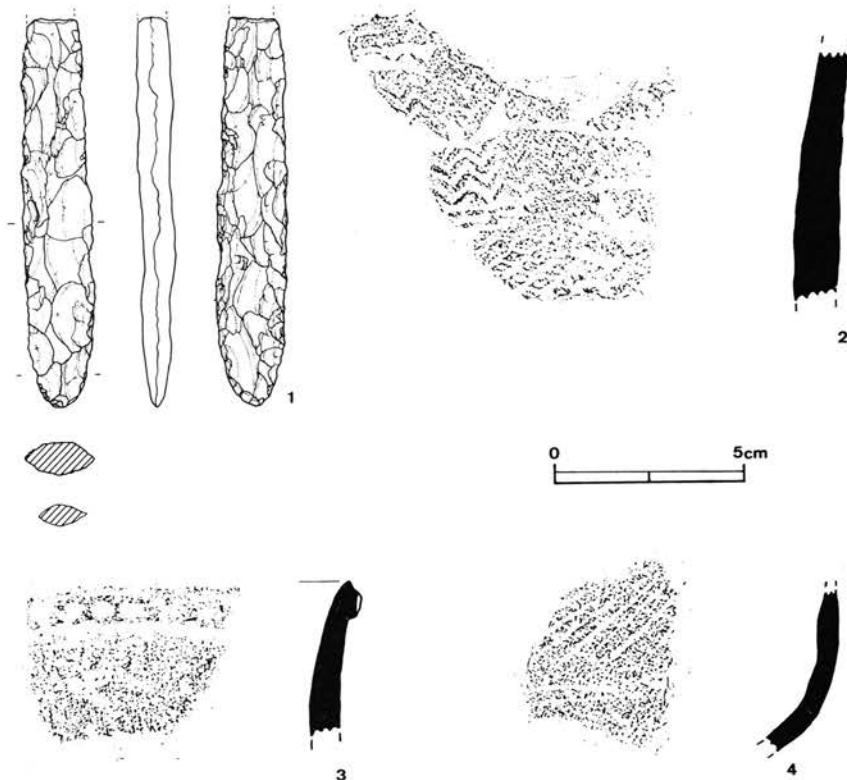
第74図 中世遺物実測図

土坑9の遺物(第74図1・2)では、瓦質土器と土師器の羽釜を图示した。1は瓦質で、内傾する口縁を持ち、肩部に幅の狭い鑿をめぐらす。菅原正明氏^(注5)の分類によると、山城E型に属する。2は土師器で、わずかに内傾する口縁を持ち、肩部に幅の狭い鑿をめぐらす。山城E型、もしくは摂津E型に属する。

このほか132区で土器の細片が集中している地点があり、その遺物が第74図3～5である。3は瓦質土器の羽釜で、直立する口縁を持ち、口縁部に凹線をもつ。口縁のすぐ下に幅の狭い鑿をめぐらす。摂津F₂型に属する。4・5は土師器の皿である。16世紀初頭の遺物と思われる。

包含層から出土した遺物(第74図6～15)には、土師器・中国製陶磁器・須恵器・信楽焼などがある。

土師器には、羽釜・甕がある。6は直立する口縁を持ち、口縁部に凹線を持つ。口縁のすぐ下に幅の狭い鑿をめぐらす。外面はヨコナデ、内面はハケ調整である。形態的には摂津F₁型に類似する。7は口縁を内方に屈曲させ、端部は上方に折り返す。屈曲部のすぐ下に幅の狭い鑿をめぐらす。大和H₁型に属する。8は甕で、受け口状の口縁を持つ。



第75図 包含層出土遺物実測図

中国製陶磁器には白磁(9・10)・青磁(11~13)がある。9・10は白磁碗で、9は玉縁状の口縁を持つものである。10は内面に段を持つ。釉は灰白色を呈する。11は青磁の四耳壺である。口縁はわずかに内湾し、端部は外方に屈曲させる。把手は粘土の帯を貼り付ける。釉色は濃緑色である。12は碗で、見込み部分にヘラ描き文がある。高台畳付と高台見込み部分は露胎となっている。13も碗で、外面には鎗蓮弁が描かれている。

14は須恵器の鉢である。やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部に凹部を持つ。東播系のものと思われる。

15は信楽焼の甕である。口縁は外反し、口縁端部を折り返す。

第4節 その他の時代の遺物 (第75図・図版第46)

縄文時代の遺物として、石器・土器がある。

石器には尖頭器(1)がある。3号墳の断ち割り(d24区)から出土したものである。先端部付近は大きく欠損しており、残存する長さ・幅・厚さはそれぞれ10.2cm・1.7cm・1cmで、重さは25gを測る。形は両面調整の木葉形である。基部はやや先細りしながら丸く成形され、断面形は厚手のレンズ状を呈する。両側縁部から中央に深く達する大きな剥離により調整加工され、縁辺にはあまり細かな調整剥離痕はみられない。石材は安山岩である。縄文時代の尖頭器は、基部に茎(舌状部)を形成しないものから、有舌尖頭器として明瞭に茎を造りだし、ついには基部にかえりを持つ最盛期を経て、そのまま小型化し鏃形に変形していく。この点からすると本例は有舌化する以前のもので、福井県鳴鹿遺跡出土のものにその類例を求めることができる^(註6)。有舌尖頭器の分布状況は、日本列島を南下するほど希薄になる傾向があり、西日本では貴重な出土例の1つとなろう。

土器は2点ある。2は押型文土器である。第1調査区d26区から出土している。楕円文と山形文の横位密接施文を行う。施文原体の長さは、楕円文では不明であるが、山形文では4.5cmである。細久保式併行期と思われる。3は深鉢型土器の口縁部である。1号墳の石室埋土から出土している。口唇部に貼り付け突帯を持ち、突帯には刻みを入れる。晩期長原式土器と思われる。

弥生時代の土器(4)は1点ある。第2調査区からの出土である。ヘラ描きによって斜格子を描き、その下に2条の沈線をめぐらす。中期のものと思われる。

第5節 小 結

西準上り遺跡から出土した遺物は、縄文時代草創期から江戸時代に至る。しかしこの中

で主体をなすのは奈良時代と鎌倉時代のものである。

奈良時代に属する遺構は土塚だけである。遺構の性格を特定できるものは少なかったが、出土した遺物には、風字硯や瓦類・土師器の高杯など、官衙や寺院などを連想させる遺物がある。

調査地内には、前述したとおり、官衙や寺院と想定できるような遺構は検出していない。このことから調査地外に目を向けると、調査地の北西には宇治郡衙推定地・岡本廃寺があり、南東には大鳳寺跡がある。

今回の調査の中で上記の遺跡との関連を示すものに川原寺式の軒丸瓦がある。上記の3遺跡の中で川原寺式の軒丸瓦が出土しているのは大鳳寺である。

大鳳寺は、調査地の南東約300mのところの位置する法起寺式伽藍配置の白鳳寺院である。昭和46年から宇治市教育委員会によって7次にわたる調査が行われ、その全容が明らかになりつつある。それによると、川原寺式軒丸瓦は創建瓦に使用されている^(注7)。平瓦は凸面に格子叩きを持つものと、縄目叩きを持つものがあり、丸瓦は凸面の整形痕をナデ消している。これらの瓦の組成は西牟上り遺跡の瓦の組成と共通する。

このような遺物の共通性は、調査地が大鳳寺と密接な関係にあったことを示唆する。さらに推測を重ねるならば、調査地付近が大鳳寺の寺地としての性格を持っていたことも考えられるのではないだろうか。

鎌倉時代になると、最低2基の土塚墓が営まれる。他の土塚については性格を特定することはできないが、土塚出土の遺物に羽釜があることから、土塚墓であったものもあるかもしれない。また、包含層出土の遺物に中国製陶磁器が多いことから、すでに削平された土塚墓もあった可能性がある。そうすると古墳の石室の中に埋葬された人々を含めると、かなり多数の人間が調査地内に埋葬されたことになる。つまり、この時代になると、調査地の斜面は墓域としての性格を与えられることになる。

これらの土塚墓の被葬者は、付近に中世集落が知られていないため不明と言わざるをえないが、かつて概報において大鳳寺との関連を想定したことがある^(注8)。しかし、杉本 宏氏は、大鳳寺出土の土器の検討から、大鳳寺の終焉を10世紀中頃としており、前述の想定は矛盾することになる。ここでは菟道地域を基盤とする集落の墓域としておき、今後の調査の進展を待ちたい。^(注9)

注1 山中敏史「陶硯関係文献目録」(『埋蔵文化財ニュース』41 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター) 1983

注2 『平城宮発掘調査報告書』Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ 奈良国立文化財研究所

注3 小池 寛・荒川 史「京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概

- 報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 横田賢二郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978
- 注5 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集) 1983
- 注6 沼 弘・増田進治「福井県鳴鹿遺跡出土の旧石器」(『福井考古』1) 1968
- 注7 杉本 宏他「大鳳寺跡第5次発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財調査概報』第7集 宇治市教育委員会) 1985
- 注8 注3文献
- 注9 杉本 宏「土器から見た宇治大鳳寺跡の終焉」(『京都考古』第34号 京都考古刊行会) 1984

付表6 遺物観察表

種類	器種	挿図番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須恵器	杯身	65-1	口径：9.8 器高：3.3	底部から直線的に立ち上がる。	ロクロナデ 底部外面回転ヘラ切り	1)緻密 2)外淡青灰色 内淡灰色 3)良好	30%残 土塚1
	杯身	65-3	口径：15.4 器高：4.5	底部から直線的に立ち上がる。	ロクロナデ 底部外面未調整	1)緻密 2)青灰色 3)良好	30%残 土塚1
	鉢	65-7	口径：19.8 器高：9.8	体部上部はやや内湾し1条の沈線がめぐる。	外面体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ 内面板状工具のナデ	1)密 2)淡灰色 3)良好	60%残 土塚1
	平瓶	65-10	残高：7.4	頸部のつけ根に1条の沈線がめぐり体部は扁平で稜を有す。	ロクロナデ	1)密 2)青灰色 3)良好	50%残 土塚1
土師器	高杯	65-12	口径：30.5	杯部内面には暗文を持つ、脚部は9つの面を持つ。	ロクロナデ 外面体部はヘラ磨き 脚部ヘラケズリ	1)密 2)明褐色 3)良好	50%残 土塚1
	甕	65-13	口径：22.2	口縁部は外反し端部は肥厚する。頸部に接合痕を残す。	口縁部外面タタキ状文様を施す。 体部不定方向のナデ	1)密 2)淡赤褐色 3)良好	5%残 土塚1
須恵器	杯蓋	67-1	口径：17.0	平坦な天井部を持ち、口縁端部はわずかに下方に屈曲させる。	体部ロクロナデ 天井部外面ヘラケズリ 内面不定方向ナデ	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	70%残 土塚2
	杯身	67-7	口径：14.0 器高：3.35	貼り付け高台を有し口縁部はやや外湾する。	ロクロナデ	1)密 2)外淡青灰色 内淡灰色 3)良好	20%残 土塚2
	長頸壺	67-9	口径：10.6	口縁部は大きく外反し頸部内面にしぼり痕がみられる。	ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)良好	30%残 土塚2
	長頸壺	67-10	高台径：7.7	肩部は直角に屈曲し、ハの字状に開く高台を有する。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡灰色 3)やや軟	50%残 土塚2
	鉢	67-13	底径：10.0	底部は水平方向に張り出し底部外面にはヘラ状工具による刺突痕がある。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡黄灰色 3)やや軟	20%残 土塚2

種類	器種	挿図 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
須 恵 器	鉢	67-14	口径：46.1 器高：15.7	体部中央に把手を有する。底部は平底。	ロクロナデ 底部と体部の境の 外面はヘラケズリ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	30%残 土坑2
	小壺	67-18	高台径：5.0	底部は著しく肥厚し 体部は垂直に立ち上 がる。	ロクロナデ 底部と体部の境外 面にヘラケズリ	1)緻密 2)暗青灰色 3)良好	10%残 土坑2
	甕	68-1	口径：17.2 器高：48.3	口縁部は外反し端部 は上方に屈曲させる。	内面青海波文タタ キ 外面縦方向タタキ の後カキ目	1)密 2)淡黄灰色 3)やや軟	40%残 土坑2
土 師 器	椀	68-4	底径：11.6	体部内面に右上りの 暗文を施し平坦な底 部から直線的に立ち 上がる。	ヘラ状工具による ナデ 外面底部ヘラケズ リ	1)密 2)褐色 3)良好	30%残 土坑2
	甕	68-8	口径：11.6	口縁部は大きく外反 する。	ロクロナデ	1)やや粗 2)赤褐色 3)良好	10%残 土坑2
	甕	68-9	口径：16.0	やや内湾ぎみの口縁 を持つ。	口縁部内面・体部 外面ハケ目 体部 内面はヘラケズリ	1)密 2)暗赤褐色 3)良	30%残 土坑2
	甕	68-10	口径：30.2	口縁部は外反し端部 は上方に屈曲させる。	口縁部・頸部ロク ロナデ 体部外面 ハケ目 体部内面 不定方向ナデ	1)密 2)淡赤褐色 3)良好	10%残 土坑2
須 恵 器	杯蓋	69-1	口径：15.2	口縁端部は短く内傾 気味に屈曲し、天井 部は平坦面をもつ。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡黄褐色 3)やや軟	20%残 包含層
	杯身	69-3	口径：14.2 器高：3.2	貼り付け高台を有し 体部は直線的に立ち あがる。	ロクロナデ 底部不定方向ナデ	1)緻密 2)青灰色 3)良好	20%残 包含層
	鉢	69-5	口径：29.0	口縁部は外反し体部 はやや肩張りである。	ロクロナデ 1か所ヘラ痕を残 す。	1)密 2)淡黄褐色 3)やや不良	5%残 包含層
緑釉陶器	椀	69-7	高台径：8.2	貼り付け高台を有し 底部は平坦面をもつ。	釉を施す ロクロ成形	1)緻密 2)黄褐色 3)堅緻	10%残 包含層
灰釉陶器	椀	69-11	高台径：8.9	貼り付け高台を有す る。	ロクロナデ	1)緻密 2)淡灰色 3)良好	10%残 包含層
須恵器	鉢	69-13	口径：19.5	口縁部外面につまみ 出しによる突帯をめぐ らす。	ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)良好	10%残 包含層
青 磁	椀	72-1	口径：15.4 器高：6.45	ゆるやかに内湾する 口縁部を持つ。	釉を施す。 露胎部は赤褐色で 中程度の環元炎を受 ける。	1)緻密 2)暗緑色 3)堅緻	100% 土坑4
	椀	72-2	口径：17.2 器高：7.0	内面を5つに区画し 劃花文を施す。口縁 に輪花を持つ。	釉を施す 外面体部は指ナデ 調整	1)緻密 2)緑色 3)堅緻	100% 土坑4
須恵器	灯明 皿	72-3	口径：8.8 器高：2.1	なだらかに立ちあがり 口縁部は外方に屈 曲する。	ロクロナデ 底部回転糸切り	1)緻密 2)淡青灰色 3)良好	100% 土坑4
瓦質土器	羽釜	73-1	口径：15.8	貼り付けのツバを有 し口縁部から体部に かけてなだらかに内 湾する。	ロクロナデ	1)密 2)淡灰色 3)やや軟	30%残 包含層

種類	器種	挿図 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	1)胎土2)色調3)焼成	備考
土 師 器	羽釜	73-2	口径：21.6	貼り付けのツバを有する口縁部は内湾する。	ロクロナデ	1)やや粗 2)淡赤褐色 3)やや軟	10%残 包含層
	羽釜	73-7	口径：22.9	貼り付けのツバを有し口縁部は大きく内傾し沈線を施す。	ロクロナデ	1)やや粗 2)淡黄褐色 3)良好	10%残 包含層
白 磁	椀	73-9	口径：18.8	口縁部は肥厚し体部は直線的にのびる。	0.2~0.3mmのうすい釉薬を施す。	1)緻密 2)灰白色 3)良好	20%残 包含層
青 磁	青磁 四耳 壺	73-11	口径：7.4	肩部に把手を有する。口縁は内傾し、口縁端部は外方に屈曲する。	ロクロナデ	1)緻密 2)青緑色 3)良好	20%残 包含層
	椀	73-13	口径：15.6	外面体部に鑄蓮弁をヘラ描きする。	釉薬の厚みは0.7mm程度	1)緻密 2)暗緑灰色 3)良好	10%残 包含層
須 恵 器	すり鉢	73-14	口径：31.7 器高：10.4	体部はやや内湾し口縁端部を肥厚し底部付近に沈線をめぐらす。	ロクロナデ 青海波文状タタキ痕が残る。	1)緻密 2)暗青灰色 3)堅緻	30%残 包含層
陶 器	甗	73-15	口径：43.6	口縁端部は著しく肥厚し口縁部内面に1条の沈線をめぐらす。	ロクロナデ	1)粗 2)淡黄褐色 3)良好	10%残 包含層 常滑系

第6章 総 括

第1節 菟道地域における古墳時代から奈良時代の変遷

宇治川東岸地域、特に菟道地域は、京滋バイパス関係遺跡の調査や大鳳寺の調査など、宇治市域の中でも最も遺跡の調査が行われた地域である。しかし、実態の不明な遺跡も多く、弥生時代・古墳時代の集落はその存在すら知られていない。このような状況のなか、ここでは現在知り得た知見をもとに、菟道地域の変遷を考えてみたい。

(1) 菟道地域の基本認識

歴史的な変遷を考える前に、まず生産基盤について考えておきたい。

太閤堤築造以前の宇治川本流は、現在の一里塚付近まで大きく入りこんでおり、現在の平野部よりいくぶん狭くなる。このことを踏まえて、さらに明治30年の仮製地図などを参考にして菟道地域の可耕地を推測すると、三室の谷筋と標高20m以下の地帯がそれにあたると思われる。これに当期中洲であった槇島南部も重要な生産基盤であったと思われるが、水害を受けやすい地域でもあり、安定した食料生産は望めなかったであろう。

ちなみに木幡地域の生産基盤をみてみると、山科川と宇治川の合流点付近は低湿地帯となっており、主な可耕地は槇島北部と岡屋周辺のみであったろう。この木幡地域と菟道地域を合わせた宇治川東岸地域の生産力は、可耕地の面積に限って見てみると、久世郡等と比較した場合劣勢であることがわかる。

(2) 菟道地域の変遷

菟道地域において、現在前期古墳は知られていない。周辺においては、伏見区桃山にある黄金塚古墳や、宇治市広野町の一本松古墳が前期古墳として知られている。つまり、宇治郡域においては、今後発見される可能性は否定できないが、前期古墳が見られない。このことは前項で述べた生産力の弱さに起因するのではないだろうか。

古墳時代中期になると、菟道地域南部の丘陵上に二子山1・2号墳が造られる。この古墳群は、前方後円墳という形態はとらないものの、仿製鏡や甲冑類・馬具などが出土しており、大きな勢力を持つ首長の墓であることがわかる。この時期は久世郡域にある久津川古墳群の最盛期であり、久津川車塚などの大型の前方後円墳が築造される。つまり二子山古墳群の被葬者は、墳形から判断すると、久津川車塚等の前方後円墳を築造した集団に準ずる勢力を持ったものと位置付けることができる。

古墳時代後期になると、木幡地域に二子塚古墳が築造され、木幡古墳群が形成される。二子塚古墳は後期古墳としては山城最大の前方後円墳であり、木幡古墳群は南山城では最

も規模の大きい群集墳である。しかし、菟道地域では単上り古墳群以外、群集墳が形成されない。

さて、この単上り古墳群に追葬が行われているころ、古墳群の東方の丘陵に単上り瓦窯が営まれる。単上り瓦窯が成立する背景については、杉本^(注1) 宏氏や直木孝次郎氏^(注2)が宇治周辺の氏族の状況から考察されている。つまり、単上り瓦窯の瓦と幡枝瓦窯の瓦の同範関係から、単上り瓦窯と秦氏とが深い関係にあることを指摘し、この秦氏を勢力下においていた山背大兄王と蘇我蝦夷が血縁関係にあることから、単上り瓦窯の瓦を豊浦寺造営に際し使用する可能性があったとしている。

この単上り瓦窯について古墳の動向からみってみる。単上り瓦窯の調査の際、工房と思われる建物群の中にSX21と呼んでいる小型の横穴式石室を検出している^(注3)。この石室の形態は単上り古墳群のものとは異なり、また立地している地点も単上り古墳群の谷側の別の谷筋である。時期は単上り瓦窯の編年の第4段階にあたるものと思われ、単上り古墳群ではすでに古墳の築造を止めている段階である。このようにみても、群構成の面では、SX21と単上り古墳群とは全く別のグループとすることができる。SX21は立地・時期の点からも単上り瓦窯と深い関係を持つと思われる。単上り古墳群が菟道地域を基盤とする集団の墓とした場合、単上り瓦窯の集団と菟道地域を基盤とした集団は別の集団であったことが類推できる。

単上り瓦窯がその終焉を迎える頃、宇治橋断碑によると、宇治川に宇治橋が架橋される。宇治橋架橋からやや遅れて、大鳳寺が創建される。時間的なつながりから見れば、大鳳寺の創建は、単上り1号墳の最後の追葬が行われた時期、もしくはその直後である。つまり、7世紀中葉のわずか30年程の間に、菟道地域においては、宇治橋の架橋、単上り1号墳の最後の追葬、大鳳寺の創建といったことが行われているのである。これらのことが、ひとつの集団・氏族によって行われたとは考えられないが、それぞれが深く関係し合っていたことは推測できる。

古墳時代から奈良時代の菟道地域には、強力な生産基盤があったとは考えられないのにもかかわらず、古墳時代中期から、大きな勢力を持った首長や氏族の存在を推測させる遺跡が出現する。この背景には、第3章でも触れたが、菟道地域が宇治川水運と、北陸方面の陸路を結ぶ要衝の地にあることが考えられ、宇治橋架橋後はさらにその重要性を増したと思われる。

注1 杉本 宏他「単上り瓦窯跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983

注2 直木孝次郎「歴史の舞台 ⑤豊浦寺と古瓦」(『明日香風』第5号 飛鳥保存財団) 1982

注3 注1文献に同じ

第2節 生産遺跡に伴う建物跡について—2・3の類例を中心にして—

今回報告した隼上り遺跡は、掘立柱建物跡群を主軸線の方向から時期的にⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に分け、Ⅰ期からⅡ期にかけてが隼上り瓦窯跡と深く関係し、Ⅲ期が大鳳寺跡との関連で成立したことを述べた。また、Ⅰ期・Ⅱ期の掘立柱建物跡群の性格として、工人集団の集落と倉庫を想定した。ここでは、生産遺跡、特に、須恵器窯・瓦窯に伴う建物跡について類例をあげ、その傾向について述べたい。須恵器窯・瓦窯はその導入以前の土器生産体制とは根本的に異なり、政治的な背景を有し、また、工人集団を維持する必要があるため、集落は不可欠な要素として捉えるべきものである。しかし、全国的に概観した場合、窯跡の発見数に比べて、それに伴う集落・倉庫の発見数は僅少である。その原因には、発掘調査の面積自体が開発区域のみであることと大きく関わっているが、一方、確認された竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が窯跡と関連することを明確にできない場合も多い。ここで取り上げる遺跡は窯跡と住居・倉庫が発掘調査によって確認できたものや性格は不明ではあるが、窯跡との位置関係から当然関連があるものの一部に限って、概観していきたい。

^(注1) 小杉流通業務団地内遺跡群(富山県小杉町青井谷・同大門町水戸田地内)

金山丘陵の縁辺部に位置し、標高は20mから35mである。発掘調査は昭和53年から同56年に及び先土器時代から中世までの複合遺跡であることが確認されている。

発掘調査によりNo.7遺跡では須恵器窯跡を6基確認しており、^(注2) 陶邑古窯址群のTK209型式に比定できる。これは、陶邑古窯址群の第Ⅱ面期にあたり、地方窯の成立以降の増加時期でもある。一方、集落はNo.6遺跡の場合は、須恵器窯とほぼ同時期に成立したと考えられる竪穴式住居跡・掘立柱建物跡を14棟確認し、No.7遺跡では竪穴式住居跡23棟・掘立柱建物跡7棟を確認している。これらの竪穴式住居跡・掘立柱建物跡の成立年代からNo.6遺跡からNo.7遺跡に集落が移動した可能性が指摘されている。また、奈良時代においてもNo.18遺跡A地区、No.20遺跡、No.16遺跡で住居跡が確認されており、これらも須恵器窯に伴う集落として認識されている。地方窯の増加時期から奈良時代にいたる集落として存続年代が長いこともあわせて良好な資料を提供したといえる。この遺跡群が所在する丘陵には、東方に下条川の上流が走り、西方には和田川が走っている。また、北方には平野部が広がり、窯・集落・古墳を築くには好条件である。焼成した製品を搬出する段階では、両河川を利用することによって極めて効率の良い作業が可能であったと考えられる。更に、燃料としての木材も当時の自然環境を復元できないものの、現状から考えると容易に採取できたと考えられる。

^(注3)
陶邑・深田遺跡(大阪府堺市大庭寺町)

泉北丘陵一帯に分布する窯跡群は、一般に「陶邑古窯址群」と呼ばれ、全国的にみても最大かつ最古の窯跡群である。日本における窯の操業開始時期については、『日本書紀』雄略七年是歳条の記述を根拠に5世紀後半とする説と、朝鮮半島の瓦質土器・陶質土器を考慮し、編年の観点とそれらの遺物との共伴関係から5世紀中葉を前後する説等、数多くの論説がある。窯跡は陶器山・高蔵寺地区等の6地区に総計700基近くが密集している。操業期間は5世紀から10世紀にまで及ぶ。

これらの窯跡に伴う集落・倉庫は文献でみられるものの、実際の検出例は少なく、ここに記述する深田遺跡は、その中でも良好な資料として高く評価されている。報告書によれば、検出した遺構は、掘立柱建物跡3～4棟・柵(杭)列4・溝2・土壇2・井戸2等で、掘立柱建物跡の柱穴内には礎板と考えてもよい木片も出土している。また、掘立柱建物跡は少なくとも3回の建て替えがあったと考えられる。出土遺物には熔着したもの等が多く見られ、そのことから製品として搬出可能なものと製品にならないものに荷分けした場所である可能性を指摘しておられる。^(注4)この遺跡の立地条件は陶邑の中心部に位置するが、石津川氾濫原の泥炭層を基層としており、掘立柱建物跡の成立に関しては必ずしも好条件とはいえない。その条件下で掘立柱建物跡を建設せしめた要因を石津川の水運を利用した製品搬出との関連で解釈されている。陶邑古窯址群に伴う他の建物跡は、積極的に肯定する根拠がないためあまり知られていないが、高蔵寺地区には前田川、富蔵地区には先述した深田遺跡と関係する石津川、光明池・谷山池地区には和田川・槇尾川・松尾川が各々の谷筋に走っており、深田遺跡同様、製品の搬出に関係した遺跡が河川毎に存在する可能性は極めて高いと考えてよい。^(注5)ただ、工人集団の集落は、現在のところ確認されていない。なお、その後の考察で「屯倉」を積極的に論じておられる。^(注6)

^(注7)
上人ヶ平遺跡(京都府木津町市坂)

木津東部丘陵の南西隅に位置し、周辺には市坂古墳群や歌姫瓦窯等がある。^(注8)特に、平城宮大膳職に瓦を供給していた市坂瓦窯の存在は、この地の重要性を論じる場合には不可欠な要素であると言える。計7か所に試掘坑を設定し、11番地・12番地・13番地において、溝・柱穴・柵列・瓦片を多く含んだ落ち込み等を検出した。掘立柱建物跡は2間(5.5m)×2間(4.8m)の規模を有し、建物跡の東辺及び北西隅の柱穴から平瓦・丸瓦・軒丸瓦が出土している。また、東西に走る溝(SD01)からは整理箱8箱分の瓦を検出しており、特に鬼瓦は平城京Ⅳ式Bと同範である可能性が指摘されている。これらの遺物が同台地上で使用されたことは考えにくく、市坂瓦窯との関連で考えなければならない。位置的に見た場合、市坂瓦窯に隣接すること等から瓦窯に伴う工房跡・倉庫の可能性が指摘されている。

平城宮の瓦を焼成した瓦窯には鹿背山瓦窯跡・梅谷瓦窯跡等があり、平城宮造営にあたり、当地が瓦生産の中心地の一つとして機能していたことがわかる。

^(注9)
音如ヶ谷瓦窯跡(京都府木津町音乗谷)

奈良山丘陵の東側斜面に位置し、標高49～52mを測る。1967年に本格的な発掘調査が行われ、ロストル式の平窯であることが確認された。その後の調査により4基の窯跡・掘立柱建物跡5棟が検出されている。出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・塼等があり、灰原から多量の土師器と少量の須恵器が出土している。特に軒丸瓦の型式から平城宮瓦Ⅱ～Ⅲ期に属することが判明した。この瓦窯と歌姫瓦窯・歌姫西瓦窯で生産される瓦が同範関係にあることによって、同一丘陵に所在する瓦窯の変遷を明確にできるだけではなく、瓦工人集団の移動を考える上で極めて重要な発見であると言える。確認された掘立柱建物跡は5棟ではあるが、柱穴の数は100以上になり、単純に考えても掘立柱建物跡はそれ以上の数になる。これらの建物跡の性格については作業場あるいは資材置場の可能性を指摘しておられ、集落は丘陵の更に高い部分に推定しておられる。瓦窯の東方には山松川が木津川に向かって流れ込んでおり、製品搬出に有効な条件である。また、反対側の丘陵に位置する市坂瓦窯跡や歌姫瓦窯跡も鹿川に隣接した位置に所在し、搬出作業の条件としては良好と言える。

以上のように、4例しか概観しえなかったが、これらの遺跡から共通点を抽出し、その傾向について記述したい。なお、4例は特に重要なものとして取り上げたため、特殊な要素を一般化して記述した部分がある。今後の調査によって同じ要素をもった遺跡が確認される可能性が高く、あえてそれらの共通要素を抽出した。

(1)瓦窯に伴う掘立柱建物跡の立地条件は、瓦窯の位置に左右されることは言うまでもないが、その性格については、瓦窯に伴う集落・製品を一時的に保管する倉庫等が考えられる。しかし、陶邑古窯址群に隣接した深田遺跡では、製品としての価値を持つか持たないかを選別するための作業場としての掘立柱建物跡群と言う性格付けがなされている。その根拠として熔着したりひびわれた製品の占める割合が出土した遺物全体から考えると極めて高いことがあげられている。一般的に倉庫群と推定する場合においても、この観点から考えることは、具体的な掘立柱建物跡の性格を考える際に一つの根拠になりうる。隼上り遺跡^(注10)の出土遺物の中にも熔着した須恵器が散見できるが、検出した掘立柱建物跡群の性格の一端を表現しているとも解釈できる。なお、瓦の場合についても同様な見解を導き出せるとは考えられるものの、焼成時に破損したと言う明確な証明ができず、あくまでも可能性を指摘するにとどめたい。

(2)基本的に製品を焼成する窯の場合は、材料としての粘土・資材としての材木等が周辺

に存在することが重要ではあるが、供給に際して製品の安全かつ効率的な運搬作業も重要である。多くの窯跡の立地条件が河川に隣接した丘陵に位置する要因として、水運との関連は重要である。上述した集落の立地条件は、概観すると丘陵上に位置しており、河川に関連した自然災害から免れるための配慮が読み取れるが、一方、製品を選別するための作業を行う掘立柱建物跡にはこのような配慮がなく、むしろ、搬出作業の効率を重視した立地が見られる。これらから考えると、群集する掘立柱建物跡においても一時保管するための倉庫と、保管には関係がなく主に搬出を意識した建物跡の2者に分類することも可能である。隼上り遺跡の場合は、丘陵南方に大鳳寺川が流れてはいるが、川幅は狭く、搬出作業に適していると考えられることは困難である。また、この遺跡から宇治川までの距離は600m前後を測り、効率的な搬出準備が必要になることから考えて、両側面を有していたと考えられる。

(3)集落の立地条件については先述したが、生活のみを考慮した場合の条件と隼上り遺跡のように倉庫管理と一体となった場合とでは若干の差異が生ずる。当遺跡の場合は日照の関係等も考慮されており、小杉流通業務団地内遺跡群の例とは細かい点で相違点がある。

以上、4例のみをあげて傾向について記したが、特殊例を一般化した点もある。今後、窯に伴う掘立柱建物跡の位置関係や地形を考慮した立地条件等を詳細に観察することにより、漠然とした性格付けから一歩進み、具体的な様相について明確にできると考えられる。また、窯跡の規模・基数等と掘立柱建物跡を中心とした集落の規模の有機的な関係についても明確にできると考えている。

- 注1 上野 章・狩野 睦・池野正男・宮田進一・久々忠義『小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会 1982.3
- 注2 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966
- 注3 『陶邑・深田』大阪府文化財調査抄報 第二輯 大阪府教育委員会 1978
- 注4 一連の考察については、中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981 所収の「和泉陶邑窯の経営」によった。
- 注5 和田川・石津川に挟まれた野々井遺跡の存在も注目できる。
- 注6 注4に同じ。
- 注7 松井忠春・小山雅人「木津地区所在遺跡(3)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第17冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注8 『木津町史 史料編I』木津町 1984によった。
- 注9 吉田恵二「音如ヶ谷瓦窯の調査」(『奈良国立文化財研究所年報1974』奈良国立文化財研究所) 1974
- 注10 柱穴内からの資料に比較的多く見られた。

おわりに

京滋バイパス建設工事に伴う隼上り遺跡・隼上り古墳群・西隼上り遺跡の発掘調査は、昭和58年10月20日からの第1次調査に始まり、昭和60年11月21日の第3次調査終了までの三か年に及ぶ日数を重ねて実施した。その期間に検出した諸遺跡・諸遺物について事実報告を記し、一側面に対してのみ総括しまとめとした。ここで改めて調査の成果を要約し、今後の指針としたい。

まず隼上り古墳群に関してである。調査着手前から2基の古墳の存在が知られていたが、すでに後世の開墾で墳丘部が削平され丘陵の緩斜面の一部と化しその存在すら想起できなかった3号墳が新たに検出されたことは幸いであった。これら三基の横穴式石室を内部主体とする円墳は、6世紀後半から7世紀前半までに逐次築造された。石室は大形→小形へと変化し、通例の後期群集墳の様相と軌を一にしている。古墳は上部を大きく破壊され天井石は言うに及ばず上部側石ですら消失していたにも拘らず石室内部からは豊富な遺物が出土した。出土遺物には各種の須恵器・土師器、刀・鏃などの鉄製品、馬具類、金・銀製の耳環などがあり、土器の年代差から数回にわたって追葬されたことは明らかである。遺物の内で注目すべきは特殊扁壺と呼ばれる須恵器である。使用目的さえ明確でないこの種の土器は全国的にもわずかに本例を含めて6例にすぎない。その分布状態は密集ではなく散在的であり、こうした状況はこの遺物が有する特殊性を如実に示していると言える。今後は用途も含め資料の増加をまって言及したいと考える。

次に隼上り遺跡についてである。30棟にも及ぶ掘立柱建物跡が検出され、少なくとも3期にわたって漸次棟数を増してより集落化していくことが具体的に把握できた。ただしこれら掘立柱建物各々が住居かあるいは倉庫などのような建物かは実証できなかった。柱穴などから出土した土器からみて、掘立柱建物群は飛鳥時代～奈良時代に属する。出土遺物中、須恵器に隼上り瓦窯産と同定できる一群があり、瓦においても素弁八葉蓮華文軒丸瓦は隼上り瓦窯出土軒丸瓦のD類に属し同文関係にある。さらに焼土塚で採取された白色粘土をも考慮する限り、本遺跡は隼上り瓦窯と極めて深い関係があったと推定せざるを得ない。試みとして隼上り瓦窯跡・隼上り遺跡出土の瓦・須恵器及び白色粘土をエネルギー分散型蛍光X線分析法を用いて胎土分析を行った。

西隼上り遺跡にあっては、発掘当初弥生時代の遺構・遺物が検出されるものと思われたが、意に反して奈良時代の土塚や中世土塚墓が確認された。同土塚からは瓦類とともに須恵質の風字硯が出土し、包含層中からは川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦が採取された。これらは調査地南隣りに所在する大鳳寺跡と何らかの関連が推定でき、大鳳寺の寺域を想

定する際に考慮されるべき事柄と考えている。

平安時代以降江戸時代前期までは本地域はほとんど居住地として利用されることなく、むしろ墓地的色彩を濃くする。隼上り古墳群にみる横穴式石室を利用した例、隼上り遺跡の三足盤・刀子・玉などを副葬した土塚墓、西隼上り遺跡の青磁碗などを埋納した土塚墓などがある。副葬形態に統一性がないが、各々被葬者の地位などによる性格や造墓背景の差違が反映されているものとも理解できよう。

18世紀以降になると、宇治地域で開始される茶栽培ともからんで隼上り遺跡で建物が築造されるに至った。排水施設の完備や瀬戸窯の名品から経済的な富裕性がみてとれる。

こうした調査の成果を羅列すれば枚挙にいとまない。各々に対し十分な分析・検討を通して考察すべきであり多くの方々からの指導・助言を賜わりながらも総括することのみで筆を擱かねばならないことはひとえに筆者等の力量不足と言わざるを得ない。本書出版をもってその任務を全うしたとは到底考えてはおらず、今後の課題として引き続いて努力していくつもりである。

なお、考古学的側面を補う目的で実施した土器などの胎土分析にあたり、奈良教育大学の長友恒人・山本健司の両先生の手を煩わらせ、玉稿まで頂いた。篤く御礼申し上げます。

また、消滅すべき運命にあった隼上り古墳群中、最も保存状態が良好であった3号墳が宇治市教育委員会の積極的な努力によって宇治市歴史資料館前の公園の一部に移築保存され公開展示されている。惜しまずに努力された宇治市教育委員会の方々に謝意を表したい。

まがりなりにも報告書のかたちにとまらがついたのは、多くの人々の御協力のたまものであり、発掘から整理まで色々と協力をしていただいた学生諸氏、とりわけ石田真一・小泉裕司・北埜善史の三君には頭が下がる思いである。

本報文には色々と不備な点も多いと思うが、全遺構を網羅し報告したことで、以って諸賢兄の御寛恕を請う。

〈付 載〉 隼上り遺跡・隼上り瓦窯跡出土遺物の胎土分析について

＝ 分析結果とその解釈 ＝

長友 恒人・山本 健司・小池 寛

1. はじめに

隼上り遺跡の掘立柱建物跡は、小結でも述べたように隼上り瓦窯跡^(注1)と大鳳寺跡^(注2)との関連で成立した集落および倉庫である。その根拠には、(1)集落は両遺跡のほぼ中央に位置すること。(2)隼上り遺跡から出土する須恵器の型式が両遺跡のものと極めて酷似すること。(3)出土した須恵器とともに隼上り瓦窯跡で焼成された素弁八葉蓮華文軒丸瓦や外面の叩きをナデ消し、あるいはヘラ削りで調整した丸瓦・平瓦が出土し、また、大鳳寺跡から出土する四重弧文軒平瓦、正格子・斜格子・縄目叩きを有する丸瓦・平瓦が出土することなどがあげられる。^(注3)これらの根拠は、遺跡の立地条件や遺物の観察から客観的なものとして認められる。今回の胎土分析の目的は二つあり、一つには上述の根拠に化学的方法を用いて、客観性をもたせるためであり、もう一つは、隼上り瓦窯跡の土器・瓦、隼上り遺跡の土器・瓦と白色粘土の関連を解明することにより、瓦窯および工房跡から離れた集落・倉庫においても、製品に不可欠である粘土の備蓄が行われたことについて考察する点にある。

考古資料についての化学的な方法としては、胎土分析をはじめ多くの方法が行われ、また、緻密な研究論文も数多く発表されている。^(注4)しかし、発掘調査報告書においては分析結果が単に結果として記載されることが多く、十分生かされていない場合がある。その原因は方法論の根本的な相違等が考えられ、一つの根拠とするには限界があることを示すものであるが、分析結果を盲信することなく、積極的かつ慎重に結果の中から必要なデータを抽出する作業は極めて重要なことであり、また、考古学の方法論だけでは決定できないことについてなんらかの基準を与えることができる。このような認識を基軸として今回の報告文に連名で記述することに関係者が同意し分担執筆を行った。

分析にあたり多忙な中、奈良教育大学 長友恒人・山本健司(分析当時)両氏には、数回にわたり討議する機会^(注5)を下さり、また、結果についての執筆もお願いした。記して謝意を表したい。また、隼上り瓦窯跡出土の試料提供を快諾下された宇治市教育委員会杉本宏氏に深謝する次第である。なお、本章の編集は小池が行い、各文責については節末に記した。

焼土塚についての事実関係は本冊66ページに記述しており、参照願いたい。

(小池 寛)

2. 分析試料について

今回の分析に供した資料は、隼上り瓦窯跡の須恵器・瓦が10点、隼上り遺跡の須恵器・瓦が7点、それに加え白色粘土塊8点である。これらの遺物は、基本的には型式毎に分析できるよう配慮したが、すべてについて網羅することは不可能であり、年代設定ができる資料を中心にした。^(注6)隼上り瓦窯跡の資料の場合は、その報告書の中で土器の型式を第1段階から第4段階まで設定しており、第1段階は飛鳥Ⅰ・陶邑第Ⅱ型式^(注7)第5段階^(注8)、第2段階は陶邑古窯址群TK217号窯^(注9)、第3段階は飛鳥Ⅱ^(注10)、第4段階は飛鳥Ⅱに各々時期が比定されている。各時期についての年代は省略するが、資料的な面では出土した個体数に限界があり、一部においては希薄にならざるを得なかった段階のものである。一方、瓦については、須恵器程細かい時期設定をせず、報告書の中で分類された平瓦の凸面成形^(注11)2種を中心に分析資料を供した。なお、凹面は布目圧痕があるため、主に凸面により選択した。隼上り遺跡の場合は、本文でも記述したように須恵器の出土点数が限られており、また、残存状態が極めて悪いため、基本的な部分では隼上り瓦窯跡の型式分類に準拠したが、十分対応させられなかったものが多い。瓦については、遺跡の掘立柱建物跡が白鳳期(周辺の遺跡で言えば大鳳寺跡が該当する)に入るものが大半であり、また、大鳳寺跡^(注12)で出土する平瓦凸面が格子目叩き・縄目叩きで成形したものがあることから、それらの瓦を除外し、なおかつ隼上り瓦窯跡の平瓦の成形技法の特徴を有するものを選択した。隼上り遺跡で検出した白色粘土は、検出した時点で他の遺物が混入しないようビニールで覆い風雨に晒さないよう十分配慮し、凶化等の一連の作業の終了をもって取り上げた。

以上が分析に供した資料の概観である。分析試料の点数が少ないことは長友・山本両氏が指摘するところでもあるが、いかなる遺跡においても資料的価値の高い遺物が多量に出土するとは限らず、量的な限界があることは考えておく必要がある。その限界の中において非破壊法は極めて有効な方法と言える。

(小池 寛)

3. 胎土分析の結果

(1) 分析の原理

土器の原料は粘土である。粘土は後背地から運ばれた微粒の土が堆積したものであるから、後背地の地質によってその成分が規定される。粘土の主成分はNa, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, Fe(ナトリウム, マグネシウム, アルミニウム, シリコン, カリウム, カルシウ

ム、チタン、鉄)等、微量成分は、La, Rb, Sr, Y(ランタン, ルビジウム, ストロントウム, イットリウム)等であり、これらの酸化物が粘土を構成している。粘土中のこれらの成分は微妙に異なっているから、その成分を分析することによって同質の粘土であるか異質のものであるかを区別することができる。また、粘土の分析値は酸化雰囲気であれ還元雰囲気であれ、1,200°C程度まで焼成しても変化のないことが知られているので、このことを利用して土器胎土の分析によって同質の粘土で焼成したものであるかどうかの判定ができる。^(注13)

窯跡出土の須恵器胎土の研究によれば、同一の窯で焼成された須恵器の分析値のばらつきは、より広い地域の須恵器の分析値のばらつきより小さくなる。窯跡以外の遺跡出土の土器胎土では同じ遺跡であっても分析値がさらにばらつくか、あるいは、ばらつきの少ない二つ以上の集団に分離されることが多い。このことから、胎土の分析値がほぼ等しく、かつばらつきが小さいならばそれらの土器は同一の粘土を原料として焼成されたものである可能性が強いといえる。

土器の同質性を判断するのに胎土の含有成分のすべてが有効な訳ではないので、統計処理に頼らない場合には、特に分析する資料によって有効成分を試行錯誤的に決定するのがよい。今回利用したエネルギー分散型蛍光X線分析法で分析される元素のなかでは一般的にはK, Ca, Rb, Srが有効である。

(2) 分析の方法

須恵器と瓦の試料は水で洗浄後に表面を削って新鮮な面をだす。粘土試料は表面を5～10mm削り取る。これらの試料を乾燥させた後、タングステンカーバイト製の乳鉢で粉碎し、100メッシュ(74 μ m)以下の粒度に揃える。この粉末化した試料を塩化ビニール製リングを支持枠として20トンで加圧成型したものを測定用試料とする。

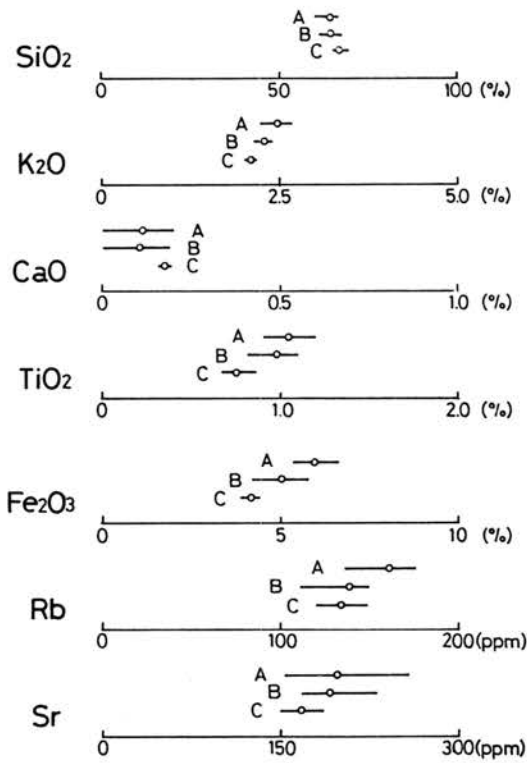
分析には、Kevex—理化学電機製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した。この装置では、16個の試料を連続的に自動分析できるが、装置の安定性のチェックと含有成分濃度の定量化のために、岩石標準試料JG-1^(注14)を同時に分析した。

分析した元素は、Si, K, Ca, Ti, Fe, RbおよびSrであるが、これらは酸化物として試料中に含まれている。酸化物濃度への交換には試料中の元素の計数率を試料JG-1中の同一元素の計数率で標準化した値を用いた。^(注15)

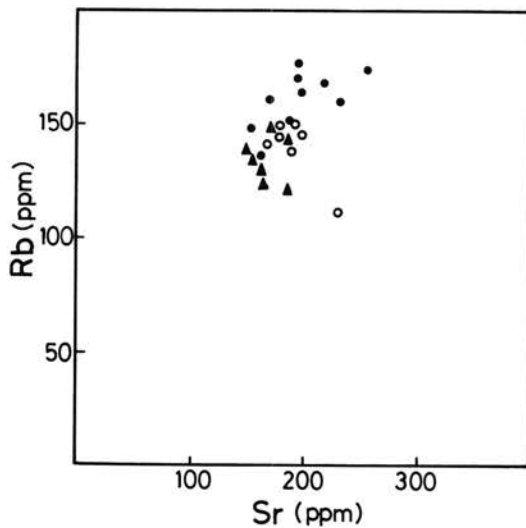
試料調製法と分析方法の詳細については参考文献(注15)を参照していただきたい。

(3) 分析結果とその解釈

瓦窯出土の須恵器と瓦(以下瓦窯と略称)、集落の須恵器と瓦(以下集落の土器と略称)および集積されていた白色粘土の3種類の試料についての分析結果を各含有成分毎に第76図



第76図 含有成分の濃度とその平均値(○印)
 A: 瓦窯の土器 B: 集落の土器 C: 集積白色粘土

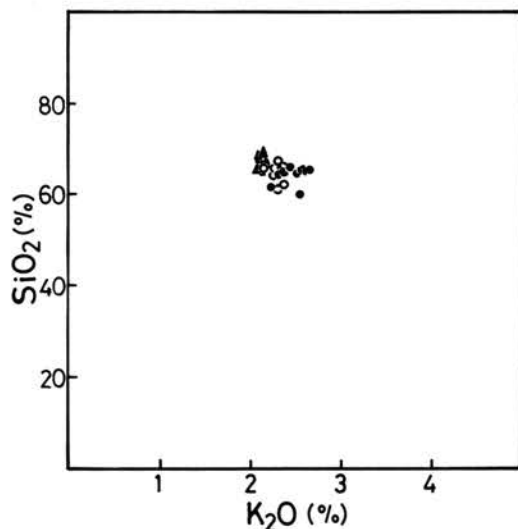


第77図 RbとSr含有量の分布
 ●印 瓦窯出土土器 ○印 集落出土土器
 ▲印 集積白色粘土

に示す。この図では、すべての試料についての濃度の範囲、平均値を示してある。この図から、瓦窯、集落の土器および白色粘土について以下のような特徴が分かる。

共通点としては、まず、CaOの含有量が極めて少ないことがあげられる。これは地質学的には大阪層群の特徴であり、集上り遺跡が大阪層群の上に立地していることから、原料粘土が遠方よりもたらされたものではないことを示唆している。第2の特徴としては、RbおよびSrの含有量が瓦窯、集落の土器、白色粘土のいずれもよく似ていることがあげられる。Srについては全国の窯跡出土の須恵器胎土の含有量の平均値が約70 ppmであることと比較すれば、集上り遺跡の3種類の試料は共通してSrの含有量が極めて多いことが特徴的である。Rb含有量も大阪層群の粘土の分析値の範囲にはいるが、近畿地方の遺跡出土須恵器の中では含有量が多いのも3種の試料群に共通している。蛍光X線分析法による胎土分析においてRbとSrはいずれも重要な元素であるが、上の事実は瓦窯、集落の土器、白色粘土が同種のものであることを強く示唆するものである。

横軸と縦軸にそれぞれSrとRbを取ってプロットしたものが第77図で

第78図 SiO₂とK₂O含有量の分布

●印 瓦窯出土土器 ○印 集落出土土器
▲印 集積白色粘土

あるが、3種の試料群はRbについてもSrについても混在していて互いに区別できないことが分かる。第78図にはSiO₂とK₂Oの分布を示した。白色粘土のK₂Oが瓦窯、集落の土器と重ならないが、すべての試料について2.1から2.7%の範囲にあり、その最大値と最小値の差は、0.7%にすぎない。一般に同じ窯で焼成された須恵器のK₂O含有量には1.0ないし2.0%の幅がある^(注17)ので、K₂O含有量から3種の試料が異なるものであるとはいえない。

3種類の試料群は必ずしも共通し

ない要素としてTiO₂とFe₂O₃の含有量も考慮しなければならないであろう。第76図から分かるように、これらの成分については瓦窯と集落の土器および白色粘土と集落の土器の含有量にはそれぞれ重なりがあるが、瓦窯と白色粘土には重なりがない。このことは瓦窯と白色粘土が必ずしも同質ではない可能性を示していると解釈できる。しかし、TiO₂とFe₂O₃についてもK₂Oと同様に同じ窯の須恵器でも含有量に幅がある。一般に最大値と最小値にはTiO₂で0.2ないし0.5%、Fe₂O₃では2ないし5%の幅がある^(注17)が、今回の試料はそれぞれ0.5%と2.7%にすぎないから、上の分析結果をもって異質のものであるとすることはできない。

以上の分析結果から総合的に判断すると、瓦窯の瓦と須恵器、集落の須恵器と瓦および集積されていた白色粘土はいずれも同質のものである可能性が強いと見なすのが妥当であると思われる。但し、TiO₂とFe₂O₃の分析結果から考慮すると、瓦や須恵器を焼成する際に今回分析した白色粘土に他の粘土を混入したことも可能性としては考えられる。

(長友恒人・山本健司)

4. 分析結果の考古学的解釈について

上述の分析結果をもとに周辺の環境や焼土坑の性格について必要な情報を抽出し述べていきたい。

(1) 5世紀中葉に朝鮮半島から登窯の技術が導入され、今までの土器作りとは違う作業工

程により、極めて硬質な須恵器の生産が始まる。従来の軟質土器の製作とは根本的に異なり、登窯の場合であれば傾斜面が必要で、材料としての粘土や焼成するための燃料が不可欠となる。これらの要素を基本に製品の搬出のための交通手段や作業に従事する工人集団の集落、そして、製品の搬出を効率的にするための倉庫・工房跡も必要条件になる。が、これらすべての要素を兼ね備える条件をもつ土地は数多いとは言えない。隼上り瓦窯跡の場合は政治的背景をもってはいるが、窯業地としての条件が備わっている。分析結果の中でいずれの試料にもCaOの含有量が極めて少なく、それが大阪層群の特徴であり、原料の粘土が遠方より搬入されたものではないことが指摘される。当地は7世紀末以降も窯業地帯として存在するが、その要因として良質な粘土が豊富にあることと深く関わっていると言える。ただ、後述しているようにTiO₂とFe₂O₃の分析値が隼上り瓦窯跡の須恵器・瓦と隼上り遺跡の白色粘土に違いが見られ、他の粘土を混入した可能性が指摘されており、今後の宇治川東岸における分析結果の増加により粘土採取地自体の解明に有力な手掛かりになるものと考えられる。

(2)窯業を維持するために必要なものには、直接的な要素である粘土・水は無論のことで、間接には一定の作業空間・製品を一時保管する倉庫・工人集団の生活基盤である集落が重要になる。^(注19)特に原料である粘土を一定量常に保管することは生産の基盤に大きな影響を与える。隼上り瓦窯跡の場合、全操業期間を通じて見ると、発掘調査においては瓦が整理箱に800箱、須恵器が100箱を数える。また、供給された豊浦寺跡の瓦・須恵器、隼上り遺跡で検出した瓦・須恵器の総量は、甚だ不正確な数字ではあるが膨大な量になる。これらに使用された粘土は、操業時にその都度調達していたとは考えにくく、一定量常に確保していたと考える方が妥当である。隼上り瓦窯跡で検出された掘立柱建物跡は、第3トレンチで7棟、第4トレンチは後世の削平を受けて検出されていないものの、何らかの建物が存在していた可能性は高く、7棟以上の建物を推定できる。また、広場についても消極的ではあるが想定されている。^(注20)この工房の規模から粘土備蓄についての容量は十分とは考えられるが、より一層生産力を安定させるために隼上り遺跡で検出した集落・倉庫に一定量保管した可能性が指摘できる。白色粘土を検出した遺構は土壇の底面が淡赤褐色に焼け、焼土・炭と白色粘土が複雑に堆積しており、意図的に白色粘土を加熱したことは確実である。また、焼土ピットの周辺においても粘土を検出していることから、採集した粘土を倉庫に一度集積し、何らかの加工した後に工房において瓦製作が行われたと考えられる。白色粘土と瓦・須恵器の分析結果においてRbとSrの含有量が一致することとTiO₂とFe₂O₃の含有量が異なる点は、粘土備蓄から瓦製作に至る工程の間に粘土自体に手を加える作業を行ったと解釈することも可能である。

(3) 隼上り遺跡で検出した掘立柱建物跡が隼上り瓦窯跡との関連で成立したことは、隼上り遺跡の土器の型式や瓦の製作技法からも容易に認められ、また、それを根拠として考古学的に解釈するに至っている。ここでは、あえて記述しなかった。

以上、分析結果をもとに記述したが、あくまで分析結果であると言う認識内における解釈であり、多くの問題点を包含していることも指摘しなければならない。しかし、今後とも周辺の窯業地帯を解釈する方法として化学的方法を用いることは重要である。なお、粘土備蓄については否定的見解もあるが予察として問題提起を行った。これらについての類例の増加をまちたい。

(小池 寛)

5. 今後の問題点

(1) 胎土分析について

今回行った胎土分析では試料の数が少なく、瓦窯10点、集落の土器7点、集積されていた白色粘土8点であった。この分析でもおおよその判断は可能であったが、更に試料数が多ければ、結果の統計処理も含めてより確度の高い判断を下すことができたと思われる。今回は試料をすべて粉末化して測定したが、土器片のままの非破壊法でも分析が可能であるので、破壊してもよい試料数に限りがある場合には土器片のままの非破壊法を併用することによって試料の不足を補うことができたであろう。また、非破壊法を併用すれば TiO_2 と Fe_2O_3 の分析値についても瓦窯と白色粘土の重なりが見られたと考えられる。

(2) 分析データの考古学的解釈に関連して

一般的に自然科学的手法による解析データは考古学にとって有用であるが、自然科学的手法を利用することによって現在の知見で何が解決可能であり、何が不可能であるかを踏まえておくことが重要であると思われる。今回の分析に即していえば、粘土を $1,200^\circ\text{C}$ 程度まで焼成しても含有量に変化がないことは知られているので原理的な方法には全く問題はないが、 TiO_2 と Fe_2O_3 の分析値に関しては確立した解釈というよりは分析者の経験によって判断したものである。これについては非破壊分析も含めて試料数を増やせば統計的処理も併用して解決したと思われる。

今回行ったのはエネルギー分散型の蛍光X線分析法のみである。この方法は土器胎土の分析法としては最も優れていると考えられるが、さらに総合的に胎土と粘土の同質性を判断するには、他の化学的、物理的、鉱物学的方法を併用することが望ましい。それによってひとつの方法では不明な点を相互に補い、より信頼性の高い結論を下すことができるであろう。

(長友恒人・山本健司)

- 注1 杉本 宏ほか「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983
- 注2 杉本 宏「大鳳寺跡第3次発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第2集 宇治市教育委員会) 1983
- 注3 注1・注2の文献から判断したものと実見したものがあるが、実見に際し、杉本宏氏の配慮を得た。
- 注4 馬淵久夫・富永 健編「考古学のための化学10章」(東京大学出版会 1981)・古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」(同朋舎 1984) 等多くの出版物がある。
- 注5 分析の目的については長友・山本両氏に十分理解され、分析結果とその解釈が分離しないよう討議する機会を数回もって頂いた。
- 注6 注1に同じ
- 注7 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」II(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊) 1978
- 注8 中村 浩他「陶邑」I(『大阪府文化財調査報告書』第28輯) 1973
- 注9 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966
- 注10 注7に同じ
- 注11 注1に同じ。以下の隼上り瓦窯跡についての記述は注1にならった。
- 注12 注2に同じ
- 注13 三辻利一・脇田宗孝・円尾好宏・喜多孝行・新浜夕起子「須恵器産地分析に関する基礎研究(第5報)―須恵器焼成による化学組成への影響について―」(『古文化財研究報告』第7号 奈良教育大学) 1987, 51~59頁
- 注14 Atsushi ANDO, Hajime KURASAWA, Teiko OHMORI and Eizo TAKEDA "1974 complication of data on the GSJ geochemical reference sample JG-1 granodiolite and JB-1 basalt" *Geochemical Journal*, Vol. 8, pp. 175-192.
- 注15 長友恒人・三宅康幸・三辻利一「エネルギー分散型蛍光X線分析法による岩石・土器胎土試料の定量分析のための検量線」(『奈良教育大学紀要』第35巻第2号) 1986, 19~29頁
- 注16 三辻利一・高橋与エ門・池畑耕一・青崎和憲・矢島宏雄「5~6世紀の大阪陶邑産須恵器の分布(第一報)」(『考古学と自然科学』第17号) 1984 35~50頁の値から濃度を算出した。
- 注17 長友恒人・戸崎充男「遺跡出土土器胎土と粘土の蛍光X線分析」(『奈良教育大学紀要』第29巻第2号) 1980 5~15頁をはじめ多数の須恵器の胎土分析値から算出したものである。
- 注18 大鳳寺跡や岡本廃寺に供給した瓦窯や7世紀末の窯が確認されている。
- 注19 窯に伴う集落の類例は徐々に増加している。
上野 章・狩野 睦他(『小杉流通業務団地内遺跡群, 第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会) 1982 によると須恵器窯址を6基とそれに伴う竪穴式住居跡と掘立柱建物跡を検出している。注9の編年ではTK209に比定できる。
- 注20 注1に同じ。

圖 版



(1) 1号墳調査前全景 (南から)



(2) 1号墳石室検出状況 (南から)



(1) 1号墳石室内遺物出土状況(北西から)



(2) 1号墳石室全景(南から)



(1) 古墓群全景 (南から)



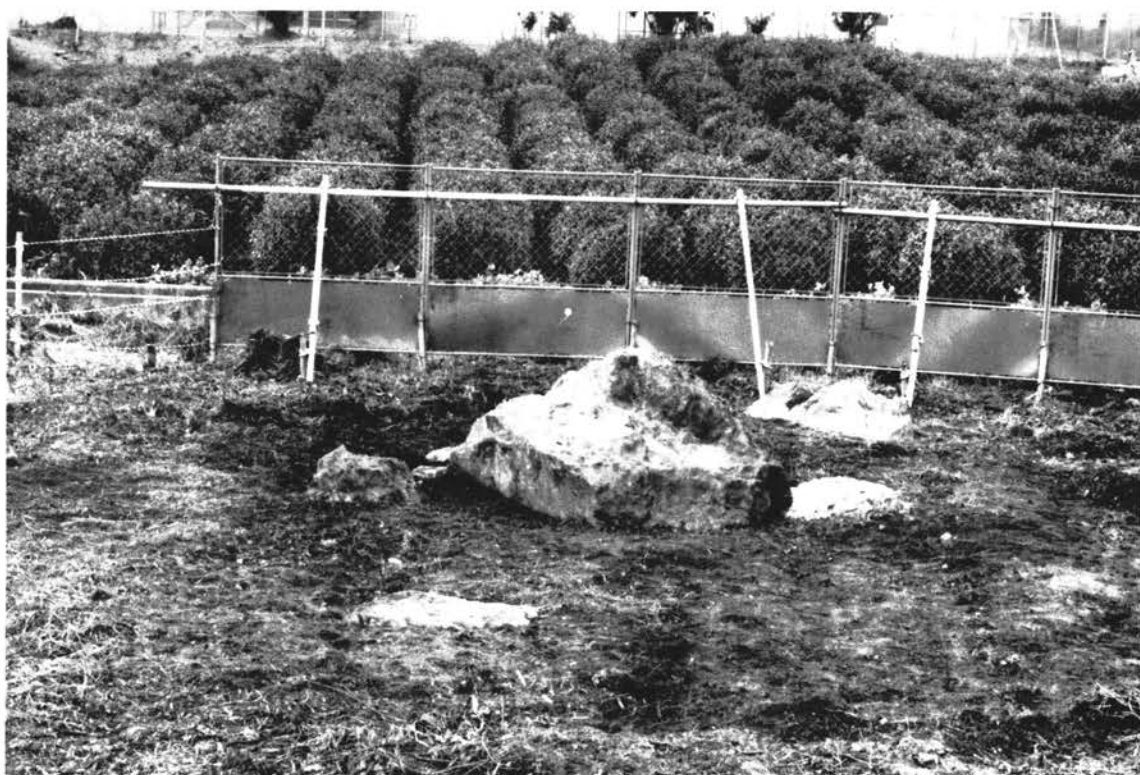
(2) 土塚17全景 (南から)



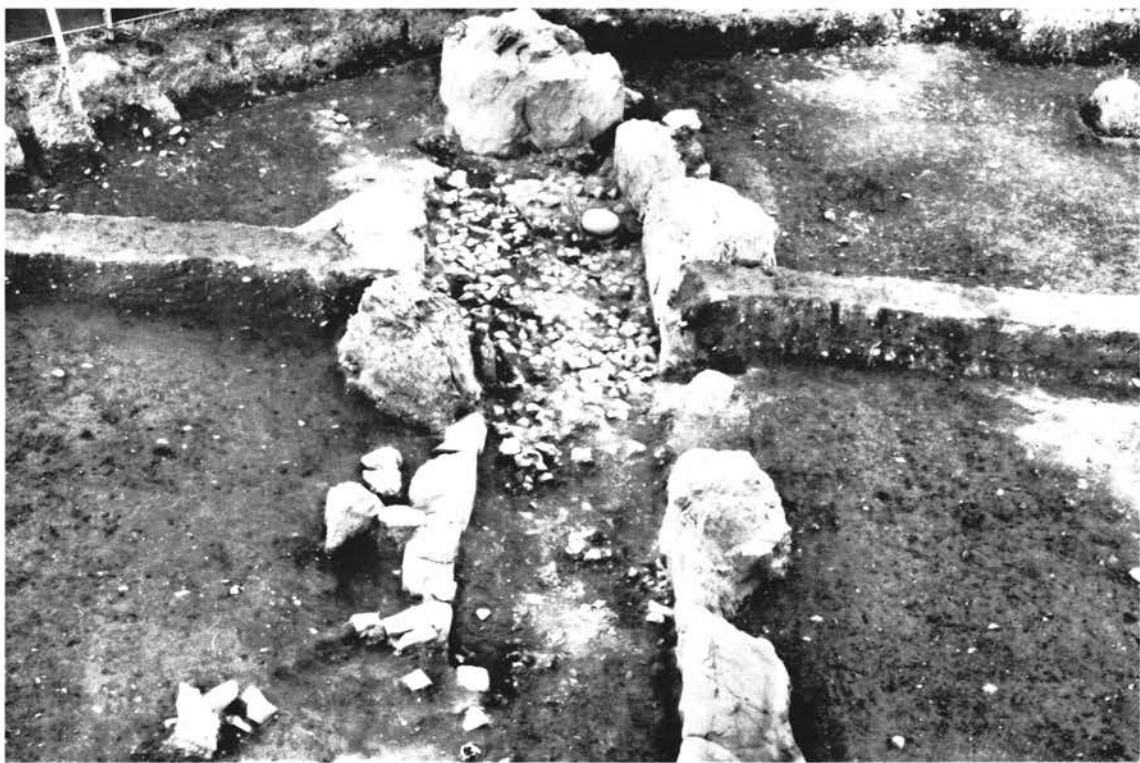
(3) 土塚18全景 (南から)



(4) 土塚19・20全景 (南から)



(1) 2号墳石室調査前全景（南から）



(2) 2号墳石室内遺物出土状況（南から）



(1) 2号墳石室内遺物出土状況(西から)



(2) 2号墳銀環出土状況(西から)



(1) 2号墳溪道部須恵器出土状況(西から)



(2) 2号墳溪道部鉄製品出土状況(南から)



(1) 2号墳石室全景(南から)



(2) 2号墳石室裏込め状況(東から)



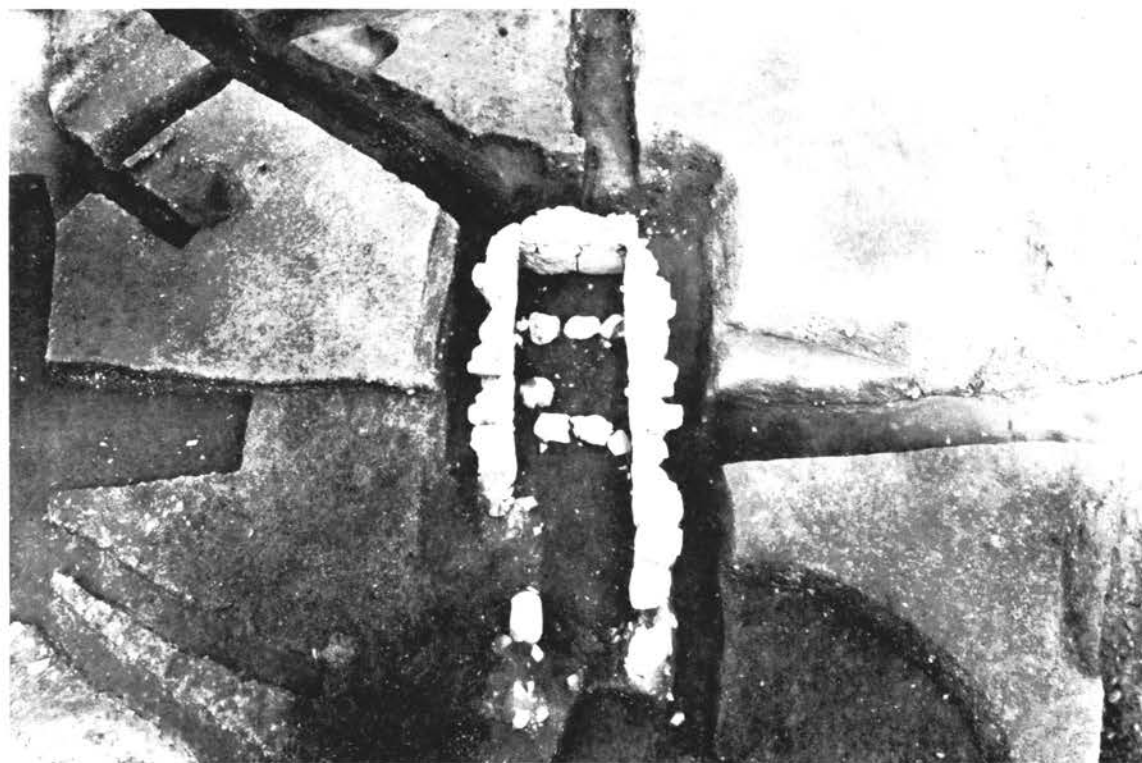
(1) 第1調査区調査前全景(西から)



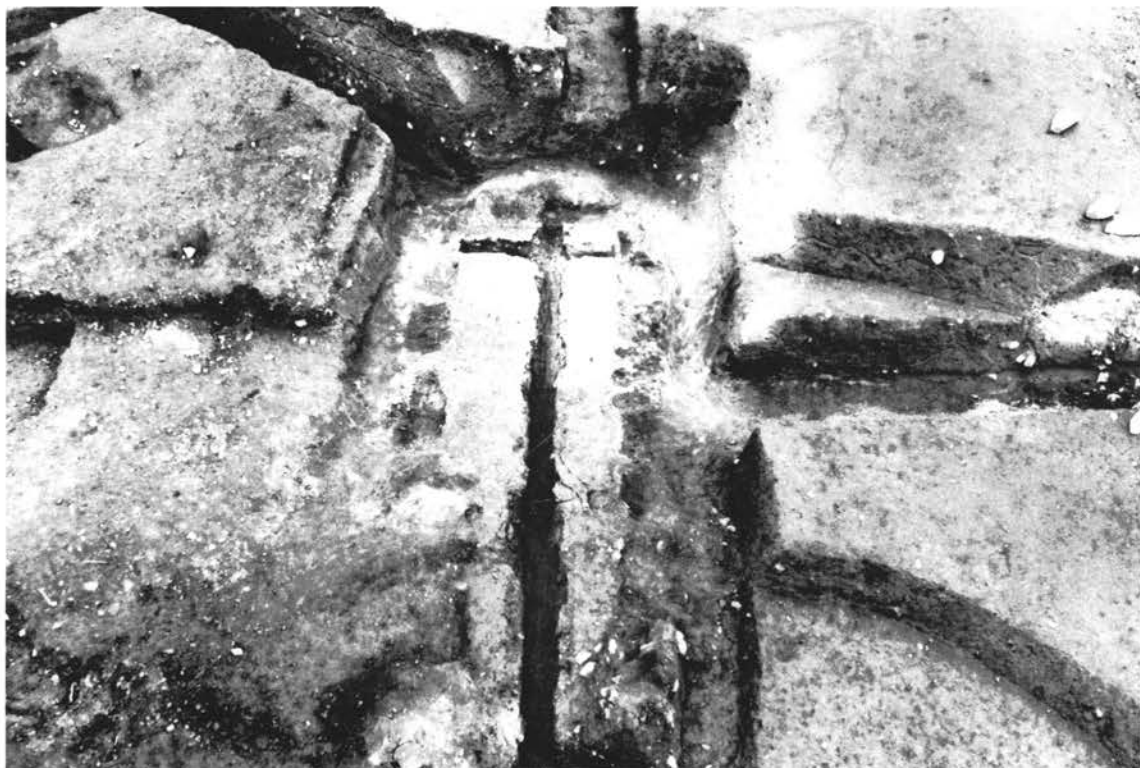
(2) 3号墳石室内遺物出土状況(南から)



(1) 3号墳石室内遺物出土状況(西から)



(2) 3号墳全景(南から)



(1) 3号墳石材抜き取り後の石室全景（南から）



(2) 3号墳周溝遺物出土状況（北から）



8-1



8-3



8-13



8-18



8-22



8-20



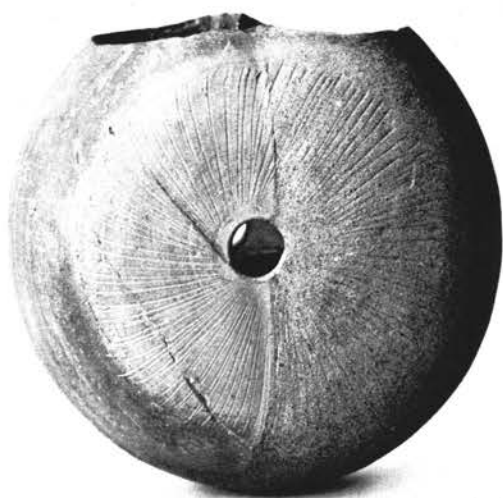
8-29



8-24



8-30



9-34



9-37



9-40



9-41



18-1



18-4



18-9



18-6



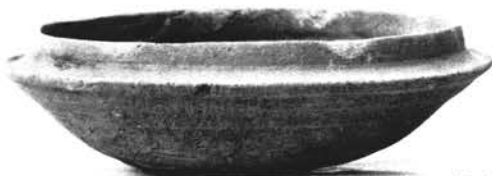
18-13



18-12



18-14



18-18



18-25



18-29



18-31



18-32



19-36



19-39



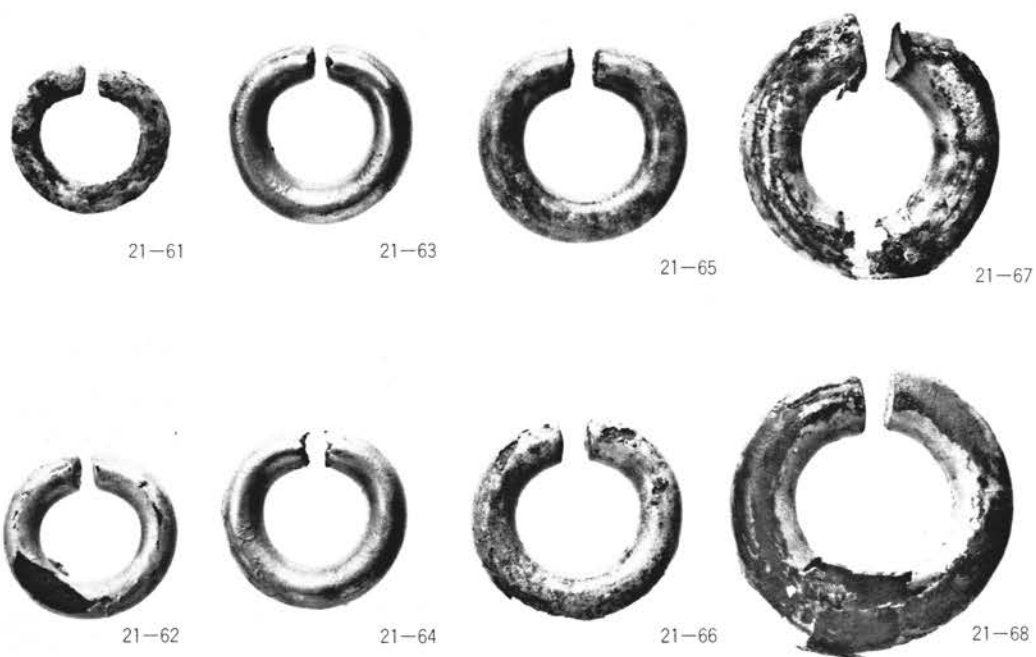
19-46



19-53



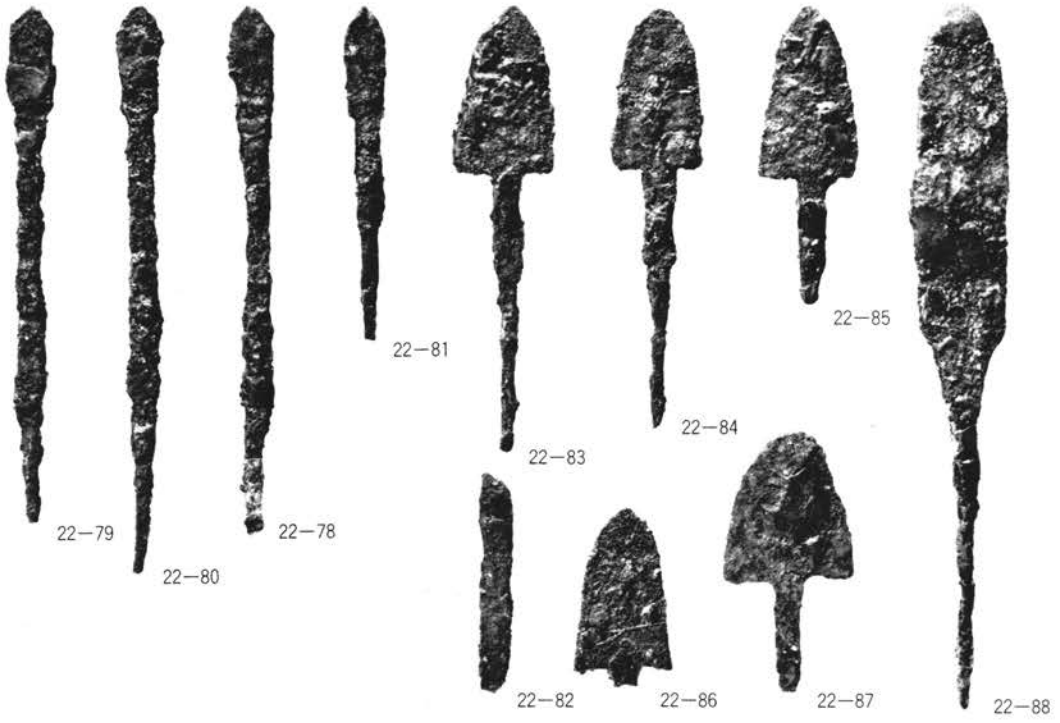
19-41



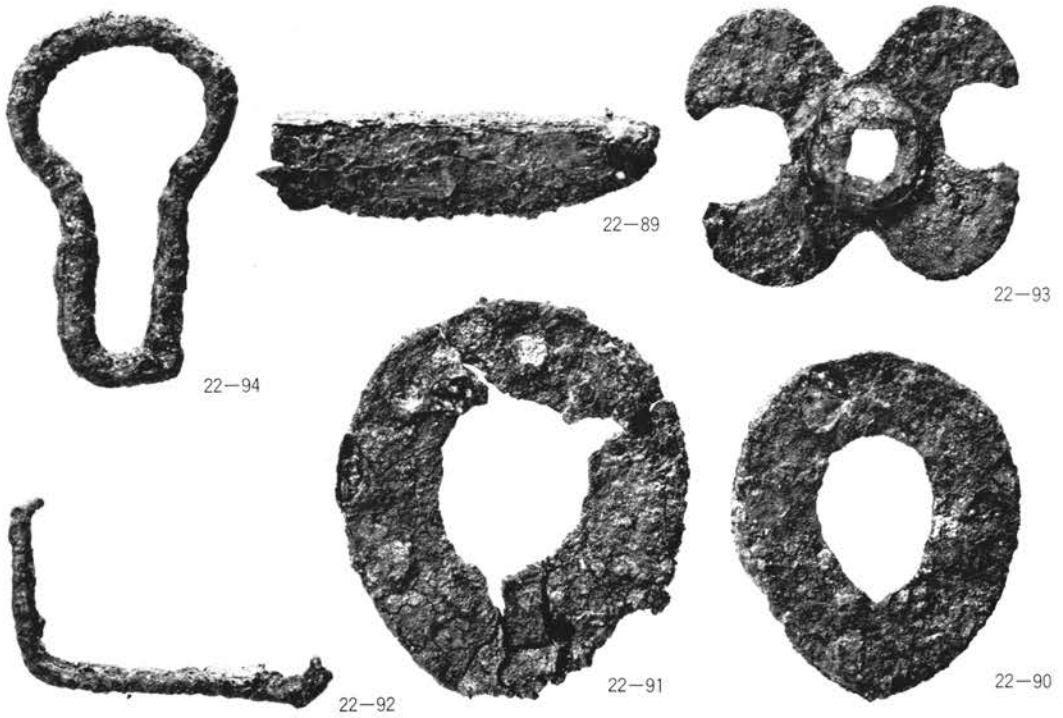
(1) 2号墳出土遺物(3)



(2) 同上(4)



(1) 2号墳出土遺物(5)



(2) 同 上: (6)



28-3



28-1



28-2



28-6



28-5



28-7



28-12



28-13



28-14



28-15



28-17



28-18



28-11



28-10



28-8



28-9



(1) 調査前遠景 (隼上り瓦窯跡から)



(2) 調査前全景 (西から)



(1) 調査地全景 (空中写真, 北西から)



(2) CⅥ区掘立柱建物跡検出状況 (建物跡10・15・16・17, 西から)



(1) CⅥ・CⅦ区掘立柱建物跡検出状況（建物跡12～19，東から）



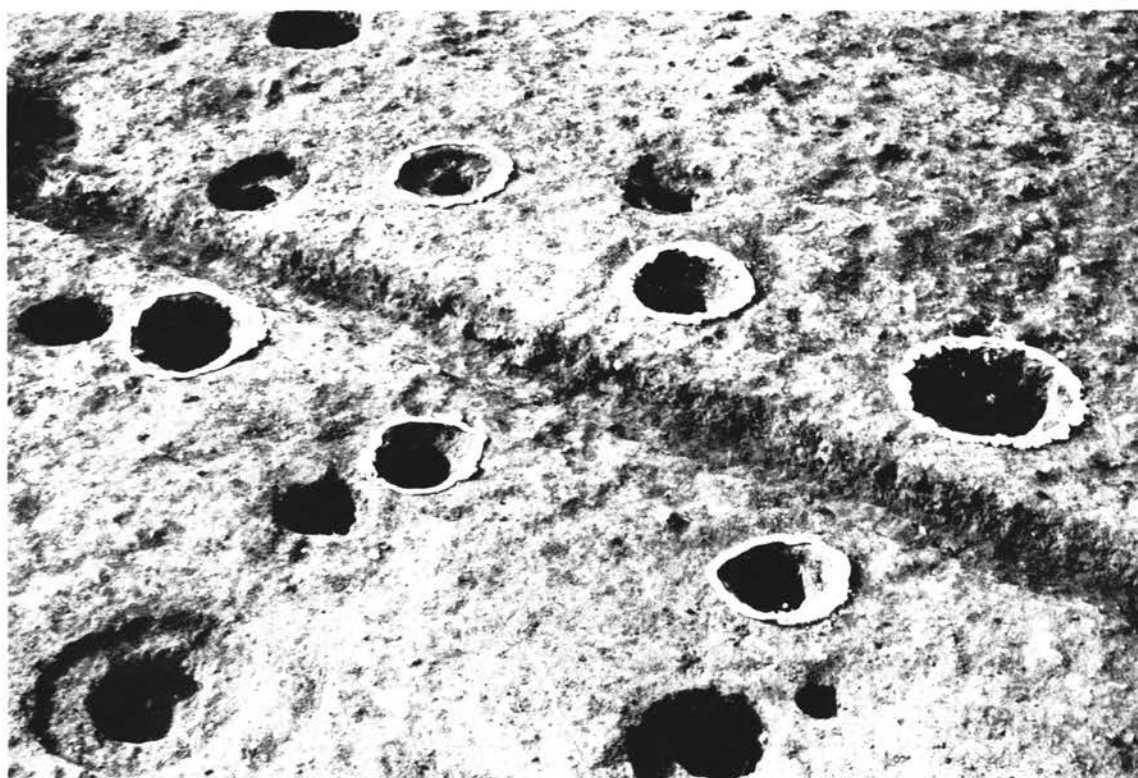
(2) CⅥ区掘立柱建物跡検出状況（建物跡15～17，南から）



(1) CⅥ区,掘立柱建物跡検出状況(東から)



(2) CⅢ・CⅣ区,掘立柱建物跡検出状況(南東から)



(1) CⅥ区掘立柱建物跡検出状況(北西から)



(2) CⅢ・CⅣ区掘立柱建物跡検出状況(北から)



(1) DⅢ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡26・27, 西から)



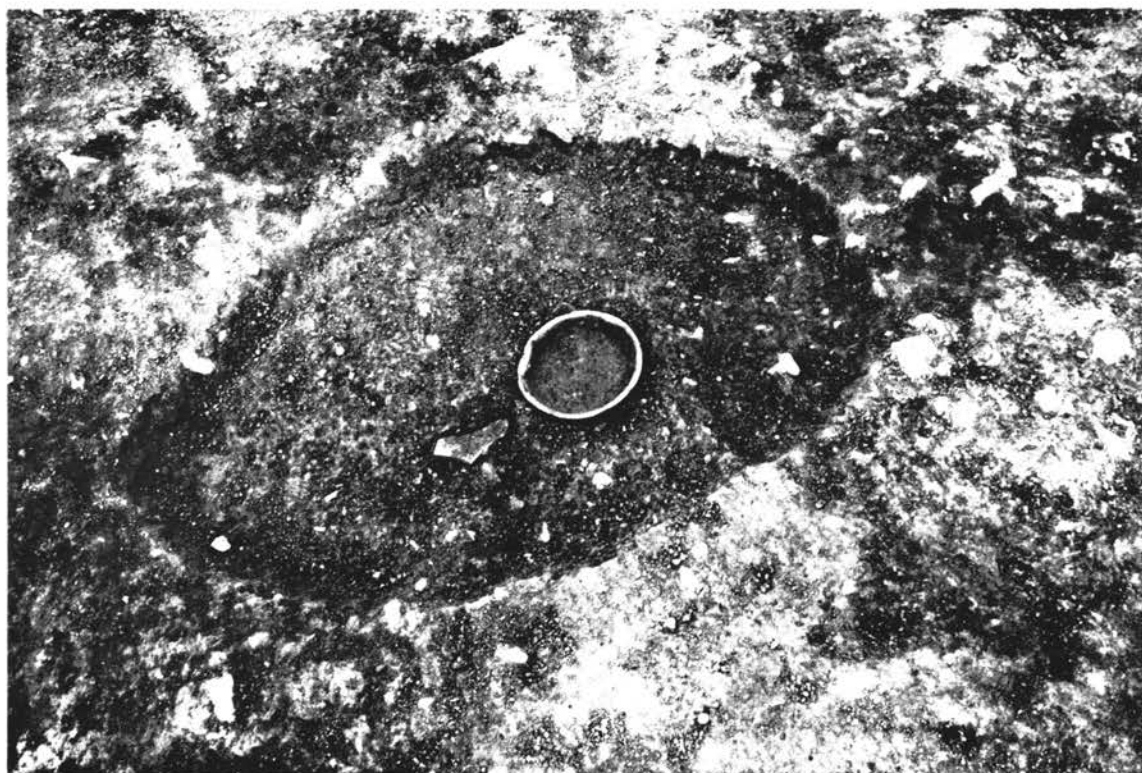
(2) CⅢ・CⅣ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡22~24, 南から)



(1) BⅥ・BⅦ区掘立柱建物跡検出状況(建物跡6～11, 東南から)



(2) DⅢ区道状遺構検出状況(北から)



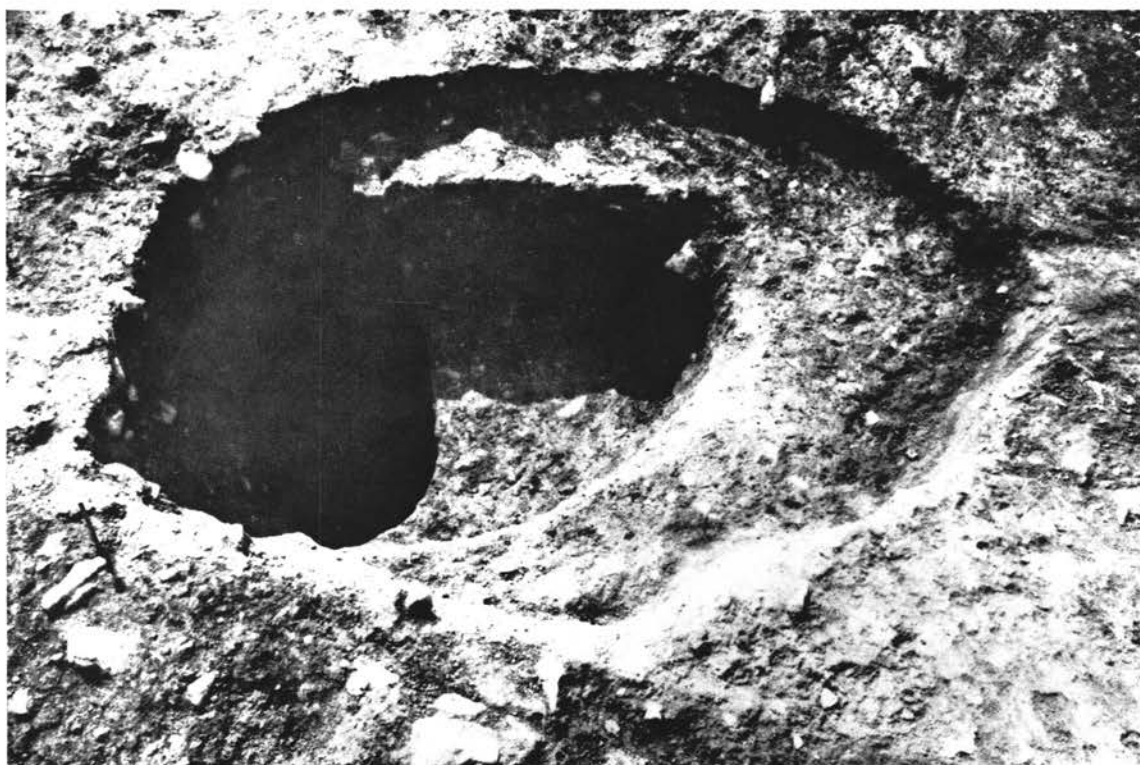
(1) 中世土塚墓検出状況（土塚中央が瓦質土器・三足盤，南から）



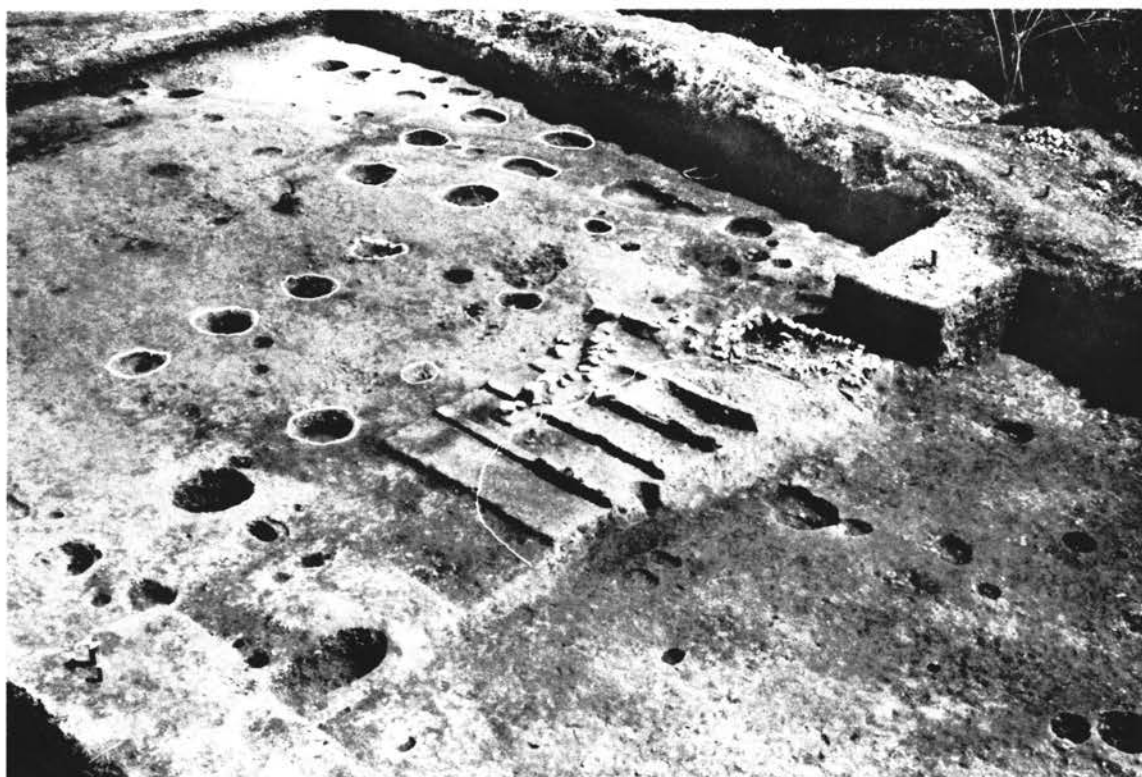
(2) 中世土塚墓遺物検出状況（土師器・皿，玉，刀子，西から）



(1) 中世土塚墓遺物検出状況（西から）



(2) 中世土塚墓完掘状況（北から）



(1) 近世遺構全景（北西から）



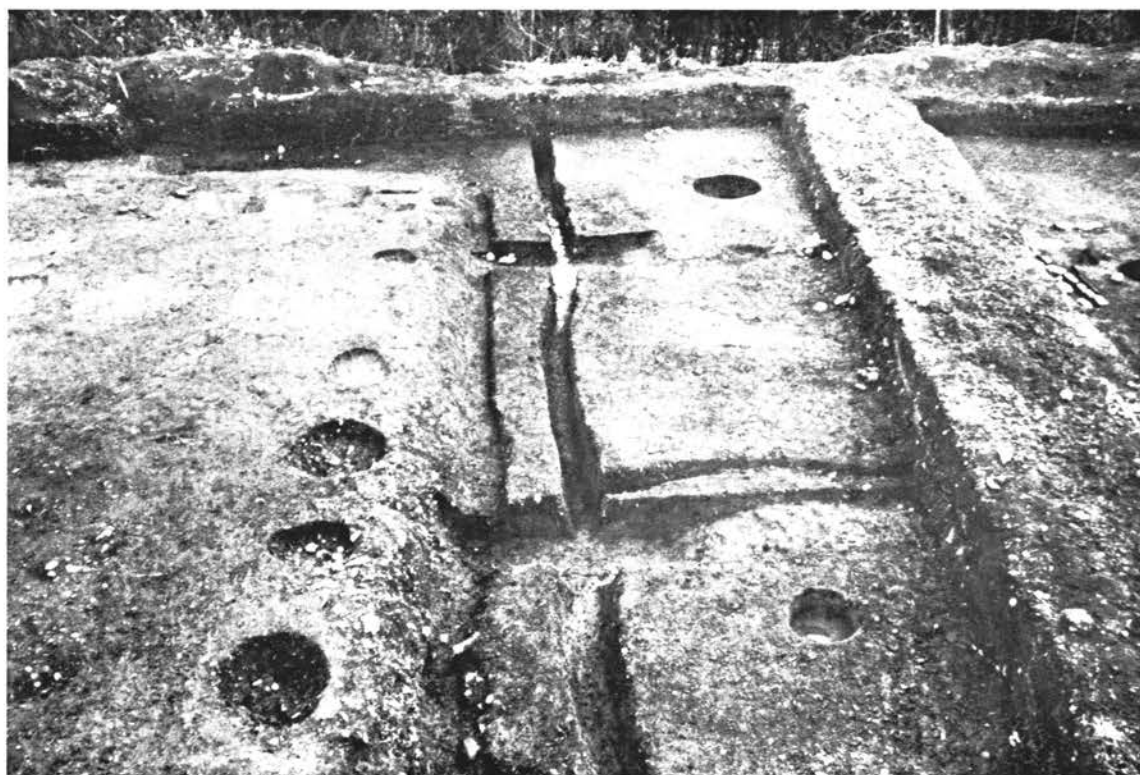
(2) 近世建物跡検出状況（西から）



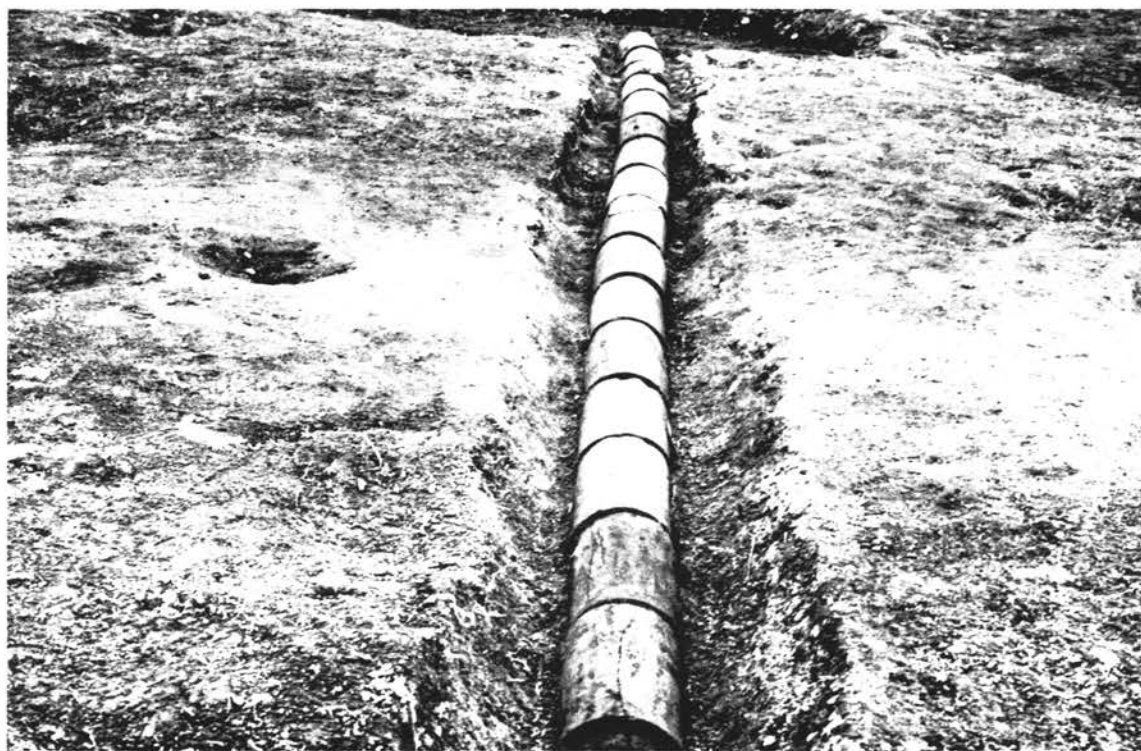
(1) 近世墓2完掘状況(北から)



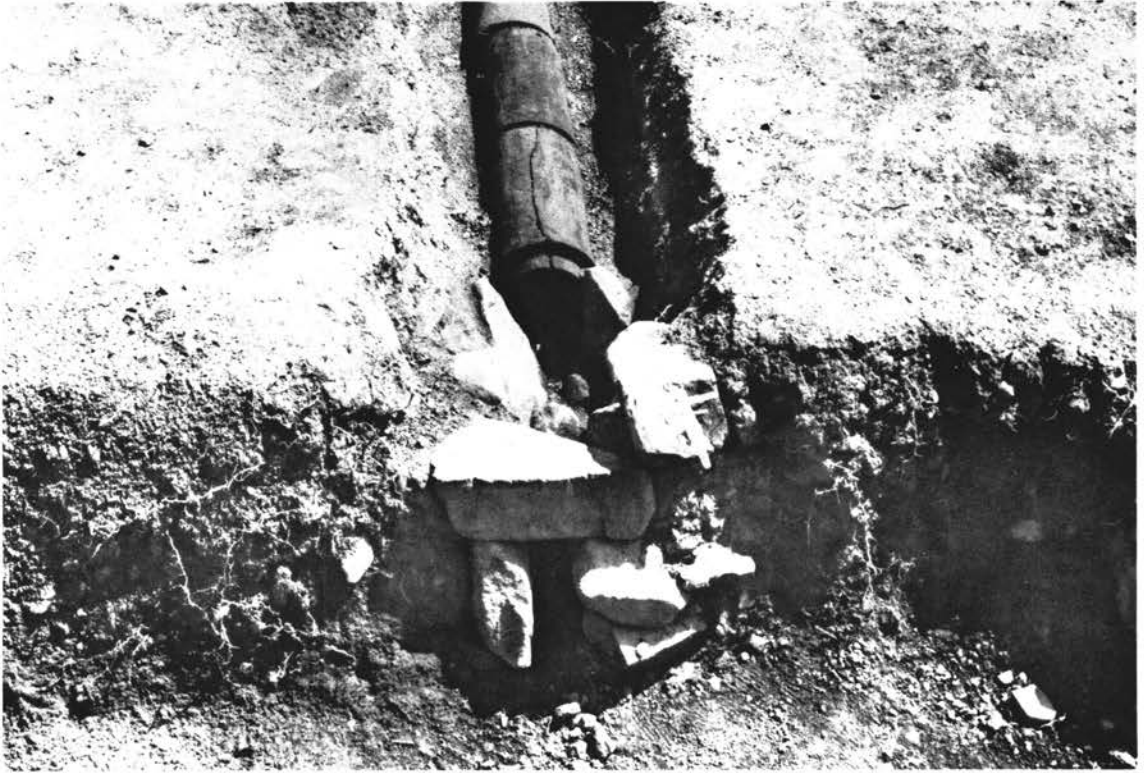
(2) 近世墓4土師器・皿検出状況(東から)



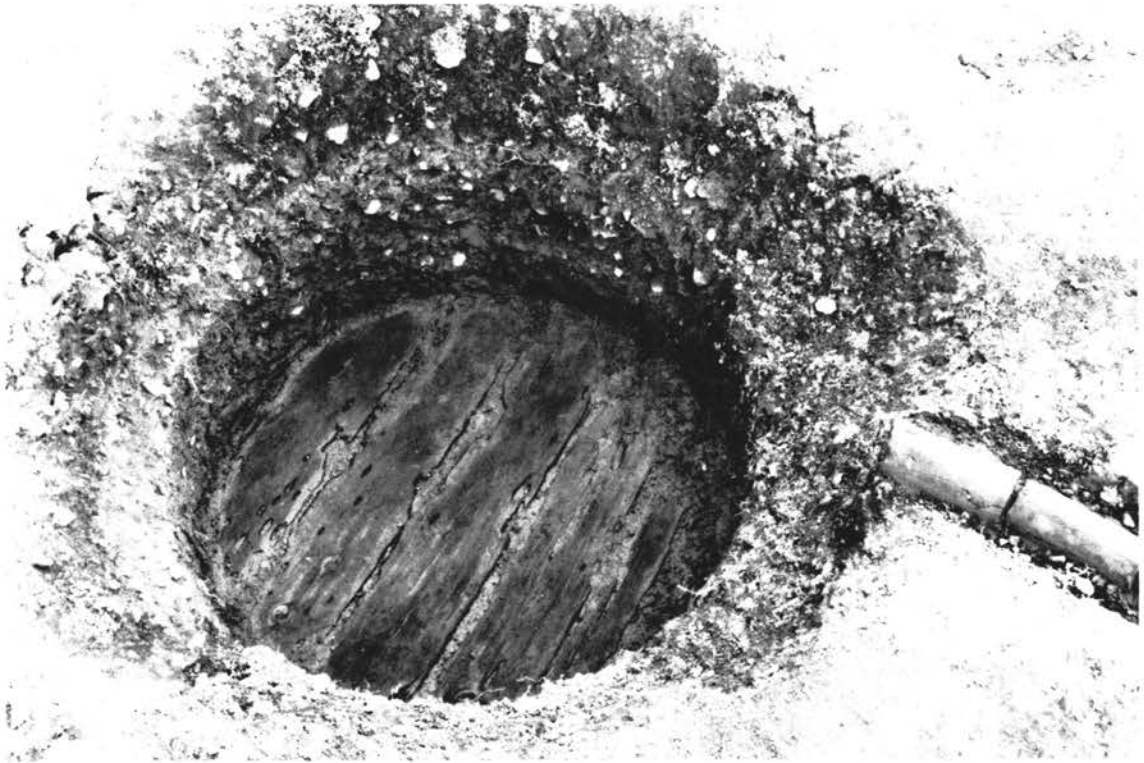
(1) 近世溝・柵列検出状況（北から）



(2) 暗渠検出状況（北から）



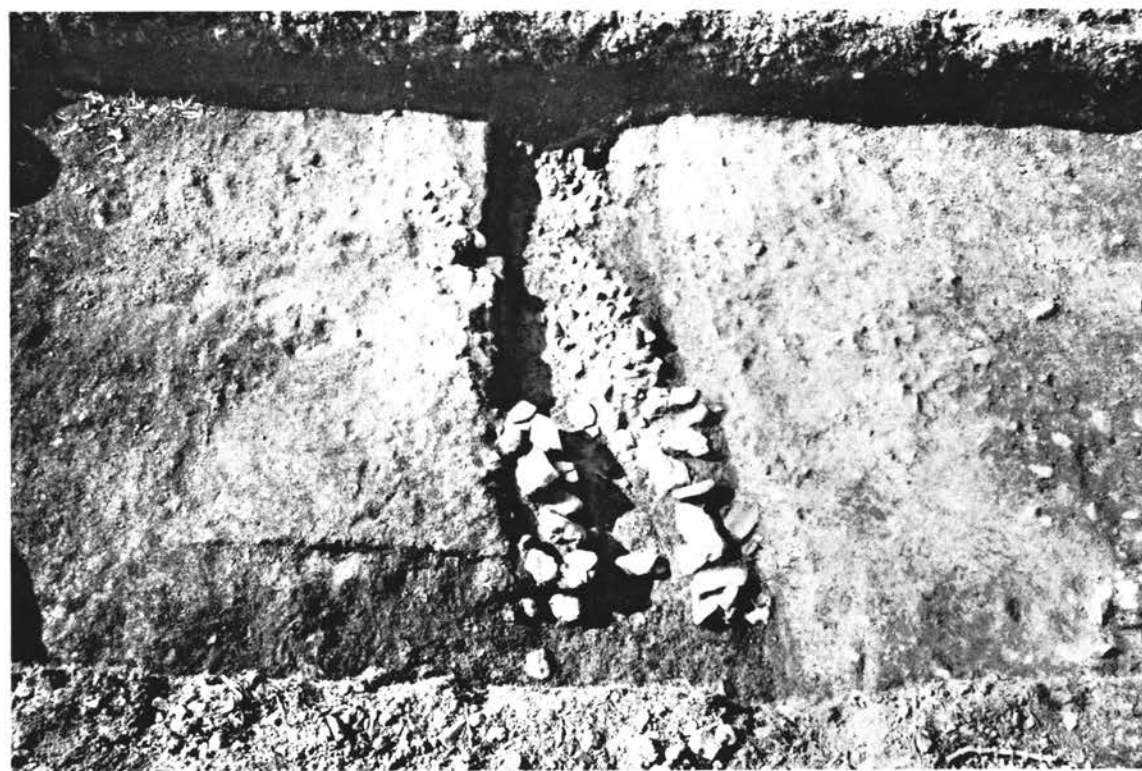
(1) 暗渠給水口（北から）



(2) 暗渠・水溜め施設完掘状況（東から）



(1) 近世溝遺物検出状況（東から）



(2) 近世溝検出状況（西から）



(1) 甕検出状況（北から）



(2) 甕検出状況（北から）



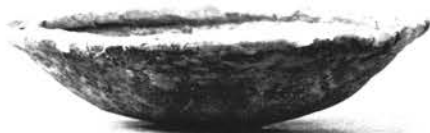
44-7



44-10



44-27



44-22



44-26



44-28



44-34



44-31



45-23



44-35



44-7



47-1



45-2



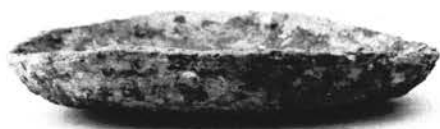
47-8



47-5



52-14



52-15



52-13



52-16



52-17



52-1



52-2



52-3



52-4



52-5



52-6



52-7



52-8



52-9



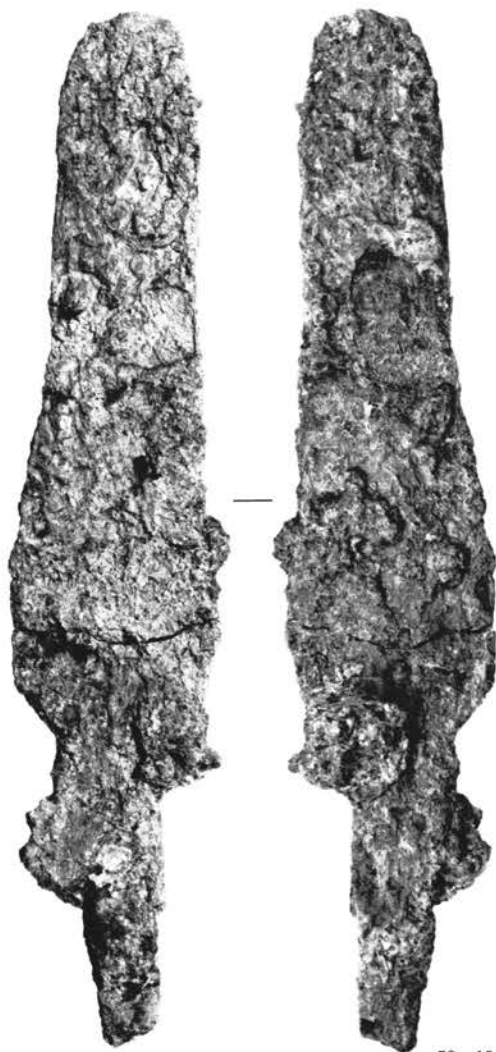
52-10



52-11



52-12



52-18



59-32



59-11



59-25



59-27



59-26



59-31



58-4



57-8



58-5



58-6



(1) 第2調査区調査前全景(北東から)



(2) 第2調査区土塚群全景(南西から)



(1) 第3調査区土坑群全景(南から)



(2) 土坑4青磁碗出土状況(東から)



(1) 土塚4 青磁碗出土状況（東から）



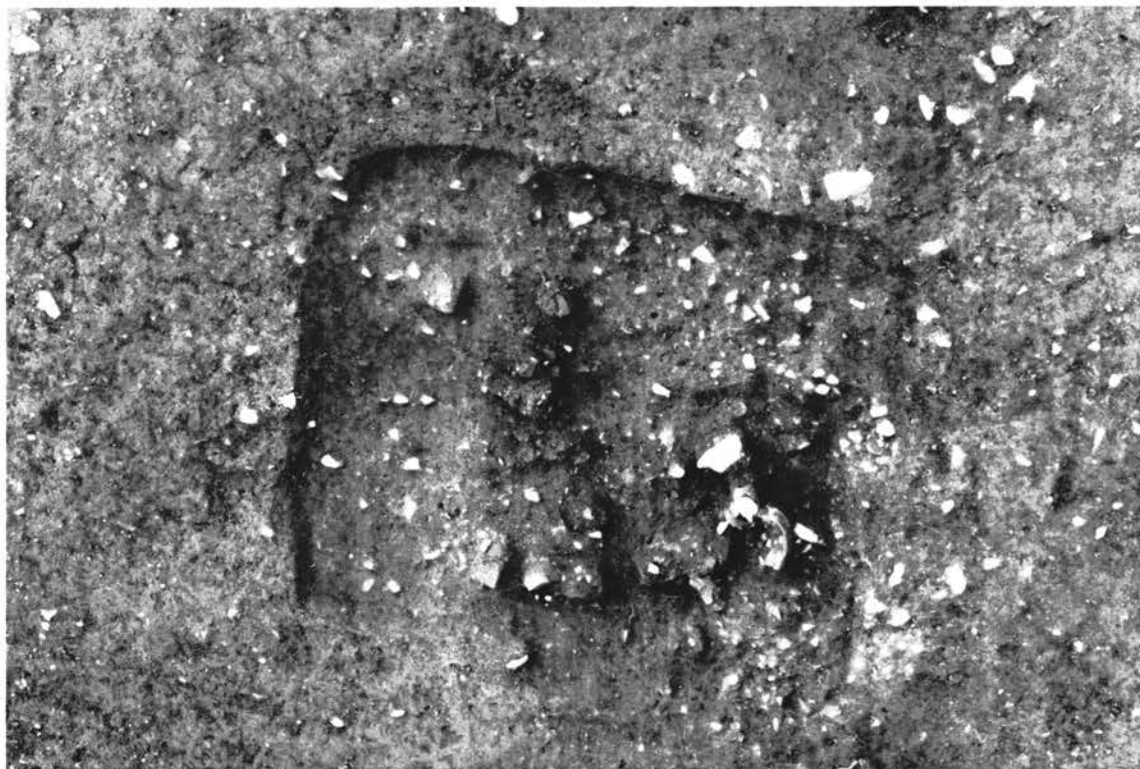
(2) 土塚4 須恵器出土状況（北から）



(1) 土塚1遺物出土状況(北から)



(2) 土塚1全景(西から)



(1) 土塚9 遺物出土状況 (西から)



(2) 土塚2 遺物出土状況 (南から)



(1) 第5調査区全景（北から）



(2) 第5調査区北半部全景（南西から）



65-1



65-3



65-2



65-7



65-9



65-12



69-1



70-1

出土遺物(1)



72-1



72-3



72-2



73-9



73-10

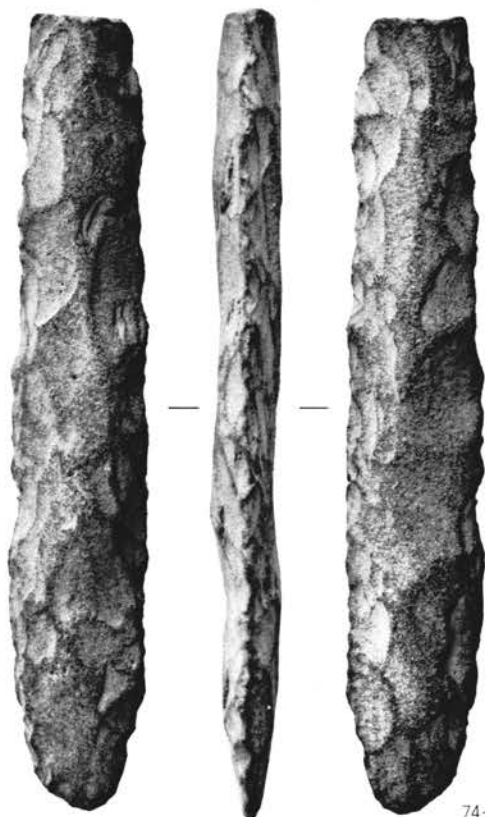
73-13



73-12



73-11



74-1



74-2



74-3

京都府遺跡調査報告書 第7冊

昭和62年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)